
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～蒼天の騎士伝説～

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 蒼天の騎士伝説

【Nコード】

N4049J

【作者名】

秋風

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのは、蒼天に舞う騎士の続編！とうとうStrikers編に突入！

強さとは何か？

守るべきものは何か？

4年間アルハザードでの生活を終え、ミッドチルダに戻ってきた蒼天の騎士「井上直人」

そして、アルカディアを滅ぼした男「マラキア」がミッドチルダへと現れる！

直人と機動六課の、ミッドチルダの命運を懸けた戦いが今、始まる！
とうとう第二部に突入です。今回も前回同様リリカルの二次創作で
す。嫌いな方は即回れ右をお願いいたします。内容がわからない人
は第一部の「魔法少女リリカルなのは」蒼天に舞う騎士」をご覧ください。

魔法少女リリカルなのはStrikers」蒼天の騎士伝説」 始
まります。

第零話「動き出した闇」（前書き）

はじめまして、そしておひさしぶりです。蒼天に舞う騎士の続編ということで、直人が帰ってまいりました。前作で大量のフラグを立てた直人ですが、今回も半端ないので、よろしく願います。ちなみに前回でたキャラクター達も登場します。そして新たに出てくるキャラたちも・・・

私としては、捌ききれぬかわかりませんが、頑張りたいと思いますので、よろしく願いますw

ちなみに今回から挿絵や絵も募集しようと思います。採用すると、その場面などに載せたりするので、是非絵に自身がある方はご連絡くださいw

それでは、今回もどうかよろしく願います

秋風

第零話「動き出した闇」

そこはミッドチルダのとある研究所。そこにある男がいた。

「もうすぐだ・・・もうすぐで完成する」

男の名はマラキア。かつて理想郷「アルカディア」を混沌に陥れた闇の科学者。

「アルハザードでは果たせなかったが、この世界なら、都合がいい」

それは男の欲望。全てを手に入れるために使うもの。

「カオス・レイよ・・・もっと力をつけるがいい・・・」

それはかつて理想郷を破壊したものより遥かに強く、禍々しい光を放つもの。

「混沌・・・その力によって、私は全てを手に入れる。」

マラキアが笑う。その笑みは何よりも邪悪なものだ。

「絶対の君臨だ・・・その闇で、わたしは強くなる」

マラキアの視線の先にあるのは黒い何かだった。

蒼天に舞った一人の騎士の物語はここから始まる。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 蒼天の騎士伝説 始まります。

第零話「動き出した闇」（後書き）

次回より本編です。お楽しみにw

第一話「蘇る蒼天の翼」（前書き）

さっそく更新です。直人の活躍をご覧ください。ではどつぞw

第一話「蘇る蒼天の翼」

新暦75年5月13日

なのはside

今日も雲ひとつない、いい天気。私は今機動六課に勤めている。はやてちゃんを中心とした、私、フェイトちゃん、ヴォルケンリッターの皆が揃う、夢の部隊。目的は古代遺物「レリック」ロストロギアを確保することが中心。私は教官官として新人である前線を鍛え、またあるときはスターズ分隊長のスターズ1として戦いに赴く。フワードメンバー

「さーと、今日もいい天気だなあ……………」

さつき朝の練習が終わって、解散したばかり。今日は今までの特訓の無茶のせいでスターズ二人のデバイスが壊れちゃった。そろそろ実戦用に切り替えるべきかなあ……………そうなると色々と訓練内容を修正しないとね。そんなことを考えていると、帰る道の途中に蒼い鳥が空を飛んでいた。とつさに私はある人を連想してしまった。

「……………どうしてるかな？直人君……………」

あれからもう3年以上が過ぎた。直人君は今だに帰ってこない。少し前にマリカさんにも聞いたけど、直人さんはどこかでまだ生きている。会いたい……………そう思う。私は首に掛かる二つのネックレスを触った。

「きつと、どこかで会える……………でも、会いたいよ、直人君……………」

私はその触っていた手を放し、その雲一つない空を見つめる。そんなことをしていると、グリフィス君から通信が入った。

「どうしたの・・・？うん・・・うん・・・わかった」

どうやら、私には休む暇なんてないみたいだね。直人君、私、頑張るよ・・・

直人 side

俺は山岳地帯にいた。

「ここどこだ・・・」

そこはもうなんというか、人の気配などまるでない山の中。俺は空中に転送され、森の中へと落ちた。そして木の枝に引っ掛かり、そのまま地面に叩きつけられた。正直な感想を言おう。かなり痛い。

「確かにちよつと無理がある転送とは聞いてたけどさ・・・」

『主、あれですよ。“お約束”って奴ですね』

「メシア、そんなこと誰から聞いた。」

『無論、アリシア嬢です。』

「だろーな」

そんなアホなこと吹き込むのはあいつだけだし。それにしても・・・

・・・

「ここ、本当にミッドチルダか？」

『間違いありません。ミッドチルダの山岳地帯です。地図にもそう出てますよ』

ブレイブスワローが地図を出すけど、これ4年前の地図だろ？まあ、かわらずそこは山岳地帯なわけで、変わらないんだろうけど。地図をよく見ると何かの線がある。なんだこれ。

「この線は？」

『これはリニアールですね。』

「ならこの線路を通っていけばいいんだな」

ちなみにここで一つ言っておこう。何故空を飛ばないのか？と疑問を思うだろうが、現在は山岳地帯に囲まれ、しかも森のど真ん中。木が生い茂りまくっているため、空へ抜け出ることが出来ないのだ。

『主、誰に説明してるんですか？』

「そこは気にするな。」

とにかく、俺はそのリニアールを目指し、途方もない道を歩くことにした。

なのはside

私達は聖王教会の出勤要請で、リニアにあるレリックの確保に向かった。フェイトちゃんは後から合流予定。はやてちゃんは聖王教会で騎士カリムと会談をしている。前線メンバーの初出撃なので、シグナムさんとヴィータちゃんはず、私が空域を確保して、新人メンバー4人がリニアに突入してレリックを確保する。私は空域を確保するため、出撃する。

「スターズ1！高町なのは、行きます！レイジングハート、セーツトアップ！」

私はその空へと飛び立った。

直人 side

「メシア、何か来ないか？」

さつきから機械の音がする。どこかで聞いたことのある音だ。

『来ますね・・・』

すると、そこに現れたのは青いボディで丸い形をした機械だった。

「ガシエット・・・？だが、アルハザードにあんなタイプは・・・」

戦闘用のガシエットのようだが、アルハザードの仕様とは色が違う。アルハザードのは黒いガシエットだ。

「思い出した！こいつは、昔出てきた未確認！」

『主！ロックされてます！』

「ちっ！やるしかないのか！メシア、セッティング！」

『オーライ、スタンバイレディ』

俺は蒼い甲冑を纏い、剣を手取る。

「行くぞ！」

俺はガシエットに斬りかかる。アルハザードのよりはいくらか弱い。すると、別方向から光線が飛んでくる。まだいたのかよ。ゾロゾロと出てくる。面倒くさい。

「メシア、一気に決めるぞ」

『オーライ、ロードカードリッジ！』

カードリッジがロードされ、メシアに蒼の雷が宿る。

「虚空雷閃！」

虚空雷閃を放つと、バラバラと音を立てて、そのガシエット達が崩れ去った。それを確認すると、俺はそのコアらしきものを手に取る。

「メシア、ブレイブスワロー、解析してくれ」

『了解・・・』

数秒メシアたちが光る。

『結果が出ました。100%の確立でアルハザードで生産されたものではありません』

「そうか・・・」

すると、この世界にアルハザードの知識を持つ人間がいるのか？嫌な予感がする。誰か、管理局に連絡を取ればいいんだが、前の戦いで俺は死んだことになっているらしく誰とも通信が繋がらない。

「仕方がない、この残骸は放置して、町を目指そう」

『そうですね・・・』

俺たちは再びその道を歩き始めようとした、まさにその時だった。目の前をリニアが通り過ぎた。

「リニアだ・・・」

『しかもガシエットのオマケつきですよ』

「そんなオマケ嬉しくないな」

どうやらさっき潰したのはアレへの援軍だったらしい。しょうがない、破壊するか。

『待って下さいマスター、上空に強力な生体反応があります。』

『主、この反応はキメラです。魔導士一名が交戦中！』

メシアたちに言われて空を見上げる。そこには黒い化け物、キメラがいる。

「ちっ！まさかキメラがいるとはな・・・・・・・・ん？」

戦っている魔導士、あれはどこかで見た気がする。白いバリアジャケット、それに桃色の魔力弾、そして茶髪のツインテール・・・・あれはまさか・・・・

「メシア、ブレイブスワロー・・・・あれをやるぞ」

『アレですか？10分と持ちませんけど』

『しかし、キメラと戦うならそれは妥当かもしれません。』

「その通りだ。行くぞ、メシア！ブレイブスワロー！」

『了解、我が主！デバイス複合！』

俺は光に包まれ、その背に白い翼を纏った。

「行くぞ！」

こうして、俺はその蒼い空へと飛んだ。

なのはside

任務は比較的楽だった。ガシエット？型を破壊し、空域を確保。そしてフォワードのみんなが無事に突入した。ライトニングの二人は

ちよつとピンチだったけど、キャロのおかげでなんとかクリア。私もリニアに降りようとしたとき、異変が起きた。

「ガアアアアアアアアアアア！！！！！」

!?

「マスター、後ろです！」

レイジングハートが叫び、後ろを見た。そこにいたのは牙を持つ、黒い怪物。

「あれは……!？」

かつて見たことあるその姿。まさかあれは……

「キメラ!？」

「ガアアアアアアアアアア！！！！！」

キメラは答えるように咆えた。そして私に突進してくる。

「アクセルシューター！」

私の周りに光弾が浮かぶ。

「シュート！」

アクセルシューターを放ち、見事キメラにぶつける。でもキメラはそんなことお構いなしに突っ込んできた。

「っ!？」

防御魔法を使って防ぐけど、反動で吹き飛ばされる。このキメラ強い……!今度は黒い翼が生え、その羽根がこっちに飛んでくる。

「レイジングハート!」

『プロテクション』

再び防御するけど、今度はその羽根が爆発して、吹き飛ばされた。

「きゃあ!」

そのまま追い討ちをかけるように突進され、私は地上へと落ちていく。まずい、魔力の制御が出来ない……!

(このままじゃやられちゃう……!フェイトちゃん、はやてちゃん……直人君!)

私は目を閉じ、直人君の事呼んだ。何故かはわからないけど、私は直人君を呼んだ。そして、私は誰かに抱えられた。そして、地面に着いた音がする。フェイトちゃんが来てくれた?ううん、それはまだ早すぎる。じゃあいったい誰が?私はゆっくりと目を開ける。そこにあるのは白い、天使の翼。そして、蒼い騎士甲冑……こんな姿をしている人を、私は1人しか知らない。目から涙が溢れる。私は絞るような声で、その人の名を呼んだ。

「……直……人……君?」

「お待たせ、なのは・・・」

私の前に、蒼天の騎士が再臨した。

第一話「蘇る蒼天の翼」（後書き）

さて、久しぶりのあとがきです。

秋風「久しぶり、なのは」

なのは「うん、外伝では出れなかったからね」

直人「とりあえず早くも再会できたな。」

なのは「そうだね♪」

秋風「それにしても映画化、おめでとぅございます」

なのは「にやはは、遅くない？」

直人「というか、秋風はアニメディアを買ってから正確な日にちを知ったらしいな」

秋風「はっはっは、どうしょ。テストの3日前だよ。」

直人「勉強しろよ?」

なのは「そうだよ?これで赤点なんて取ったら補習だよ?」

秋風「知るか!俺はみるったら見るぞ!」

直人・なのは「「コラー!」「」

秋風「次回第二話『再会と出会いと・・・』TAKE OFF!」

第二話「再会と出会いと・・・」(前書き)

更新遅れました。すいません・・・

では第二話どうぞ

第二話「再会と出会いと・・・」

直人 side

目の前にいるのは間違いない、キメラだ。しかも最近作られた感じだな・・・。とりあえずなのはは無事か…こんな再会になると思わなかったけど、まあいいか・・・

「なのは、平気か？」

「本当に・・・本当に直人君なの・・・？」

まだ目から涙を流しながら俺を見るなのは。まあ、信じられないのも無理はないか。

「ああ、正真正銘の井上直人だ。なのは、お前は下がってろ」

「でも・・・」

「大丈夫、俺は負けない」

言いながらなのはを降ろし、メシアスワローを手にとった。

「行くぞ！」

「ガアアアアアアア！！！！」

俺は駆け出し、メシアスワローを振るう。キメラの爪と重なり合って、火花が散る。このタイプのキメラはなのはには辛いかな・・・

「メシアスワロー！」

『ロードカードリッジ！』

「真・蒼天雷破！」

「ギガアアアアア！……！！！」

一撃が当たると、キメラが奇声を上げて倒れ伏した。そして黒い灰が舞い、黒い核が現れて砕け散った。

『複合、強制解除』

「ふう………」

やっぱりマリカなしだと10分保つか保たないかな……

「なのは……大丈夫……」

「直人君……！」

安否を聞こうとした瞬間、なのはが俺に抱きついて来た。俺はそれを受け止める。

「おっと……」

「直人君……直人君……ふえええん！」

「な、泣くなよ！」

「だって、だってえ！」

まったく、涙なんか出して…せつかくの美人が台無しだ。そんなことを考えていると、空中から誰か降りて来た。金髪に黒いバリアジアケット……

「フェイト？」

「直……人……」

ん？色々考えてみればこの状況は非常に不味くないか？

「あ、フェイト……これは……」

「直人！」

俺は色々と焦ったが、フェイトは俺に構わずに抱きついて来た。

「フェ、フェイト！？」

「直人……うつぐ……ひつぐ……」

フェイトまで泣き出す始末。ああ、どうしようか……

「ああもう、二人とも泣くなよ……」

俺は二人の頭を撫でる。この辺は変わらないな、二人とも。まあ、四年も連絡ない人間がいきなり現れたら驚くよな。こうして、俺は二人との再会を果たした。

??? side

「ドクター、リニアに放ったガシエット、全滅しました。レリックも管理局の手に渡ったようです。」

「まあ、今回は貴重な研究材料が見ただけでも、良しとしよう」

私はうすい笑みを浮かべ、その光景をみる。金髪の少女に赤髪の少年、青い髪の少女…よもや、私の作品たちがこうして存在していたとは…

「Fの残滓か…そして」

私は別モニターに映る青年と怪物を見る。

「ふふふ…英雄か。よもや生きているとは思わなかったな。そしてキメラ…素晴らしい！」

私は目の前に映る研究材料に心を躍らせた。

直人side

とりあえず俺はなのはたちに連れられいったん機動六課という隊舎に連れて来られた。そして、その隊舎の前につくと、茶髪の女性が駆け寄ってきた。

「直人君…！」

「はやて」

「直人君・・・う、うえええ！」

はやてまで泣き出してしまった。後ろでは泣く三人の姿を呆然と見る4人の子供がいる。色々突っ込みどころがあるが。数分ではやてが落ち着き、応接室へと連れて来られた。その頃には3人とも落ち着いていて、俺は3人から解放された。

「落ち着いた？3人とも」

「うん・・・」

「なんとか・・・」

「大丈夫や・・・」

「こんな形で再会するなんて、思っても見なかったけど。みんなが元気そうでよかった」

「私も、直人君に会えてとても嬉しい。」

なのはが笑う。この笑顔は何年ぶりに見たっけな。

「色々気になることがあるんだが、どうして3人はミッドチルダに？」

「うん、この部隊ははやてが作った部隊「機動六課」なんだ」

「はやてが作った部隊？」

俺は驚いてはやてを見た。前に指揮官としての研修も受けていると聞いたことはあったが、まさか本当に指揮官になっているとは驚き

だった。

「目的は昔直人君も見た古代遺物「レリック」の確保や」

「なるほど・・・」

「で、今回リニアでレリックが確認されて、出撃したら・・・」

「俺がいた・・・と」

「うん」

フエイトが頷く。ああ、そういえば預かり物もあるんだよな。とりあえずいきさつからも話さないといけないか。

「ところで、直人君はこの3年間どこにいたの？」

「ああ、それを丁度話そうと思ったところだ」

そう言つて俺は結界を展開させ、念話、通信などを一切遮断した。

「え！？」

「3人には話すつもりではいた。でも、他の人間に聞かれるのは色々とまずいんだ。心して聞いてくれ。勿論、他言無用だ」

俺の言葉に3人が頷く。そして俺は語り出す。3年前の運命の日。俺はゼオンの「次元回路の旅人」によって異世界「アルハザード」に辿り着いたこと。そしてそこでアリシアとプレシアさんに助けられ、アルハザードの騎士になったこと。アリシアたちのことに関し

ては、フェイトは驚きを隠せなかったようだ。なのはも驚いている。

「母さんが・・・」

フェイトの目から涙が溢れる。嬉しいのだろう。実の母が生きていることが。

「手紙を預かってる。後で読むといい」

そう言って俺はフェイトに手紙を渡した。

「じゃあ、直人君はこの世界に帰ってきたのは」

「勿論地球に帰るためだ。」

「そっか・・・よかったよ。本当に。私、毎日祈ってたの。直人君が帰ってくるようにって」

そう言っただけのはが取り出したのは桃色の星のペンダント。フェイト、はやてもそれぞれ取り出す。ああ、それは確か俺が買ったやつか・・・

「これ、スターズ、ライトニング、ロングアーチのエンブレムなんだよ?」

「そうなのか・・・なんか恥ずかしいな」

俺は言いながら紅茶を口に流す。すると、はやてが唸っていた。

「どうした?はやて」

「あんな、直人君。実は頼みがあるんよ」

「頼み？」

「直人君、機動六課に入らへん？」

「機動六課に？」

機動六課といえばこの部隊のことだ。この3人に加えヴォルケンリッターが全員いるのに、俺が必要なのだろうか？なのはとフェイトも驚いてはやてを見た。

「は、はやてちゃん！？」

「はやて、いくらなんでもそれは……」

「今機動六課は色々と力不足なんよ」

「つまり、その不足を補うために俺が？」

「うん……勿論無理にとは言わへん。」

はやての言葉に少し考える。キメラがさっき現れた時から、あることを考えていた。『この世界にもしまラキアが来ていたら』という恐ろしい考えだ。もしそうなら、俺はここで戦わなければならない。だが、それには俺1人では無理だ。なら、はやてたちの力を借りるのは一つの手ではないだろうか？

「わかった。」

「「「え?」「」」

「手伝うよ、はやて。機動六課の力になる。」

「ほ、ほんまに!？」

「ああ、ただ一つだけ頼みがある」

「なんや？」

「さっきのキメラのことだ。」

俺は言いながらメシアから画像を映し出す。なのはさえも圧倒するそのキメラを。

「これ、4年前の・・・」

「ああ、実はアルハザードに、1人の犯罪者がいた」

マラキア・・・あいつがこの世界に来ている可能性も、キメラが現れたならあるだろう。俺はマラキアについてのいきさつも話した。マラキアがアルカディアでカオスを生み出し、世界を破滅させたということを。

「そいつがもしこの世界に来ていたなら、逃がした俺に責任がある。」

「カオスを生み出した存在・・・」

フェイトがポツリと呟き、なのはとはやても息を呑む。

「頼みたいのは、もしこいつらが現れたらなんでもいい。情報をくれ。それが条件だ。」

「うん、ええよ。うちらも直人君の力になる。」

「ありがとう、はやて」

「はやてちゃんだけじゃないよ。私だって力になる」

「私もだよ、直人」

なのはとフェイトが俺の手を取り、はやてがそれを包むように握った。

「改めて直人君、機動六課へようこそ！」

はやての言葉に、皆が笑っていた。

数十分後、俺たちはロビーへ向けて歩いていた。なんでも、俺をみんなに紹介するそうだ。

「なあ、なのは？」

「なあに？」

「姉さんとマリカ・・・どうしてる？」

「うん、元気だよ。アリサちゃんやすずかちゃんも直人君の心配してる」

「そつか・・・みんなに迷惑掛けたからな」

今さらだが、俺は随分といろんな人に迷惑を掛けたな。本当に。そんなことを話していると、ロビーに着いた。結構人数が多いな。すると、はやてが壇上に上がる。

「今回、急ではありますが、民間協力者として、1人の騎士がいらしてくれました。」

俺ははやての隣に立ち、挨拶をする。

「井上直人です。皆さん、よろしくお願いします」

挨拶を終えると、拍手が巻き起こった。なんだ？この異様な雰囲気は。挨拶が終わって解散になると、4人の子供が俺のところに寄ってきた。確かこの子達は近くにいた子達だ。

「あ、あの・・・！ミッドチルダを救った英雄なんですよね！」

赤髪の男の子にキラキラした目で言われ、俺の思考はストップした。何を言ってるんだ、この子供は。

「（おいなのは！なんのことだ！？）」

「（にやはは、言い忘れてたけど直人君はミッドチルダでは超がつくほど有名人だよ？）」

なのはにまで言われ、俺は良くわからない。何故だ？気がつけば周りにいた一般の隊員たちもこちらをチラチラ見ている。すると、フ

エイトが補足を入れてくれた。

「（あのね、あの戦いの映像をミッド全国の人が見てて、そのあとに実は直人は一般にはM E T（戦闘での行方不明）になってて、ミッドを救った英雄として称えられたの。）」

なるほど、それで英雄か。

「あ、あの・・・」

「ん？」

今度は青い髪をした少女が話しかけてきた。あれ？この子どこかで見なかったか？

「えっと、その・・・私、4年前に空港火災で助けてもらったスバル・ナカジマです・・・！その、ずっとお礼が言いたくて、その、あの・・・ありがとうございました！」

空港火災・・・ああ！思い出した！この子エントランスで泣き叫んでた女の子だ！

「そっか、あの時の・・・」

「その、私、ずっと直人さんに憧れてて・・・その、あの・・・」

なんとも歯切れが悪い。緊張しているのかな。

「それで、魔導士に？」

「あ、はい！」

「そうか・・・それは嬉しいな」

そう言つて俺が頭を撫でた。すると、スバルは目に涙をため、俺に抱きついた。今日で4度目だよ、これ・・・

「生きててくれて嬉しいです！うええええん！」

「ああ、わかったわかった！頼むから泣かないでくれよ」

とりあえず頑張つてなだめる。理由は簡単。3人の視線が痛いからだ！

「じゃあみんな自己紹介しようか」

「グスツ、ス、スターズ3のスバル・ナカジマ二等陸士であります
！」

「スターズ4のティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「ライトニング3 エリオ・モンディアル二等陸士であります！」

「ライトニング4のキャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！こっちはフリードリヒ」

「キユク〜！」

4人+αの自己紹介を受ける。なんとまあ可愛い魔導士たちだ。

「井上直人だ。よろしく頼む。」

「「「はい！」「」「」

こうして、俺は機動六課へと迎えられた。

第二話「再会と出会いと・・・」(後書き)

直人「今日は超更新遅かったな」

なのは「まっただよ。」

フェイト「なんでもオールライダー対大ショッカー見てたらしいね」

はやて「あ、うちGacktさんファンなんよ。」

秋風「だよねえ、あの人カッコいい」

直人「ま、お前はひたすら小説かいてればいいんだよ」

秋風「なにおう!」

なのは「次回第三話『模擬戦』TAKE OFF!」

第三話「模擬戦」(前書き)

シグナム戦再びです。今回もそれなりにバトル頑張りました。

それでは本編どうぞw

第三話「模擬戦」

次の日、俺は朝早くに目を覚ました。それというのも、何というか、夜寝た時とは違う感触があったからだ。

ムニッ

「ん．．．？」

何か当たってる．．．前にもなかったか？こんな展開。目を開けると予想通り．．．なのはとフェイトが俺のベッドで寝ている。当たっている部分は言うまでもなく2人の胸だ。

「はあ．．．．．」

ベッドがやけにでかいと思ったら．．．こういうことか。

「よいしょ．．．っと」

とりあえず二人をどける。こいつら、全く変わってない。二人が俺の手を捜すので、しょうがなく二人の手を繋ぎ合わせる。

「さてと、暇だし．．．」

少し早いけど散歩でもするか。俺は隊舎の外へ出る。改めて思うけど、広いな。

「はっ．．．ふっ．．．はあっ！」

ん？こんな朝早くから誰だ？そう思いながらそちらを覗くと、そこにはスバルが一人、練習をしていた。

「朝から頑張るなあ・・・」

「な、な、直人さん！おはようございます！」

スバルが顔を真っ赤にして、俺に挨拶しながら敬礼してきた。

「俺は囑託だから敬礼はいいんじゃないか？」

「す、すみません・・・」

「いや、いいって・・・それにしても1人で特訓か・・・朝練もあるのに偉いな・・・」

「えと、今ティアがトイレに行っているからいませんけど、2人で練習してるんです。」

ティアって言うと、あのオレンジ髪の女の子か。

「そういえばその、直人さんはどうしてここに？」

「ああ、俺は少し早く目が覚めてな。散歩だよ。」

「あの、出来れば戦い方教えてもらいたいなあ・・・なんて」

「別に構わないが」

「本当ですか!？」

格闘技なら騎士団にいたときやったしな。あんまり上手ではないけど。

「ああ・・・それじゃあ、構えろスバル。」

「はい！」

スバルが返事をして構えを取る。俺も構えを取った。

「来い、スバル。」

「うおおおおお！！！！！」

スバルが突きを繰り出し、俺はそれを避ける。続けて蹴りが飛んできた。あんまり重くないな。俺は受け止めた蹴りを弾く。動きも単調だな。

「スバル。蹴りにしろ突きにしろ、もっと体重を乗せろ。」

「は、はい！」

返事をして再び攻撃してくるスバル。さっきよりいくらかよくなったな。

「攻撃パターンが単純過ぎだ。もっとパターンを変えろ。」

「はい！」

こいつなかなか筋がいいな。だが・・・

「これはどうだ？」

俺は飛んでくる突きを受け流すと、背後に回り込んで手を捻った。

「いたたた！痛いです！」

スバルに言われ、俺は手を離れた。

「バリエーションを増やして戦え。今の突撃じゃ、性能の高いガシエットには通じないぞ。」

「あ、ありがとうございます！」

「スバルお待たせ・・・って、井上さん！」

「ああ、おはよう。ティアナ・・・だったか？」

「お、おはようございます！井上さんどうしてここに？」

ティアナも敬礼してきた。だから敬礼いらないって・・・

「朝の散歩だよ。たまたま通りかかったただけだ。」

「そうなんですか・・・じゃあなんで汗を掻いてるんですか？」

「スバルと少し組み手したんだ」

なるほど、とティアナが納得する。

「それにしても、二人とも頑張るな。朝の訓練があるってなのはから聞いてたのに。」

「はい、私は凡人なので、他人より多く練習しないとダメなんです。」

「私はティアが一人で練習するのが寂しそうだから一緒にやってるんです。」

「別に寂しくないわよ、馬鹿スバル」

「えー！ひどいよティアー！」

仲いいな、こいつら。って、もう朝練の時間じゃないか？

「二人とも、朝練って6時からだよな」

「はい、そうですけど・・・」

「もう10分前だぞ？」

俺が言うと、ティアナが自分の時計を確認して、数秒硬直。どんな顔が青ざめる。

「スバル！走るわよ！」

「え！ちよつとティアー！？」

「井上さんありがとうございます！失礼します！」

ティアナが敬礼し、スバルもお辞儀をしてそのまま走っていった。
頑張れ、二人とも。

二人が走っていったが、俺はとりあえず歩いて訓練場へ向かった。
昨日挨拶してきた4人がガシエット相手に戦っている。へえ、頑張るなあ……

「井上？」

後ろから声が掛かった。この声は……

「シグナムさんじゃないですか」

「ああ、久しいな。無事で何よりだ」

ピンク色のポニーテールの女性、シグナムさんが微笑んだその瞬間、
レヴァンティンが首筋へ向けて振るわれた。俺は反射的にそれを避ける。

「ほう、腕を上げたな」

「び、びつくりした……いきなり何するんですか」

危ない……ライと特訓してなかったら首が飛んでたよ……

「なに、ちよつとした挨拶だ」

「こんな物騒な挨拶は聞いたことないです。って、シグナムさんは訓練出ないんですか？」

「ん？ああ、私は人に教えることはできんな。作戦なども、近づいて斬れと言えん」

「あ、あはは・・・」

この人も変わってない。相変わらず怖い……。すると、なのはが降りてきた。

「おはよう直人君！」

「ああ、おはよう。訓練は？」

「今丁度終わったよ。直人君もやってみる？」

まあ、腕試しってことでいいかな・・・・・・・・

「わかった、やるよ」

「そうこなくっちゃ。シャーリー！」

シャーリー？どっかで聞いたような。すると、遠くから眼鏡をかけた女性が走ってきた。

「あ、直人さんお久しぶりです」

「君は・・・えーと・・・誰だっけ？」

素で忘れた。どっかで会った気がするけど・・・

「昔観測基地で会ったじゃない。」

「ああ！あの時の！」

確か初任務のときに会ったな。

「久しぶりだな。まさかこの部隊にいるとは」

「はい！八神部隊長からお誘いいただきました！」

「それじゃあさっそく訓練しよう。直人君、準備はいい？」

「ああ、勿論」

俺は訓練場に入り、メシアを手を取った。

「メシア、セットアップ！」

『スタンバイレディ！』

蒼い騎士甲冑を纏うと、メシアを構える。すると、ガシエットたちが出現した。

『じゃあはじめるよ？』

「ああ、いつでもどうぞ」

俺は画面向こうにいるなのはに頷く。

「それじゃ、レディーゴー！」

ガシエットたちが俺に向かってくる。俺はバックステップでガシエ

ツトの攻撃を避ける。

「メシア、セカンドモード！」

『2モード！』

メシアが双剣へと変化し、ガシエツトを切り刻んでいく。

「遅い！」

一気に接近し、そのままガシエツトを両断する。この程度なら楽勝だな。どうせならアルハザードで考えた新しいフォームを使ってみるか。

「メシア、新しいフォームを使おう」

『5モードですか？』

「ああ、やってみよう。」

『了解、5モード！』

メシアが一つになり、そして形状が変わっていく。これは今まで使ったこともなかったがとりあえず試したくなったので使ってみた。それは長い太刀だ。ちなみに4年前にも使ったことはない。

「さて、行くぞ！」

俺は駆け出し、太刀を振るった。遠くにいる敵にも、その攻撃が届く。付加能力としてその振るった斬撃が衝撃波としてい飛んで行く

オマケ付き。これによって大分数が減った。

「楽勝だな」

『しかし主、これは結構魔力の調節が難しいですね。』

「ああ、そろそろリミットブレイクでカタをつけよう」

『オーライ、リミットブレイク！』

ティアナ side

伝説とまで言われた英雄。最初は半信半疑だったけど、訓練が始まってからは驚きを隠せなかった。その次々と剣の形状を変えて戦う井上さんの姿。その強さはまるで鬼神だった。

「あれ、あんな状態初めて見たね」

「そのようだな、後で聞いてみるとしよう」

なのはさんたちは彼がガシエツトを倒すことより、その武器の形状を気にしている。もしかして、あの人がコレくらいをこなすのは当たり前だと思ってるの？

「すっごーい！かっこいい！」

一方でお馬鹿な相棒とちびっ子二人はキラキラした目で井上さんを見ている。まあ、この子達にとってはカッコいいんでしょうね。スバルに関してはさっき遠くから井上さんが見てたのをスバルが見た

ときガチガチになってたし。スバルはそれほど懂れてるのね。

「あれ、直人君・・・」

なのはさんが驚いた顔になった。井上さんの甲冑が真紅に燃え上がったからだった。

「リミットブレイクを使ってる」

「ああ、そういえばお前はアレを無闇に使うなと教えたのだったな」

「はい・・・まったく直人君は・・・」

なのはさんから少し黒いオーラが出ている。シグナム副隊長はなんかワクワクしてる。どうしてかしら。

「紅蓮雷斬！」

爆音とともに、ガシエット？型が破壊された。嘘でしょ！？粉々じゃない！すると、なのはさんに通信が入った。

『なのは、終わりか・・・？』

「うん・・・」「いや、まだだ」

シグナム副隊長がいつの間にか騎士甲冑を纏い、空を舞った。

直人 side

もう終わりだと思ったが・・・シグナムさんか。久しぶりに戦うのも悪くない。

「さあ、次は私と勝負だ。」

「ああ、こうして戦うのは・・・」

「3年ぶりだ！」

互いに駆け出し、俺はメシアを振るう。

「やるな！腕を上げている！」

「貴女もあの時は本気ではなかったようだな」

攻撃が早い。

「レヴァンティン！」

『ロードカードリッジ！』

「メシア！」

『ロードカードリッジ！』

互いにカードリッジをロードし、構えを取って駆け出す。

「紫電・・・」

「紅蓮・・・」

「「一閃！」」

紅と紫の光がぶつかり合う。

「ならば！」

『シュランゲンフォーム！』

シグナムさんのレヴァンティンが連結刃になった。あれはまずい！

「くっ！メシア、2発だ！」

『ロードカードリッジ！』

「火竜・・・一閃！」

シグナムさんが火竜一閃を放つ。俺はその紅と蒼の混ざった雷をメシアに纏わせ、それを振るった。

「紅蓮蒼雷斬！」

その斬撃がぶつかり、相殺された。このままでは魔力消費が激しい俺が負ける。

「メシア！」

『クリスタルブレイド！』

空中に透明な剣が8つ現れ、それがシグナムさんへ向かう。これはクリスタルダガーの応用。数よりも質量にこだわったその威力と追尾性能の高い射撃攻撃。

「ぬっ！4年前のようにはいかんぞ！」

「4年前と同じと思ったら大間違いだ！」

俺が言うと、シグナムさんが避けたクリスタルブレイドが細かく分散され、クリスタルダガーとして降り注ぐ。

「くっ！何！？」

「もらった！」

俺がメシアを振るう。そしてそのままシグナムサンを地面に吹き飛ばした。煙が晴れると、いつの間にかボーケンフォルムで構えていた。

「駆けよ隼！」

「何！？」

『ボーケンフォルム』

矢が飛んでくる。俺は残り5発のうちのカードリッジの2発を使う。

「虚空紅蓮刃！」

紅い斬撃と矢がぶつかり合った。コレによって俺はリミットブレイ

クが解ける。魔力を消費しすぎたようだ。そしていつの間にかシグナムさんが近づいていた。

「レヴァンティン！」

「くっ！メシア！」

『『ロードカードリッジ！』』

「紫電・・・」

「蒼雷・・・」

「「一閃！」」

——ズガアアアン！！！！

俺たちは爆風に巻き込まれた。

なのはside

ま、まさかここまでやるなんて・・・

「直人君！？シグナムさん！？生きてますか！？」

一応非殺傷設定だけど、こんだけ爆発したら二人もただじゃ済まないよね。なんてことを思ってたら、煙の中から声が聞こえる。

「「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」」

まさかまだ戦ってるの！？モニターを見ると、もう完璧な斬り合いになっている。二人とも負けず嫌いだなあ・・・もう。それにこれ以上やったら訓練場壊れちゃうよ。

「二人ともストロップ！！！」

私は二人の戦いを止めた。

直人side

俺のメシアとシグナムさんのレヴァンティンが当たる直前、俺たちは剣を止めた。すると、モニターからなのはが怒っていた。

『もう、二人ともやり過ぎだよ！』

「じ、ごめん・・・つい夢中に」

「すまないなのは隊長」

シグナムさんと謝罪し、俺たちはなのはたちのところへ向かうことになった。

「それにしても直人、腕を上げたな」

「まだまだですよ。ボーケンフォームに対処しきれませんでしたし」

ん？シグナムさん今俺のこと直人って・・・

「私もまだまだだ。本来ならボーゲンフォームで仕留めたと思っていたが、まさかあんな切り替えしをしてくるとは思ってたかな。」

シグナムさんが笑う。

「嬉しいぞ、お前のような騎士に会えてな。これからも頼むぞ、好敵手よ」

「あ、はい・・・」

シグナムさんが手を出してきたので握手した。今、好敵手と書いてもって読まなかった？

こうして、俺のシグナムさんとの再戦の模擬戦は終わりを迎えた。

第三話「模擬戦」（後書き）

さて、今回はこれ、シグナムとフラグたったかも

直人「ありえない。シグナムさんに限って」

秋風「でもほら、あの人は超バトルマニアだぞ」

直人「それはそうだけど・・・」

秋風「ま、いずれにしろ頑張れ、三人は何か言うことは？」

なのは「直人君？」

フェイト「ちよつと・・・」

はやて「お話しよか？」

直人「ギャあああああああああ！！！！！！！！！！」

秋風「次回、第四話『派遣任務、いざ海鳴へ！（前編）』 TAKE
OFF！」

第四話「派遣任務、いざ海鳴へ!」(前編)」「(前書き)

最近忙しくて更新が出来ません!ごめんなさい!

第四話「派遣任務、いざ海鳴へ！（前編）」

模擬戦が終わり、俺は食堂で朝食をとることになった。右側になのは、左側にフェイト、正面にシグナムさんが座り、食事を取りながら先ほどの模擬戦について話をしている。

「そういえば直人、お前のあの太刀はなんだ？」

「ああ、あれは5thモード・・・まあ、新しい形態です。少し前にプレシアさんがメシアを拡張してくれたので、それで考えて作りました。付加能力として斬撃が飛ばせます」

3人になるほど、と納得する。

「でも直人君？どうしてリミットブレイクを使ったのかな？使いすぎは禁止って言ったよね？」

！
なのはから黒いオーラが出てる。笑ってるけど目が笑ってない・・・

「うつ・・・でもこの4年間で体に反動はでなくなったんだ。」

「ふーん、そうなんだ。」

とりあえずなのはは納得してくれたいらしい。すると、はやてが来た。

「直人君、みんな、おはようっ」

「おはようはやて。」

「実はな、聖王教会から依頼が来たんよ」

「依賴？」

「そ、派遣任務の依頼」

はやてが説明し、そのロストロギアを見せる。なんかスライムみたいだな。

「それで、どこに行くことになったの？はやて」

フェイトが不思議そうに聞くと、はやてが意味ありげに笑う。

「ふふふ、派遣任務の行き先は……」

はやてが一拍置き、その場所を発表した。

「97管理外世界地球、日本の海鳴市や！」

「ええええええ！！？？」

二人が驚きの声を上げる。俺とシグナムさんも声に出してはいないが、驚きた。ってことはつまり……

「俺も一時的に地球に帰れるって事か……」

「そ、お得やろ？」

はやてが嬉しそうに言っていた。もしかしてこいつ、狙ってたのか

？こうして、俺たちは派遣任務として、地球へと向かうことになった。

地球に着き、俺は海鳴に戻ってきた。ああ、久しぶりの地球だ。ちなみに俺たちは今コーテージにいる。

「金持ちのやることはわからねーな。なんで住んでる町に別荘建てるかな、アリサの奴」

「にやはは・・・」

「あはは・・・」

なのはとフェイトが苦笑する。そう、ここはアリサの別荘だ。フォードメンバーは初めての管理外世界だから、はしゃいでいる。

「直人さん！なのはさん！フェイトさん！飲み物どうぞです！」

「お、ありがとうリン」

そう言っリンが俺たちにお茶を渡してくれた。今のリンの状態はマリカの戦闘体制のときと同じ、フルサイズだ。大きなエリオやキャロぐらいた。先ほどのティアナの「でかっ・・・やっぱ小さい・・・？」という突っ込みは面白かった。

「そっいえばアリサたちは何時来るんだ？」

「もうすぐ来るはずだよ・・・あ、来た！」

なのはの視線の先には一台の車がある。そこから降りてきたのは・
・
・

「なのは！フェイト！」

「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

十中八九、この二人だ。そして、俺に視線が行く。

「直人……」

「直人君……」

「そ、その……ただいま……」

俺が言った瞬間、そう、まさにその瞬間だった。

「バカア！」

二人同時にパンチを入れられた。グフツ……いい、パンチじゃないか。そんなことを思っていると、今度は二人が涙目で俺に抱きついてきた。

「生きてたなら、連絡くらいしなさいよ……バカアアア！」

「直人君！ほんとに、無事で……うええええん！」

「二人とも……その、ゴメン」

俺はそれしか言えなかった。すると、俺は後ろで殺気を感じ取った。そこには黒いオーラを放つ3人の姿があった。はやて、お前はいつの間に戻ってきたんだ。

「私たちが泣いたときは泣くなって言ったのに・・・二人には随分優しくない？」

「頭冷やす？」

「ちょ、ちよつと待て！」

俺が慌てると、3人とも笑っていた。

「ま、今回は特別許してあげる。」

「何を許すんだ、何を・・・」

俺がため息をつくすると、今度は俺のところに小さな何かが飛んできた。

「うわーん！主！主！主！」

マリカだった。

「マ、マリカ！？」

「主！無事でよかったです！」

泣きじゃくりながら俺に擦り寄る。ああ、こいつも変わってないな。そんな騒動の後、フォワードが挨拶すると、アリサたちが挨拶を始

める。

「アリサ・バニングスよ。なのはやフェイトたちとは親友で、直人とはベッドで一夜を過ごした仲よ。」

「月村すずかです。アリサちゃんと同じくなのはちゃんたちとは親友で、直人君は私の未来の旦那さんです。」

二人が自己紹介する。その瞬間、俺が突っ込みを入れた。

「おい！俺との関係の説明がおかしいだろ！」

「そうだよ！直人とは私だって一緒に寝たよ！」

「うちだって寝たで！」

「直人君は私の旦那さんなの！」

なのはたちが抗議の声を上げる。でも違う！みんな根本的に抗議するポイントが間違ってる！ライトニングの二人は意味がわかっていないようだが、スターズの二人は顔を紅くしている。ああ、俺をそんな目で見ないでくれ。

「ゴホン！そして、私が主、井上直人のユニゾンデバイスのマリカです」

マリカがお辞儀すると、大きさがフルサイズになった。今なる必要があるのか？

「リインがフルサイズでいるので、私もなっておこうかなと」

「あ、あの！マリカさんですか！？本物の！？」

スバルが目をキラキラさせている。あれ？こいつに会ったことあったか？

「4年前空港にいた女の子ですね？ずいぶん大きくなりましたね」

マリカが笑顔で答える。コイツも覚えてるのかよ。

「ギン姉から聞きました！ギン姉を抱えて怪物から逃げてくれたって！それで直人さんが怪物と戦ったって！」

スバルの目がもうなんというか、ギラギラにランクアップした。ああ、そうか。ギン姉って、スバルの姉のギンガちゃん・・・だったかな？よく覚えてないけど。

「さて、じゃあ任務に移ろうか」

なのはが切り出し、任務の説明に入った。捜査範囲は町全体。その特定箇所にサーチャーを置くというもの。俺はセットアップし、マリカと空から設置することにした。

「私たちは千草さんを迎えに行くから。後でね。」

「え、千草さん来るの！？」

なのはたちが驚くと、フォワードが首を傾げる。

「千草さん・・・？どなたですか？」

「俺の姉だ・・・高級レストランのシェフをやっている」

「その千草さんが今回お料理を沢山持ってきてくれるらしいわよ」

「千草さんの料理は本当においしくて滅多に食べられないからね」

「「「やったあ!」」」

3人が喜び、フォワードのスバルとエリオがよだれをたらしている。

「とにかく、また後でね。すずか、行くわよ」

そう言っアリスたちは来るまで俺の家に向かった。

「あれ、直人君は空から?」

「ああ、マリカもいるし、ステルスは効くからな」

「終わったら一旦翠屋に集合だよ」

「了解・・・井上直人、出るぞ!」

こうして、俺はマリカと空を舞った。

一時間後、俺たちはサーチャーを巻き終えて翠屋に向かった。

「おお、直人君!」

「士郎さん、桃子さん」

懐かしい面々と再会した。

「いやあ、立派になったな！無事で何よりだ！」

「ほんと、たくましくなったわね」

と、二人が笑っている。

「おい、直人君——！」

すでになのはが奥の席を取っておいたようだ。

「お疲れ、なのは」

「うん。直人君とマリカさんもね」

俺たちは紅茶を飲みながら、他のメンバーの到着を待つ。その横でマリカがケーキを食べている。

「マリカ、夕飯食えなくなっても知らないぞ」

「ケーキは別腹なんです」

「女には腹がいくつあるんだ。」

と、冷静なツツコミを入れると、なのはがクスクスと笑っていた。

「ふふふ、直人君はこっちに戻ってきてからいつもの直人君になっ

たね」

「そうか？」

「うん、そう。」

なのはが笑い、俺も自然と笑顔になる。他のメンバーが来るまで、俺たちは翠屋での一時を楽しんだ。後でフェイトたちにボコされたのは言うまでもない。

別荘に戻ると、どこかで見た女性が走ってきた。

「直人！」

「姉さん！」

姉さんが俺にダイブし、俺はそれを受け止める。

「直人、お帰り！」

「ただいま姉さん・・・心配させてゴメン」

二人で抱き合っていると、フォワードがなぜか泣いている。お前らが感動してどうするんだよ。姉さんの後ろには大量の料理が並んでいる。どうやら、もう作って持ってきたらしい。すると、はやてたちが料理をしている。フォワードたちは慌てているが、はやてはかなり料理が上手だから・・・って、なんか揉めてる？

「ちょっと、なんで私が手伝ったら駄目なのー!？」

「これだけいるからいいですよ、シャル先生」

「大丈夫よ私一人が増えても!」

「やめとけシャル、お前じゃはやての足を引っ張るところか料理を殺しちまうから」

「それって私の料理が不味いつて事!？」

「ああ」

ヴィータが率直な感想を言う。ああ、お前ってホントひどいなあ。そしてシャルさんが俺に涙目でよって来る。

「直人君!ヴィータちゃんたちが虐める!」

「い、いや・・・まあ、そうですね。じゃあはやて、シャルさんに野菜とか切るくらいさせてあげようよ」

「そやね、シャル、手伝ってや」

「はい!」

満面の笑顔でシャルさんが手伝いに行った。すると、ヴィータが近づいてくる。

「お前、この4年で口車が上手くなったな」

「あはは。まあ、色々あったから」

アルハザードでは仕事を抜け出すアリシアの説得をしまくったからな。まあそんなことがあって、俺たちは無事バーベキューの準備が終了した。すると、シグナムさんが戻ってくる。

「シャマル、お前は手を出していないだろうな？」

「あ、シグナムひどい！」

「まあまあ、材料を切ってくれましたから」

「まあ、切るくらいなら・・・」

と、シグナムさんが唸っていた。その後シャマルさんがいじけてしまったのは言うまでもない。

『いただきます！！』

こうしてみんなでの食事が始まった。とりあえずルールとして、バーベキューの肉は馬鹿食いしてもいいが、姉さんの料理は味わって食べるように。だそうだ。そうでもないとスバルとエリオに歯止めが利かなくなるそうだ。

「わあ、おいしい！」

「ああ、姉さんの料理は久しぶりだな」

この4年間はリンスさんの料理だったな。おいしかったけど、あの人和食を知らないから大変だった。なのはたちは姉さんの料理に喜んでいる。あ、ティアナとキャロも頬に手を当てて喜んでる。

「んっ、おいふい！」

一方スバルが肉を頬張っている。エリオもか。お前ら、少しは野菜を食え。

「それにしても姉さん、よくこんなに作ったね」

その量はもう山盛りだ。俺たち全員で食いきれるかも怪しい量だ。まあ、それはこの二人がなんとかするだろうけど。

「ええ、朝から来るって聞いてから仕込みが大変だったわ」

につこりと答えてる。ああ、多分半端じゃないんだろうな。こうして、俺たちは夕食を楽しんだ。こんな一日があってもいいよな。こんな、平和な一日が。

第四話「派遣任務、いざ海鳴へ!（前編）」（後書き）

今日はキャラ対談お休みです。

次回は早く投稿するように努力します

直人「バイトと両立するのも無理な話だな」

秋風「6人の女に振り回される貴様が言うな!」

直人「なにおー!」

秋風「次回第五話『派遣任務、いざ海鳴へ!（中編）』 TAKE
OFF!」

第五話「派遣任務、いざ海鳴へ!（中編）」（前書き）

今回は後書きのゲストにあの方が登場!お借りしますw

第五話「派遣任務、いざ海鳴へ！（中編）」

みんなで食事を終え、食休みをした後、アリサがこんな事を言い出した。

「そういえばこのロッジ、お風呂ないわよ？」

確かに、だが目の前の湖を浴びるほど暖かい季節じゃないよな。どうするんだろ。いつそのこと家に帰って風呂にでも入ろうかな。

「そうなるか・・・」

「あそこやね」

「あそこだね」

隊長陣がなんか頷いてる。どこか場所なんてあつたか？この辺に銭湯とかなんて・・・いや、ちょっと待てよ？

「では、これからスーパー銭湯へ向かいます！」

「・・・スーパー銭湯？」

フォワードが首を傾げる。それはそうだ。そんな施設ミッドにはない。てか、スーパー銭湯は聞いたことあるな。確かかなり広い銭湯だ。ネーミングセンスが微妙だが、それなりに良いと評判だった・・・はず。すると、スバルが俺に近寄ってくる。

「あの、直人さん。スーパー銭湯ってなんですか？」

「うーん…口で言うより見た方がいいよ。楽しみにしてな」

俺の言葉に四人とも首を傾げていた。

それからしばらくして、全員がスーパー銭湯にたどり着いた。その団体つぷりに番台の人は驚いていたけどさすがプロなのか、すぐに対処した。

「大人11人に子供4人・・・」

俺が指を指して数える。大人は俺、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、マリカ、姉さん、シグナムさん、シャルさん、スバル、ティアナ。子供はヴィータ、エリオ、キャロ、リイン。

「コノヤロー！」

「いつ！」

数えていると、いきなりヴィータにすねを蹴られた。かなり痛い。

「あたしは大人だ！」

「いや、どこからどう見ても・・・」

俺が言葉が続けようとしたが、ヴィータが刃を剥き出しにして威嚇する。そんなに大人いないだろ。

「ガLLLLLLLLLLLL!!」

「わーった、わーった、大人12人に子供3人で。」

こうして俺たちは銭湯に入ることとなった。すると、今度はライトニングがもめている。今度は何があつた？

「楽しみだね、エリオ君」

「そうだねキャラ、フェイトさんたちと楽しんできて」

エリオが男湯へ入ろうとするが、キャラに腕を掴まれた。

「え？一緒に入ろうよ」

「いや、僕男だから・・・」

エリオが断ろうとするが、キャラが指を指した。その先にあるのはある表示。というか、ポスターだ。

「あれね、アリサさんが教えてくれたんだけど、11歳以下ならどっちに入ってもいいんだって。だから一緒に入ろうよ」

「い、いや・・・僕は・・・」

エリオ超慌ててる。面白いな。すると、フェイトが追い討ちをかけるように駆け寄ってきた。

「エリオもせっかくだから一緒に入ろうよ」

まあ、女ってこんなもんだよな。

「フェイトさん・・・えっと・・・その・・・」

「エリオ君は私のこと嫌いな・・・？」

涙目でキャラが見る。あーあ・・・これは断りづらいぞ。すると、俺にエリオから念話が飛んできた。

「（い、井上さん・・・助けてください・・・）」

今にも泣きそうな声だ。そんなに辛いのか、この状況が。

「（うーん・・・ま、しょうがないな）」

俺は承諾してライトニングの所へ駆け寄る。

「フェイト、エリオも思うところがあるんだ。今日は勘弁してやれ。隊舎に戻ってからゆっくり入れれば良いだろう？」

「うーん・・・そうだね。」

こうしてフェイトは諦め、女湯へ入っていった。

「井上さん！ありがとう！」

「はいはい、じゃあ俺たちも行くか。」

「はい！」

エリオは嬉しそうに入っていた。俺が入る寸前、キャラずっとそ

の看板を見て考え、俺に念話を送る。

「（井上さん、これって私も同じですよね）」

「（ん？まーそうだな・・・まさか、キャラ？）」

「（はい！そっちに行きます！）」

「（お前がそれでいいなら俺は止めないでおくよ）」

俺はそのまま男湯へと入った。とりあえずエリオが驚いていたが気にせず頭を洗い、体を洗い終える。

「エリオ、髪洗ってやるからこっち来い」

「あ、いいんですか？」

「ああ、おいでエリオ、キャラもな」

「はい！」

エリオ達の髪を流し、俺たちは風呂に入った。キャラはまだ自分の体を洗うと言って入ってきていない。

「それにしても、エリオはでかくなつたな」

「え、僕と会ったことありました？」

「いや、一度フェイトの家に泊まりに行った事があってな。そのとき写真を見た。それと、お前についても教えてもらった。」

「・・・・・・・・・・」

「安心しろ。誰にも言わないから。でもまあ、お前はそのことで悩んでるだろ」

「・・・・・・・・・・はい」

やっぱりな。まあそりゃそうだ。

「昔フェイトにも言ったことがあるが・・・お前は、エリオ・モンディアルという一人の人間だ。仲間がいて、相棒のデバイスがあつて・・・こんな風に楽しくいられる。そんなお前が、人形だったり、代用だつたりするはずがないんだ。」

「井上さん・・・」

「過去は変える事も、戻ることも出来ない。未来への道を閉ざすな前を見る。そうすれば、必ず光に辿り着けるから。」

「は、はい・・・!」

エリオが嬉しそうに笑っていた。こいつもきつとフェイトと同じ苦しみを味わった。こんな子供が・・・俺はそれがたまらなく苦しかった。それをした大人が許せないと思った。だが、コイツの笑顔を見ているとそれを忘れさせてくれる。

「失礼します」

銭湯にキャロも入ってくる。コイツのこともフェイトから少し聞い

た。強大な魔力と力を持ったが故に、一族を追われ、管理局に保護された後も部署をたらい回しにされたことも。そしてこの笑顔が最近にできたことも。

「キャロ、お前はどうか？ 今が楽しいか？」

「はい！」

「そっか・・・エリオ、お前は騎士だ。過去を悔やんでたら、目の前の大切なもんを取りこぼすぞ？」

俺はクシャクシャとエリオの頭を撫でる。

「守ってやれよ？ 大切なパートナー」

「は、はい・・・」

エリオがキャロをちらりと見て顔を紅くした。すると、キャロが不思議そうに俺を見る。

「ん？ どうしたキャロ」

「なんだか、井上さんはお兄さんみたいです。ねえ、エリオ君？」

「う、うん・・・」

「はは、じゃあ俺のことは兄と呼んで良いぞ？」

「え、そんな・・・」

エリオがびつくりする。しかし、キャロは違った。

「はい、直人お兄ちゃん。ほら、エリオ君も」

「直人・・・兄さん」

「よく出来ました」

俺たちはこうして笑い合った。すると、子供用露天風呂の隣にある混浴の露天風呂から手が出ている。キャロがそれに気づき、エリオの手を引く。

「エリオ君、外の露天風呂行こうよ」

「う、うん・・・キャロ」

こうして向かう二人。そして温泉につかろうとした瞬間、腕が出てきてエリオを拉致。キャロは嬉しそうに混浴のほうへ入っていった。多分拉致したのはアリサか、はやてだろうな。

「頑張れ、エリオ・・・」

俺はそう呟き、温泉での一時を楽しんだ。

風呂に上がると、ストラダのソニックムーブを使った並に飛んで戻ってきた。

「ひ、ひどい目にありました・・・」

「大丈夫か？エリオ」

一方でキャラが満足そうに帰ってきた。

「まあ後数年はこうというのが続くから。我慢しろエリオ……」

「兄さん、なんだか馴れた感じですか？」

「まあな……」

数少ない男性隊員だ。せめて慰めてやることくらいしてやろう。

「のどか沸いたな。2人とも、何がいい？」

俺が指差したのは牛乳が販売されている売店だ。

「え、そんな悪いですよ」

「そっいうな。兄が言うことは素直に受け入れるもんだぞ？」

「でもこれなんて書いてあるんすか？」

キャラが不思議そうに見つめる。そっか、この二人は文字が読めないもんな。

「えっと、牛乳、コーヒー牛乳、イチゴ牛乳、フルーツ牛乳……あとはジュースだな。今度暇があったら日本語教えてやるよ。」

「ほんとですか！」

「お願いします！」

そんなに日本に関心があるのか。まあ結局、エリオはフルーツ牛乳。キヤロはイチゴ牛乳。俺はコーラを買った。

「ふう、美味しいな・・・」

「はい！」

「そういえばフェイトさんたち遅いですね。」

「ああ、女つてのは色々身だしなみとか直すから長いんだよ。」

姉さんも風呂に入ると40分は上がってこないし。

「そういえばお兄ちゃんのはさんたちの中で誰が好きなんですか？」

「!？」

一瞬コーラを吹きそうになった。

「キヤ、キヤロ？どうしてそんなことを？」

「アリサさんが聞けって・・・」

あいつ・・・子供に余計なことを・・・

「……………そうだな、俺には選べないよ。みんなの中からなんて」

「どうしてですか？」

「……誰か一人を決めたら、他のみんなが幸せになれない気がするさ」

子供に何を言っているんだ、俺は。

「そうなんですか……」

「色々あるんだよ、大人には」

俺は笑いながらコーラの缶をゴミ箱に放り込んだ。すると、キャロのケリュケイオンにサーチャーにロストログアが引っ掛かったと連絡が入った。

「あいつらまだ上がってきてないな……俺とエリオが行く。なのはたちへキャロが伝えてくれ！」

「はい、お兄ちゃん！」

「行くぞエリオ！」

「はい！兄さん！」

キャロが女湯へ向かい、俺とエリオは走って現場へと向かった。

第五話「派遣任務、いざ海鳴へ！（中編）」（後書き）

直人「はあゝ大変だった」

秋風「何が？」

直人「何って、ウイズのところに行っただろ」

秋風「ああ、散々アテナに振り回されてたな」

直人「あの人（？）とお前は似てる気がするよ」

ウイズ「よゝす」

直人「あ、ウイズ。それにアテナじゃないか」

アテナ「昨日ぶりです、直人さん」

ウイズ「前ははなんだかね、直人さんに全部任せちゃって」

直人「まああれだ・・・半壊してればああなるよな」

ウイズ「・・・・・・・・・・」

直人「ウイズ？」

アテナ「また発作のようです」

秋風「あらー（汗）」

アテナ「それにしてもさつき別の影が見えたような……………」

ユリア「呼んだかしら？」

ウイズ「ユリア！？なんているんだよ！」

直人「ああ、なんかこいつ（秋風）が呼んだらしい」

秋風「いや、以前来る感じだったから呼んでみた。」

ユリア「それにしてもあれね。次回からユリアの休息所にしようかしら」

直人「そうなるとウイズがまた……………」

ウイズ「どうして俺ばかり……………」

秋風「あーあ……………」

直人「そういえば八神先生は受験だっけ」

アテナ「そうですね。そういえば秋風さんも受験生だったのでは？」

直人「こいつはAOっていう卑怯な手で大学へ内定決めたから遊び放題なんだよ」

秋風「失敬な！ちゃんと課題に追われてるぞ！」

ユリア「追われてどうするのよ！」

直人「こいつはウイズ以上のヘタレだからな」

秋風「黙れ！天下御免のフラグメーカーが！」

ウイズ「まあまあ・・・」

直人「すまん、取り乱した」

秋風「まったく、ゲストの前でみっともない」

アテナ「私的には秋風さんが一番すごかったですが・・・」

ユリア「アテナ、気にしたらいけないと思うわ」

ウイズ「さて、そろそろ俺たちは自分の世界に帰るよ」

直人「ああ、また来てくれよ、ウイズ、ユリア、アテナ」

アテナ「また弄ってあげますから。」

ウイズ「お前、新しくそっち行ったら？」

アテナ「私は相棒一筋です」

ユリア「それじゃ、またね」

秋風「それじゃ、バイバイ」

神崎ウイズ 出演作品 魔法少女リリカルなのは S t r i k e r

S With

魔法少女リリカルなのは Strikers With 2nd

魔法少女リリカルなのは Strikers Withの主人公。

ヘタレらしく、いつも相棒のアテナに弄られたりしている。それでもはやてのことを大切に思うちよつとシスコンw

これからはやてとどう進展するか楽しみですw

ユリア 出演作品 魔法少女リリカルなのは Striker

S With 2nd

ウイズの母のクローンで実年齢9歳だが、容姿は20代前半。ウイズの妹にあたるそう。創造する魔法を得意とし、一度なのはと口論して模擬戦をしたとか。

こつというS系の女性がうちの小説いないんだよね・・・

アテナ 出演作品 魔法少女リリカルなのは Strikers

With

魔法少女リリカルなのは Strikers With 2nd

ウイズのデバイスで、ウイズ誕生後にレイラという姉妹機と共に作られた。とても人らしい性格の持ち主で、ウイズをしょつちゅうからかって遊んでいる。ツツコミやショートこんとをやって私（秋風）を笑わせてくれる。

また直人を弄ってあげてください。

直人「次回でいよいよ海鳴編は最後！」

秋風「次回第六話『派遣任務、いざ海鳴へ！（後編）』TAKE OFF！」

第六話「派遣任務、いざ海鳴へ!」(後編)」「(前書き)

とうとう海鳴編終了。原作はもう少し後から崩壊していく予定です
(笑)

第六話「派遣任務、いざ海鳴へ！（後編）」

俺とエリオがロストロギアのある場所まで辿り着く。それを追う様に、3人も来た。あまり出た時間には大差がなかったようだ。

「直人兄さん、あれ・・・」

「ああ、どうやらあれがロストロギアらしいな」

「なにあれ、スライムみたい・・・」

フォワードがそれを見つめる。その数は数十体。はやての話では、身の危険を感じるとダミーを散布し、逃げようとするらしい。

「リボルバーナックル!!」

ぷよ〜ん・・・

「えっ、攻撃が効かない!？」

なるほど、柔かいボディの所為だろうな。能力の所為かはわからないけど、物理的な攻撃が効かないし、ティアナの魔力弾としか効かないか・・・うーむ、ならどうしようか。

『いつそ辺り一面吹き飛ばします?』

メシア、物騒なことを言うな・・・

「いや、それはやめたほうがいいな」

一応あれ、ロストログアらしいし・・・

「魔力の気配を追うしかないな。」

すると動いている奴を見つけた。なるほど、このまま撒いて逃げる魂胆か・・・

「スバル、左のほうへ逃げている奴を仕留めろ」

「は、はい！」

スバルが指示通りにそのスライム的なロストログアを追う。それから数分、本体を含めダミーを逃がさないように俺がクリスタルダガーで行く手を阻むと、ティアナが本体に気づいたらしく、すぐにキヤロが反応してアルケミックチェーンで捕獲しようとする。

「バリア展開!？」

ティアナが驚きの声を上げる。しかも意外と出力があるらしくキヤロが苦戦している。

「エリオ、アサルトコンビネーション、行くよ！」

「はい、スバルさん！」

二人が同時にカートリッジをロードする。

「ストライク・ドライバー!!」

同時攻撃を叩き込む。大きな爆音と砂埃を起こしながらの攻撃はロストロギアのバリアにヒビを入れた。だが、破壊できていない・・・！

「え、破壊できなかった！？」

「ちっ！メシア！」

『ロードカートリッジ！』

カートリッジをロードし、俺はすぐにロストロギアに斬りかかった。

「蒼雷・・・一閃！」

蒼い雷が走り、そのロストロギアのバリアを斬る。

「ティアナ！キャロ！」

「はい！クロスミラージュ、バレットS！」

『ロードカートリッジ！』

「我が乞うは、捕縛の檻。流星の射手の弾丸に、封印の力を」

『ゲットセット！』

「シーリング・シュート！」

キャロの補助魔法つきの封印弾がロストロギアに命中。なんとか封印を終了することが出来た。

「よくやったぞ、キャラ、ティアナ」

「はい！お兄ちゃん！」

「ありがとうございます・・・って、お兄ちゃん？」

ティアナが困惑する。スバルもびっくりして俺を見ていた。

「あの、お兄ちゃんというのは？」

「ん？ああ・・・親しみの意味で二人には兄って呼ぶように言っただけだ」

「僕も兄さんって呼ぶことにしました。」

エリオも嬉しそうだ。すると、スバルが元気に手を上げる。

「はいはい！じゃあ私、直人兄って呼んでもいいですか？」

「ああ、好きにしろ」

「やたー！」

スバルが大喜びする。するとティアナがそれを武力介入（拳）で鎮圧。それを持つてなのはたちの所へと戻ることになった。

ロッジに戻り、シャマルさんが封印処理しようとしたが、キャラがやると言い出し、キャラがそれを封印。こうして俺たちの任務は終

わった。

「さて、これで一旦戻るのか・・・」

俺が言っと、アリサとすずかが不満の声を上げた。

「えー！？もう行くの直人！」

「もっとゆっくりしてってよ！せっかく帰ってきたのに・・・！」

「そう言われてもなあ・・・」

「じゃあない、一日だけ泊まるとしよか？」

はやての提案に二人が喜ぶが、俺は首を傾げる。

「いいのか？機動六課放って置いて」

「大丈夫や。ロングアーチには明日一日休み上げるし。」

こうして、俺たちは一泊だけ泊まることになった。みんなで姉さんが作った夜食を食べ、なのはたちやフォードメンバーは眠りについた。俺は満点の星空を見ている。海鳴にこんな場所があったとはな。

「直人」

「ん？アリサとすずか・・・」

アリサとすずかが俺のところへ寄ってきた。もう寝たと思ったのに。

「どうした二人とも・・・」

「ちょっと眠れなくて・・・」

「なのはたちは疲れてるからか、ぐっすり寝てるわ」

二人は俺の両サイドで腕を絡ませる。

「お、おい・・・」

「いいでしょ？今日ぐらい」

「ね、お願い」

「好きにしてくれ・・・」

俺は言いながら星を見上げる。

「星が綺麗ね・・・」

アリスも言いながら空を見上げる。その首には、俺が買った太陽のペンダントが光り輝く。

「本当、今日はいい事づくめだね」

すずかの首にも、月のペンダントが輝いている。

「ああ、そうだな・・・」

二人と再会して、姉さんやマリカたちと再会して・・・こんなに嬉

しいものはない。

「ねえ直人・・・私達もミッドチルダに行ってもいい？」

「え？」

「お願い、足手まといにはならないから」

二人は必死に俺に目で訴える。それは俺が決めることなのか。それともはやてに聞けといふべきなのか。正直迷った。

「・・・・正直、賛成できない」

「どうして？」

「俺には、まだやるべきことがあるんだ。」

俺は静かに、カオスを生み出した男、マラキアの搜索のことについて話した。

「ガジェットだけならまだしも、キメラもいる。今ミッドに行くのは危険なんだ」

「でも、直人君はそんな危険な中に・・・」

「本当はミッドにいるのはたちだって心配で仕方ないんだ。」

俺が言うと、二人は申し訳なさそうに顔を下げた。

「ごめん、心配してくれるのに・・・・・・」

「ごめんなさい・・・」

なんだか、悪いことしたな。二人だって俺のことを心配してくれているのに・・・

「でも大丈夫・・・俺はマラキアを捕まえたら、必ず帰ってくる」

「うん・・・わかった」

「じゃ、もう寝ようか」

二人は納得してくれたらしい。・・・ん？寝るって？

「ほら、一緒に寝るよ直人君」

「今日ぐらい付き合いなさいよ」

「はいはい・・・」

二人に腕を掴まれて脱出は不可能。俺は諦めてベッドに入った。

「おい、どうしてこのベッドでかいんだ？」

「勿論、私とすすかと直人が寝るためのベッドだもの。」

言いながら俺のところにつづくまる。まあ、今日くらいいいか・・・。
俺は三人と共に眠りに着いた。

次の朝

「ん・・・もう朝か」

時間は5時・・・早かった。俺は起き上がり、二人の腕を丁寧に解いて外に出た。すると、何か音がした。あれは・・・

「ティアナ？何してるんだ？」

「あ、井上さん・・・」

「どうした、こんな朝早くから」

「自主練習です。私、凡人なもので」

言いながらティアナはクロスミラーージュで自ら出てきたターゲットを撃ち落す。しかしスピードやキレが感じられない。

「お前、何時からその自主練習やっている？」

「えっと4時から・・・」

どつりで息が上がっているわけだ。てか、4時ってまだ日が上がってないだろうが・・・

「この・・・馬鹿たれ！」

「いつ・・・！」

俺はティアナに拳骨を入れた。

「な、何を・・・」

「睡眠も取ってない上無茶な訓練なんてするな。任務で怪我したらどうする」

「・・・でも、私・・・凡人だし・・・」

ティアナが小さく呟く。んなこと気にしてるのかよ。

「そんな無理して体壊したら元も子もないぞ・・・それにそんな特訓じゃ限界があるだろ」

「うつ・・・」

ティアナも薄々気がついていたようだ。

「わかった・・・じゃあこうしよう。ミッドに帰ってからマンツーマンで見えてやる」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ、俺は異世界にいた時は指導者でもあったからな。ある程度は教えてやる」

「あ、ありがとうございます!」

ティアナが頭を下げる。

「さて・・・ちょっと出かけてくる。」

「どこへですか?」

「墓参りだ」

俺が言うと、ティアナが少しためらい、口を開いた。

「あの、ご同行してはダメですか？」

「・・・ま、好きにきな」

こうして、俺はティアナと共に両親の墓へと向かった。

そこは墓地だ。朝が早いので、まだ誰もいない。そこには井上家の墓と書かれた墓がある。俺は数秒間目を閉じる。ここに来るのは久しぶりだ。姉さんが手入れをしているからか、綺麗になっている。

「ここには、どなたが？」

「俺の両親だ。もう随分前に死んだ・・・」

「私も、です・・・」

「え？」

ティアナ、いきなり何を言い出すんだ？

「私は幼い頃、兄を亡くしました」

ティアナは静かに語り出す。自分の兄が管理局員であり、違法魔導士を追って殉職したこと。そしてその葬儀で上司から「無能」「役

立たず」のレッテルを貼られたことを。そしてその男達を見返すために魔導士になったこと。

「私は兄のように才能はありません。だから、私は努力するしかないんです」

「ティアナ・・・・・・・・」

俺はゆっくりとティアナの頭を撫でた。

「!?!?!?!?」

「お前も辛い思いをしたんだな・・・・・・・・」

「はずかしいですよ・・・・・・・・」

ティアナが顔を紅くする。ああ、確かにこの年齢じゃあこんなことをされるのは恥ずかしいか。

「ま、心配するな。俺がお前を強くしてやる」

「はい・・・・お願いします!」

ティアナは強い瞳を持って頷いていた。

こうして墓参りが終わり、とうとうミッドチルダに戻ることになった。

「それじゃあ直人、またね」

「直人君。元気でね」

「直人、体には気をつけるのよ？」

3人が見送ってくれる。だが、俺はここで一つの疑問を持った。

「おいマリカ、なんでお前がこっちにいるんだ」

「私がいなかったら誰がメシアたちの出力調整するんですか」

それは一理あるけど・・・

「しかしだな・・・」

「大丈夫よ直人。私のことは心配しないで？」

姉さんが笑顔で言ってくれる。まあ、それならいいんだけどさ・・・

「じゃあ姉さん、アリサ、すずか・・・行ってきます」

「いってらっしゃい。なのは、フェイト、はやて、あんた達も気を付けてね」

「うんアリサちゃん」

「アリサたちも元気でね」

「抜け駆け禁止だよ？」

「わかつとるよ、すずかちゃん」

こうして俺たちは再びミッドチルダへと戻っていった。

第六話「派遣任務、いざ海鳴へ!（後編）」（後書き）

さて、今回はトークはナシです。それにしても皆さん、感想ありがとうございます。これからも頑張りますw

秋風「次回第七話『ホテル・アグスタ』TAKE OFF!」

第七話「ホテル・アグスタ」（前書き）

ポセイダンのエレンですが、アルハザードの女王エレンとかぶったので、ターナと変えました。蒼天に舞う騎士の方も直したので、その辺は願います。

今回のあとがきにはあの無垢な少年が登場です。

第七話「ホテル・アグスタ」

海鳴から帰ってきて数日後。俺はフォワードやなのはたちと共にヘリに乗っている。それというのも、地上本部からの要請で「ホテル・アグスタ」で行われるオークションの護衛に行くこととなった。しかしながら、最近ティアナの特訓につき合わされ眠い。俺は睡魔と格闘しながらも、なのはたちの話を聞く。

「広域指名手配されてる次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの線を中心に、捜査を進める。」

はやてがスカリエッティの説明をする。フェイトの話ではプロジェクトFの技術の基盤を作ったのもこの男らしい。

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応、覚えておいてね？」

「……はい！」「……」

と、話を引き継いだフェイトの問いかけに、フォワードメンバーが返事をする。すると、今度はリインが画面の前に飛び、画面が切り替わった。マリカはフルサイズでその話を聞いている。

「で、今日向かう先はここ！ホテル・アグスタ！」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが、今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出品されるので、そ

の反応をレリックと誤認したガシエットが出てきちゃう可能性が高い、とこのことで、私たちが警備に呼ばれたです！」

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、油断は禁物だよ。」

つまり一般的なテロもあるってわけか。ああ、眠い・・・

「現場には昨日から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長他、数名の隊員が張ってくれてる」

「私達と直人君は中の警備に回るから、フォワードは・・・って、直人君？」

あ、もう駄目だ・・・お休み・・・zzzz

「主！」

「っ・・・！」

言葉にならないほどの衝撃が俺を襲った。マリカがクリスタルブレイドの峰で俺を叩いていた。

「マリカ・・・！お前・・・！」

「主！皆さんの前でみっともないです！」

マリカが起こり、なのはたちが苦笑する。スバルたちもアハハと笑っていたが、ティアナだけが俺に念話で送ってくる。

「（その、すみません・・・）」

「（気にするな。俺が好きでやってるんだ）」

ティアナと訓練するとその日のうちに体力の60%くらいを持っていかれる。ちなみに昨日俺はその秘密の特訓がなのはにばれ、俺だけ「お話」をさせられた。正直それが一番体に響いてたりするわけで、ティアナのせいではない。すると、キャロが遠慮がちに手を上げた。

「あの、シャル先生。さっきから気になってたんですけど・・・その箱、何ですか？」

シャルさんの足元には、4つの箱が、忠実な召使いのようにじっとしていた。それは俺も気になってたな。

「ああこれ？これは、隊長達と直人君のお仕事着」

と、シャルさんは意味ありげに笑った。

その後しばらくして、ホテル・アグスタに到着した。ミッドチルダの有名な富豪達が揃う中、4人の人物が受付に姿を現した。そして、受付の男性はそれを見て、驚く。

「こんにちは、機動六課です。」

はやて、なのは、フェイトのドレス姿。そして後ろには俺がスーツを着て立っている。普段とは違う、その姿に俺は顔が赤くなっていた。

「直人君、直人君、私のドレス、どうかな？」

「直人、私もどう？」

「直人君、うちは？」

・
3人が寄って来る。なんでこういつときにそういつこと聞くな・

「3人とも綺麗だよ」

「えへへ」

「あはは」

「ふふふ」

なのはとフェイトが俺の腕に抱きつき、はやてが俺に寄り添う。ああ、周りの視線が痛い。正直な話、こんな美女3人に囲まれば周りに殺気も飛ぶだろう。

「直人君、ちゃんと私達をエスコートしてね？」

「そうだよ、じゃないと怪しまれるから」

「こんな状態じゃ警備できねーよ・・・」

ああ、外で待機になったマリカがうらやましい。そう思った。

その頃外、ティアナside

「ふえつくしゅん！」

あれ、くしゃみ・・・？マリカさんはユニゾンデバイスなのに・・・
「風邪ですか？」

「どうでしょう、私デバイスですから。」

そりゃそうよね。すると、スバルが念話で話しかけてきた。

（でも今日は・・・八神部隊長の守護騎士団全員集合かぁ・・・）

（そうねえ・・・あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長とか副隊長達のこと）

ほんと、もうオタクなんじゃない？

（うん・・・父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど、八神部隊長の使ってるデバイスが、魔導書型で、夜天の書つていうこと。副隊長たちと、シャマル先生、ザフィーラが、八神部隊長の所有する特別戦力だつてこと。で、それにライン曹長合わせて6人で無敵の戦力つてこと。まあ、八神部隊長たちの詳しい出自とか、能力の詳細は特秘事項だから、あたしも詳しくは知らないけど・・・）

それだけ知ってりゃ上等よ・・・それにしても

（レアスキル持ちは皆そうよね・・・）

（ティア、何か気になるの？）

(別に・・・)

皆強い。スバルはまだまだ伸びるし、エリオはあの歳でBランク、キヤロは稀少技能持ち・・・それに英雄の井上さんまでいる。ああ、やっぱりあたしは凡人だわ・・・。井上さんに鍛えてもらってるけど、それでも強くなれた気がしない。

「ティアナさん？」

突然マリカさんが話しかけてきた。

「あ、はい・・・なんですか？」

「ティアナさんは強くなりたいんですか？」

「はい・・・私は強くなりたいです」

はつきりとした答えを出したのに、マリカさんは少し困った顔になっていた。私間違ったこと言っていないのに・・・

「その強さは、どうして手に入れるのか考えてみるといいですよ？」

「は・・・？」

意味がわからない。するとガシエットの反応が確認されたらしく、シャーリーさんが報告する。私はアンカーガンでシャルマル先生の所まで行った。

「シャルマル先生！前線の様子、私にも見せてください！」

「わかったわ。クリアルヴィント、お願いね」

『はい!』

証明して見せるわ。直人さんに鍛えられたたちからで。ランスターの強さを！

直人 side

一方俺となのはたちはぐーぱーで別れ、それぞれが警備している。相手はフェイト。なのはとはやてが恨めしい目でこちらを見ていてすごく怖かった。

「それにしても直人、最近ティアナと秘密の特訓してたんだって？」

「ああ・・・あいつが馬鹿みたいな特訓してたからさ。」

「そうなんだ」

「身内がいなくなった悲しみは、痛いほど知ってるからな」

俺は両親のことを思い出す。すると、フェイトが顔を伏せた。

「ティアナは今、力をただ見返すものとは思ってないよ・・・」

「ああ、それは俺もわかってる。そのうち教えるさ・・・」

そんな話をしていると、センサーにガシエットの反応があったらしい。

「フェイト、中は頼むぞ。」

「うん、任せて」

こうして、俺は外へ行き、空へと舞った。

ティアナside

ああもう、イライラする！ガシエットたちがこっちに来るのを撃つ、撃つ、撃つ、撃つ！でもやってもやっても沸いてくる。

「ティアナさん。少し落ち着いて狙ってください。危ないでしょう？」

「私は落ち着いています！」

マリカさんに怒鳴っちゃった。後で謝ろう。すると、マリカさんの周りにクリスタルで出来た短剣が数十も現れた。

「来たれ、悪を貫く光の剣よ、全てを貫け、クリスタルダガー！」

クリスタルの短剣が光り、ガシエットを串刺しにしていく。すごい・
・これが英雄のデバイスの力なんだ・・・。こうなったら私も・
・！

「クロウズシフトB！行くわよスバル！」

「おう！」

スバルが先天系魔法ウィングロードで囷となり、私はクロスファイアーを溜める。

「む、無茶ですよティアさん！」

エリオの心配をよそに、私はクロスファイアーを発射した。

「クロスファイアー・・・シュート！」

魔法弾が発射され、次々とガシエットに命中していく。それを見て安心感を覚えた私だったけど、それがいけなかった。一発だけ、弾丸がそれていた。それはまっすぐにスバルに向かっていく。

「スバル！」

それに気づき、私は叫んだけれど、無常にもそれが爆発した。

「あ・・・ああ・・・」

後から来たヴィータ副隊長も驚いている。しかし、そこにいたのは・・・

「まったく、危ない危ない・・・」

「直人兄い？」

そこにいたのは一人の天使だった。

直人 side

来て見れば早速これか。やっぱりティアナのやつ、俺が訓練する以外に無茶な訓練してたな。するとヴィータが前へ出た。

「ティアナ！この馬鹿！味方撃つてどうすんだ！」

「副隊長・・・その、これはこういう作戦で・・・」

スバルが弁解するが、ヴィータは怒鳴ることをやめない。そりゃそうだ。

「何が作戦だ馬鹿野郎！直撃コースだったぞ！もういい！二人とも・・・」

「ヴィータ、ストップ」

「直人・・・？」

ヴィータが驚いている。

「それ以上言ったら、ティアナが立ち直れないだろ。今は敵に集中しよう」

「わかったよ・・・」

「スバル、スターズは後退して裏のほうへ回れ」

俺が指示を出すと、スバルが了解したかのように頷き、ウィングロードで降りていく。そのときだった。

「ヴィータ！フォワードを下がらせる！」

「わ、わかった！」

「それと外にいるシグナムさんとザフィーラさんに連絡！コイツは普通のキメラとは違う！」

俺は言いながら着地し、メシアスワローの状態を解除した。

「マリカ、ティアナ、しっかりしろ！」

「私は問題ありません。ティアナさんが・・・」

まだ震えている。キメラはこちらに気がついていないようだ。

「ヴィータ、フォワードは頼んだ。」

「でもお前マリカと二人でやる気か！？」

「大丈夫だ。」

言って、俺は魔法陣を展開した。

「しよ、召喚魔法陣！？」

キヤロが驚く。そりゃそうか。

「『我が求めるは癒しの力。我が求めるは煉獄の炎。我は求めるのは癒しの水・・・同時召喚！エルフ、ケロベロス、ポセイドン！』」

詠唱の後、俺が契約する契約者、カナリア、二ド、ターナたちが現れた。

「久しぶりです、我がマスター」

「久しぶりに戦か・・・血が騒ぐ」

「ふふ、同時召喚なんてマスターも強くなったわね」

それぞれが言う。フォワードは啞然としている。ヴィータも顔を引きつらせていた。

「マイマスター、我らを呼んだ理由はあれですね？」

「ああ、奴を倒す。カナリア、二ド、ターナ・・・行くぞ」

「・・・仰せのままに！我が主！」「」

こうして俺たちは駆け出し、キメラに踊りかかる。

「我が力は煉獄の炎なり！ヘルフレイム！」

「聖者に癒しを、悪しき者には苦しみの水を！ウォーターアクエリオン！」

二ドとターナの攻撃が激突する。それによって、キメラが悲鳴を上げた。その一方で、キメラの攻撃がフォワードに向けられるのを、ことごとくカナリアが弾いた。

「加護の音色よ・・・悪しきものの力を避けよ！」

「す、すごい・・・」

「同時召喚して、それを操るなんて・・・」

と、フォワードがただ驚いている。俺はそれを気にせず空を飛び、キメラに斬りかかる。

「はぁ！」

メシアが当たるが、刃が通らない。

「くっ！」

俺は離れ、距離をとった。

「駄目ね、外装が硬いわ。」

「アルカディアにいたのより骨がある・・・あいつは食えんな」

「マリカ、お前はいけるか？」

「はい主、問題ありませんよ」

そう言つてマリカが立ち上がる。

「みんな、後は俺がやる。下がっててくれ」

言葉と共に3人が消える。

「久しぶりだが・・・」

「やるしかありません・・・」

「ユニゾン・イン！」

俺はマリカとのユニゾンをし、天を舞った。

ティアナside

直人さんが同時召喚して、そしてユニゾンして戦っている。もう滅茶苦茶だわ。あの人、どうしてここまで戦えるのよ・・・

直人side

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

メシアを手に、俺は再び敵に斬りかかる。しかし硬い！

「リミットブレイク！」

『リミットブレイク！』

俺の装甲が真紅に染まり、敵を切る。それでも駄目か・・・！

『主、後10分が限界です！魔力量が少なすぎます！』

「わかってる・・・次で決めるぞ、メシア！」

『オーライ、ロードカートリッジ!』

カートリッジをロードする。魔力の消費をしすぎた今となっては、メシアスワローになることは出来ない。なら、攻撃をするのはこれが最後だ・・・!

「紅蓮蒼雷斬!」

紫色の稲妻が走り、俺はキメラを真つ二つに斬り払った。

「ハア・・・ハア・・・や・・・った・・・」

そこで俺は倒れ、意識を失った。

第七話「ホテル・アグスタ」（後書き）

秋風「ふう、これでアグスタ編終了っ」と

直人「それにしても、召喚したのは久しぶりだな」

秋風「ああ。しかも確かめたらポセイドンの名前と陛下の名前一緒だったから変えちゃったよ。」

直人「ああ、ターナになってたな・・・まったく、お前はいつもいつも」

秋風「うるさい！知らなかったんだからしょうがないだろ！」

???「あ、あの・・・」

秋風「お、ソラ君、よく来たね」

ソラ「はじめまして、秋風さん、直人さん」

直人「そんなかしこまらなくていいぞ。」

ソラ「は、はい・・・」

秋風「うん、君も直人と同じ匂いがするね」

ソラ「・・・？」

直人「どういうことだ？」

秋風「うむ、灰色の野良猫先生の話聞いて思った。この子もフラグ乱立だろうと」

ソラ「フラグってなんですか？」

直人「おい！無垢な9歳に変なこと教えてんじゃねえ！」

秋風「だって第一話でヴィータに会って「可愛いですね」だよ！？フラグ決定だよ！」

ソラ「えっと、可愛いじゃないですか、あの子」

直人「俺はあいつに嫌われてるけどな」

ソラ「そうなんですか？」

秋風「ああ、ヴィータは直人がはやてをたぶらかしていると思っているんだよ」

ソラ「たぶらかす？」

直人「いいかげんにしろおお！」

秋風「ぎゃあああああ！！！！！！！！！！」

ソラ「な、直人さん！？」

直人「ソラ、今日のこいつの発言は忘れる。いいな？」

ソラ「はい！」

秋風「というかソラ君。君って結構女の子に見えるね」

直人「確かに、ポニーテイルだし、まだ幼さは残る。それに最新話ではスカートだしな」

ソラ「そ、そんなにですか？」

秋風「これは下手するとなのはたちに弄られる的かもな……」

直人「あいつらは一度獲物を狙うと大変なことになるぞ？あいつらは獲物を駆る獣もとい悪魔で魔王だ。気をつけろ」

ソラ「あ、あの……直人さん。後ろ」

「なのは「直人君？誰が魔王かな？」」

フェイト「無垢で可愛い他の小説の主人公に何を教えてるのかな？」

はやて、「この子がSTSに来たらどうするつもりや?」

秋風「ソラ君、目を瞑ってなさい」

ソラ「はい・・・」

直人「ギャあああああああ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

秋風「ま、今回は自業自得だよな。」

ソラ「綺麗だけど怖いお姉さんたちです・・・」

なのは「ソラ君、何か言ったかな？」

ソラ「えっと、綺麗な方だなと・・・」

なのは「そっかそっか。それじゃ、私達はs t sで待ってるから。それじゃあばいばーい」

ソラ「はい、綺麗なお姉さん達」

秋風「ソラ君、君もメーカーだね。」

ソラ「とりあえずあまり良くない意味と受け取っておきます」

直人「さて、そろそろ時間か？」

ソラ「はい、そろそろ帰ります。今日は楽しかったです」

秋風「ああ、話が進んで、なのはたちと進展したらまたおいで」

ソラ「意味は良くわかりませんが、それではまた・・・」

ソラ・フォード 性別 男

出演作品 魔法少年の物語 作者 灰色の野良猫先生

9歳の主人公。容姿は白い髪にポニーテイルで華奢。とても女の子に見えてしまう。性格も優しく素直。うちの直人とは大違いです。素直な故に、襲い掛かってきたヴィータに「可愛い」というほど。この子も直人と同じ匂いがします。

稀少技能として「想像具現化【イメージクリエイト】」というのを
持っている。ある意味チートだな。ランクはS+・・・チートだね
(汗)

これからの話に期待です。これからも頑張ってください、灰色の野
良猫先生

直人「次回第八話『蒼い天使VS不屈のエース(前編)』TAKE
OFF!」

第八話「蒼い天使VS不屈のエース（前編）」（前書き）

ゲスト申し出が最近来るようになりました。こんな小説でよければ
あとがきだけでなく本編にも登場させてもいいくらいです。
随時募集しますw

第八話「蒼い天使VS不屈のエース（前編）」

キメラを倒してから一時間後、俺はゆっくりと目を覚ました。そこはホテルのロビー。体を起こすと、周りは騒がしかった。どうやら戦闘が終わり、現場検証をしているのだろう。

「いつ！」

体を起こそうとするが、その瞬間激痛が走る。恐らくキメラにやられた傷だろう。横を見ると、マリカがいた。

「主、大丈夫ですか？」

「まーな……我が求めるは癒しの力。召喚、エルフ」

俺の詠唱と共に、カナリアが召喚された。

「マイマスター、御用ですか？」

「ああ、傷を……頼む」

「仰せのままに」

俺に光が当たり、俺の傷は消えた。

「みんなは？」

「現場検証してます。」

「よし、行くか・・・」

こうして俺は外へと向かった。

なのはside

ああもう、直人君はどうしてああ無茶ばっかするかなあ・・・。それにしてもユーノ君久しぶりだね。私は今現場でユーノ君と話している。ユーノ君は昔は一緒に戦ってたけど、司書長さんになってから出ば・・・オホン、会う機会が少なかったからね。

「なのは。その、久しぶりだね」

「うん、元気だった？」

最近会ってなかったからなあ・・・それにしても、ユーノ君顔赤いなあ。熱でもあるの？

「あの、なのは・・・？」

「何かなユーノ君。」

「その・・・ずっとなのはに伝えたいことがあって・・・」

「ふえ？何？」

「君が好きだ！なのは！」

一瞬、時間が止まった。え、なに？伝えたいことってそういうこと・

・・・？

「ずっと、君が好きだったんだ・・・」

ユーノ君・・・気持ちは嬉しいんだけど・・・とっても、とっても嬉しいけど・・・

「ごめんなさい！」

私が言った瞬間、ユーノ君が固まった。

「その、私・・・好きな人がいるの・・・その、ずっと前から」

「そ、それって・・・あの英雄？」

「う、うん・・・別に英雄だからってわけじゃないの。14年前、私を救ってくれた彼を私は誰よりも愛してるの・・・だから、ごめんユーノ君。わたし、ユーノ君は友達だから」

そう言っただけは、その場から駆け出した。ユーノ君「ごめんね、でも私はお友達だから。」

直人 side

なるほど、随分とひどいな。辺りの緑や地面が抉れてる。

「キメラ・・・あの野郎・・・」

キメラはすでに灰になっており、黒い球体も砕け散っていた。

「やっぱりアイツ・・・この世界に来てる」

マラキアの野郎、いったい何をここでしかす気なんだ・・・。そんなことを考えていると、なのはが駆け寄っていた。

「直人君！」

「な、なのは・・・」

やばい、あんな無茶した後だ。殴られる！そう思ったが、なのはが俺に飛び込んできた。

「あ、あれ・・・？」

「直人君、心配したんだよ？」

「ごめん、悪かったよ・・・」

声が震えていたなのはに、俺は一言そう言った。そうすると、なのはが離れてくれた。

「直人君何してたの？」

「ああ、ちょっとキメラを見てた。随分強化されてる。」

「直人君が本気で挑まないと勝てない相手・・・厳しいね」

「ああ、それでも大丈夫だ。なのはやみんながいるならな」

俺がそういうと、なのはは笑顔だった。こうして現場検証は終わった。途中からなのはと話していると背中が悪寒が走ったのは気のせいだろう。

とりあえず隊舎に戻り、なのはからフォワードへ休息をとるように言われ、フォワードは戻っていった。そしてヴィータがティアナについて聞くと、なのはとフェイトがティアナの兄、ティード・ランスターについて話した。大部分は俺がティアナに聞いたことだった。そして夜になり、俺は外にいた。するとヘリパイロットのヴァイス陸曹がそこにいた。

「ヴァイス・・・」

「うつす、旦那」

ヴァイスとは数少ない男性メンバーということで、結構仲がいい。グリフィスも同じだ。それにしても・・・

「誰が旦那だよ」

「なのは隊長、フェイト隊長、はやて部隊長の旦那でしょ？」

「お前に軽く殺意を覚えるよ。で、ティアナは？」

俺は言いながら遠くに見えるティアナを見た。いまだに訓練を繰り返している。

「駄目駄目。俺の言葉を聞いてませんよ」

馬耳東風・・・か。しょうがないなあいつは・・・

「わかった。選手交代だ」

「後は頼んますよ」

俺たちはタッチして場所を入れ替わり、俺はティアナのところへと向かった。

「はぁ！」

ティアナがクロスファイヤーで撃ち抜こうとするが、俺がその前に俺がダガーでそれを撃ち抜いた。

「もうやめとけ、ティアナ」

「い、井上さん・・・！？」

「約束したよな。俺が見る以外で特訓はしないって」

そう、帰ってから自主錬を見る条件として、身勝手に特訓はしないという約束をした。

「すみません・・・でも・・・！」

「でもないだろ・・・そんなに、今日のミスショットはショックか？」

「・・・・・・・・はい」

ティアナは顔を伏せて頷いた。俺はため息をつきながらティアナを見る。

「今日、どうしてミスショットしたかわかるか？」

「私の・・・技量の問題です・・・」

「違う、体を痛めつけすぎたんだ、お前は」

こいつは訓練のときも、自主練のときも、同じように体を痛めつけている。まるで自分に鞭を打つように。

「お前、俺が付き合う以外にも訓練をしていたな？それが原因だ。俺はお前が倒れるほど訓練をさせた覚えはないからな。」

「・・・さい」

「・・・？」

「うるさい！貴方に何がわかる！貴方みたいな天才に、私みたいな凡人の気持ちなんてわからないわよ！」

ティアナが我を忘れて怒鳴っている。これだから子供は・・・

「じゃあ逆に聞こう。お前は満足か？力を手に入れて、兄のティダ・ランスターのことを見返せて。」

「そうよ！私はそのために戦ってる！」

—— パァン！

言った瞬間、俺はティアナの頬を叩いていた。それはもう反射的に。

「奇麗事を言うんじゃないやねえよ・・・クソガキが！」

ティアナは驚いたように俺を見ていた。

「お前はただ嫉妬してるんだろうが。この部隊の面子に・・・それを兄貴のせいにするんじゃないやねえ！」

「っ・・・・・・・・・・！」

ティアナは目に涙をため、そのまま走り去っていった。

「・・・・・・・・・・はあ、何をやってんだ俺は」

『マスター、ちょっとやりすぎです』

「わかってる・・・たく、注意が止めになっちまった」

俺はため息をついて隊舎へと戻った。

翌日から俺は訓練を手伝わなくなった。それも当然だ。約束も守れない奴に教えることは何もない。ティアナは真面目に教導を受けてはいるが、それがフリだとすぐにわかった。さらに俺のことを時々睨みつけていた。めんどつくさいなあ・・・。それから数日後、ティアナとスバルはなのはに二対一で挑むこととなった。

「あ、もう始まってるんだ」

フェイトが遅れてきた。本来ならフェイトがスターズを相手にする予定だったのだが、フェイトはデスクワークで遅れてしまっていた。

「本当はスターズは私がやろうと思ってたのに……」

「あいつ最近無理しすぎだ。休ませねえと」

ヴィータも唸るように言う。確かに、あいつは頑張りすぎだな。それにしても……

「ヴィータ、ティアナをどう思う？」

「いつもよりキレがねーな……どうしたんだ？」

その通り、クロスシフトにまったくキレがない。さらに言えば、先ほどからスバルがなのはに突っ込んでばかりだ。しかもそれはティアナお得意の幻術ではない、スバル本人だ。

「スバル！駄目だよそんな危ない軌道！」

「すみません！でもちゃんと避けますから！」

スバルが別のウイングロードでなのはから離れる。ティアナの姿が見当たらないので探すと、ビルの向こうで砲撃を放とうとしていた。

「ティアナが砲撃を……！？」

作戦としては確かに間違っではないが、これではスバルが危なすぎる。俺たちの心配を他所に、スバルはなのはのアクセルシユート

を避けながらなのはに突っ込む。

「でりゃあああああ!!!!!!」

スバルが攻撃するが、なのはの防御魔法に阻まれる。その瞬間ティアナの姿が消えた。

「あれは幻影!？」

「じゃあ本物は!？」

ライトニングの二人が驚く。ティアナはウィングロードを走り、カトリッジをロードしながら魔力刃を出し、なのはに突っ込んだ。

「一撃必殺!でええええい!」

ティアナの特攻。その瞬間だった。

「レイジングハート・・・モードリリース」

『オーライ』

なのはがレイジングハートをしまい、その瞬間に爆発が起きる。

「なのは!」

フェイトが声を上げた。しかし、なのははティアナの魔力刃を白刃取りしていた。親が剣士だからってそんなことするか?手から血が流れている。手が切断されていないだけ良しとしたい・・・というか、まずいな・・・

「おかしいなあ・・・二人ともどうしちゃったのかな？頑張っているのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

「あっ！？なのは・・・さん？」

二人の声が震えている。ライティングも驚いている。

「練習のときだけ言うこと聞くフリして、本番でこんな危険な動きしたら、練習の意味、ないじゃない・・・」

なのはが顔を伏せた。そうとうショックなんだろう、教導が伝わっていないことが。俺とフェイト、そしてヴィータがなによりも知るなのはの教導に懸ける「理由」が。そしてなのははティアナを見た。

「ねえ、ちゃんと言われたとおりによろうよ？私の言ってること、私の教導、そんなに間違ってるのかな？」

瞬間、ティアナが離れ、再びカートリッジをロードした。

「私は！傷つけないから！もう無くしたくないから！」

ティアナが泣き叫ぶ。

「だから強くなりたいんです！」

なのはが目を瞑った。そして殺気を込めたような単色となった黒い瞳でティアナを見た。

「少し、頭冷やそうか・・・」

なのはの足元に魔法陣が展開された。そしてティアナに人差し指を向けた。

「クロスファイアー」

右手に魔力弾が精製された。

「まずい！マリカ！」

「はい主！」

俺はそのままセツトアップし、飛んだ。

「うわああああ！！ファントムブレイ！」

「シュート」

しかしなのはの砲撃がティアナに直撃した。

「ティア！」

スバルが行こうとするが、バインドで止められた。

「バインド！？」

「スバル、よく見ていなさい」

言った瞬間、ティアナにまたしてもクロスファイアーが発射された。

スバル side

まさかなのはさんがあんなことするなんて……。私は今にもティアに所に飛んで行きたかった。でもバインドで動けない。そして二発目が放たれた。

「ティアアアアア！」

砲撃が激突した。そんな……。ティア……。煙が晴れ、そこにいたのは、白い翼をはためかせた天使だった。

第八話「蒼い天使VS不屈のエース（前編）」（後書き）

さあ、ついに魔王降臨・・・

なのは「魔王じゃないもん！」

直人「あれはどっからどう見ても魔王だ」

秋風「カオスも裸足で逃げ出すな」

直人「そうだな。」

なのは「うう・・・久しぶりの登場なのに何この扱い・・・」

秋風「しょうがないじゃん、原作なんて本当は二発当ててるんだぞ？」

直人「だよな。怖いって」

なのは「そうだけど・・・・・・・・」

秋風「他の小説も似た感じだからな、結構優しいほうだよ？俺が書いたのなんて」

なのは「うう・・・」

直人「それにしてもユーノだっけ？登場超短かったな」

秋風「当たり前だ。」

なのは「なんで？」

秋風「あいつ俺嫌いだもん」

直人「率直な意見だな」

なのは「可愛そう、ユーノ君・・・」

直人「まあ、そのわりにはなのはもストレートにフツタよな。10年の想いを」

なのは「ふえ！？だ、だって私が好きなのは・・・ゴニョゴニョ・・・」

秋風「ま、とりあえず次回はついに実現のなのはVS直人だな」

なのは「いままではずっとシグナムさんだったしね。」

直人「そういえば感想にゲストとして鷹先生の所のリリカルなのはフロンティア〜魔導士と少年達の記録〜の孝俊が出たいらしいぞ、ここに」

秋風「こんなところでよければ大歓迎だな」

直人「てなわけで次回は多分孝俊君をお招きします。」

秋風「一応確認したいけど拓也じゃなくていいのかな？」

直人「いいんじゃない？本人が出たいなら」

秋風「OK。では鷹先生、メッセージか感想に詳細プロフィールを送ってくれるとありがたいです。そうすると話がスムーズになるので」

直人「じゃないとキャラ崩壊しますんで、お願いします」

なのは「一応メッセージを送っておいたほうがいいんじゃないかな？」

直人「そうだな、ちゃんとやっつけよ？秋風^{ちゅうふう}」

秋風「はいはい……………」

直人「次回第九話『蒼い天使VS不屈のエース（後編）』TAKE OFF!」

第九話「蒼い天使VS不屈のエース（後編）」（前書き）

最近直人がフラグメーカーの駄目男になってます。

今日の戦いで皆さんが考えなおしてくれると嬉しいですが・・・

とりあえず本編どうぞ♪

第九話「蒼い天使VS不屈のエース（後編）」

ティアナになのはからの魔力弾が当たる直前、俺はデバイス複合を行いメシアスワローによって展開される白い翼でそれを防いだ。ティアナは気絶している。安否を確認すると、俺はなのはを見た。相変わらず目は虚ろで黒い。

「直人君、なんのつもりかな？」

「……………これ以上の追撃はいらない……………そう判断しただけだ。」

「私の模擬戦の邪魔、しないでくれる？」

「模擬戦……………か」

今のは模擬戦だとは思えなかった。いったいどの辺りからどこまでが模擬戦だったことやら。下手すると最初から違ったのかもしれない。

「模擬戦は喧嘩じゃない……………確かに正論だよ。だが、いつものお前なら訓練を止めて注意するはずだ。」

「……………」

「どうして、言葉で解決しようとしないんだ？かつて、俺に教えた時のように」

昔俺が囑託魔導士になった時と同じように教えてくれれば良い筈なのに、体で教えるなんて無茶な話だ。俺にはそれだけが理解できな

かった。

「直人君、もう一度言うよ……私の邪魔、しないで。」

「力はただ力ではない。お前がやろうとしたのは、理不尽な暴力だ！」

「……………」

なのはがアクセルシューターを放った。俺はガードすると、すぐさまバインドが解けたスバルに念話を送る。

「（スバル！ ティアナを連れて退避しろ！）」

「（は、はいっ！）」

俺がティアナを投げ、それをキャッチしたスバルはすぐさまウイングロードでティアナを連れて退避した。

「直人君も、少し頭冷やそうか」

「冷やすのはどっちか、よく考えろ！」

こうして、俺達の初めての激突は幕を開けた。

「アクセルシューター……………」

なのはの周りに多くの光弾が浮かぶ。その数、およそ20ほどだ。

「シュートッ！」

アクセルシューターが発射され、俺はそれを避ける。

「甘いよ・・・」

「追尾か・・・！」

避けた光弾が追尾する。俺は避けながらも、狙いを定め、クリスタルダガーを空中で発動、発射する。

「撃ち抜け！」

クリスタルダガーがアクセルシューターを打ち消し、なのはに向かう。しかし、なのははすぐに防御した。そしてまたしても距離を取り、俺はメシアスワローを構えなおした。まずいな・・・攻撃が読まれてる。

「へえ・・・そんなことができるの」

「次はこちらから行く・・・」

『ソニック・ブレイブ』

俺は瞬時になのはの背後に周り込み、メシアスワローを振る。これはフェイトのブリッツアクションとほぼどう系統の電光石火だ。が、あっさりと防御された。

「何!？」

「背後に回って倒す強襲は読んでたよ・・・」

レイジングハートの形状が変わった。あれは収束魔法を使う時の・・・！

「デイベイン・・・・・・・・」

俺はすぐに離れ、羽を前で交差させ、防御魔法を発動させた。これはまずい！

「バスターアアアア！！」

桜色の砲撃、デイベインバスターが俺に直撃した。しかし、防御魔法が破られても羽のおかげで耐えることが出来た。だがギリギリだ。

「ぐっ・・・・・・・・くう・・・・・・・・」

「今を防ぐんだ・・・・・・・・今のは結構本気だったのに・・・・・・・・」

感心しているが、今のなのはには関係ないんだろう。次々と砲撃が放たれる。

「直人君には私が戦い方を教えてるんだよ？勝てると思う？」

「さあな・・・やってみなければわからない！」

言いながら俺は防御し、なのはに斬りかかる。

「そんな危ないことして、駄目だよ・・・」

「そうかな？」

俺は地上で張っていたクリスタルダガーを発射する。しかし、なのはそれを避け、アクセルシューターで撃ち落した。

「ちっ！やるな・・・」

「私だって負けないよ・・・直人君、頭冷やしてもらおうから」

今のなのは恐らく俺を倒すことしか考えていないだろう。だが、俺には一つの疑問があった。どうしても理解できない、そんな疑問が。

「どうしてだ、なのは・・・」

「・・・・・・・・・・？」

「お前が教導にかける気持ちを、俺はそれなりに理解しているつもりだ・・・・・・・・だが、何故ティアナの気持ちを理解しようとしている？」

確かに基礎ばかりやるなのは訓練に、昔の俺も疑問を持った。だが、なのは自分と同じようにならないために必死に訓練をやらせている。理解している人間にはわかって、解らない人間に理解させるのは無理な話だ。ティアナだって、理解できないからあんな行動に出してしまったのだから。

「レイジングハート・・・」

「なのも気がついていないはずだ。分かり合うには、黙っていただ

けでも意味がないことくらい。俺が言っていることは、間違ったことか？」

「カートリッジロード・・・」

なのはがカートリッジをロードし、俺に向けた。

「お前はいつも抱え込みすぎだ。」

「デイベイン・・・」

エネルギーが収束していく。俺もカートリッジをロードする。

「蒼天・龍斬波！」

「バスターアアアアア！！！！！！！！！！」

蒼い砲撃の龍と桜色の砲撃がぶつかり、相殺した。俺達は衝撃でみんなから見えない地上に落ちる。というか、吹き飛ばされた。

「っ・・・！！」

「なのは・・・」

「！？」

俺はメシアとブレイブスワローを待機モードにして、なのはを強く抱き締めた。なのはの頬が赤かった。だが、これは昔、なのはがやったことでもある。俺は強く、強くなのはを抱きしめる。

「お前は1人で、抱えすぎだ」

「あ……」

「お前は、独りじゃない……俺やみんながいる……だから、もういいんだ……なのはちゃん」

俺もかつて罪に苦しんだとき、なのはは俺を助けた。だから、俺もなのはを助けたい。そんな心から出た言葉だった。すると、なのはの大粒の涙が俺のバリアジャケットにボタボタと流れ落ちる。

「直人君……うぐっ……ひっぐ……うえええん……ごめんなさい、ごめんなさい！」

「よしよし、もう怒ってないよ。今だけいっぱい泣いとけ」

それからなのはは数分間泣き続けた。

夜になって、ガシエットの反応が確認された。こちらの戦力を確認するつもりらしい。出撃したのは俺1人。みんなの力を明かす必要はないと、俺が買って出た。なのはも出撃すると言い出したが、デコピンでその意見を一蹴。

「お前はティアナ達に言うことあるだろ。お前とフォワードは出撃待機から外れる」

「でも……」

「でもない。分かり合うことは、何よりも大切なんだ。覚えと

け」

俺がなのは頭を撫でると、なのは嬉しそうに笑っていた。

「……………うん」

そんなことの後、俺はへりに乗り込み、出撃している。

「旦那、いいつすよ！」

「了解した……………蒼天の騎士、井上直人……………出撃する！」

こうして俺は闇夜を舞った。

戦いは飛躍的楽だった。ガシエット？型は速攻で潰して帰還。その後なのは過去の過去を自ら語ったと話し、なのは泣いているティアナを優しく抱きしめていた。俺は今、外でコーヒーを口になっている。すると、誰かが近づいてきた。

「直人さん……………」

「ティアナか」

ティアナだった。先ほど泣き続けていたからか、目元が若干赤い。

「ありがとうございます……………助けてもらって……………そしてごめんなさい。私、直人さんの言うことを……………」

「気にすんな。聞いたんだろ？なのはの教導の理由」

「はい・・・」

「なら、もう無理なんてするなよ。無理なんてして強くなるのは、本当の強さじゃないんだ。それに、お前はまだまだダイヤの原石だ。変に自分で斬らなくて良かったじゃないか」

言って、俺は自販機からココアを買ってティアナに投げた。

「あ・・・ありがとうございます」

「そういえばティアナ、お前は言ったな、自分は非才だって・・・」

「はい・・・」

「だが、俺はそうは思わない」

「え・・・」

ティアナがキョトンとして首を傾げる。

「確かにお前はスバルやエリオみたいなパワーはないし、キャロミみたいな稀少技能もない。だがな、お前はフォワードの中で一番強敵だと思ってる」

「え・・・」

「幻術を駆使し、敵を翻弄する・・・普通にはない能力だ。それに、お前の作戦技能は高い。あと数年すれば、間違いなく他の3人を抜く。お前は・・・」

言いながら俺は優しくティアナの頭を撫でた。そう、ティアナの力は敵からすればかなり厄介な能力であり、経験をつめば間違いない。エース級へと進化する。まだ経験が足りないだけで、経験を積みめば必ずや強くなる。

「お前は、努力する天才だ」

「直人・・・さん」

ティアナの目に、またしても涙が溜まる。どうやらティアナは今日目の涙腺が緩いようだ。

「だから焦らなくていい・・・周りに頼っていいんだ、ティアナ」

「はい・・・」

ティアナが顔を赤くし、頷いた。あれ？俺は何かした？

「さて、戻るか・・・もうこんな時間だしな・・・」

時計の時間は午前2時・・・もう寝ないと、明日からの訓練で起きることが出来ない。

「あ、あの・・・直人さん・・・」

「どうした？」

「その、次から・・・兄さんと呼んでいいですか・・・？」

「ああ、構わないさ。ほら、行くぞティアナ」

「はい、兄さん・・・」

ティアナは嬉しそうに笑い、俺の腕に絡み、隣を歩いた。

次の日、俺はティアナに腕を組んでいるところを発見され、現在訓練場で3人に囲まれている。

「あの、何コレ？」

「何って、模擬戦だよ？」
リンチ

「今模擬戦って書いてリンチって読んだろ！」

「あはは、ティアナまで手にして、手紙にもアリシアと仲良く映ってる写真があったね？」

「プレシアさんなんてものを送ってるんだあなたは！」

「少しお説教が必要やね？」

「直人君、今度こそ頭冷やそうか？」

「マ、マリカ！」

マリカに助けを求めるが、白いハンカチで遠くから手を振っていた。
あいつ！

「『頭冷やそうか・・・』」

第九話「蒼い天使VS不屈のエース（後編）」（後書き）

直人「もぐもぐ」

秋風「何食ってるんだ？」

直人「ソラからもらった干し柿」

秋風「ああ、お疲れ。ウィズ君の所に行った以来だったわけ？」

直人「ああ、マリカが綺麗なお姉さんって言われてたぜ？」

秋風「あいつ一応かなり年上だけどね。稼働暦的にはかなり歳行ってるぞ」

直人「それは禁句だ。」

秋風「まあ、今回ティアナのフラグも立ったし、よしとしよう」

直人「良くねえ！」

孝俊「こんばんは！」

直人「おお、こんにちは孝俊君」

秋風「こんなところにようこそ」

直人「それにしてもオリジナルとは言え、デジモンの世界の人間と話せるとは」

孝俊「あはは、まあ俺もびっくりしてますけどね」

秋風「あれだ、デジモンは昔持ってたな」

直人「確かバージョン2だったけ？」

孝俊「えっと、何それ？」

秋風「ああ、デジモンを育てるゲームだよ。」

孝俊「そんなのがあるんだ」

直人「確か秋風はいつもウ。コ投げるやつに進化させちゃうんだよな」

秋風「だってあれ勝率とか世話の技量で変わるんだもん」

直人「確か一度だけエンジEMONにしたんだよな、エレキモンから」

孝俊「エ、エンジEMON！？」

秋風「ああ、一日足らずで死んじゃったけどな」

直人「あいつとんだだけデリケートなんだよ。」

孝俊「まあエンジEMONは神聖なイメージがあるから」

秋風「そういえば何モンに進化できるんだっけ？」

孝俊「えっとブロスモン」

秋風「カッコいいな。オリジナル介入で龍のスピリット・・・これはチートだな」

直人「ああ、公式に孝俊をチートキャラと認定！」

孝俊「ちなみに秋風さんがチートと認定してるのは？」

秋風「とりあえずソラ君かな」

直人「彼の所の待合室の龍は怖いよ？」

孝俊「なるほど・・・」

秋風「ジゥ・・・」

直人「どうした？」

秋風「いやさ、この先デジヴァイスで進化するんだろうけど、究極体とかになったらどうなるのかな？」

孝俊「考えたこともないんだけど」

直人「とりあえずメタルマメモンになっとけ」

孝俊「いやいやいや！無理だろ！」

秋風「何を言うか！あいつ超つえーぞ！？多分拓也とか瞬殺だよ！？」

孝俊「そんな風に進化するシステムじゃねーから！」

直人「仕方あるまい。こいつが見ていたのは確か『カードスラッシュ』とか言ってデジモンを強くするアニメまでしか詳しく知らないんだ」

秋風「フロンティアも結構飛ばし飛ばしだったしな．．．」

直人「一番印象にあるのがデジヴァイスを拓也たちが温泉で奪われるところだっけ？」

秋風「ああ、そのあとデジヴァイスを分解されかけるんだよな」

直人「んで、氷見友樹って子を取り返すんだよな」

孝俊「あいつら何をしてたんだ．．．」

直人「なんかのデジモンに騙されたんだよな」

秋風「んで、ヒロインの．．．織本泉って子が一人で戦ってたな」

直人「ああ、懐かしいな．．．」

孝俊「あいつらって結構お馬鹿？」

直人「まあ、小学生だからね」

秋風「さて、そろそろ時間かな？」

孝俊「ええ、そろそろ帰ります」

秋風「鷹先生によろしく。それと、今度コイツが遊びに行きたいらしいから」

直人「言っておいてくれ」

孝俊「オツケー！」

秋風「あ、そうそう。コレやるよ」

孝俊「これは？」

秋風「俺が開けてなかったデジモンのヴァージョン5」

直人「オークションで売れなかったあまりだろ」

孝俊「そっか、でもサンキュー！バイバイ！」

秋風「おお！またなー！」

直人「がんばれよー！」

おもはやしたかし

面林孝俊 出演作品 リリカルフロントティア〈少年達の記録〉

デジモンフロンティアにおいてのオリジナル主人公で、無印作品においてフェイト側へつく。ちなみにデジモンフロンティア原作の主人公である拓也はなのは側についている。ちなみに孝俊はフェイトの裸を見ている。ああ、この子もフェイトとフラグが立つなあと確信している私がいいます。

直人「次回第十話『小さな出会い』 TAKE OFF！」

第十話「小さな出会い」（前書き）

連続投稿です。なにぶん明日は出せないもので・・・（汗

随時後書き参加募集しますw

それでは今回ちょっと長いですwどぞw

第十話「小さな出会い」

なのはとの戦いから数日が過ぎた。最近ではティアナの動きが良くなった。まあ、あんな騒動があれば当たり前だ。最近では俺と再開した朝練もしっかりこなしている。うん、こいつは将来大物だな。そんなわけで朝の訓練が終わり、午前中の訓練でリミッターを一段階解除するという話になった。なのはとヴィータがOKを出し、俺に振ってきたので、俺も勿論OKと出し、一同が喜んだ。で、そのご褒美としてフオワードは午後は休みになった。んで、どうせなら俺も街に出ることになった。

「主！あそこのアイスが食べたいです！」

「お前はいい加減食い物から頭離せ」

マリカと共にクラナガンを歩く。以前も一緒だったが、ゆっくり過ごせなかったからとマリカが俺に頼んできた。はやてたちもお土産をくれればそれでいいと許可してくれた。

「ふう、さてと・・・服も買ったし、これからどうしようか」

「主、こうしているとデートですねっ」

フルサイズのマリカの容姿は確かに20代前半の若い女性だ。服装もなのはに借りた私服とはいえ、その服はかなり色っぽく見える。

「あの子、主とデートするってどんな考えだお前」

「いいじゃないですか」

まったく、こいつは4年経っても変わらない。まあ、それがいいところなのだが。

「そういえば最近は剣術で勝負してませんね」

「そうだな。帰ったらやるかあ」

「いいですね、負けませんよ?」

と、二人で笑い合う。

「それにしても平和だな・・・」

「そうですね・・・4年前が嘘みたいです」

「ああ、そうだな・・・」

懐かしい。初めて会った日も、こんな自然公園で会ったんだっとな。

「でもマリカと会ってから、こんなことになるとは思わなかったよ」

「こんなこと?」

「普通の人間が異世界で魔法バトル・・・こんなこと、神様でも予想がつかないだろ」

「ふふつ、それもそうですね主。私は、主と一緒に入れて幸せです」

マリカは嬉しそうに笑う。はは、コイツもたまには可愛らしいところあるんだな。

「可愛いのはいつもです！」

「人の心読むな。」

「だって私と主は繋がってます。大切な絆ですから」

「そうだな・・・」

俺は雲ひとつない空を見上げる。すると、アイスを食べ終えたマリカが俺の手を引いた。

「さあ主！こうなったら4年分を今日遊びまくりましょう！」

「そうだな！行くか！」

こうして俺はマリカと共に、クラナガンの街へと消えていった。

それから2時間ぐらい経っただろうか。俺たちはクラナガンの街を歩く。ゲームセンターで遊び、食事をしたり、買い物をしたり・・・一般人がするのと変わらない休日だった。しかし、それが俺にとってはたまらなく嬉しかった。すると、裏路地の近くで音がした。

「ん？」

「どうしました？主」

「何か音がしなかったか？」

——ゴトン

下水道からだ。嫌な予感もするが、しょうがない。

「行くぞマリカ」

「はい、主」

こうして俺たちは下水路の中へと向かった。中に入ると、そこには少女が倒れていた。5、6歳といったところだろう。

「しっかりしろ！」

俺が起こすと、少女は虚ろな目で俺を見た。

「う・・・？」

「良かった、息はあるな・・・」

「っ！主！」

「ガルアアアアアアアアアア！！！！」

「キメラ！」

ボロボロの少女を抱えながら前を見た。そこにいたのは狼に似たキメラ。羽根があり、鋭い刃のようなものがついている。

「ちい！マリカ！」

「はい主！」

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンしてバックステップを取る。すると、少女の足に何かが絡み付いていたので、それも抱える。

「コレは・・・？」

どっかで見かけたが、今はそれどころじゃない！

「マリカ！」

『はい！クリスタルダガー！』

クリスタルダガーが直撃する。しかし、あまり効果がない。そのときだった。俺が下がっていると、壁から出てきた何かとぶつかった。

「なっ！？」

「きゃあ！？」

水色の髪の少女だった。いったいどうやって壁を通ってきたんだ？

水色の髪の少女 side

レリックの反応追っかけてたらいきなり誰かとぶつかっちゃったよ・・・誰だろ。って、英雄の井上直人じゃん！ドクターが今一番調べたい人ナンバー1の！

「い、井上直人さん!？」

「俺を知っているのか？」

「う、うん!超有名人!」

嘘じゃないけど、とりあえずこの人管理局の囑託魔導士だし・・・

「危ない!」

「え!？」

いきなり私は抱えられて下がられた。前を見ると、ドクターが言っていた怪物がそこにはいた。

「な、なにあれ!？」

「キメラっていう化け物だ。」

「なんで狙われてるの!？」

「知るか!」

私の質問を一蹴すると、私を降ろして剣を構えた。

「たく、今日は厄日だ・・・マリカ、この女の子とそこの子頼む」

「了解です、主」

いきなり直人さんの体から女の人!これってユニゾンデバイス!?

「さ、主に任せましょう」

「え、でも大丈夫なの!？」

「大丈夫です」

女の人が言っと、直人さんが化け物に切りかかった。

「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

『ロードカートリッジ!』

蒼い雷が剣に纏い、化け物瞬殺・・・これは駄目だ、多分その女の子マテリアルだし、ケースはレリックだけど多分無理、奪えない。

「よし、片付いたな・・・」

直人さんはため息をついて少し笑っていた。

??? side

「ちっ・・・使えん屑が・・・」

また失敗か・・・あの男、忌々しい。だが仕方がない。まだ完成していない試作品だ。

「あの子供に興味はないが、レリックは・・・仕方あるまい。次の手を考えよう」

私の目の前には数十の化け物がバイオ液に浸っていた。

直人 s i d e

さて、とりあえず下水道から脱出。すると、女の子が目を覚ました。

「ひっ！」

「大丈夫、もう怖いのはいないよ」

「本当？」

「ああ、本当」

俺が笑顔を見せると、女の子も笑顔になった。さてと……

「で、君はなんであんなところに？」

「え、えつとぉ……あはは……」

この子が謎だ。その服装は何かのボディースーツらしい。正直これを着ているセンスが駄目だ。

「名前は？」

「私はセイン」

「俺は井上直人だ」

「私はマリカです。よろしく」

「う、うん・・・よろしく」

セインは慌てている。確かに、色々と突っ込み所満載だしな。すると、女の子が震えていた。

「どうした？」

「オシッコ・・・」

「ゲッ・・・」

やばい、こんなところでされたらえらい目にあう！

「お、おいセイン！」

「な、な、な、何！？」

「この辺にトイレは？」

「えっと、あるよ！」

「案内しろ！」

「わ、わかった！」

セインは俺が言ったことに慌てて頷き、俺とマリカの腕を掴んだ。

「IS デープダイバー！」

すると、俺たちの体が地面に入っていく。

「な！？」

「これは！？」

「大丈夫、大丈夫！しっかり捕まっでいて！」

こうして俺たちは地面へと潜って行った。

セインside

とりあえず近くの公園に連れていた。もう夕方だからか、人はまったくいない。マリカって人がマテリアルを連れてトイレに向かっていた。ふーん、英雄って聞いたからもつと怖い人かと思ったけど、いい人じゃん。助けてくれたし。地上本部の英雄とはえらい違いだね。

「どうした？さっきからジロジロ見て」

「うっん、なんでもない！」

「ほら、これ着ろ」

そう言っで私に上着を投げてくれた。

「それじゃ風邪引くぞ？」

「あ、ありがと・・・直人さんは私のこと見てなんとも思わないの？」

私は率直な意見を聞いた。しかし、直人さんは短く笑った。

「まあ、壁の中に入ったりお前の格好は確かに突っ込み所満載だな」

「だ、だよねぇ」

やばい、捕まったらまずいなあ・・・でもレリックが・・・

「だけど悪い奴には見えないんだよな、お前」

「へ!？」

「いや、なんとなくだよ・・・それに俺が困ってて解決してくれたんだ。黙っててやるよ」

「あ、ありがと・・・」

この人超いい人だ!それにカッコいいし!

「あ、あのさ直人さん・・・」

「ん？」

「そのケース、一つ貰っていい？」

「一応確認するぞ?お前これどうするつもりだ?」

「そ、それは・・・」

やっぱり駄目か・・・

「じゃあ別の質問。さっきのカメラと繋がりは？」

「ない！絶対無い！」

すると、直人さんはケースを開けた。レリックが光り輝いている。

「やっぱりレリックか・・・」

「そ、そうだね・・・」

「しょうがない、礼だ。持ってけ」

直人さんが封印処理をしてそれを私に投げってきた。

「え、いいの!？」

「ああ。一つくらいいいだろ。嚴重な封印処理したし、多分解くに2ヶ月かかるから」

うわぁ・・・やることがひどいよ・・・

「じゃ、じゃああたし帰るよ。バイバイ直人さん!っと、服・・・」

「持ってけ」

「ありがと!バイバイ!」

私はディープダイバーで潜り、集合地点へと急いだ。

直人 side

おそらくあの子はガジェットの仲間だな。だが人っぽい・・・まあ、あのレリックは封印解くのに本当は半年掛かるし、いいか。すると、マリカと女の子が戻ってきた。

「ギリギリセーフです、主」

「よかった・・・で、君の名前は？」

「ヴィヴィオ・・・」

「いい名前だ。」

俺はヴィヴィオと名乗る女の子を抱き上げる。

「ヴィヴィオはあんなところでどうしたんだ？」

「ママ・・・」

「え？」

「ママとパパ、いないの・・・」

迷子・・・？だがこんな格好で？親はどんな虐待してんだよ。

「そっか・・・どんな人たち？」

「わかんない・・・でも、いないの・・・」

ヴィヴィオの目に涙が溜まる。

「じゃあお家は？」

「わかんない・・・うつ・・・うつ・・・」

今度は涙声でいう。ああ、決壊寸前だ・・・

「わかった、じゃあお兄ちゃんと来るか？」

「うん・・・行く・・・」

「しょうがない、マリカ、デパートで服を買ってきてくれ。」

「了解です」

こうして、マリカが服を買った後、俺はその服を着せて機動六課へと帰ることになった。うん、これは幼女誘拐じゃない・・・よね？

「自覚があるんですか？」

「うるさい、言うんじゃない」

とりあえず機動六課の前に帰ってきた。それまではよしとしよう。隊舎に入るのがすごく怖い。それというのも、誤解を招くであろう

3人の存在だ。

「どうする・・・？」

「覚悟して突っ込んでください」

「俺に死ねと？」

「お兄ちゃん？どうしたの？」

ヴィヴィオが不思議そうに俺に聞く。ああ、そんな目で聞かないで・

「なんでもないよ。じゃあ入ろうか」

「うん！」

せめてお土産と別の意味でお土産のレリック（これ）で機嫌が取れますように・・・

「ただいま〜」

「たいま〜」

俺がロビーへ行くと、なのはたちと、フォワードが帰っていた。

「おかえ・・・」

全員の視線がヴィヴィオに向けられ、そしてなのはたちがそれぞれデバイスを構えた。

「直人君？それは誰の子かな？」

「まさか、誰かと・・・？」

「許さへんで・・・」

「兄さん、何ですかその子・・・」

「直人兄い・・・」

スバルとティアナまでデバイスを構える始末。マリカはいつの間にかヴィヴィオを連れて逃げている。おい！ちよつと待て！

「待て！お前ら！これを先に見ろ！」

そう言つて俺はレリックのケースを見せる。

「レリック！？」

「ああ、実はな・・・」

こうして、俺は全員にキメラと戦ったことと、女の子を助けたことを話した。

なのは、フェイト、はやて、俺で、現在レリックについてと、ヴィオについて話している。もちろん、セインのことも。

「なるほど・・・でもびっくりや。まさかお土産にレリックとは・・・」

」

「ははは・・・」

「でも大丈夫なの？もう一つをよくわからない子に渡すなんて・・・」

フェイトが唸るが、俺は短く笑う。

「ああ、一応あれは封印処理をかけて、ただの宝石級までやったから。」

「ならええか・・・でも直人君？次からはないで？そんなこと」

「ああ、わかってるよ」

俺は頷き後ろを見た。ヴィヴィオがさっきから俺にしがみついている。恐らく検査が怖かったのだろう。入るのにもそうとう嫌がったし。

「で、この子は診察の結果、人造魔導士と出たんよ・・・」

「そうなのか・・・」

「で、この子はどうなる？」

「一応うちで面倒を見るか、本局の施設に送るか・・・」

「ヴィヴィオ、どうしたい？」

俺が言うと、俺のズボンを一層強く握った。

「おにいちゃんといたい！」

涙目だ。ああ、そんなに泣かないで欲しい・・・

「わかったわかった。」

俺は抱き上げ、よしよしと頭を撫でる。

「まるでパパやな」

「19歳で6歳の子持ちって・・・どんな鬼畜だ俺は？」

「直人パパ？」

はやて・・・余計なこと言うから・・・

「えっと、俺がパパ？」

「駄目・・・？」

ウルウルと涙目で俺を見る。ああ、これは断れない。

「わかった、ヴィヴィオ。」

「パパ！」

嬉しそうに俺にしがみつく。はあ、また厄介ごとが・・・

「主、諦めましょう」

いつの間にかミニサイズになったマリカが浮遊している。

「おねえちゃんちっさい・・・」

「ふふふ、面白いでしょう?」

「うん!」

ヴィヴィオはマリカに興味津々だな・・・すると、なのはの目がギラリと光った。

「ねえヴィヴィオ? ママ、欲しくない?」

「ママ・・・? うん、欲しい!」

やっぱりそう来たか・・・

「おい、ちょっと待て・・・」

「実は保護責任者の他に後見人ってあるんだよね・・・」

「それってつまり?」

「事実上ママになる!」

「ヴィヴィオ、誰がママがええ?」

3人が笑顔でヴィヴィオに聞く。俺は背筋が寒くなった。マリカは

少し遠くから笑いをこらえている。あいつ・・・

「うんとねえ・・・みんな！」

ヴィヴィオが言うと、俺は固まった。ヴィヴィオ、皆って・・・

「えゝ！」

「それもええな・・・」

「そうだね」

「争いが無くなるし、この際はいつか・・・」

3人とも何納得してるの！？

「じゃあ私はなのはママだね」

「私はフェイトママだよ、ヴィヴィオ」

「うちははやてママや」

「えへへ、ママがいつぱい」

おいおいおいおい！

「ちょっと待てえ！俺の意見は！？」

「」「」「聞いてない」「」「」

俺は言われた瞬間がつくりと肩を落とした。そしてマリカは相変わらず後ろで腹を抱えて笑っていた。

セイン side

「ただいま」

あたしが帰ると、ナンバーズの姉妹のみんながいた。赤髪の？11のウェンディに、？3のトーレ姉、それに？4のクワ姉それと？9のノーヴェ。

「はい、レリック」

「あらあら、よく手に入れたわねえ」

「だが一つとは・・・」

「いいじゃん手に入れたんだからさ」

あたしが言うと、ウェンディが不思議そうに私を見た。

「セイン、その上着はどうしたツス？」

「あ、これ？聞いて聞いて！今日英雄の井上直人に会ったんだよ！」

「マジか！？あの英雄！？じゃあその上着は・・・」

「うん、直人さんにもらった！」

その言葉に一同騒然。まあ当然かな♪

「セイン、敵方と何を話した？」

「別に詳しく話してないよ。キメラに襲われてそれどころじゃなかったし」

「フム・・・キメラを使う者もレリックを・・・」

「トーレ姉さま、とりあえず下水道にガジェット送っておきますう！」

「ああ、頼む」

「それでそれで！？どんな感じだったス？」

ウエンディが興味心身だ。そういえば戦闘映像見たとき一番興奮してたっけ。

「うん、ウエンディやノーヴェが言ってたイメージとは違ったかな」

「え？」

「すごく優しくて、かっこよかった」

「ホントツスか？怖かったり凶暴だったりとかは？」

「全然、あたしのことも詳しく聞こうとしなかったし、レリックもくれたし！」

「いいなあゝ・・・会いたかったスゝ」

「そうだね・・・でも確かに、また会えるといいなあゝ・・・」

私は貰った上着を綺麗にたたみ、あの人のことを思い出した。

第十話「小さな出会い」（後書き）

秋風「ついに登場ヴィヴィオ&ナンバーズ」

直人「ああ、ヴィヴィオにパパと言われたときは焦った」

ヴィヴィオ「パパ〜！」

秋風「噂をすればか？」

直人「だな」

ヴィヴィオ「パパ！何してるの？」

直人「そうだな、ここでこの人とお話してるんだよ。」

ヴィヴィオ「井上ヴィヴィオです！」

秋風「うん、可愛いね。秋風です」

直人「この人は変な人だから近づかないように」

ヴィヴィオ「は〜い！」

秋風「おい！へんなこと言うな！」

直人「それにしてもヴィヴィオ、どうしてなのはたちをママに選んだんだ？」

ヴィヴィオ「だって頭の中にマリカお姉ちゃんが3人とママになつてくれますよって」

直人「あいつ・・・」

秋風「まあいいじゃん。この後も色々あるんだから。」

直人「色々ってなんだ!」

秋風「じゃあヴィヴィオ、これ読んで」

ヴィヴィオ「んと・・・じかい第十一話『白銀の魔導士到来』ていく おふ!」

直人「ヴィヴィオになにやらせてんだあああ!」

秋風「ぎゃあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

第十一話「白銀の魔導士到来」(前書き)

テスト前なので更新が難しくなりました。ちょっと頑張りますので皆さんよろしくお願いします。今回もゲストの方がいらっしやいますw

第十一話「白銀の魔導士到来」

ヴィヴィオの父となって数日。俺は夜中、通信室でアルハザードへと通信を繋げた。

『やつほい！直人！』

「アリシア、久しぶり」

画面にはアリシアが映る。どうやら向こうは朝のようだ。

「プレシアさんは？」

『母さんならもう仕事だけど、どうかしたの？』

「いや、アリシアの方がいいかもしれないな」

『どうしたの？』

「ああ、実は……………」

俺はアリシアにキメラが最近現れたことを話、データを送った。

『わかったわ。母さんやエレンたちに話してみる……………』

「……………？どうかしたのか？」

『うん、実はマラキアって、私を蘇生させた魔導士でもあるんだ……………』

・
』

「そう、なのか・・・」

そういえばアリシアは一度死んでいる。確かに、誰かが蘇生させなければ今アリシアはいない。

『だから少し捕まえるのに抵抗があった。でも、今は違う。世界を滅ぼそうとしているなら、私達が止めないとね!』

「アリシア・・・・・・・・」

『ごめん、変に迷わせるつもりはなかったの・・・』

「大丈夫、そんなことはわかってるさ」

俺はアリシアを慰める。すると、足音が聞こえてきた。

「やばっ・・・アリシア、じゃあ頼んだぞ?」

『うん、まかせて!』

こうして俺は電源を切った。そこに入ってきたのはグリフィスだった。

「あれ、直人さん何をしてるんです?」

「あ、ああ・・・ちよつと実家にな、連絡入れてたんだ」

「そうなんですか。もう就寝時間ですよ?」

グリフィスは気がついていないらしいな。よし、危なかった・・・

「ああ、ヴィヴィオも心配だしもう寝るよ。じゃあなグリフィス」

「はい、おやすみなさい」

こうして俺は部屋に戻り、眠りについた。

??? side

早朝5時・・・私はキョロキョロしながらある部隊の建物を歩く。
とりあえず来た理由はただ一つだけなんだけど・・・問題が結構あつたりする。

（うーん、来たのはいいけど、これは完璧に迷子だよねえ・・・）

カウンターで聞こうにも、私じゃなあ。この姿じゃ色々とまずいし・・・
いっそ変身魔法でも使おうかな。

「あれ、フェイトさん？」

「え？」

やばっ！人と接触しちゃった！赤髪の男の子がすごい見てる！この子もフェイトの知り合い！？

「おはよう。え、えっと、どうしたの？」

「いえ、なんで私服なのかなあって・・・」

「あ、これ？えっと、勤務前の気分転換かな？」

「そうなんですか」

「あ、ねえ、直人の部屋どこだっけ？」

私の言葉に、小さい子供たちはキョトンとした。私何か変なこと言っただけかな？

「ど、どうしたの？」

「え、だってよく直人兄さんの部屋なら潜りこんでいるじゃないですか」

「そうなんだけど、ちよつとど忘れしちゃって」

ふうん・・・フェイト、そんなことするんだ・・・

「直人兄さんの部屋ならその角を曲がった三番目です」

「ありがと。じゃあねー」

エリオside

フェイトさんがご機嫌で行ったけど、僕とキャラは首を傾げた。

「ねえキャラ、なんかフェイトさんおかしかったね」

「うん、なんか少し・・・」

いつものフェイトさんなら私服になんか滅多にならないし、あんなエメラルド色の服は見たことない。何よりあの髪型とテンションはいつもとは違った。キャラも何か違和感があるみたいだし、うーん・

「あれ、エリオ、キャラ、おはよう。どうしたの？こんな所で。」

「え？あれ？フェイトさん！？」

僕達の後ろに制服を着たフェイトさんたちがいた。あれ？ソニックムーブでも使ったの！？

「直人兄さんの部屋に行っただんじゃ？」

「直人の部屋ならこれから行くんだよ。・・・どうしたの？」

え、じゃああのフェイトさんは？僕とキャラは今のことを話すしかなかった。

??? side

「あつた。ここね。」

そう言つて私は鍵を開ける。多分直人のことだからセキュリティーはそんなに甘くないはずよね。

「アナザー、よろしく」

『了解』

数秒でドアが開いた。セキュリティ甘いわねここ。部屋に入ると私は内側からロックして、直人の寝るベッドに向かった。相変わらず可愛い寝顔ね、しかもグッスリ寝てる。

「よしよ・・・」

ベッドに入ると、小さな女の子が眠っていた。ふうん・・・直人、こういう趣味だったの？ま、それは後として・・・ふふっ、やっぱり直人と寝ると違うわね。気持ちいい。

「ん・・・んん・・・」

「あ、お、起きちゃう」

小さな女の子が薄く目を開けた。

「・・・フェイトママ？」

ママ！？直人、こんな子供をフェイトと！？

「まだ寝てていいよ・・・パパも寝てるでしょう？」

「うん・・・」

私の言うことを素直に聞いたのか、また眠りについた。さて、どうやら直人にはきつい一発をお見舞いしてやることになりそうね。起こしますか。私は思い切り顔をつねった。

「いたたたた！」

「おはよう、直人？」

直人は目をこすりながらため息をついている。これが直人の最近の当たり前なのかしらね。

「フェイト・・・またお前か・・・勘弁しろよ毎回・・・」

「ふうん・・・毎回ねえ・・・フェイトとそんなことを・・・」

「は？お前何を・・・アリシア？」

「やっと気がついた？」

直人 side

俺は眠かったのが一発で吹き飛んだ。

「ア、ア、アリシア！？なんでこっちに！」

「ふふふ、びっくりした？」

アリシアが掛け布団の上から俺の上に乗っかる。

「フェイトと何をやってたらこんな子供が産まれるのかしら？」

「待て！お前はものすごい勘違いをしてる！」

「私も直人との子供が欲しいなあ・・・」

「アリシア！やめっ・・・ん！」

俺とアリシアの唇が重なる。離れようにも腕を回され、身動きが取れない。数秒キスをして放れた。

「ふふ、また奪っちゃった♪じゃあ、子供作っちゃおう？」

「待て！ほんとにお前は誤解してる！」

ヤバイ、アリシアが完全に暴走してる。アリシアが服を脱ごうとしている。

「「直人（君）！」「」」

そこになのは達がドアを破って入って来た。やばい、助かる確率がすごく低い！

「直人君、何しているのかな？」

「私に化けた女の人とベッドにいるなんていい度胸だね」

「お仕置きが必要やね？」

「待て！お前らもすごい誤解を・・・！」

「「「問答無用！！」「」」」

またしてもなのは達は話を聞かず砲撃を放った。

「バルディッシュアナザー」

『了解、プロテクション』

白銀のプロテクションが展開され、なのは達の砲撃を防ぐ。

「う、嘘！」

「私達の攻撃を・・・それに今、バルディッシュって・・・」

「あんた、何者や！」

「ふう、危ないわね。フェイト、初対面のお姉ちゃんにいきなり砲撃はないんじゃない？」

「「「え？」「」「」

三人が驚き、呆然とする。俺はアリシアをどかしてベッドから降りる。

「アリシア、今は完璧にお前が悪い。」

「いいじゃない。ちよっとしたおふざけよ」

「アリシア・・・姉さん？」

アリシアもベッドを降り、フェイトの前に立った。

「初めまして・・・はちよっとおかしいかな。アリシアだよ、フェイト。」

「姉さん！」

フェイトが涙を流し、アリシアに抱きついた。

「会えて嬉しいよ、フェイト」

「うん・・・うん！」

2人が抱きついていると、ヴィヴィオが目を覚ました。

「うにゆう・・・？フェイトママが2人ー？」

まあ、普通そうなるよな。

「直人パパ、おはよう」

「お、おはようヴィヴィオ」

「あ、なのはママとはやてママもおはよー」

その言葉を聞いた瞬間、アリシアがフェイトを放し、俺にバルディ
ツシュアナザーを構えた。おいおいおいおい！

「直人？どういうこと？」

「だから誤解だっって言っているだろ！話を聞け！」

俺はヴィヴィオのことについて話し、アリシアはようやくバルディ
ツシュアナザーを収めた。

「なーんだ、そういうことなの」

「やっと理解したか。」

「まあ、直人の子供にしたら大きいもんね。」

理解してくれたことに対して俺は安堵のため息を漏らす、ヴィヴィオは今だに理解できず、首を傾げている。

「フェイトママ？」

「この人はね、私のお姉ちゃんで……」

「アリシアだよ。私もママって呼んでくれたら嬉しいな。」

「アリシア！お前何言ってる……」

「アリシアママ？」

その場の空気が凍った。いやホントに。それにも関わらずヴィヴィオは……

「えへへ、またママが増えちゃった♪」

と喜ぶ始末。俺はため息をつくしかなかった。その後俺が3人とばっちりを受けたの言うまでもない。

機動六課食堂。そこで俺達は朝食を取っている。フォワードはフェイトが食堂に2人いることに驚いた。エリオとキャロに関しては、「あの時の！」と声を上げていた。

「はいはい、初めまして。フェイトの姉のアリシアです」二人は朝会ったよね、騙してごめんね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんかフェイトさんとは違う感じはしてたので・・・」

俺はアリシアの頭を掴み、無理やり下げる。

「痛い痛い！なにすんの直人！」

「ホントに悪いと思うなら頭を下げろ。すまないな、二人とも。」

「でもホントにそっくりですね。髪型が違って初めてわかるけど・・・」

「顔なんて瓜二つ・・・」

「あはは、まあねー」

と、アリシアは笑って誤魔化すが、それは当然だ。アリシアを元に作ったのがフェイトであり、遺伝子や身体的なものはアリシアとフェイトはみんな同じなのだ。ただしアリシアとフェイトは利き腕が逆になっている。ちなみに現在フェイトはロングヘアだが、アリシアはポニーテールに髪を結っている。すると、エリオが複雑な表情でアリシアのことを見ている。俺は仕方がなく念話を送った。

「（エリオ、お前の気持ちもわかる。だが、変なこと思っなよ？）」

「（直人さん・・・）」

「（アリシアはフェイトの姉だ。それでいいだろ?）」

「（はい、すみません・・・兄さん）」

エリオは納得して俺を見て頷いた。フォワードとなのはは自己紹介をして午前中の訓練へと向かった。ヴィヴィオはまだ食事をしていない。

「ヴィヴィオ、ピーマン残さない」

「だってきらいだもん・・・」

「駄目やでヴィヴィオ、食べへんと大きくなれんよ?」

俺とはやてが必死に言うが、ヴィヴィオは涙目で首を横に振る。

「ピーマンきらい・・・」

「はやて、今度ピーマンだけの料理頼むわ」

「直人パパいじわる・・・」

ヴィヴィオがいい、俺とはやてが苦笑する。すると、アリシアがオムライスにピーマンを混ぜ、ヴィヴィオの前に出した。

「こうすればピーマンの味がしないわよ?ほら、アーン」

ヴィヴィオはちょっとためらったが、そのスプーンを口にし、飲み

込んだ。

「よくできました」

アリシアが頭を撫でるとヴィヴィオが嬉しそうに笑っていた。

「さてと、で？アリシア。ここに来た理由は？」

「うん、できれば人払いしてくれる？」

「わかった。フェイト、ヴィヴィオを頼む」

俺が言うとフェイトが頷き、ヴィヴィオを連れて食堂を退出した。

「さて、はじめまして。アリシア・テストロッサです。」

「機動六課部隊長八神はやてです。ご用件は？」

「ええ、これを見て」

そうして出したのはマラキアについての詳細記録と、キメラに関する調査書だった。

「とりあえずマラキアについての詳細記録。それと、直人が昨日送ってくれたキメラの詳細データよ。この世界じゃ解析しきれないものまで書かれているわ」

「なるほど・・・キメラはやはり強化されていたのか・・・」

「うん、それでこれ、現在直人がいる部隊の隊長につて、陛下から」

「うちに・・・？」

アルハザードについては3人にはちゃんとした説明があるから問題はないが、はやてはその紋章が押された手紙を開けた。

「なんて書いてある？」

「もし、マラキアが現れ、ミッドチルダに何か起きたときは、アルハザードが全力で支援し、ミッドチルダの平和を共に守ることを誓います・・・やて」

「皇女も、本気のような・・・」

「うん、近いうちにライたちも来るわ。私は先に来て、直人がいる部隊がどんなところか、確かめるのが役割だったのよ」

なるほど、だからアリシアが来た・・・ってわけか。

「フェイトたちもいるし、マラキアの野望も阻止できる。そう思うわ。さて、堅苦しい話はここまで。はやてさん、私宿無しなんだけど、泊めてくれない？」

「ま、まあええけど・・・」

はやてが俺をチラリと見る。

「わかったわよ。朝みたいなのはしないわ」

「ならええやろ。アリシアさん、機動六課にようこそ！」

はやてとアリシアが手を取り合えい、こうしてアリシアが機動六課に迎えられた。

第十一話「白銀の魔導士到来」（後書き）

直人「とうとうアリシアまでこつちに・・・」

秋風「ああ、これでさらに大変になったな。俺が」

直人「なんで？」

秋風「だってキャラ書くの大変じゃん」

直人「確かに」

昶「こんにちは・・・」

秋風「やあ昶君いらっしやい」

直人「はじめまして」

昶「はい、よろしくお願いします直人先輩」

直人「先輩？」

昶「一応はやて先輩達と同年ですから」

秋風「ああ、そういえばなのはたちも先輩って呼んでるなでも現在年齢じゃ昶が年上じゃん」

直人「確かに」

昶「そうですね・・・あ、そういえば秋風さんはうちのところに新キャラ作りましたね」

直人「ああ、スピカだっけ？」

秋風「あいつ当初の予定ではアリシアのユニゾンデバイスでもあったんだよな。」

直人「確か設定では4歳だったっけ？」

秋風「そ、直人が来たと同時期に開発されたんだよな。確か型番が「S-P I - K」だから「スピカ」だったっけ？」

直人「んで、指輪に変身できると」

昶「そんな秘話が・・・」

秋風「実は結構考えて作ったからな。採用してくれて嬉しい限りだよ」

直人「そういえばさ、昶は稀少技能持ってたな」

昶「そうですね。チートですよ、これは」

直人「おお、一気に色々出てきた」

秋風「なるほど、こういう力つてのもすごいな」

昶「まあ消費激しいんですけどね」

直人「にしてもカッコいいよな、昶のデバイス。エクスカリバーだっけ？」

昶「はい、こいつです」

秋風「昔FFにエクスカリパーってあったな」

直人「ああ、あの使えない剣？」

秋風「そうそう」

直人「こっちはメシア・・・英雄だもんな」

秋風「ひょっとして嫉妬してる？」

直人「してねーよ」

昶「おっと、そろそろ時間だ。また遊びに来ていいですか」

秋風「ああ、またおいで」

直人「んじゃ、俺はこれをやろう」

昶「これは？」

直人「FF6だ。これに確かエクスカリパーが出てくる」

昶「はは、頑張ります・・・それでは！」

しんてい あかり
神藤 昶

出演作品「魔法少女リリカルなのはStrikerS Caliver&antom」

JS事件から随分経った後の物語として登場した主人公。稀少技能として無限の剣製というスキルを持つチートキャラ。ここの後書きに何故こうもチートキャラが集うのかとつくづく思う。ちなみにシグナムの弟子で、シグナムからも天才といわれる少年。しかし直人と同じくフラグが立つ少年。実は彼と他作品の影響から作者が直人にフラグを乱立させてたりするw

直人「次回、第十二話『機械の少女達と無限の欲望との出会い』TAKE OFF」

第十二話「機械の少女達と無限の欲望との出会い」(前書き)

今回で直人のフラグが一つ消滅します。期待してた人はすいません。
当初からこういう予定だったので・・・

でわ本編どうぞ。あとがきにはあの人・・・！

第十二話「機械の少女達と無限の欲望との出会い」

アリシアがミッドチルダに来て早くも3日が過ぎた。アリシアは元々遊びに来たわけではないのだが、機動六課に協力しようにもすれば上にアルハザードについてばれる可能性があるので、機動六課以外はあまりであるかないようにしているので、仕事はない。

「アリシアおねーちゃん、遊ぼう！」

「ええ、いいわよ」

アリシアはヴィヴィオの面倒を良く見る。母ではなく姉というのは、アリシアがそのほうがいいだろうと言ってきたのだ。それというのも、俺に対して恋心はもうなく、現在はラムザと付き合っているからだという。ちなみにこの間のは冗談だというが、俺には冗談には聞こえなかった。冗談でキスするか、普通。なにがどうなってアイツと付き合うことになったかは聞かなかったが、俺としては面倒な枷が一つ外れたような感覚だった。読者の皆さんには「なんだよ・・・」と言われるかもしれないが、そこは了承して欲しい。

俺はとりあえずヴィヴィオ達と昼食を取る。あいかわらずヴィヴィオをピーマンを食べてくれない。なのはたちが説得するも、涙目で俺に訴えてくる。

「パパ・・・」

「ヴィヴィオ、好き嫌いするとなのはたちみたく綺麗になれないぞ？」

「だって、キャロ・・・」

エリオがキャラに言うと、どうやらキャラも二ンジンをエリオの方へやるうとしていたようだ。

「・・・食べます」

キャラも諦めたらしく、それを口に運ぶ。はやては一足早く食事を済ませて立ち上がると、思い立ったように俺のほうを向いた。

「あ、直人君？後でちよつとええ？」

「ん？なんだ？」

「実はちよつと頼みがあつてな・・・」

「了解。あとで部隊長室行くよ」

了承して、はやてが食堂を退出した。一方ヴィヴィオは今だ緑色の野菜と格闘中。そんなに嫌か、ピーマン・・・

「ヴィヴィオ、頑張つて食べな」

「・・・うん」

ヴィヴィオは我慢してピーマンを涙目で飲み込み、一気に水を飲み干して俺に抱きつく。

「偉いぞヴィヴィオ」

「うん・・・」

俺はヴィヴィオの頭を優しく撫でた。

食事を終えて俺は部隊長室へ向かった。

「で？頼みつてのは？」

「うん、ちょっとスカリエッティがいたらしい研究所を見つけたんですよ」

はやてがモニターにそれを映し出した。

「へえ、ミッドチルダの山岳地帯・・・よく見つけたな」

「ガジェット反応やら何やらを追ってたら辿りついたんや」

なるほど、その辺はさすが管理局って所だな・・・

「じゃあ俺はその捜査を？」

「うん。で、陸士108部隊の捜査官の人と一緒に行ってな」

「わかった・・・それじゃあマリカとティアナを連れて行く」

「ティアナを？」

はやてがジト目で見る。しかし、これにはちゃんとした理由がある。

「あいつは執務官志望なんだろ？こういう調査の経験も積んだほう

「がいいと思つて」

「……それもそうやな。わかった、直人君はスターズ4と一緒に捜査をお願いや」

「了解、はやて」

それから少しして機動六課隊舎前。

「じゃあ、行ってくる」

「パパ……」

「大丈夫だ。今日明日には帰ってくるから」

俺はヴィヴィオを抱き上げ、頭を撫でる。

「本当？」

「ああ、ちゃんと帰ってくる。」

俺はフェイトにヴィヴィオを渡す。

「ティア、気をつけてね？」

「わかってるわ。あんたがいないのが不安だけど、兄さんがいるから」

「ティア？直人兄いと変なことしないでよ？」

「しないわよ！」

ティアナが顔を真っ赤にして怒る。

「直人君、気をつけてね？」

「わかってるよ。ヴィヴィオを頼む」

「うん、まかせて・・・それと」

「ティアナ、変な気を起こさないように」

なのはとフェイトの声が重なり、ティアナは後ずさる。

「は、はい！」

こうして俺とティアナ、そしてマリカが発発した。行きはバイクである。アルハザード騎士だった頃、一応バイク免許を取っているの
で俺はヴァイス陸曹のバイクを駆り、ティアナを後ろに乗せる。

「主！いつの間に免許を？」

「ああ、騎士の課程で二輪と四輪を取るのは必須でな。色々苦労したんだよ」

実を言えば試験（外伝二話以降）の後は免許や資格を取るのに追われてたりした。

「兄さん、あれが陸士108部隊です」

「あれか・・・」

見えた隊舎の前にバイクを止め、中に入った。

「さて、部隊長室に行くか・・・」

「陸士108部隊といえば、スバルのお父さんが隊長なんですよ」

「そうなのか・・・」

一度会った気がするな。確か空港火災の時だっけ？

「主はあの時必死でしたからね」

マリカが浮遊しながら言う。なんか目に付くから大人しくして欲しいな・・・

「マリカ、俺の肩に座ってろ」

「はい、主」

受付で場所を聞き、部隊長室へと辿り着いた。そこにいたのは見たことある男性と、桔梗色の髪をした女性だった。

「どうも、囑託魔導士の井上直人です」

「井上直人のユニゾンデバイス、マリカです」

「機動六課スターズ4のティアナ・ランスター二等陸士であります」

俺が挨拶すると、男性が苦笑して立ち上がる。

「おう、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐だ。ま、名前からわかるだろうがスバルの父親だ。久しぶりだな、坊主」

「ええ、その節はどうも」

すると、今度は横にいた女性が前に出た。

「GINGA・ナカジマです。お久しぶりです。あの時はその、本当にありがとうございます」

「ああ、大きくなったな・・・なんというか」

4年も経てばそうかもしれないが、スバルといいこつも身長とかその他はでかくなるもんだな。

「主、表現が卑猥です」

「黙ってる」

「マリカさんも、あの時は本当に・・・」

「私はあの時貴方を抱いて逃げただけですよ。お礼は主に言ったので構いませんよ」

マリカもニツコリと笑顔を見せる。そして、GINGAがティアナの方を見た。

「ティアさんも久しぶりね。」

「ええ、訓練校の休暇以来です」

へえ、知り合いだったのか。

「さて、挨拶が済んだところで仕事の話をしようか」

ゲンヤさんがソファーに座り、俺とティアナも座る。マリカはテーブルに座った。

「さて、この研究所だが・・・」

モニターに現れる研究所。いったい何をしている場所なのかわからない。

「ここは戦闘機人を製造していたらしい研究所だ」

「戦闘機人？」

その単語に、ギンガとティアナが反応する。そしてマリカが思い出したように口を開く。

「聞いたことがあります。人の身体と機械を融合させ、常人を超える能力を得た存在だと」

「ああ、鋼の骨格と人工筋肉を持ち、遺伝子調整やリンカーコアに干渉するプログラムユニットの埋め込みにより高い戦闘力を持つ存在だ」

「それとスカリエッティになんの関係が？」

「この技術は色々と問題があつてな。人外的なことは勿論。人間と機械が相容れるわけがない」

なるほど、拒絶反応か・・・確かに問題はあるな。となると・・・

「その問題を解消したのがスカリエッティ・・・と？」

「そういうこつた。」

ゲンヤが頷き、そこまでのルートを映し出した。

「ここが入り口だ。先遣隊の報告ではすでに放置されているらしいが、油断できない。うちだけでやってもよかったんだが、スカリエッティ絡みだと機動六課も適任だからな。」

「それで俺が呼ばれたんですか」

「ああ、囑託のお前なら色々と手続きがいらないからな」

なるほど、はやても考えてるわけだ。

「108部隊からはギンガを出すつもりだ。3人・・・いや、4人で向かってくれ」

「了解、さっそく行きます」

俺は立ち上がり、マリカも俺の肩に乗った。

「じゃあギンガ・・・でいいかな？」

「は、はい！」

「ティアナとマリカ、ギンガを連れ、研究所へ調査を行います」

「ああ、頼んだぜ坊主」

こうして、俺たちは研究所へと向かった。

研究所に着き、周囲にトラップなどがないか確認。その後中に突入した。

「こいつは・・・」

そこにはバイオ液に浸った怪物達の姿があった。どれも死んでいて、所々には殺されたような後がある。

「酷い・・・」

ティアナの顔が青ざめる。

「ティアナ、大丈夫か？」

「はい、兄さん」

ティアナは無理に笑顔を作ってうなづく。資料などを見ているギンガも驚きを隠せないようだ。

「・・・・・・・・これは？」

ふと、俺は紙を見つけた。持ち去られた資料の一部だろうか？

新暦○年度

ついに初の戦闘機人が完成した。2体機人に名を付けるとしよう。

「プロトタイプゼロ ファースト」そして「タイプゼロ セカンド」
後に別研究所にて実験を行う予定だ。

「プロトタイプってことか・・・スカリエツティの物なのか、それとも・・・？」

俺の疑問は増すばかりだ。

「に、兄さん、それほんとに！？」

ティアナが驚いてそれを見る。すると、ティアナの顔が強張っていた。

「どうかしたのか？ティアナ」

「い、いえ・・・」

何か隠しているのか？それにしても・・・

「荒らされたのはつい先ほどのようだな・・・」

足跡も俺たち以外の者が入った形跡がある。

「ギンガ、周囲に人の気配は……ギンガ？」

「あ、はい！何ですか？」

「いや、どうやら俺たち以外の足跡があるからな。周囲に人がいるという報告は？」

「いえ、ありません……」

先ほどからギンガの様子がどうもおかしい。何か許せないといった表情と、これは……悲しみ？

「ギンガ」

「はい？」

「何か、無理をしているのか？」

「いえ、そんなんじゃないです……」

どうにもそんな様子じゃないな。まあ、それは後で聞くとしよう。

「兄さん！」

「どうした、ティアナ？」

「これ……」

ティアナが指を指す先にあるのはわずかな隙間だった。

「風が来ているな・・・」

「抜け道・・・でしょうか？」

「となると、どこかに仕掛けが・・・？」

床に一つだけ傷がないタイルを見つけた。それを押すと、ギギギ、と音を立てて扉が開いた。

「なるほど、ここから逃げたのか・・・」

土もまだ乾いてはいないようだ。

「行くぞ・・・マリカ、もしものときのために脱出用の転移装置を用意しておけ」

「了解です、我が主」

俺たちはデバイスを構え、ゆっくりと階段を降りていった。降りていると、いきなり魔力が下がった。

「これは・・・」

「AMFか・・・メシア」

『了解です、我が主。アンチAMF起動・・・』

俺の魔力は元に戻る。前にアルハザードで使ってた技術が役に立つとは・・・。だがこうなるとマリカの転移は一人分だ、どうするか。階段が終わると、そこには紺色のスーツを着た少女たちが待つ

ていた。どうやら囲まれたようだ。

「私たちは時空管理局です。彼方達は!？」

「我々は戦闘機人・・・タイプゼロファースト、お前を待っていた」

「私を・・・待っていた？」

ギンガが呟く。どうということだ？

「どういう意味だ？」

俺が聞くと、中央にいたショートヘアの女性が答えた。

「そこにいるのは戦闘機人タイプゼロファーストだ！」

ギンガの顔が青ざめる。なるほど、となるとスバルはセカンド・・・になるのか？だがそうなる・・・

「ギンガを渡すわけにはいかない・・・」

俺はメシアを構え、女性と対峙する。

「ギンガ、お前は逃げろ」

「え!？」

「ここで捕まったら、スバルが悲しむだろ？」

俺は言う、転移魔法を発動させた。発動させたと言っても、マリ

力が勝手にやったのだが。

「え!？」

『転送座標確定・・・転送』

「直人さ・・・!」

ギンガが言う前に転送された。これで一安心だ。事情はあとで聞けばいい。

「悪いなティアナ、この制御下じゃお前まで逃がすのは難しい」

「兄さん、見くびらないでください。私だって戦います」

ティアナがクロスミラーージュを構える。どうやら完全にAMFが充滿しているというわけでもないのか。

「頼もしい限りだ・・・」

「これだけのAMFの下でよく転送できたな」

女性が言くと、俺は軽く笑った。

「昔いた世界にAMFコイツが撒かれていてね。その下で使う魔法は覚えてるのさ」

言いながらメシアを強く握った。

「どうやら、ここで死んでもらったほうが良さそうだ・・・」

横にいた眼帯の少女もダガーのようなものを構える。 4対2・・・
これは厳しいかもな。するとそこへ・・・

「あれ、直人さんだ！」

「セ、セイン！？」

壁から出てきたのは少し前に会った少女、セインだ。

「みんなどうしたの？」

セインが一人キョトンとしている。一人だけ現状が読めていないらしい。中央の女性もどうしていいかわからない顔をしていた。

「セイン、お前は・・・」

「へ？」

「空気を読め、セイン」

小さな女の子が言うと、セインはようやく現状を理解したのか、アツチャーって顔をしている。

「もしかしてタイミング悪かった？」

「当たり前だ。」

そんな話をしていると、紫色の髪の女性がモニターに現れた。

「待つて頂戴トーレ」

「ウーノ？」

「ドクターが彼らを招待したいそうよ」

「だがな・・・！！・・・・・・了解」

トーレと呼ばれた女性がこちらを見た。

「聞いたとおりだ。来てもらおう」

その言葉にティアナが困惑する。

「兄さん・・・・・・」

「ここは従ったほうが良さそうだな・・・」

これだけ囲まれれば勝ち目は薄い。俺一人ならともかくティアナを庇いながら戦うのは厳しい。後ろにいる少女たちの能力は知らないが、セインのように色々な角度から攻撃が来る敵と戦うには不利な条件がありすぎた。こうして、俺とティアナとマリカはスカリエツティのアジトへと向かった。

「ここが・・・」

ティアナが相変わらず警戒心剥き出しであり、俺から離れない。

「ティアナ・・・少し落ち着け」

「うん、兄さん」

クロスミラー・ジュを握り締めながら、ティアナは頷く。そして・・・

「やあ、よく来たね」

そこにいたのは白衣の男・・・なるほど

「あんたがジェイル・スカリエッティか？」

「いかにも、伝説の英雄、井上直人」

「俺のことは調べ済み・・・か？」

「いやいや、君の力についてはとても計り知れないよ。是非一度話がしたかったんだ。」

スカリエッティは笑みを浮かべる。ティアナは相変わらずだ。

「どうして俺を呼んだ？」

「話がしたい。先ほども言っただろう？」

「いいだろう。できれば周囲の連中をどけて欲しい。話をするときにティアナに手を出さないと約束しろ。」

俺が言うと、スカリエッティは短く笑い、手を上げた。すると、周りにいた戦闘機人たちが武器を降ろした。

「ティアナ、マリカとここで待ってる」

「兄さん・・・」

「大丈夫だ。マリカ、頼むぞ」

「はい、主」

こうして俺はスカリエッティと部屋に入っていった。

第十二話「機械の少女達と無限の欲望との出会い」(後書き)

秋風「疑問に思ったことがあるんだが……」

直人「何？」

秋風「このコーナー名前ないよな」

直人「確かに」

秋風「てなわけで募集！いい名前待ってます！」

直人「めちゃくちゃいきなりじゃねーか！」

秋風「気にするな」

シン「ども」

直人「お、シンが来た」

秋風「よく来ましたね。てか、来て大丈夫なのか？これ」

シン「文句ならうちの作者に言ってくれ」

秋風「恐れ多くて言えないよ」

直人「そういえばシンはアスランと激闘を果たしてこっちに来たんだよな」

シン「まあ、そうだけど・・・」

秋風「そうなると結構ずれるんだよな」

シン「何が？」

秋風「いや、前に感想に書いたけど俺はアニメ感覚だったけど運命先生は漫画版じゃん」

直人「あー・・・確かに」

シン「まあ結末は一緒らしいからいいんじゃないか？」

秋風「まあ、ね・・・」

直人「シンといえば結構明言があるよな」

シン「・・・？例えば？」

秋風「第一話の『また戦争がしたいのか！あんたたちは！』とか」

直人「『あんたって人はああ！』とか」

シン「えっと・・・ああ、まあ・・・」

秋風「『答えは聞いてない』とか」

直人「それ違う！色々違う！」

シン「なんだよそれ」

秋風「ごほん！で、運命先生からリクエストで『女性の落とし方・
・』」

直人「違っだろ！女性に対してのイロハだっけ書いてあるだろ！」

秋風「まあどっちにしろ同じだ」

シン「そっいうもんなのか？」

秋風「まず落とし・・・ゲフン、とりあえず女性は王子様的なこと
されると落ちます」

直人「意味がわからん。」

秋風「まあ簡単に説明するとだな、なのはの場合落ちたのは小学校
一年生の時に直人に優しくされたのが鍵だ。」

直人「それはまあ・・・その・・・」

秋風「で、フェイトやはやては過去を受け入れ、優しく包む。これ
が必勝だな」

シン「なんだよ、必勝って・・・」

秋風「この先の話で必ずシンが3人を落とせるといわけだ！」

シン「か、勝手に決めないでくれよ！」

直人「まあ、書くのは作者だからな・・・その辺は逆らえないよ」

秋風「運命先生のこの先がどうか・・・にもよるけどな」

直人「ちなみにシンの性的には誰がいいわけ？」

シン「い、いや、まだわかんないだろ！会ったばかりだし・・・」

秋風「まあ、それはまた次回来た時にじっくり聞くとしよう・・・」

シン「な、なんだよそれ！そんなの聞いてないぞ！」

秋風＆直人「「答えは聞いてない」」

シン「あんたちはあああああ！」

秋風「まあ落ち着け、そろそろ時間だ。」

直人「お土産やるぞ」

シン「お土産？」

直人「フリーダムのプラモデル」

シン「あんたはあああああ！」

直人「ぎゃあああああ！」

秋風「まあ落ち着け、ステラ付きのガイアのプラモとディステイニ
ーのプラモやるから」

シン「う、あ、ありがとう・・・」

直人「あっちのなのはは苦勞するかもな・・・」

シン「じゃ、またな」

秋風「また進展したらお招きするよ。ばいばーい！」

直人「頑張れよ、そっちで真の主人公になれ」

シン・アスカ 出演作品 魔法少女リリカルなのはDestiny
原作 機動戦士ガンダムSEED Destiny
ny

言わずと知れたガンダムの主人公・・・だった男と言われている。
現在運命先生が書く作品にて純粋な主人公（笑）

ここでは小説の設定を紹介する。

アスランとの激闘を終えると、シンは觀察世界へと飛ばされなのは
たちと出会う。そしてなのはの手に触れたことから後天的な魔導士
として覚醒。現在デバイスはないが、ディステイニーが今後どうな
るのが注目すべきところかもしれない。

直人「次回、第十三話『敵地での一時』TAKE OFF!」

第十三話「敵地での一時」(前書き)

最近小説にブランクが出始めてます。駄文になってたらいけません・
・
・

では本編どうぞw

第十三話「敵地での一時」

スカリエッティの部屋に入ると、イスに座るように言われた。そんなもってモニターに出ていた女性がコーヒーを置いた。

「……………飲まないのかね？」

「あいな、普通飲むと思うか？」

普通に何か入ってると考えるのが普通だろうが。

「確かに、敵地でそんなことはしないだろうな」

スカリエッティは短く笑う。だけど正直、こいつの笑顔が怖い。

「で？話っているのは？」

「いやいや、君に興味が沸いてね。是非とも君の体を……………」

「怖いからその先を言っな。てか、男に興味持たれたいとか普通は思わないだろ」

「連れないね……………」

「もう帰っていいか？なんかイラッと来た」

俺が言うと、スカリエッティは笑っている。こいつ笑うの好きだな。

「別にこれだけってわけではないさ。例えばそう、プロジェクトFの二人は元気かい？」

「・・・・・・何？」

「おや、聞いていなかったかい？あの技術を確立させたのは私だ。」

スカリエッティがフェイトとエリオをモニターに映し出す。

「Fの残滓が今いつたいどんな風に生きているか、気になって・・・」

スカリエッティが言い終える前に、メシアを取り出して突きつけた。

「それ以上、あいつらを貶すことは許さない・・・」

「ほう？」

「確かにあいつらはお前の技術が元になってる・・・でもな、あいつらは今人間として前を見て歩いてるんだ。残滓とか言うんじゃないよ」

「それはすまなかった。」

スカリエッティが詫びを入れ、メシアを押してどけた。俺もメシアを引っ込める。

「君は彼女たちを大切に思っているらしいね。」

「当たり前だ。仲間を大切にしない奴なんて、屑中の屑だ」

俺はため息をつきながらバリアジャケットを解除した。

「だがまあ、俺はお前に対しては複雑な心境だ」

「何故だい？」

「お前がいなければフェイトやエリオも生まれてはいない。それにスバルやギンガも、生まれてきてはいない。そういう面では感謝しなきゃいけない。だけど敵に感謝つてのもな」

「感謝・・・か。そんなことをされたのは初めてだよ」

スカリエッティはさつきとは違う嬉しそうな笑みを浮かべていた。まあ相変わらず笑顔は怖いけど。

「話したいことはそれだけか？」

「いや、後一ついいかな？」

「なんだよ」

「キメラについてさ・・・」

キメラのことを聞くということは、コイツがガジェットと一緒に送り込んできたわけじゃないのか？

「ホテル・アグスタの一件だが。あの大型のキメラは実に興味深い。」

「あのキメラは特殊だ。普通のキメラにカオスの魔力を注入させて

いる」

「なるほど、だから普通のものより頑丈なわけかい？」

「まあな・・・って、知らなかったのか？」

俺が言うつとスカリエッティはため息をついた。

「ああ、私の計測に何かさせたガジェットもあれに全部破壊されてね。管理局のデータをハッキングして存在を知ったのさ」

なるほどね・・・ま、話はこんなところだろ。

「もういいのか？話は」

「ああ、ありがとう。是非今日ぐらいゆっくりしていきたまえ」

「いや、帰るよ。家族の約束があるしな。何時までも敵陣のど真ん中にいるわけにもいかないしな。」

そう言つて扉を開けた瞬間、セインともう一人の少女が入ってきた。

「セインか」

「直人さん帰っちゃうの！？」

「ああ、てか、普通にお前が敵だとは知らなかったしな。」

「いいじゃないっすか！今日一日ぐらい敵だつてこと忘れて欲しいっす！」

「えーと、君は？」

「うちは？１１のウエンディッス！」

「井上直人だ・・・で、あれが俺のユニゾンデバイスのマリカだ」

「こんにちは」

マリカが笑って挨拶すると、ウエンディが頭を下げた。

「それにしても、英雄に会えるなんて感激ッス！」

「英雄って・・・俺はそんなたいそうなもんじゃないよ？」

「いや、映像で見たけどあんな動きとかを普通出来ないっす！」

と、ウエンディは大興奮している。

「ティアナ、大丈夫か？」

「はい兄さん・・・マリカさんがいてくれたし、大丈夫です」

ティアナは再び俺のところに寄る。

「その人って直人さんの彼女？」

言われた瞬間ティアナが顔を赤くする。

「いや、そういうのじゃないな。俺の教え子だ」

「教え子なのに兄さんって呼んでるの？」

「何よ、悪い？」

ティアナがバツが悪そうな顔で言う。おいおい、そういうことは言うなって。

「にしても……………」

俺はセインとウェンディを見る。

「お前らその格好恥ずかしくないのか？」

「確かに、それはいえますね。」

俺とマリカが首を傾げる。それというのも彼女たちのボディースーツは結構きわどかったりする。

「うち等は基本いつもこんな感じっスけど？」

「うん、まあ突っ込まないでよくよ」

そんな話をしていると、ウェンディの腹が鳴った。

「そっぴや今日は訓練したから何も食べてないっス」

「食堂でゼリー食べよう」

セインに手を引かれ、俺たちは食堂へと連れて来られた。そこには

先ほどの眼帯をした少女がいた。

「えーと、さっき俺と戦おうとした少女」

「む、もうドクターと話は終わっていたのか。挨拶が遅れてすまない。私はチンクだ」

「井上直人だ。」

「ティアナ・ランスターよ」

「それにしても、小さいのにしっかりしているな」

「あ、直人さんそれ言ったら駄目だよ！チンク姉気になっているから！」

確かに、なんかチンクがいじけている。ちょっと可愛いと思ったのは内緒にしておこう。

「あゝ、悪かったよ。そう落ち込むなって」

「あ、ああ・・・」

チンクは少し驚いたように俺を見ていた。

「ん？俺になんかついてるか？」

「いや、彼方達は私達が怖くないのか？」

「は？」

怖いというか、むしろ可愛いの種類に入るんじゃないか？席に座ると、チンクは静かに口を開く。

「私たちは戦闘機人だ・・・人ではないし、それにいずれ管理局と戦うことになる。そのとき私はお前を殺すかもしれないんだぞ？」

真剣な顔と口調で言うが、俺にとってはそうでもなかった。

「うーん・・・まあそう考えるとそうだけども、世の中つてのは広いんだぞ？」

「なに？」

「俺が知ってる怖いものは・・・例えば怒ると目を単色にして戦艦クラスの砲撃を撃ってくる魔王がいる。なあ、ティアナ？」

「は、はい・・・」

また脳内に「魔王じゃないもん！」って聞こえたけど気にしないでおこつ。ティアナも思い出してしまったからか、ちょっと震えてたりする。

「だが、我らは人間ではないんだぞ？」

「あんただっていじけたり、そのセインてのが兄さんと楽しく話したり・・・全然人間らしいじゃない。」

ティアナが言うと、チンクはびっくりしている。俺もそれに言葉を続けた。

「それに、うちにも色々と変わった出生で生まれた奴だっているんだ。生まれ方が違うだけで人間じゃないわけないんだよ」

「そうですよ。貴女達はどこまでも人間らしい「人間」だと思いますよ?」

俺たちの言葉に、チンクは微笑んでいた。

「ありがとう、そう言ってもらえると嬉しい。」

チンクは笑顔でコーヒーカップを手取る。

「貴方たちも飲まないか?」

「ああ、じゃあ頂こうかな」

そう言っただけ俺はイスに座った。スカリエッティが出すコーヒーよりはいいだろうと思ったのもこの時だったりする。

結局今日はスカリエッティのアジトに泊まる事となった。うん、正直ありえないよね。敵のところまで寝るなんてさ。夕食はなんか知らんけどガジェットが作っていた。高性能だな、ガジェット。ティアナも少しだけセインやウエンディと話すようになり、それに後から紹介されたウーノ、トーレ、クワットロ、セツテ、デイエチ、オットー、デイドというナンバーズとも仲良くなった。ちなみにクワットロからは、本気で俺のことを調べられそうになったが、セインたちに止められ、俺はなんとか助かった。そんな騒動の後、俺はマリカとティアナを食堂に置いて再びスカリエッティのラボへ向かった。

「よう」

「ん？どうかしたかい？」

「いや、なんとなく来たただだ。あそこは女だらけだからな」

「なるほどね・・・」

スカリエツティは苦笑しながら操作していたパネルを閉じた。

「君は不思議だな」

「何がだ？」

「君に感謝していると言われてから、何故だか心がすっきりしているんだ」

「それが人間として普通だと思うけどな」

「実は私も普通ではないのだよ」

「何？」

スカリエツティの言葉に俺は首を傾げる。

「私は『アルハザード』の知識で作られた人工生命体・・・」「無限の欲望」だ」

「アルハザードの技術・・・！？」

「そう、管理局の最高評議会に作られた存在、それが私さ」

「なるほど、だからガジェットについても知っているのか。」

つまりアルハザードの人間のクローンであり、その技術を受け継いだからこそガジェットを作れるってわけか。

「お前のことは大体わかった。でも、どうしてお前のことを上層部は黙認するんだ？」

「ふつ、それが彼らの“正義”らしい。」

コーヒーを口にしながら、スカリエッティはほそくに笑う。

「腐ってるな」

「ああ、管理局の上層部や地上本部の上はほとんどそうだ。知らないかったかい？」

「まあな。じゃあお前はあの作られた奴らに従ってるってことか？」

「いいや・・・私は私の夢のためさ」

「夢？」

こいつに夢なんてあったのか・・・

「ああ、刷り込まれた物かもしれんが、私は世界を引っくり返したいんだ」

「世界を変える・・・か。しかし、そんな作り物の夢でお前は満足するのか？」

「どういう意味だい？」

「夢つてのは自分で抱いて実現させることに意味がある。なのに他人から与えられた夢を実現させるなんて、器の小さい人間がやることだろ。」

かつて俺にも夢はなかった。だが、その夢がどんなに大切か、夢を持つことがどれほど良いことなのか、それを俺は教えられた。

「言うことが違うね。さすがは英雄かな？」

「いや、俺の持論だ。あんたも夢の一つや二つ、考えて作ったらどうだ？」

「ちなみに君の夢はなんだい？」

「俺の大切な仲間と家族を守り、平和な世の中で生きること・・・かな」

不意に、なのはたちとヴィヴィオ、そして姉さんの姿が浮かんた。

「なるほど、でも思いつかないな・・・私には」

「大丈夫さ。俺もそうだったんだ。夢は些細なことからいい」

そう、きっかけはいくらでもあるのだから。

「例えば・・・そうだな。お前の持つ技術で、人を助ける・・・とか」

「私が人を？」

「ああ、あんたの技術、悪用なんてしなければ多くの人を助けられると思うぜ」

そう、生体関連に関わるスカリエッティの技術は並ではない。それがアルハザードの技術ならばなおさらだ。例えば鋼鉄の外部骨格を基礎に、極めて人に近い義手や義足を作ること也有可能だ。

「夢つてのは悪意を持つものだけじゃない。人や自分の未来のためにだつてあるんだ」

「なるほど・・・では私の夢は、君を知ること・・・かね」

「んなもん、今日だつたらいくらでも話して教えてやるよ」

こうして、俺とスカリエッティは遅くまで話を続けた。

???side

「ここか・・・」

私はその遺跡を見る。

「揺りかごの下にある楽園か・・・それを実現させるとしよう・・・」

「

私は黒い影を従え、遺跡の中へと侵入した。

第十三話「敵地での一時」(後書き)

直人「最近投稿時間にずれが出来たな」

秋風「ああ、学校が休みだからな」

直人「じゃあ連続投稿とかしろよ」

秋風「……………努力しよう」

直人「それにしてもU・T先生が感想を書いてくれるとはびっくりだな」

秋風「ああ、見たときはびっくりしたよ」

直人「確かFF7とのクロスオーバーだっけ？」

秋風「ああ。先生の作品を見て、俺もここで書いてみたい！って思っただしな」

直人「だから俺の魔法にリミットブレイクがあるのか」

秋風「まあな。メシアの4thモードだって、アドベントチルドレンADCで使ってる剣が参考だしな」

直人「ちなみにFF7で好きなキャラは？」

秋風「勿論ザックスとアンジールとジェネシスだ！」

直人「・・・それはクライシスコアだろ？」

秋風「俺敵にはシスネも好きだけどな」

直人「ああ、あいつのチャクラムカッコいいよな」

秋風「まあ、今度クラウドをお招きしてみたいね」

直人「じゃあまず先生の所に折り菓子持って行って来い」

秋風「ああ、そうするよ。」

直人「次回、第十四話『現れる世界の影』TAKE OFF!」

第十四話「現れる世界の影」(前書き)

ブランク中なのにまさかの連続投稿。駄文だったら本当に申し訳ない

では本編どうぞw

第十四話「現れる世界の影」

スカリエツティのアジトに泊まった朝。俺は目を覚ました。すると、そこにはティアナが俺の上に乗し、セイン、ウェンディ、チンクなどベツドにいた。

「こいつらは・・・」

俺は仕方なくティアナを起こし、全員をたたき起こした。ナンバーズを先に行かせ、ティアナ、マリカと三人になった。

「ティアナ、クロスミラージュを貸せ」

「え、はい・・・」

「メシア。あのプログラムを」

『了解、アンチAMFインストール』

メシアが光ると、クロスミラージュも光った。

『コンプリート』

「兄さん、何を？」

「一時的だが、AMF下でも魔法が使えるようにしておいた。スカリエツティに今日聞く答えによっては、どうやって脱出するかが生き残る鍵を握る。」

昨夜

「スカリエツティ」

「なんだい？」

「俺はお前がそこまで悪人とは思えない」

「ほう、何故だい？」

そう、初めて会ったときから思っていたことだった。こいつの目は「アイツ」のように腐りきってはいなかったからだ。フェイトから聞いていたものとは正直少し違って思うようにも思えた。

「あんたの目には、まだ輝きがあるってことさ」

「君は不思議だね。敵にそんなことを言う・・・ましてや、敵陣で一晩を過ごすなど。そして、私は君の言葉に心が動かされていく」

「敵だろうと何だろうと、そいつらのことを知ろうと思えば、全てを悪とは認定できない」

「君は、本当の悪を知っているのかい？」

その問いに、俺は迷うことなく頷いた。

「ああ、最悪の人間を俺は知っている。だからこそ、お前が本当の悪人に見えないのかもな」

「ふつ、人からそう言ってもらったのは初めてだよ」

「スカリエッツィ、あんたがやろうとしてるのは、多分あんたのためにはならない。そんな気がする。」

「本当に面白いことを言うな、君は。確かにそうだ。だが、私は今となっては戻ることもできんよ」

「何故だ？」

「上層部に作られ、私はナンバーズという「作品」を作り、様々なことに手を染めた犯罪者だ。今さら、元に戻るなどできんよ」

「確かに、お前一人じゃ無理かもしれない。だがな、今は俺がいるぞ」

孤独・・・この男にはこれが全てかもしれない。その中にある辛さは、同じようにわかる。

「あんたが罪を償うなら俺はあんたの味方になる。ナンバーズだって、手を出させない」

「何故君は私にそこまでしてくれる？君にとって、私は敵なんだよ？」

「・・・・・・似てるのさ、あんたと俺が」

孤独だったこと、罪を背負うこと。そして夢を持っていなかったこと。その全てが、俺と重なっていた。

「俺は、あんたを助けたい。俺は『英雄』だからな」

「くつくつく・・・君がそれを使うかね？」

「言ってみて思ったが、正直恥ずかしいな」

俺は短く笑い、ドアの方へ行く。

「回答は、明日聞くよ。あんた自身の答え、聞かせてくれ」

俺はこうして外へと出て行った。

スカリエツィ side

本当に面白いな、彼は。最初は体を調べるだけだったのに、いつの間にか彼に心を動かされてしまった。

「なら、私も最後の仕事をするでしょう」

私はある人物にある者達の排除を命じた。

回想終了

「ってことだ」

「兄さん、犯罪者相手によくそこまで・・・」

「まあ、後はアイツ次第だ。飯行くぞ」

「ご飯ですね」

マリカは嬉しそうに肩に乗った。部屋を出て歩いていると、紫色の髪をした少女がいた。

「あれ、どうかしたのか？」

「……お母さん、見てるの」

少女の視線の先に、一人の女性がポッドで眠っている。当然だが、全裸で。

「主！見ちゃ駄目です」

「あなたは、ナンバーズじゃないの？」

「違う、ドクターに協力してるだけ。レリックがあれば、お母さんが目を覚ますから」

少女はただ母と呼ぶ女性を見つめていた。

「君、名前は？」

「ルーテシア」

「俺は井上直人だ。よろしくな」

「私はマリカです」

「ティアナ・ランスターよ」

「ここにいたかよ、ルーラー」

すると、今度は大柄な男性と小さな小人がいた。すると、マリカが驚いている。

「あなた、ユニゾンデバイス？」

「そうだけどって、もしかしてお前もか！？」

「私はマリカと言います。」

「あたしはアギトっていうんだ！って、あんたたち誰？」

アギトと名乗る少女が首を傾げると、男が呟く。

「お前は、井上直人か？」

「ああ、そうだ。」

答えると、男は俺を見る。

「どうかしたか？」

「いや、お前がああ『英雄』とはな。」

「英雄なんて名ばかりさ。周りの者しか守ることが出来ない、ちっぽけな騎士だよ」

「守ることが出来るのは、立派な騎士だと思うがな」

男が短く笑い、槍を構えた。

「何の真似だ？」

「一手、頼みたい」

「ちよつと、旦那！？」

「ああ」

俺もこの人と戦つてみたい。率直な感想があつた。この人の目から出る殺氣、本物だ。この人の強さ、この人の想い、知つてみたい。突然そんな衝動に俺は包み込まれた。

「メシア……」

了解です、我が主

メシアを手に取り、構えを取る。沈黙が続く、そして……

「……！」

互いの一撃が、ぶつかりあつた。俺の肩を男の槍が掠すり、メシアが男のわき腹を掠っていた。

「ふっ……やるな、英雄」

「あんたの想い、すごいな」

一撃に込められた想いを、俺は理解した。重い。この人の背負っているものはなんて重いんだろうか。互いに武器を収める。

「まだ名を名乗っていなかったな。俺はゼスト。ゼスト・グランガイッだ。」

「あんたは見たところ騎士のようだが・・・どうしてスカリエッテイのアジトに？」

「・・・・・・・・・・」

「別に答えたくないならいいさ」

俺はそう言っただけでルーテシアの頭を撫でる。

「ほら、飯行くぞ。あんた達は？」

「いや、遠慮しておこう。今日はあの男に呼ばただけだからな」
そう言っただけでゼストさんはルーテシアとアギトを連れて行ってしまった。

ナンバーズと朝食を取る俺たち。で、その横でマリカがノーヴェと食事の取り合いをしている。

「おいお前！それはあたしの肉だぞ！」

「大皿に乗っているものは個人のものではありません。取った物勝

「ちですよ？」

「このやろー！」

「やめろマリカ、みつともない」

俺はマリカを止める。すると、トーレがノーヴェを止める。

「ノーヴェもやめろ」

「だって・・・」

「食べ物ごときでそう熱くなるな。それにしても、こんな騒がしい朝食は初めてだ」

と、チンク。するとノーヴェは大人しく席に着いた。

「そっぴやスカリエッティは？」

「ああ、ドクターはなんかいなら言つてさ」

「ふーん・・・」

そんなことで朝食を終え、とうとう帰ることになった。帰ることになるにつれ、セインたちは残念がっていた。ティアナはだいたい予想がついているのか、クロスミラージュを待機形態で強く握っている。

「一日だけじゃなくてずっといて欲しいっす！」

「悪いな、色々こっちにも事情があるんだ」

「いいじゃん！もう一日くらい・・・」

ウエンディとセインがぶーぶーと文句を言う。すると、スカリエツティが現れた。

「やあ、待たせたね」

「・・・答えは出たか？スカリエツティ」

「ああ、決めたよ。私は管理局へ自首しよう」

スカリエツティの言葉に、俺とティアナとマリカ、そしてナンバーズ。さらには後ろにいたゼストさんたちも驚いていた。

「それが、あんたの答えか？」

「ああ。私も罪を償い、夢を探そうと思う。だが、君に頼みがある。」

「なんだ？」

「私の「作品」いや、「家族」を、機動六課で保護して欲しい」

スカリエツティは真剣な表情で言っている。本気のようなだ。

「それと・・・」

スカリエツティの後ろから、ルーテシアの母親が運ばれてきた。

「彼女と、彼らの保護もね」

「スカリエッツィ！どういうことだ！」

「今まで騙っていてすまなかったね。彼女はレリックなしでも目覚める」

「貴様・・・ゼストさん・・・!？」

「貴方の槍は、スカリエッツィに向けるのに意味はないと思います」
マリカの言葉に、ゼストは槍を引いた。

「ルーテシア、今までのすまなかったね」

「・・・いいよ、お母さんが目を覚ますなら」

ルーテシアはスカリエッツィを許したらしい。俺は優しくルーテシアの頭を撫でた。

「よかったな、ルーテシア」

「うん。」

嬉しそうにルーテシアが微笑む。この子が微笑むと、可愛いもんだな。

「ルールーが笑った・・・」

アギトが驚いている。もしかして、この子は笑ったことがなかった

のか？すると、ウーノやクワットロたちがドクターに詰め寄っていた。

「ドクター、本気ですか！？」

「ああ、彼に君たちを任せるよ。ドゥーエにも連絡を取った。どうやら、最高評議会は始末したらしい」

「始末！？」

俺は驚いてスカリエッティを見た。ティアナも驚いている。

「ふふ、見るかい？哀れな最高評議會を」

出てきたのは脳みそが三つ。まさかこれが・・・！？

「これが、最高評議会の正体か？」

「そう、肉体を失い、脳だけで生きる哀れな老人達さ」

なるほど、肉体を捨てて、意思だけでも生かそうとしたわけだ。嫌な不老不死だな。

「さて、君たちはこれから行くといい・・・私はこのまま行くとしてよう」

「なら私も行きます！」

ウーノが言い出すが、スカリエッティは首を振った。

「いや、君も保護してもらってくれ。牢に入るのは私一人で十分だ」

「しかし……………」

「その通り。だが君達が行くのは地獄だ……………」

不意に、男の声がした。俺は驚いてその方向を見る。そこに立つのは一人の男。

「貴様は……………」

「久しぶりだな、蒼天の騎士」

「マラキア……………」

俺はメシアを構えた。どうしてここがわかった！？いや、それ以前にどうしてここにこいつがいる！？

「誰だい、君は」

「私はマラキア…………君と同じ科学者だ。そして……………」

マラキアの体から黒い何かが爛れ出る。そこから数十のカメラが生まれる。

「世界を破壊する破壊者だよ……………」

ここに、最悪の男が乱入した。

第十四話「現れる世界の影」（後書き）

直人「まさかのここでストップ」

秋風「しょうがないじゃん、なんかそのほうが区切りよかったし。」

直人「あのなあ……………」

ナナキ「お邪魔するよ」

クラウド「……………邪魔する」

秋風「ク、クラウドさん！ナナキさん！ようこそ！」

直人「緊張しすぎだよ。ようこそお二方」

クラウド「ああ、急ですまない」

秋風「い、いや……………まさか来てもらえるとは」

直人「確かに……………クロスオーバーのキャラは二回目だけど。大物だな。この二人は」

ナナキ「オイラたちそんなに大層なものじゃないよ？」

秋風「いやいやいや、ファイナルファンタジーの大ファンとしては嬉しい限りだ！」

直人「ディシディアもクラウドしか使ってないしね」

クラウド「・・・そうなのか」

ナナキ「まあクラウドは使いやすいらしいしね」

直人「それにしても、クラウドのリリカル小説にはお礼を言うべきかな？」

クラウド「何故だ？」

秋風「『片翼の天使の導いた世界』を読まなきゃ、この小説存在しないわけだし」

直人「俺も元はクラウドが参考だしね」

ナナキ「そういえばリミットブレイクや剣なんかがそうだね」

クラウド「しかし、見た限り剣の腕はまだまだだな。」

直人「うっ！痛いところを・・・」

秋風「そうだぞ、女ばかりじゃなくてそっちも気にしろ」

ナナキ「秋風さんが書いてるんじゃないの？」

秋風「なんのことかな？あっはっは」

クラウド「それにしても、何故こちらの小説を見て書くと思ったんだ？」

秋風「実はリリカルなのはクロス小説がたまらなく好きでね。Fのクロスを探していたら「小説を読もう」に辿り着いたんだ」

直人「で、二次創作の存在を知って俺が生まれたと」

ナナキ「そういえば戦闘スタイルは結構クラウドに似ているよね」

秋風「大ファンだったからな。クライシスコアとかも何週もして
し、アドベントチルドレンも何回も見てる」

直人「ここまで来るとマニアの域だ。気にしないでくれ」

クラウド「あ、ああ・・・」

秋風「そういえばクラウドの世界は無印だったね」

ナナキ「そうみたいだね。オイラはアースラにいるけど、クラウドはフェイトのところだ」

直人「正直読んでいてまったく違和感がないんだよな」

秋風「セフィロスの登場タイミングやクラウドとフェイトのこと・
・随分合ってる」

直人「アニメになっても絶対違和感ないな」

ナナキ「言いすぎじゃない？」

クラウド「確かにな・・・」

秋風「で、クラウド的にはフェイトはどうなの？」

クラウド「どう、とは？」

秋風「だってほら、ティファがいるじゃん。それとフェイトだったらどっちがいいんだ？」

ナナキ「それはオイラも気になるね。」

クラウド「ノーコメントだ」

直人「うん、そういう反応だと思ったよ。じゃあこれだ！」

秋風「何それ？」

直人「タラララッタラ〜！嘘発見器〜！はやての部屋から借りてきた」

クラウド「……………！？」

秋風「すごいもの持ってきたな」

直人「ナナキ、秋風！クラウドを押さえて！」

ナナキ「オツケ！」

秋風「しょうがない……………」

クラウド「凶斬り！」

直人「あゝ！機械が！」

ナナキ「一閃・・・かなり手加減なかったね」

秋風「相当聞かれたくなかったんだね」

クラウド「無理に聞かれて誤解されたくないだけだ」

ナナキ「あはは・・・それにしても、もう時間じゃないかな？」

クラウド「そのようだ」

直人「今度そつちに遊びに行ってもいいかな？」

クラウド「ああ、その機械を持ってこなければな」

直人「わ、わかってるよ・・・・・・・・」

ナナキ「持つてく気だったね」

秋風「んじゃ、君たちにお土産」

クラウド「これは？」

秋風「ゲーセンで取ったフェイトのぬいぐるみだよ」

クラウド「・・・・・・・・一応、貰っておく」

直人「ナナキにははい、なのは人形」

ナナキ「うん、ありがとう」

秋風「それじゃ、またきてね！」

直人「ばいばーい！」

クラウド・ストライフ 出演作品 魔法少女リリカルなのは〜片翼の天使が導きし世界〜

原作 Final Fantasy?
言わずと知れたファイナルファンタジー?の主人公。

出演作品ではセフィロスと戦い、海鳴へと辿り着いた。そこでフェイトと出会い、ジュエルシードの収集を手伝い、プレシアの手からフェイトを救おうと奔走している。

作品は無印で、セフィロスがプレシアを利用し、アルハザード、すなわち「約束の地」へ行くこうとたくらんでいる。

ナナキ（レッド?） 出演作品 魔法少女リリカルなのは〜片翼の天使が導きし世界〜

原作 Final Fantasy?
ファイナルファンタジー?で、宝条に実験体にされていた所をクラウドに救われた。

時空管理局に保護され、アースラで行動を共にしている。クラウドの出現に驚きながらも彼を援護。クロノからクラウドを逃がしたりなど、仲間としての意識はしっかりしている。

直人「次回『蒼天の騎士VS混沌の騎士』TAKE OFF！」

第十五話「蒼天の騎士VS混沌の騎士」(前書き)

最近忙しくて更新できないです。補習もあるので更新が難しくなりそうです

では本編どうぞ♪

第十五話「蒼天の騎士VS混沌の騎士」

俺たちの目の前に立つのはかつて楽園と潰した男、マラキア。俺はメシアを構え、奴を睨みつける。

「おや、久しぶりの再会だというのに、連れないね……」

「マラキア……何故お前がここにいる」

「簡単な話だ。ここを破壊しに来た」

「破壊……？」

スカリエッティもマラキアを見る。

「この聖王のゆりかごの下に、あるものが眠っていてね……私はそれが欲しいのさ」

「聖王のゆりかごになにか眠っているのかね？」

「そう、世界を破滅に導く、楽園がな……」

ゆりかごの下……つまりここを潰して手に入れなければならないのか。

「そんなこと、俺がさせると思っか？」

俺とティアナ、ゼストさんがデバイスを構え、ナンバーズたちも武器を構えた。

「外道が・・・」

「ああ、私は外道さ。それが私の誇りでもある」

俺は駆け出し、メシアでマラキアに斬りかかるが、その鎧の人形に阻まれる。

「ちっ！」

黒い鎧はそのままもう一本の剣を出し、俺を串刺しにしようとする。

「くっ！」

俺はそれを避けると、間合いを取る。

「間合いなど取る暇もないぞ？」

一気に鎧が俺のほうへ斬りかかる。早い！

「メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！」

「ほう・・・この一撃、見事」

黒い鎧が剣を受ける。こいつ、今喋った！？

「どういうことだ、キメラが・・・」

「くつくつく・・・久しいな・・・」

どこかで聞いたことのある声。

「その声、カオス！」

混沌の意思、カオスが俺の目の前にいる。馬鹿な、確かにあいつは・
・

「俺が倒した・・・か？」

「何！？」

「甘い・・・我はあの程度では死なんよ・・・」

カオスが笑う。その鎧からは黒い霧が漏れている。

「この姿ではまだ完全に蘇ったとは言えんが・・・」

瞬間、カオスが視界から消える。そして後ろから衝撃に襲われ、吹き飛ばされた。

「ガハッ・・・」

「前よりは力がある」

俺は地面に叩きつけられる。こいつ、不完全でこんなに・・・！

「カオス、遊んでいないでその人形達を消せ」

マラキアの視線の先にあるのはナンバーズたち。マリカとティアナも構えを取る。

「マラキア、悪いが勝負の途中だ」

俺は立ち上がり、メシアを構える。こいつ、明らかに前より強い。

「今の一撃・・・体の重心をずらしたか・・・」

「ハア・・・ハア・・・負けて・・・たまるか！」

ナンバーズたちの前に立った。まだ背中中の傷が痛い。

「マリカ！」

「はい、主！」

「「ユニゾン・イン！」」

ユニゾンし、メシアを構える。メシアスワローにしたいところだが、そんな隙がない。

「ふっ、面白い・・・」

カオスも剣を構える。こいつ、初めて構えを取った・・・！？

「いくぞ！」

「来るがいい！」

再び激しい火花が散る。こいつ、昔はパワーをただ押し付けるだけだったのに……！

「世界の混沌……その身で受け止めて見せよ！」

メシアの上から強烈な衝撃に襲われた。手が痺れる。やばい……！

「クロスファイアー……シュート！」

二撃目が入る前に、ティアナのクロスファイアーが激突し、カオスが引いた。予想外だったのか？

「小娘……我がこやつに集中しての攻撃……見事。だが……」

カオスは鎧を見ながら笑っている。

「パワー不足だ」

ティアナの背後に回り、一撃が放たれる。

「ティアナ！」

俺はすぐにティアナへの攻撃を防ぐ。カオスはまだ余裕があるようだ。

「ふっ……その体でよく耐えるな」

「頑丈なのが……とりえでね」

剣を弾き、一撃をお見舞いする。

「蒼雷一閃！」

「混沌破断……」

「な!？」

カオスの剣が消え、手と一体化した。そしてそれが盾となり、攻撃を防がれる。

「くっ……」

「無駄な足掻きだ……」

「今だ!発射！」

横からディエチが砲撃を行う。あんな銃どこにあったんだよ。
「ぬっ！」

「チンク！」

「わかっている！」

「IS、ランブルデトネーター！」

「IS、ブラインドインパルス！」

チンクのスティンガーの爆発と、トーレの一撃がカオスに当たる。
しかし……

「この鎧の前では無意味だぞ、人形共」

「くっ・・・！」

魔法も、斬撃も、ナンバーズの固有魔法さえ通らない。そんな馬鹿なことが・・・

「どうかね、これがカオスだ。これでもまだ50%だ。カオス・レイが目覚めれば、確実に世界は終わるだろう」

「カオス・・・レイ？」

「我が力の根源にして、世界の終焉を導く楽園だ。」

「まさか、そんなものがこの下に眠ってるのかよ!？」

ノーヴェの言葉に、カオスが苦笑する。

「そう、我が半身にして、我が城であり楽園・・・」

「おしゃべりはそこまでだ。カオス、片付けろ」

「いいだろう・・・」

カオスが瞬時に消え、ナンバーズが吹き飛んだ。

「がっ！」

「ぐっ！」

「うわぁ！」

「みんな！」

『主！前！』

メシアの声に反応すると、すでにカオスがその手の剣を構えていた。

「貴様も消えろ！」

「メシア！」

瞬時のカートリッジロードの後、その斬撃を受け止めた。しかし、メシアは弾かれ、俺はまともにその一撃を受けた。

「がっ……はっ……」

「兄さん！」

「直人さん！」

血が出る。痛い、熱い、体中が悲鳴を上げる。やばい、このままじゃ……死ぬ……

「さて、さすがは機械で出来た人形か……頑丈だな」

「みんな……逃げろ……」

俺は血を流しながら立ち上がる。やばい、足元がふらふらする……

「直人・・・いいから逃げる!」

俺はメシアを構え、カオスを睨みつける。

「その体でよく立ち上がれるな」

「みんなを死なせてたまるか・・・もう二度と・・・目の前にあるものを失いたくない!」

もう二度とあんな想いはしたくない、死にたくなくとも、目の前にある命を守りたい。それだけが俺を支える。

「う・・・おおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

メシアを構え、リミットブレイクでカオスに襲い掛かる。

「ぬう!」

「おおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

鎧に連撃を叩き込む。息をする暇も与えない、圧倒的な速さと威力でねじ伏せる!

「おおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

鎧が崩れ始め、黒いオーラが消えていく。

「本能だけで動くか・・・もはや獣だな」

その言葉に、私達は驚く。すると、兄さんの体からマリカさんが飛び出てきた。

「うつ・・・！」

「マリカさん！」

「ティアナさん・・・」

「兄さんは、あれはどうなってるんですか!？」

いつもリミットブレイクするなら、甲冑は真紅。だが、今の兄さんの体の甲冑は赤黒い色をしていた。

「主の本能が暴走しているんです。」

「ほ、本能!？」

「リミットブレイクは本来、使用者の意思と本能をリンクさせて使うクラウン家の力です。しかし、主の意思が切れたことによって、本能だけが暴走しています。本来は意思が消えればリミットブレイクが強制解除できるのですが・・・」

マリカさんは兄さんを不安な様子で見ている。

「死という恐怖と、私達を守りたいという執念。その二つが制御を上回り、本能が暴走したんです」

「止める方法はないの!？」

セインが涙目でマリカさんを見る。しかし、マリカさんは首を振った。

「あぁなつては、カオスを倒すか、主の体が限界に達するのが先か・
・・・」

「そんな、兄さん……」

私はその獣と化した兄の姿を見続けた。

カオス
side

急な力を増したかと思えば、単なる暴走か……。だがその気迫と殺気、見事なものよ。

「ああああああああああああああああああ！！！」

「ふっ！おもしろい！」

我は剣を強く握り、力を込める。どうやらこの器には限界があるようだ。

「愚かなるものよ……我が一撃で沈め！」

我が剣の突きは左肩に刺さった。ぬ、心臓を狙ったのだが、超反応

で避けたか。

「ガ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「ふんつ！」

奴の手からデバイスが離れ、強制的に解除されたか。他愛もない。

「愚かなものよ……」

ティアナ side

「兄さん！」

私は壁に叩きつけられた兄さんを抱きとめた。血が酷い。すると、ずっと後ろで傍観していた男が笑っている。

「カオス、もういいだろう。奴らを消せ」

「ふん、貴様の言いなりもしゃくだが、よかろう……」

カオスが剣を構えてる。まずい……！

「皆さん！私の周囲へ集まってください！」

マリカさんがいい、私は兄さんをセイン、ウェンディと運び、マリカさんの周囲に寄った。

「このAMF下ですから、魔力を溜めるのに苦労しました・・・でも、もう行けます!」

魔法陣が展開される。これは転移魔法!?

「な!？」

「ここは引かせてもらいます。でも必ず、主は貴方達を倒します!」

こうして私と兄さん、マリカさん、そしてスカリエッティとナンバーズは聖王のゆりかごから脱出した。

第十五話「蒼天の騎士VS混沌の騎士」（後書き）

ようやくゆりかご脱出。とりあえず直人君死に掛けです。

直人「まったく、今回は叫んでばかりだったな」

秋風「確かに。喉がガラガラになりそうだったな」

直人「そういう問題じゃねーよ」

紫藤「どーも、こんにちは」

秋風「やや、紫藤君、ようこそ」

直人「おっ、仮面ライダーディエルブか」

紫藤「ええ、初めまして」

秋風「まさかライダーが来るとはなあ・・・」

直人「秋風も昔オリジナルのライダーを考えたことあったな」

紫藤「そうなんですか？」

秋風「仮面ライダーガイアだったね。」

直人「まあ、小説にはいたらず企画倒れだったけど」

紫藤「まあ、俺はディケイドからの派生なんで・・・」

秋風「確かに。この小説オリジナルのライダーも沢山いるよな」

直人「ライダーって日々こんなところからきてるのか………」
「

紫藤「もしかしてWも……」

直人「いやいやいや……それはないでしょ」

秋風「それはまあともかく、ディエブルってほとんどディケイドと変わらないよな」

直人「確かに。シグナムと戦うときもアギトになったし」

紫藤「ええ、ディエブルドライバーも同じ大ショッカーで製造されてますし」

秋風「もしかしたら小さくmade in って書いてあったりして」

直人「どんだけだよ。市販グッズじゃねーんだから」

紫藤「確かに、それはないでしょう。」

秋風「そういえば少し前までガンバライドカードを買ってたな……」
「……」

直人「ああ、番組に出てくるカードとか当たるとちょっと嬉しいよな」

紫藤「なんのカードを持ってるんですか？」

秋風「たしかBlackと、クウガのドラゴンフォーム、キバのパッシャー」

直人「あとは電王の決め台詞のカード全種だな」

紫藤「けっこう持ってますね」

秋風「深夜のゲーセンで知らないおっさんに沢山もらったよ」

直人「びつくりするほどの量を、な」

秋風「深夜のゲーセンって、ほんといい人しかいねえよな」

直人「ああ、最高だ」

紫藤「あの、一応全年齢対象の小説でその発言はどうかと……」

秋風「まあ気にするな。っと、そろそろ時間だな。」

紫藤「みたいです。俺もなのはたちの世界に帰らないと……」

秋風「ちなみにこの話でいつかは知らんが直人が出てこない話を作る」

直人「は!？」

秋風「まあ外伝だ。紫藤とは関係ないが、読者の方には知っておいて貰おう」

紫藤「じゃあ俺はこれで」

秋風「ああ、待った。はいこれ」

紫藤「これは？」

秋風「ゲーセンで手に入れたカードだ。使いたまえ」

直人「……………それ、余ったレアカードの仮面ライダーのセツトじゃん」

紫藤「ありがとうございます。それでは！」

直人「ああ、頑張つてな！」

秋風「それじゃあな！」

双宮紫藤 出演作品 仮面ライダーディエルブ 破壊者と星との邂逅

仮面ライダーディケイドの二次創作からリリなのとのクロスで誕生した仮面ライダー。作品では仮面ライダークディケイドと呼ばれるライダーとの戦いを終え、士とStrikersの世界へ足を踏み入れる。なのはとのフラグが立っています。

直人「次回、第十六話『帰還』TAKE OFF!」

第十六話「帰還」(前書き)

まさかの連続投稿。ちょっと調子乗ってますw

では本編どうぞw

第十六話「帰還」

俺は何もない空間にいた。ここはどこだ……？真っ暗だな……

「ここはあの世？」

「あらあら、来てしまったの？」

そこにいるのは一人の女性だった。

「母さん？」

「久しぶりね。元気だった？」

目の前には死んだ母さんがいた。ってことは……

「俺、死んだの？」

「いいえ。まだ貴方は生きてるわ。でもそれを選ぶのは貴方よ？」

「選ぶ？」

「このまま私と来るか、それとも戻るか。どちらかです」

はは、人生最大の選択だな。

「そつえば、父さんは？」

「ええ、今あの世で一番有名な人と掛け合っています」

「一番偉い？」

「子供の頃話もしたでしょう？閻魔様よ」

それは確かに一番偉いな。

「あなたが生きるべきか、死ぬべきか。どちらか討論している。」

「そうなんだ……………」

「私としては、よくやったと思います。直人、あなたはどうしたいの？」

「俺は……………」

このまま母さんに行くか。それとも戻って戦うか……………俺は……………」

「俺は、戻るよ」

「いいのね？先に待つのは地獄かもしれないのに」

「もう後悔したくない。」

なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか、ヴィヴィオ……………そして六課みんなの笑顔が浮かぶ。

「俺は、みんなを守る騎士になる」

「ふふ、立派になったわね」

「まったくだ。直人」

「父さん」

そこにはスーツを着た男性。紛れもなく、俺の父親だ。

「父さん、相変わらずかつちりしたスーツだね」

「これが一番しつくり来る。・・・母さん」

「はい、いいと思います」

父さんの言葉に母さんが頷いた。いったい何が？

「直人、もし家に戻ることになったら、私の書斎の一番したの引き出しを開けなさい」

「え？」

「お前を一人前と認めたときに渡すものが入っている。」

父さんと母さんの後ろに、光の道が出来た。それは大好きな蒼の色。空の色だ。

「ここからまっすぐ行けば、現世に戻る。」

「体には気をつけるのよ。それと、千草に頑張れって伝えて頂戴」

「うん、わかったよ……あのさ、父さん、母さん」

「何かしら？」

「ありがとう」

俺の言葉に、二人は頷き、俺は一気にその道を駆け抜ける。その輝きが待つ、蒼い空へと。

また真つ暗な空間だ。違うな、俺が目を開じているからか……。この匂いはアルコールかな？俺はゆっくりと目を開けた。そこにいたのは、5人の天使。天使たちは驚いた顔で俺を見ている。だがまあ、挨拶はするか。

「よお、なのは、フェイト、はやて、アリサ、すずか……」

「……直人（君）！！」「」「」

なのはたちが俺に抱きつく。

「いつ……つうぐー！」

「あ、ご、ごめん……」

「ここは……病院か？」

「うん。聖王病院……彼女達が運んでくれたんだよ」

そこには眠っているナンバーズとティアナ、そしてマリカの姿があ

った。

「ははっ……皆無事か……」

「直人君。事情はティアナとマリカさんから聞いたで。スカリエツ
ティも自首した」

「そっか……フェイト」

「何？」

「お前は納得するかわからないけど……あいつは……」

俺が言いかけると、フェイトの指が俺の口を押し当てた。

「わかってる。私は彼が許せない。でも、直人を助けた彼を、私は
信じてみようと思う」

「そっか……」

俺はそのフェイトの言葉が少し嬉しかった。まるで、俺自身の罪が
消えていくような、そんな感じだった。

「でも、なんでアリサとすずかがここに？」

「なのはから連絡が来てすっ飛んできたのよ」

「なのはちゃんが大慌てでいうから、まともに準備もしてこないで
ね」

さすががクスクスと笑っている。確かに、二人ともかなりラフな格好だな。

「パパ！」

「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオが泣きまくって俺にしがみついた。

「大丈夫？大丈夫？」

「ああ、大丈夫。ただいま、ヴィヴィオ」

「パパ・・・おかえ・・・すう・・・すう・・・」

ヴィヴィオは安心したのか、ゆっくりと眠りについた。

「ヴィヴィオ、ずっと起きてたから・・・」

「そっか・・・ありがとうヴィヴィオ」

俺はヴィヴィオの頭を優しく撫でた。

「そうだ、メシアは？」

俺が言うと、なのはがメシアを取り出した。ボロボロになったメシア。俺はそれが直視できない。

「すまない、メシア」

『主のせいではありません。私の力不足。そして、弱さです』

「だが、俺があの時リミットブレイクを暴走させなければ……」

『……確かに、それは貴方の心の弱さかもしれませんかし……』

メシアが一拍置き、光る。

『強くなっていけばいいのです。私も、あなたも』

「そうだな、強くなろう。誰よりも、何よりも……」

「直人君、メシアはシャーリーに言っただけで修理してもらったから、しばらくはブレイブスワローを使っただけ」

「ああ、わかった。」

『マスター、私も力になります。』

「頼りにしてるよ、相棒」

俺はブレイブスワローを装着した。

「じゃあ直人君。私達は六課に戻るね。その間はアリサちゃんとすずかちゃんが面倒みてくれるから」

「あ、ああ……」

なんか3人から黒いオーラが出ているのは気のせいかな？

「仕事、頑張ってくれ」

「うん、じゃあね」

「お大事にな、直人君」

こうして3人が退出した。残っているのはナンバーズとアリサ、すずか、ヴィヴィオ、ティアナ、マリカ。

「とりあえず、そうだな。ティアナ、マリカ、起きろ」

俺の言葉にティアナたちが目を覚ました。

「兄さん！」

「主！」

二人が俺に抱きつく。だからやめろって！

「いてててて！」

「あ、すいません」

「忘れてました。大怪我だって。」

「ああ、もう大丈夫だ。ティアナは六課に戻って大丈夫だ」

「はい。じゃあ私、ナンバーズの子達も連れてきますから」

こうしてティアナがナンバーズを起こし、全員事情聴取へと連れて行かれた。もつとも、それをするのは機動六課であり、危害は加えないという約束だ。

「そういえば主、ゼストさんからこれを」

「ん？これは？」

手紙のようだ。開けるとそこにはしばらく身を隠す。ルーテシアを頼むと書かれていた。

「そういえばルーテシアは？」

「ルーテシアならお母さんのところだそうです。」

そっか、お母さんも保護したんだ。俺はため息をつく。そういえば・
・・・・

「マリカ、今の俺の魔力は？」

「確か精密検査では著しく落ちていると聞きました。しかし、失われてはいません」

「そっか。なら・・・『我が求めるは癒しの力・・・召喚、エルフ』」

召喚魔法陣が光り輝き、カナリアが姿を現した。

「マイマスター、御用でしょうか？」

「ああ、この傷、何とかなるかな？」

「はい、やってみましょう」

俺に光が当てられ、傷が消えていくしかし、肩の傷はどうあっても直らなかった。

「マイマスター、どうやら今の魔力量ではこれが限界です。マスターの肩は数日してから直すとしましょう」

「ああ、そうしよう・・・ありがとうカナリア」

「はい、またお呼びください・・・・・・・・・・」

こうしてカナリアが消えた。それを見てアリサとすずかが驚く。

「やっぱり魔法ってすごいわね」

「ホント、傷があつという間に治ったね」

「まあな・・・・・・・・」

「直人！」

「アリシア」

今度は病室にアリシアが入ってきた。アリサとすずかは驚いている。

「フエイト？」

「フェイトちゃん？」

「あ、違うんだ。こいつは……」

俺が言うと、アリシアは笑顔を向ける。

「初めまして。アリシア・テストロッサです。フェイトの姉なの。よろしくね」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです」

互いに握手する。ま、瓜二つだから驚くのも無理はないよな。

「で、どうした？」

「どうしたって。マラキアのことよ！大丈夫だったの！？」

「ああ、だが、事態は結構悪化しているようだ」

俺はアジトで起こったことを話した。

「カオス・レイ………わかったわ。私は一度戻る」

「ああ、頼む」

「ええ。それじゃ、バイバイ！フェイトとヴィヴィオによろしく！」

こうして、あっさりとアリシアは帰っていった。

「なんか、嵐のような人だったね」

「そうね・・・」

二人はちよつと驚いているが、俺には見慣れた光景だった。

「ん・・・パパ・・・」

あれ、ヴィヴィオが起きた。

「パパ、お腹すいた・・・・・・・・」

ヴィヴィオのお腹から音がした。時計を見ると、もう夜の8時だ。いつも7時とかに飯を取ってたヴィヴィオにとってこれは辛いな。俺は苦笑し、ゆっくりと立ち上がる。

「じゃあ、ご飯に行こうか」

「うん、パパ」

「つと・・・」

まだ完全に直っていないからか、倒れそうになる。しかし、アリサとすずかに支えられた。

「大丈夫？直人君」

「まだ無理したらだめよ」

「ああ、ありがとう二人とも」

二人に支えられ、俺たちはゆっくりと食堂へ向かった。この時、食堂に向かうまで、360°で殺気をもらったのは言うまでもない。

食堂に着くと、ヴィヴィオはまっさきにカレーライスを頼んだ。どうやらピーマンをよっぽど食べたくなかったらしい。

「直人、どうする？」

「ああ・・・俺はそうだな、サンドウィッチでいい」

喰いすぎて怪我悪化したら元も子もないからな。マリカはピザを3枚ほど。(めっちゃでかいやつ)。アリサはグラタン、すずかはスパゲッティを頼んだ。席に着き、ヴィヴィオが嬉しそうにカレーを頼張る。実を言えば、地球の食べ物はかなり有名なものであり、多くの店などで取り入れられている。

「ヴィヴィオ、美味しいか？」

「うん、パパ」

「ねえ、気になってたんだけど、なんで直人がパパなの？」

「えっ・・・」

これを説明するとまた面倒だ・・・

「ああ、ヴィヴィオの保護責任者だからですよ」

マリーカー！

「へえ、初耳なんだけど」

「いや、それは・・・」

「ねえ、パパ、なのはママたちは？」

ヴィヴィオー！また余計なことを！

「へえ、知らなかったなあ・・・」

「直人君、どういふことが説明してくれる？」

黒いオーラが増す。ヴィヴィオもびっくりして俺の後ろに隠れてしまった。こ、怖！

「わ、わかった・・・わかったからフォークをこっちに向けるな！」
逃げられない。これは・・・。仕方なく、俺はそれについて説明した。

「なるほど・・・なのはたち、ようするに抜け駆けね」

「ずるい、なのはちゃんたち・・・」

「パパ・・・」

「はいはい、ヴィヴィオは食べておとなしくしてようね」

「うん・・・・・・・・」

ヴィヴィオがめっさ怯えてる。そりゃそうだ。周囲の人間みんな避けちゃったもん。

「お前ら、ヴィヴィオが怯えてるから」

「あ、ごめん」

「ごめんね、ヴィヴィオちゃん？」

「うん・・・・・・・・えっと・・・・・・・・」

そういえば二人のことをヴィヴィオは知らないのかな？

「私はアリサ・バニングスよ」

「私は月村すずかだよ」

笑顔で自己紹介すると、ヴィヴィオも笑顔になった。

「井上ヴィヴィオです」

あれ、敬語使うようになった。なのは、この二日間で何を教えたんだ？ふと視線を外し、外を見た。外は綺麗な夜空が輝いてる。あの星のどれかで、母さんたちは見守っていてくれるだろうか？

「・・・・・・・・ありがとう」

俺は小さく呟く。

「パパ？」

「うん、なんでもないよ。さ、食事もしたし、お部屋に戻ろう」

「うん！」

食事を終えたので、俺は全員で病室に戻った。その後アリサとすずかも機動六課へと向かった。二人は宿がないらしい。なので、今はヴィヴィオとマリカの3人だけだ。

「ヴィヴィオ、歯磨きしたか？」

「うん」

「ちゃんとしていましたよ。なのはさんはこの2日でどうやってヴィヴィオを育てたんだか」

確かに、それは気になるところだな。ヴィヴィオは今パジャマに着替えている。といっても、ヴィヴィオのパジャマはなのはのTシャツだ。服もなのはが小さい頃着ていたものを着ているらしいが、それでは少なすぎる。明日、リハビリを兼ねて買い物にでも行こうか。

「ヴィヴィオ、明日お買い物行こうか」

「お買い物？」

「そう、ヴィヴィオのお洋服を買おうと思っただけ」

「行く！」

ヴィヴィオは笑顔で頷いた。

「よし、わかった。じゃあ明日に備えて寝ような。」

「うん！」

マリカが電気を消し、ヴィヴィオは俺のベッドに入り、寝息を立てて寝始める。体の方も俺はカナリアのおかげで全治一ヶ月が2日になった。とりあえず明日は肩の怪我をどうにかしよう。そう思いながら、俺は一時の休息についた。

第十六話「帰還」(後書き)

秋風「ふむ、なんかノリで書いたら早く書けた(笑)」

直人「てか明日勉強しなきゃだろ。そんなんで大丈夫か?」

秋風「ああ、なんとかする」

直人「先が思いやられる……………」

秋風「そういえば最近小説が増えてるな」

直人「確かに。面白いのばかりだ」

秋風「俺的にはのちのち抜かれそうで不安だな」

直人「何が?」

秋風「人氣が」

直人「この小説人氣なんてあるのかさえ皆無だな」

秋風「そこは言っな……………」

直人「今回はゲストは来ないし、この辺にしておこうか」

秋風「そうだな」

直人「次回、第十七話『一時の平和』TAKE OFF」

第十七話「一時の平和」(前書き)

今回は無謀にも3連続投稿。どうかお付き合いくださいませ

では本編どうぞw

第十七話「一時の平和」

朝8時。俺は目を覚ました。体もかなり動くようになったし。肩の傷も魔力を集中したおかげで少しは楽になった。

「ヴィヴィオ、起きろ。もう朝だぞ？」

「うん・・・パパ、おはよー」

「ああ、おはよう。マリカ、お前も起きろ」

「ううん・・・主・・・まだ8時じゃないですか」

「あのな、もう8時だろうが。さっさとヴィヴィオと顔洗って来い」

「マリカお姉ちゃん、行こう！」

ヴィヴィオに連れられ、マリカたちは洗面台へと向かっていった。

マリカ side

超眠いです。正直まだ寝ていたいのに・・・

「おねえちゃんおねむ？」

「そうですね・・・まだ眠いです」

ヴィヴィオはしっかりしてますね。顔も丁寧に洗って・・・

「えいっ」

「きゃ!？」

訂正します。やっぱり子供です・・・

「おめめさめた？」

「はい・・・とりあえず覚めました」

別の意味で。私はビショビショの体をタオルで拭き、大きく伸びをしてからヴィヴィオの肩に乗ります。

「ではヴィヴィオ、戻りましょうか」

「うん!」

こうして私たちは病室へと戻っていきました。

直人 side

ふう、とりあえずカナリアを呼んで傷の修復を頼んだことで、肩の傷は良くなった。こういうとき魔法って便利だ。そう思いながら着替えを終えると、ドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

ドアが開くと、そこにはギンガの姿があった。

「直人さん!」

ギンガが俺に抱きついてきた。

「おっとと・・・ギンガ、無事だったのか。」

「ごめんなさい!私の、私のせいで・・・!!」

「いやいや、別にギンガが悪いところなんか一つもないだろ?」

「私が・・・私が普通じゃないせいで・・・」

ああもう、どうしてこうフェイトといい、エリオといい、ナンバーズといい、こうも自分を悲観的に見るかなあ・・・

「あのさ、別にギンガが普通じゃないからって悪いことなんて起きてないだろ?」

「でも、あなたの怪我は・・・」

「これは俺が自分でやった自業自得。ギンガは一ミリも悪くないよ」

俺は優しく頭を撫でた。

「ギンガが戦闘機人つてのには驚きはしたけど、ギンガは人を不幸にしたことがあるか?」

俺の言葉に、ギンガは顔を伏せて首を振った。

「なら、いいじゃないか。ギンガには家族がいる。その家族を、その力で守ればいい」

「直人さん……」

ギンガの目に大粒の涙がある。俺はそれをそっと拭き取った。

「ほらほら、せつかくの可愛い顔が台無しだ。もう泣かない泣かない」

「直人さん……ありがとう」

「どういたしまして。」

ギンガが顔を紅くしながら涙を拭いた。

「では、私は仕事に戻ります」

「ああ、頑張つてな」

「はい」

こうしてギンガは部屋を出て行った。それと入れ違いで、ヴィヴィオたちが戻ってくる。

「じゃあヴィヴィオ、着替えたら出発しようか」

「うん！」

「主、外で待つててください」

「あのな、俺にそういう趣味はない」

そんな討論もあったが、結局ヴィヴィオが着替え、俺たちはクラナガンへと向かうことになった。

「ひとがいつぱい・・・」

ヴィヴィオにしてみれば、初めての外の世界だ。保護されたときは意識ははっきりしていなかったし、機動六課にいてからはほとんど外には出ていなかったという。

「主、服は前に行ったデパートで良いのでは？」

「そうだな。行くか、ヴィヴィオ」

「うん、パパ！」

俺たちはデパートに向かうことになった。この時はマリカもフルサイズでヴィヴィオと手を繋ぎ、服選びをしていた。少女でも女だ。下着や服などにはこだわりがあるのか、ヴィヴィオの服を大量に買った。そしてお昼を食べ、今度は靴などを見に行く。するとその途中、ぬいぐるみのコーナーをヴィヴィオが見つけ、それを見つめていた。

「ヴィヴィオ、どうした？」

「うさぎさん……」

そこにあるのは大きなぬいぐるみの間にちょこんと座っているうさぎのぬいぐるみだった。白く、可愛い。

「主、買ってあげてはどうですか？」

「ん？ああそうだな。ヴィヴィオ、あれが欲しいのか？」

「うん」

「わかった。いい子にしてたご褒美だ。買ってあげる」

その言葉に、ヴィヴィオが目を輝かせた。

「ほんと!？」

「ああ、本当」

俺とヴィヴィオをそのショップに入り、そのウサギを買った。そんなに高くはない。所詮は子供のおもちゃだ。

「よかったですね、ヴィヴィオ」

「うん!」

ヴィヴィオは嬉しそうにそのぬいぐるみを抱きしめる。

「じゃ、次は靴か……」

「ですね……主、あれは」

「ん？」

「……直人（君）！」「……」

走ってくる5人の女性……十中八九なのはたちだった。

「みんな、どうした？」

「だって、直人君が病室にいないっていうから……」

「いや、外出許可はもらっただけ……」

「そうやない。なんで誘ってくれへんのや」

そういうことかよ。だが、ヴィヴィオは嬉しそうだ。

「なのはママ、フェイトママ、はやてママ、みて！パパが買ってくれたの！」

「よかったねヴィヴィオ」

「いい子にしてたんだね、偉いよ」

「ほんまや。ほら、おいでヴィヴィオ」

はやてがヴィヴィオを抱っこして、ヴィヴィオも嬉しそうだ。子供ってのはやっぱり母親大好きか？

「てか、お前ら仕事は？」

「大丈夫、シグナムたちに任せてきたから」

シグナムさん、ご愁傷様です。

「それにしても、ずるくない？」

「何が？」

「なんでなのはただけヴィヴィオのママなのよ」

「どうせなら私達もママがいいよ」

と、アリサとすずかが抗議する。対して3人は早い者勝ちだというのが、ヴィヴィオは不思議そうに二人を見つめる。どうやら自分のことと言い争っていることがわかっていないらしい。俺はため息をついてヴィヴィオを抱き上げた。

「ヴィヴィオ、ママ達は放っておいて靴を見に行こう」

「うん！」

とりあえずその後あいつらは戻ってくるまで討論を続けていた。

とりあえず今日の目的は達成。かなりの量なので、服は宅急便で六課に送る事となった。現在はヴィヴィオと手を繋ぎ、みんなで外の公園を歩いている。

「綺麗な夕焼けだな」

「そうだね」

「にしても、こうやってみんなで騒ぐのは久しぶりや」

「そうね、直人は帰ってきてても慌しかったし」

「4人とも帰ってきたらすぐミッドチルダに行っちゃうし」

「にやはは、やっぱりみんなが揃うと嬉しいね」

みんなは嬉しそうに笑う。4年間という時間の中で、俺はみんなに辛い思いをさせていたのだと、ようやく気が付いた。

「そうだな、やっぱりみんなで揃っていたほうがいいな……」

「

騒がしくも落ち着く。この顔ぶれで、この空間にいられることが、今の俺には何よりも幸せだった。

「パパ」

「ん？」

「抱っこ」

「はいはい」

俺は言われるままにヴィヴィオを抱っこする。どうやらおねむのよ

うだ。ヴィヴィオはほんの数分でうさぎのぬいぐるみを抱えて眠ってしまった。

「疲れてたんだね」

「ああ、今日はいっぱい歩いたからな」

ヴィヴィオの髪を、なのはが優しく撫でる。ヴィヴィオは嬉しそうに笑っている。よほどいい夢を見ているんだろうな。

「あのね、直人。スカリエッティに聞いたんだけど、ヴィヴィオは聖王の遺伝子を元に作られたんだって」

「聖王？」

「うん、古代ベルカの諸王時代を生きた聖王女、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」

「なるほど、そのクローン……か」

「もうヴィヴィオは何か利用されることはないかもしれない。でも、ヴィヴィオはその事実を背負って生きなきゃいけない」

フェイトは悲しそうに言う。フェイトはかぶってしまうのだろう。自分とヴィヴィオが似た存在であることが。俺は小さくため息をつく。

「でもさ、ヴィヴィオはオリヴィエとは関係ないんじゃないか？」

「え？」

「ヴィヴィオはヴィヴィオだ。俺の娘で、フェイトやなのは、はやての娘だ。それでいいじゃないか。」

それ以上でもなければ、それ以下でもない。ここで眠っているのは、甘えん坊で、元気いっぱい少女。井上ヴィヴィオだ。

「いつか、ヴィヴィオは本当のことを知る日が来るだろう。でもヴィヴィオはきつとそれを受け入れる。そんな気がするよ」

「うん、そうだね」

フェイトも納得したようにヴィヴィオを優しい眼差しで見つめる。こうして、俺たちの平和な一日は幕を閉じた。今はヴィヴィオを抱いたまま、時空管理局の転送ポートにいる。アリサとすずかが地球に帰るからだ。

「じゃあアリサ、すずか、元気でな」

「直人、これ以上怪我したら許さないからね！」

「もうアリサちゃんたら・・・直人君、体には気をつけてね」

「ああ、わかってる。」

「アリサちゃん、すずかちゃん、学校頑張つてね」

「なのはたちも、しっかり直人を見張つてなさいよ？」

「うん、わかってる」

「今度は首輪でもしとくで」

はやて、それはやりすぎだろ。

「じゃ、バイバイ」

「またね」

こうして、二人は転送され、地球へと帰っていった。

「じゃ、帰ろうか、機動六課に」

「え？俺はまだ病院じゃ……………」

「もう怪我も治ってるじゃない。病院の先生は無理しなければ大丈夫だって言ってたから」

「そうやで、みんな待つとる。帰るか、直人君？」

「ああ、そうだな・・・帰るか、機動六課へ」

俺は笑顔でそう答えた。すると、みんなも笑顔になった。この笑顔、俺は守らなきゃいけない。母さんに、父さんに誓ったから。

「さあ、帰ろう」

こうして、俺の平和な一日は幕を閉じた。

後日

「なんやこの仕事の量はー！」

「どうしてこんなことになってるの!？」

「にゃー!これどういうこと？」

デスクルームでなのはたちが騒いでいる。どうやら、昨日の仕事が溜まっていたらしい。

「主、一応捌きましたが、これ以上は無理です」

「ですうゝ・・・・・・・・」

げっそりしたシグナムさんとリイン。そして横でヴィータがため息をついている。

「なのは、フェイト、お前らが悪い。諦めて仕事しろ」

「」「そんなー!!!」「」「」

父さん、母さん、六課は今日も平和です。

第十七話「一時の平和」（後書き）

直人「今回はなんと三連続投稿！」

秋風「睡眠と戦い頑張ります」

直人「てか、次回は・・・」

秋風「そう、予告したとおり、この先2話分にお前に出番はない！」

直人「なに!？」

秋風「とうとうアイツが登場だ!楽しみにしている!」

直人「次回、第十八話『復活と真実』TAKE OFF!」

第十八話「復活と真実」(前書き)

今回直人に出番はありません。しかし重要な物語ではあるので読んでくれると嬉しいです

では本編どうぞw

第十八話「復活と真実」

??? side

ここはどこだ……

「あれから、どれだけの時が経った？」

俺は真っ白な空間で眠っていた。周りを見るが、見渡す限り何も無い。ずっといたら気が狂いそうだ。

——ここは次元の狭間よ

「……次元の狭間？」

——そう、あなたは生き延びた。この空間にいることによって

「ここから出ることは？」

——できるわ。でも、貴方はよくやったわ。ここでゆっくり眠っていて？

その言葉に、俺は短く笑った。

「悪いけど、こんな何もない空間じゃ退屈すぎる。世界は、まだ光を見ていない」

——あなたにとって、世界はあなたを苦しめた存在よ？それでも

行くの？

確かに、俺は苦しめられた。世界に、自分に。だが……

「それを持ち越えなきゃ、いけない。俺は騎士だからな」

——そう……じゃあ止めないわ。行つて来て。そして、世界に光を見せて。そしてあなた自身も、自分を支えてくれる光を掴んでね……

足元に紅い魔法陣が現れる。どうやら、これで転送されるようだ。すると、俺は転送される直前に、目の前に金色の粒子が集まれ、一人の女性になるのを見た。なるほど、俺を助けてくれたのはお前だったのか。

「ありがとう………ティーナ」

俺の言葉に、ティーナは笑顔だった。

アリス side

ミッドチルダから帰ってきて早くも3日。今日は、すずかの家に行く。大学の課題をおわらせるために。道路を車で走っていると、あるものが目に入り、私は急ブレーキを踏んだ。

「ひ、人！？」

そう、道路の、それも人気のない道路のど真ん中に人が倒れていた。

「ちょっと、大丈夫！？」

気絶しているだけで息はある。私はなんとかその男の人を担ぎ、車の後ろに乗せた。

「急がなきゃ……………」

私は急いですずかの家へ向かった。

すずか side

今日はアリサちゃんがうちにやって来る。アリサちゃんと課題をやりと楽しいし早く終わる。そんなことでガーデンで紅茶の用意をしていると、家のベルがなった。どうやら来たみたい。私は玄関まで迎えに行くと、アリサちゃんの車が猛スピードで玄関の前に止まった。

「アリサちゃん!？」

「すずか!お医者さん呼んで!あとノエルさんとファリンさんも!」
よく見ると、車の後ろで男の人が眠っている。

「ど、どうしたのこの人!」

「道で倒れてたのよ!ほら、早く!」

「う、うん!」

こうして、私は家の中に走っていった。

??? side

俺はどうしたんだ・・・？次元の狭間からどこかに転送されたらしいが、その後の記憶はさっぱりだ。俺はゆっくりと目を開けた。そこは豪華な屋敷の中だった。

「ここは・・・どこだ？」

俺は周囲を見るが、まったくわからない場所だった。

「あら、気が付いた？」

金髪でショートカットの女性と、紫色の髪でロングヘアーの女性が部屋に入ってきた。この家の人間か？

「君達は？」

「私はアリサ・バニングス。貴方をここまで運んできたの」

「私は月村すずかです。ここは私の家なの。」

「そうだったのか・・・ありがとう、どうやら手当てまでもらったようだ」

ところどころには包帯が巻かれている。そういえば俺はボロボロだったか・・・

「あの、そういえばお名前を教えてくださいませんか？」

すずかと名乗る女性が遠慮がちに言う。む、そういえばまだ名乗っていませんでした。これは女性には失礼だな。

「すまない、俺は………」

この時一瞬迷った。何故だろう、名前を名乗るか否か……。だが、怪しまれるのもごめんだ。とりあえず本名を名乗ることにした。

「俺はゼオン。ゼオン・クラウンだ」

「「ゼオン・クラウン!？」」

二人して驚いていた。俺は何か変なことを言ったか？

「じゃああなたが、マリカさんの前マスター？」

「マリカを知っているのか？君たちはいったい？」

マリカの名前だけでなく、俺が前マスターだったことまで知っている。この子は何者だ？

「あの、直人君から聞いてます。一緒に戦った人って………」

「君達は彼の知り合いか？」

「はい。学校が一緒でしたから。」

月村が言う。待てよ………

「彼は無事か!？」

確かカオスに攻撃した瞬間に俺が「次元回路の旅人」を使ったが、無事だったかはわからない。すると、月村とバニングスは笑顔だった。

「ええ、一昨日まで色々あって大怪我だったけど、元気よ」

「そうか……………」

「そういえば、4年もどこにいたんですか？ゼオンさん」

月村の言葉にまたしても驚く。4年……だと!？

「4年!？」

「ええ、貴方と直人が行方不明になってからもう4年経ってるわよ」

「4年……………そんなにも私は眠っていたのか」

次元の狭間だったからか、時間の感覚が狂ったのかもしれない……

「で、この後だけどうする？一応管理局に知り合いはいるけど」

「あ、ああ……………だが、君たちに世話になるわけにもいかない」

「水臭いこと言わなくていいわよ。ちょっと待ってなさい」

バンングスが端末を取り出し、数分。しかし、バンングスは首を傾げた。

「あれ、おかしいわね。3人とも出ないわ」

「何か会議中なんじゃないかな。なのはちゃんたち忙しいから」

「そうね……………」

「なのは…………とは、高町なのはか？」

「ええ、そうよ」

「まさか、関係者があの有名なエースオブエースか。驚きだな」

まさか友達とは。すると、俺の腹が鳴った。

「あ、お腹空いてるんですか？」

「らしいな。4年も眠り続けていたからな」

「じゃあご飯貰ってきますから。ちょっと待っててください」

こうして二人が退出した。おれは置かれていた荷物を見た。

「これは……………」

それはラグナとロック…………かつて俺を狂わせたデバイスだった。

「なぜこれがここに……………」

『マイロード、目が覚めましたか？』

「貴様ら、何故ここにある」

『当然です。私達は貴方と共に4年間過ごしてきたのですから』

「貴様らのせいで俺がどれだけ……」

ラグナたちを殴りそうになるが、やめた。痛いだけ出しな。

『マイロード、我々も同じです』

「何？」

『カオスの意思、それに私達は操られていました』

「カオスに？」

『はい、ラグナは私の名前ではありません。私の真名^{まな}は『シャイン』

』

『そして私もロックではありません。私の真名^{まな}は『イーグル』』

「何故お前らは操られていたんだ？」

『実を言えば、我々はクラウン家に実験をされたのです』

「何!？」

意外な言葉だった。まさか、こんな偶然があるうとは……

『そしてさまざまな人の手に渡るにつれ、我々はカオスの意思に飲まれ……』

『記憶も、姿も改竄させられたのです……』

シャインとイーグルの言葉は、どことなく重かった。自分の一族の過ち。それがこんなデバイスたちにも及んでいたとは……

「……すまない」

『過ぎたことです、マイロード』

『しかし、一つだけお願いが』

「なんだ？」

『今一度、我々と契約を果たしてください』

二人の言葉に、俺は驚く。自分達を狂わせた一族の人間にそんなことを頼むとは……それとも何かの罠だろうか？

『今だ、世界の混沌は消えたわけではありません』

『あなたの力で、世界に光を見せるというならば……』

『今一度、我らが力を貸しましょう！』

俺は考える。カオスがまだいるのなら、俺は戦うべきだ。それが俺

が唯一「罪」を償うための方法だ。しかし……

「……正直、まだお前らの話を信じることは出来ない」

『わかりました。我々に触れてください』

言われるがまま、俺はシャインとイーグルに触れた。その瞬間、俺の頭に、旧暦の歴史が頭に流れ込んでくる。これはいったい!?

『私は行きます、ゼオン』

『オリヴィエ殿……』

そこは炎が逆巻く荒地だった。なんだ、このビジョンは……

『霸王と戦い、今度こそ戦いを終わらせませう』

俺と似た人物……恐らくは初代?そして目の前にいるオッドアイの女性。これは誰だ?

『あなたのメシアスワローと、シャインには助けられました』

『オリヴィエ殿、貴方は、本当に行くのですね?』

『はい、それが……私に残された使命です』

『わかりました。私はもう何も言いません。オリヴィエ聖王女殿下・……』

『ゼオン……』

初代が肩膝をつき、頭を下けている。・・・聖王？これは古代ベルカの諸王時代！？

『もし互いに生まれ変わるのなら、平和で、青空と花が見れる場所で会いましょう』

『わかりました。クラウン家が頭首、ゼオン・クラウンは貴方の元へ必ず舞い戻ります・・・』

オリヴィエと呼ばれる女性が微笑んだ。そして、その先にいる男を見据えている。あれが霸王か？

『では、ゼオン』

『はい、私は残りの敵の排除に参ります。どうか、御武運を』

『ええ、あなたも』

ここで、ビジョンは消えた。

『どうでしたか？』

驚きの一言しか出てこなかった。そして俺の目から涙が流れる。

「シャイン、お前はクラウン家のデバイスだったのか」

『はい、そしてイーグルはブレイブスワローの代わりに作られた姉妹機です』

その言葉を聞き、俺は決意を固めた。

「・・・・・・・・・・わかった。力を貸してくれ」

『では私達の真名を呼んでください』

「シャイン、イーグル。俺に力を貸してくれ」

『『イエス、マイロード』』

シャインたちが輝きを放った。そして、その二つは腕輪に変わり、右腕に緋色、左腕に金色の腕輪が付いた。右がシャイン、左がイーグルのようだ。

「これからよろしく頼む」

『『イエス、マイロード』』

そんな会話をしていると、バニングスたちが戻ってきた。

「あれ、何してるの？」

「ああ、少し・・・な」

「食事を持ってきました。よかったらどうぞ」

「ああ、いただくとしよう。」

こうして、俺はもう一度騎士として戦うことを誓った。

第十八話「復活と真実」(後書き)

秋風「はい、こんばんは」

ゼオン「ここは……」

秋風「今回は次回まで君が主役なので」

ゼオン「久々の登場だ。」

秋風「まあ、オリヴィエの設定はかなり無茶にくつつけた」

ゼオン「たしかに、クラウン家は旧暦から戦い続けた一族だ。初代がオリヴィエと会ったという仮説もあってもいい」

秋風「まあそのうちゼオンと直人が共闘するわけで」

ゼオン「先は楽しみにしておこうか」

秋風「そうだね。ではどうぞ」

ゼオン「ああ。次回、第十九話『蘇る紅翼、変わりゆく心』TAK
E OFF!」

第十九話「蘇る紅翼、変わりゆく心」(前書き)

つ、疲れた……

今回の話で色々変わってるところがあります。とくにあの二人ですが……

では本編どうぞ♪

第十九話「蘇る紅翼、変わりゆく心」

あれから一日が経過した。俺はバニングス家で居候している。とりあえずバニングスの家は広いし、犬が多かった。俺は世話になり、いろいろと仕事を貰い、働いている。すると、バニングスが寄ってきた。

「どうした、バニングス」

「ええ、これからずかと買い物に行くんだけど、付き合ってくれない？」

「何故だ？」

「荷物を持つ人間が欲しいのよ」

そういうことか・・・

「わかった。手伝おう」

「じゃ、行くわよ」

こうして俺とバニングスは月村の家に向かうこととなった。

月村と合流し、少し遠くにあるショッピングモールに辿り着いた。

「バニングス、月村、何を買いに行くんだ？」

「そんなの見ながら決めるのよ」

「いつもそうなんですよ」

さすが金持ち、言うことが違うな。こうして俺は二人の買い物に付き合わされた。

「これどう？」

「似合うよアリサちゃん」

婦人服売り場で楽しそうに買い物しているが、そんなのはこの二人だけだ。この世界の金銭については少し知っているが、ミッドチルダの額に換算しても、偉い額の服を買いおうとしている。月村が選ぶブラウス、なんでテレビと同じ値段なんだ……

「あの、ゼオンさんはどう思います？これ」

月村が見せる。まあ悪くない。

「いいと思うが、それにその服とあわせてもいいと思う」

「言われてみれば……いいですね。ありがとうございます」

「あ、ああ……」

なにがありがとうなのかわからないが、いいか。それから買ってからその合計を見てたじろいた。その合計金額で車買えるぞ。

アリサ side

前に直人と来たところだけど、今回はゼオンとすずかが一緒にしても……

「ねえ、ゼオン？」

「なんだ、バニングス」

「いい加減名前呼びなさいよ」

「何故だ？」

ああもう、こいつ見ると昔の直人見ているみたいね！

「苗字で呼ばれるの好きじゃないのよ」

「私もすずかって呼んで下さい」

「わかった、アリサ、すずか」

あら、直人と違って文句は言わないのね。

「お腹空いたわね、ご飯食べましょう」

こうして私達はレストランへと向かっていった。

すずか side

それにしても、なんだか直人君とゼオンさん似てる。雰囲気とかそっくり。だからかわからないけど、笑顔とか見ると自然に顔が赤くなっちゃう。私は食事をしながらそんなことを考えていた。

「あの、ゼオンさん」

「なんだ？」

「ゼオンさんは服は・・・」

「これだけだ」

今の姿は赤いジャケットだった。話だと、バリアジャケットを着てるとか。もう夏なんだし、暑そう。

「ねえアリサちゃん、ゼオンさんの服、どうにかしてあげない？」

「それもそうね。見てると暑苦しいし」

ああもう、アリサちゃんはどうしてそうツンツンしちゃうのかしら・・・

「いや、君たちに迷惑をかける訳にもいかないだろう」

「気にしないでください。私が何とかしてあげたいから言ってるので」

私の言葉に、しぶしぶ了承してくれたゼオンさん。なんだかちょっと可愛かったな。

ゼオン side

今現在、俺は二人に服を選んでもらっている。この服は通気性があるので問題ないのだが、アリサに「暑苦しい」と言われ、グサリとなにかが刺さった気がした。そして服を買い、俺はそれに着替えた。勿論、トイレで。

「うん、似合ってる」

「そうね。暑苦しくはなくなったわ」

「そうか……この服の代金は必ず返そう」

さつき見たが洒落にならない額だったしな。それにしても、この二人、どちらの性格もティーナに似ている。まるで、我がままだが優しいところがアリサで、優しく、何かに気が付く性格が……

「いいんです、気にしないでください。そのかわり……」

「今日は私達に付き合いなさい！」

「………了解した」

こうして、俺は午後もこの二人に連れまわされた。

夕方になり、二人は帰る前にトイレへと行った。が、長すぎる。これこれ30分以上掛かっている。どうかしたのか？すると、駐車場から猛スピードで走る車があった。そこには縛られた二人の姿があ

った。

「アリサ、すずか!？」

『マイロード、これは誘拐・・・では?』

「ちっ!イーグル、サーチャーを飛ばせ!」

『了解』

金色の球体が車を追う。俺は人影が見えないところに行き、甲冑を纏った。

「シャイン、イーグル、セットアップ!」

『スタンバイレディ』』

「デバイス複合!」

『『デバイス複合システム、起動開始!』』

その新たな名はシャインイーグル・・・新たな翼だ。俺の背中には直人と相対した紅い翼があった。

「行くぞ」

こうして俺は空を舞った。

アリサside

わけのわからない集団に連れられ、私とすずかは誘拐された。すずかが涙目だ。私だって泣きたい。今まで未遂はあったものの、本当に誘拐されたのは初めてだった。すると、マスクをつけた男が笑う。

「くつくつく・・・バニングス家と月村家の娘・・・いい金が取れるぞ」

「そしてこいつらを売ってさらに金になる・・・いいですね、兄貴！」

下劣！なんて最低なやつらなのよ！なのはたちも、直人もいないのに・・・

「その前にちよつと味見しようか・・・」

男達の手が私達に伸びる。誰か助けて・・・！なのは・・・フェイト・・・はやて・・・直人・・・ゼオン！私に男が触れようとした瞬間、工場の上に張られたガラスが割れた。

「なんだ！？」

上から降ってきたのは、紅い翼を生やした天使だった。

ゼオン side

二人は無事か・・・間一髪だったな。

「な、なんだてめえ！」

「こいつ、背中に羽がある！化け物か！？」

「ふん、何とでも言え。だが……こいつらに手を出した代償は償ってもらっぞ」

連結剣を構える。すると男達は銃を構えた。

「やっちまえ！」

銃から弾丸が放たれた。俺はそれを弾き飛ばし、スピアを出してそれを貫いた。

「ギャあああああああああ！！！！！！！！！！」

銃が爆発し、男達の手が火傷した。だが、ボスらしき男が鉄パイプで襲ってくる。

「オラあああああああああ！！！！！！！！！！」

「シャイニングイーグル」

『ロードカートリッジ！』

「紅天一閃！」

真紅の炎が宿り、一閃。勿論非殺傷設定なので死にはしない。警察を呼び、俺は二人の縄と猿轡を取った。

「大丈夫だったか？二人とも」

「ありがとう……」

「助かりました……」

「よかった」

俺が笑顔で言うと、二人が顔を紅くして、涙目で俺に抱きついた。

「お、おい……二人とも!？」

「来るの遅いのよ!馬鹿あああ!」

「怖かったよ!ふえええん!」

二人がおお泣きしてしまった。ま、まいったな……。それから警察が来るまで、二人は泣き続けた。

夜になり、今日はアリサの家にすずかが泊まっている。で、何故か俺は二人に挟まれ、ベッドで寝ている。

「どうしてこうなった?」

「い、いいじゃない!」

「今日だけその……お願いです」

まあ怖い目にあった後だ。しょうがない……。こうして俺は眠りについた。

アリサ side

夜中。私は目を覚ました。どうやらすずかも起きてるみたい。

「ねえ、すずか・・・起きてる？」

「うん。アリサちゃん」

「ゼオン、かつこよかったわね」

「うん・・・直人君と同じくらい・・・」

「すずかその・・・私・・・」

「もしかして、アリサちゃん？」

助けてくれたときの笑顔が頭から離れない。私はすずかに意を決して告白した。

「私、ゼオンが好きになつたみたい・・・」

「アリサちゃんも？」

も？って、まさか・・・

「私も、そうみたい・・・」

すずか side

アリサちゃんがあんなことを言うなんてびっくり。でも、私も同じ。直人君が好き。でもそれと同じくらいにゼオンさんが好き。そして私は彼の笑顔が忘れられなかった。あの時翼を広げ、助けに来てくれた彼の姿が脳裏から離れなかった。

「アリサちゃん……どうしよう」

「わ、私に聞かないでよ……」

私はもしかしたら、直人君以上にゼオンさんが好きになってしまったかもしれない。それはアリサちゃんも同じみたい。

「……私、直人君が好きだった。でも、今はそれ以上にゼオンさんへの気持ちが大きい」

「私もそうよ。直人が好き。でも、それ以上にゼオンが好き」

「……なんだか、複雑……」

声が重なった。私達はとことん良いコンビかもしれない。

「どうしよう……」

直人君に振り向いて欲しかった。でも彼は振り向いてくれない。ゼオンさんはわからない。でも、今の直人君はなのはちゃんたちがいる。だから、私はもう届かない。どこかにそんな気持ちがあった。

「ねえアリサちゃん」

「何？」

「私達、好きな人まで一緒になっちゃたね」

私がいうと、アリサちゃんは笑っていた。

アリサ s i d e

確かそうね・・・だから・・・

「一緒に好きになって、一緒に受け入れてもらいしょう」

「そうだね、アリサちゃん」

わたしたち二人は笑い合い。眠りに付いた。

ゼオン s d i e

朝起きると、二人はもういなかった。どうやら朝食を食べに行ったようだ。俺もそろそろミッドチルダに行かなければな・・・

「あら、起きたの？」

「ああ、アリサ」

「おはようございます、ゼオンさん」

「ああ、すずかもおはよう。」

俺は挨拶し、ベッドから降りる。

「着替えるから外にいてくれるか？」

俺の言葉に二人は顔を真っ赤にして頷き、出て行った。どうしたんだ？

「ふう……」

着替えて外に出た。いい天気だ。すると、再び二人が寄ってきた。

「ねえ、ゼオン？」

「なんだ？」

「これからどうするの？」

「俺はミッドチルダに行こうと思う。」

カオスを倒さなければいけない。世界に光を見せる。それが俺の蘇った理由。

「私とすずかも行ったら駄目？」

「どういうことだ？」

いきなり何を言い出すのだろうか？

「あの、ゼオン」

「ゼオンさん・・・」

二人は目を閉じ、いきなり開いた。

「私達は、貴方が好きです!」

「・・・・・・・・・・え?」

我ながら随分間抜けな声が出たものだ。二人とも震えている。どう
いうことだ。

「私達、ゼオンに助けられてから、貴方の笑顔が忘れられなくなっ
たの」

「あなたが危険な場所に行くなら、私達も影で支えたいんです」

驚いてた。まだ2日しか経ってない人間にここまでするとは・・・
だが、「罪」を持つ俺に、そんな資格はない。

「俺は、罪人だ・・・君たちに、それを背負って欲しくない。気持
ちは嬉しいが・・・・・・・・」

言おうとした瞬間、二人に抱きつかれる。どうしたものか。

「それでも、私はあなたが好き」

「罪なんていわないで。私たちも背負いますから・・・」

「二人とも・・・」

すると、アリサが俺と唇を重ねる。そして離れたかと思うと、今度はずかが唇を重ねた。

「一緒にいます。あなたと、どこまでも……」

その瞬間、二人の姿がティーナと重なった。

「……………」

ああそうか……。俺は……。俺は、二人が好きなんだ。出会ってからの時間なんて関係ない。その全てを俺は受け入れていた。彼女達も、俺を受け入れた。だからこそ、俺はこの二人に惹かれていた。

「ありがとう」

俺はそう言って二人を抱きしめた。どこか似ていたのではない、彼女達の人を思う心の強さ。それはティーナと同じだった。ティーナは、こうなることがわかっていたのだろうか？上空に、一羽白い鳥が空を飛んだ。

「アリサ、すずか……。行こう、ミッドチルダへ。二人に、世界の光を見せる。」

俺はオレンジと紫色に輝く光を手に入れた。

第十九話「蘇る紅翼、変わりゆく心」(後書き)

秋風「あー・・・疲れた」

ゼオン「・・・・・・・・・・」

秋風「あら、フリーズ？」

ゼオン「何だこれは」

秋風「いや、実は当初からこういう予定だったり(笑)」

ゼオン「どんだけ急展開だ！フラグが別方向なんてどんだけ読者裏切ってるんだ！」

秋風「でもまんざらでもない？」

ゼオン「うつ・・・！」

秋風「まあこの先頑張っとう。これからも登場数増えるから我慢してよ。てか、けっこう無茶したとは反省してるから。気にするな」

ゼオン「致し方ない・・・。というか、これでは二人が軽い女に見えてしまうぞ？」

秋風「そこはゼオンが直人を上回ったってことで一つ」

ゼオン「また苦情が来ても知らんぞ」

秋風「じゃ、今日はこの辺で！」

ゼオン「次回、第二十話『英雄』 TAKE OFF！」

第二十話「英雄」(前書き)

今回久しぶりに直人がキレます。多分ティアナに起こった以来です

秋風「今回は重大発表もあるので下まで見てくださいね」

直人「それでは本編どうぞ！」

第二十話「英雄」

退院してから早5日。俺はその後の事後処理に追われていた。

「ふう〜・・・終わった・・・・・・・・」

俺はイスでのけぞっていた。ミッドチルダの言語でナンバーズについでに報告書を書いていたからにはしょうがない。

『主、お疲れ様です』

『マスター、長かったですね』

メシアとブレイブスワローを端末から外し、いつも付けている場所に戻した。メシアは今までより外部フレームを変え、かなりデザインが変わった。それでもメシアはメシアだ。

「直人兄い」

「スバルか。訓練は？」

「終わったよ」はい、コーヒー」

スバルがコーヒーを渡してくれたので、それを飲む。ふう、仕事の後はコーヒーかビールだな・・・・・・・・やっぱり。

「直人兄い報告書？」

「ああ、ナンバーズの処遇と、色々な」

ナンバーズはチンクから始まる5番以降のチンク、セイン、セツテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディートの8人は海上保護施設に送られた。この8人は今まで戦ってきたことはあるものの、「普通の人間」としての暮らしを知らないために、このような処置が取られている。担当は陸士108部隊。ゲンヤさんが色々根回しをして、ギンガがそれを担当することになった。これから先、人として生きていくことを教えると、ギンガが気合を入れた。スバルは頑張ってねと言ってからティアナたちに呼ばれて行ってしまった。ちなみに、残りの4人はというと・・・

「直人、書類が出来たわよ」

「ありがとうウーノ、もう休んでくれ」

「ええ、ありがとう」

こんな感じ。ウーノ、トーレ、クワットロは他のメンバーより長く稼働・・・いや、長く生きているため、ここ機動六課で協力者として働いている。ウーノは主に、事務。クワットロはシャーリーとデバイスについて研究。トーレは何故かシグナムと意気投合。戦闘実技についてフォワードと訓練する形になった。ただ、一人だけいないのがスカリエッティから聞いた？2の存在。ドゥーエと言うらしいが、少し前から連絡を絶っているらしい。なんでも地上本部に潜入したままだとか。明日は地上本部に行く予定でいる。

「まあ、スカリエッティが捕まったとは思ってないんだろうな・・・」

スカリエッティは現在拘置所にいる。かなり上位の犯罪ランクを持

つていたため色々と待遇が酷いらしい。なので一度なのはたちと内密に赴き、そのスカリエツティに暴行していた監視員、それを傍観していた管理局員と「お話」をし、保安部に突き出した。

「パパ」

「ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ、髪濡れたままですよ」

ヴィヴィオとマリカは風呂上りか。この野郎、主人が仕事してるのに一人だけ悠著に風呂とは……

「いいじゃないですか、お風呂好きですもん」

「そういう問題じゃないだろ。明日は地上本部に行くんだ。もう寝る」

「はい主。ではヴィヴィオ、ママたちの所へ行きましょう」

「うん！パパ、おやすみなさい！」

「ああ、おやすみ」

ヴィヴィオとマリカは部屋へと向かった。俺も少ししたら寝よう。それにしても潜入しているのならドゥーエとかいうのもスカリエツティが捕まったことくらいわかるはずなんだが……

??? side

ここは・・・どこ？どこかの地下のようだけど、暗くてよく見えな
い。私どうしたんだっけ・・・

「くくく・・・こうもあつさり捕まるとは・・・・・・・・・・」

「あなた、誰？」

「そうですね・・・地上本部に捨てられた者たち・・・といえば
わかりますか？」

「貴方達、この前の・・・・・・・・・・」

こいつらの顔、覚えているわ・・・・・・・・・・確か地上本部の金を横領
していた幹部達・・・・・・・・・・

「こちらら地上本部のためにやったのにあの狸親父め・・・・・・・・・・」

まったく、自分達の愚かさに気が付いてもいない馬鹿ね。それにし
ても・・・

「何故私を誘拐したの？」

「くつくつく・・・お前は奴の秘書だ。ならば、秘書だからこそ知
ってることもあるだろう？」

下劣ね。そして低能。

「私が喋るとでも？」

「喋ってもらっんじゃない。喋らせるのさ・・・」

「覚悟はいいかい？」

ドクター・・・助けてください・・・

次の日、俺は朝人がいない時間にロビーにいた。

『久しいな』

「ああ、って・・・アギトは？」

『まだ寝ている。そちらこそ、相棒はどうした』

「こっちもまだ寝てるよ」

互いに苦笑する。通信相手はゼストさんだ。

「それにしてもいきなりどうしたんですか？」

『ああ、お前に頼みがあつてな・・・』

ゼストさんは俺に地上本部へ行きたいと言ってきた。理由はかつての友に会い、真実を知るためだそうだ。普通に大手を振っていけばいいのだが、自身はスカリエッティに蘇生させられているため、色々問題があるのだという。

「うーん・・・方法・・・か。いつそ変身魔法使ってみますか？」

『悪くはないが、その後どうする?』

「実は今日地上本部に行くんですよ。スカリエッティの仲間の件ですね」

とりあえず今後のこと。まずはゼストさんと合流。ゼストさんに変身魔法並びに阻害魔法をかけ、なんとかゼストさんの友、レジアス中将の所に行く。これがミッションプランだ。本部内では魔法の使用は禁止されている。バレれば色々とまずい。

「ま、そんなときはそんなときかな……」

俺はため息をつきながら通信を切った。

「ハア……じゃあマリ力起こすか……」

「直人」

「あれ、ウーノ……おはよ」

「おはようございます。先ほどの話、本当?」

「聞いてたのか?」

俺の言葉にウーノが頷く。そういえばハッキングとか得意なんだっけ、こいつ。

「これを持っていくといいわ」

俺に渡してきたのは黒いカード。真ん中には背景に最高評議会関係

者の紋章が描かれている。

「最高評議会が死んだとばれるまだ時間があるわ。これを使えば地上本部の人間は大抵黙るらしいわ」

「いいのか？」

「ドクターがあなたに出来る限りの協力をするよう言われているの。それにドゥーエのこともあるわ。これが恐らく、現在変装している姿。」

写真が渡される。桃色の髪の女性だ。

「わかった。ありがとな」

「あとドクターから伝言よ」

「何？」

「『また私の世話にならないように頑張りたまえ』ですって」

皮肉か。確かに、俺が重症を負ったときに俺に応急処置したのはスカリエッティとこいつらだ。ま、そうならないようにしますか・・。こうして俺はロビーを後にし、マリカを叩き起して地上本部へと向かった。

地上本部についた俺たち。ゼストさんとアギトと合流し、俺は地上本部へ着いた。ちなみにゼストさんは今フードをかぶっている。受付カウンターに立つと、何故かカウンターの女性に驚かれた。

「あの、すみません……」

「あ、は、はい！」

「レジアス中將は今どちらに？」

「中將なら今は自分の仕事場にいらっしやいますが。」

「お会いできますか？」

「少々お待ちください……」

カウンターの女性が連絡を取る。

「ご用件しだいだと仰ってますが」

言われて、俺はウーノに貰ったカードを見せた。

「し、失礼しました。中將のお部屋はこちらです」

マップを貰い、俺たちは歩き出す。が、そこでストップをかけられた。

「あ、あの……」

「はい？」

「あなたはもしかして井上直人さんですか？」

「そうですね．．．．．」

俺が頷くと、カウンターの女性に紙とペンを出された。

「もしよかったですらサインください！ファンなんです！」

ファン．．．？

「いや、ファンで．．．俺はただの囑託魔導士ですけど．．．」

「世界を救った英雄の貴方にこんなことは失礼承知です！お願いします！」

「は、はあ．．．」

カウンターの女性二人にとりあえずサインを書いた。こんなこと今までやったことないぞ。

「でも結構馴れた手つきでしたよ？」

「余計なことを言わない」

マリカを黙らせ、俺たちはエレベーターへと乗り込んだ。

「それにしても、地上の英雄と世界を救った英雄か．．．．．」

「え？」

「お前とレジアスのことだ。」

そういえば聞いたことあるな。地上の英雄レジアス・ゲイズ……
現在は中將の職に就き、近代兵器である「アインヘリアル」を推進
する人物。なのはの話では、一般市民からの信頼も厚いが、聖王教
会などを嫌う人物で、稀少技能を持つはやてをすごく嫌っているら
しい。余談だが、世界の英雄は井上直人。地上の英雄はレジアス・
ゲイズと言われているらしい。つくづく迷惑な話だ。

「いいじゃないですか。英雄……カッコいいです」

「あんな、俺は別に世界のために戦ったんじゃないんだよ。」

「だが結果的にお前は世界を救っている。その事実は変わらないだ
ろっ」

「そうだぜ！旦那の言うとおりだ！自信持てよ！」

自信とかそういう問題でもないんだがな……。そんなことを
言っているうちにエレベーターが止まった。そしてマップ通りに進
み、部屋に着いた。なるほど、立派なことだ。俺はそのままドアを
開ける。ノックしたら多分鍵をかけられるだろうと思ったからだ。
そこには二人の人物。一人は机に座る肥満体の男。もう一人は眼鏡
をかけた秘書らしき女性。

「何だ、貴様らは」

「お初にお目にかかる。井上直人だ。レジアス中將」

「ほう、貴様があの世界を救った『英雄』か」

「好きに取ってくれて構わない」

「それでその英雄が何のようだ？」

「会わせたい人がいてね」

俺の言葉にゼストさんがフードを取った。それに対して女性が驚きの声を上げた。

「ゼスト・・・さん？」

「オーリスはお前の秘書か・・・」

「ああ、優秀だからな・・・」

二人の間に沈黙が生まれ、ゼストさんが写真を取り出した。

「お前に聞きたいことは一つだけだ。八年前、俺と俺の部下達を殺させたのは、お前の指示で間違いないか？」

ゼストさんとレジアス、そしてルーテシアのお母さんが映っている。そしてギンガに似た女性もいる。

「俺たちの語り合った正義は、今どこにあるんだ？」

その重なった二枚目には若い二人の写真があった。

「・・・・・・ワシは、地上を守るために全てをささげ、全てを捨てた。それだけだ」

「それだけのために、俺の部下を殺したのか！」

「直接手を下したわけではないが、間接的にはそうなる。だが平和には犠牲もいる。」

そう、スカリエッティの話では、こいつはスカリエッティに資金提供をしていた男でもある。

「地上を守るためには仕方なかったことだ！この現状を見る！人手の不足！増加する犯罪！そして衰退するこの本部！それを戻すためなら、私はなんだってする！」

「それが英雄のすることか！」

「そうだ！英雄だからこそするのだ、地上とそこに住む人々を守るために！」

——ドコッ！

マリカ side

何か鈍い音がしたと思ったら、主が魔力を溜めた手で壁を殴っていました。やばいですね、これはキレてます。

「ざけんじゃねえぞ……………」

「あ、主！？」

「地上を守るために犠牲が出てもしようがない？その程度のこと？

そのあんたの言う犠牲のためだけに、いったい何人の人間が涙を流したと思ってる！」

ああ、もう駄目です。主、完璧キレてます……

「小僧に何がわかる！」

「わかるものか！あんたみたいな屑言うことなんて！」

「何……！？」

レジアスだけでなくゼストさんとアギトも驚いてますね。でもその通りです。今のあの男に英雄の欠片ありません。

「どうして全てを守ろうとしない？正義を貫かない？あんたは英雄でもなんでもない……ただの臆病者だ！」

「貴様……言わせておけば……！」

「英雄は武功を立ててなるものでも、英雄は市民から呼ばれてなるものでも、ましてや犯罪に手を染めてなるものでもない！英雄はどんな絶望的状况であろうと、それを自分の夢と誇りで打破し、人を導く人間のことだろう！あんたの夢と誇りはどこにある！」

主の言うことは少しむちゃくちゃに聞こえますが、簡単に言えば「夢も誇りも持たない人間を英雄と呼べるか馬鹿野郎」ってところですね。

「……直人の……世界を救った英雄の言うとおりだ。かつて語り合った、俺たちの夢……そしてそのために掲げた誇り

は今どこにある？レジアス」

「・・・・・・ワシは」

レジアスが何か言いかけたとき、いきなり私達の前に映像が現れました。

直人 side

レジアスが答えようとしたとき、いきなり良くわからない事態が起きた。それは謎の男達が女性を縛り上げているものだった。

『やあレジアス・・・・』

「貴様ら・・・・」

誰だ、こいつら。

「あなたたちは先日捕まったはずの局員！」

「管理局の金を横領したバカが何のようだ？」

『そんなこと言ってられるか？』

そこに映るのはピンク色の髪の女性。あれはまさか！？

『貴様の秘書だ。痛めつけたが何も吐かないからな。貴様に直接色々取引をしようと思ってるね』

男が笑っている。まさか連絡が取れないのがこんな理由だったとはな。

「（マリカ・・・逆短急げ）」

「（はい、主・・・）」

「貴様らゴミと取引などする必要などない」

「ほう、ならこの局員は死んでもいいと？」

男が言うが、レジアスの表情は変わらない。

「たかが局員の一人や二人、知ったことか」

そう言ってレジアスは通信を切った。

——バキッ！

俺はレジアスを殴り飛ばした。正直耐えられなかった。

「あなた、なんてことを！」

オーリスがいうも、俺はそれを無視した。

「どうやら、地上本部の上とやらは完璧に腐ってるらしいな。お前らはスカリエッティ以上に最低な人間だよ。マリカ、どうだ？」

「大丈夫、ギリギリ出来てます。ここからそう遠くない場所です。急ぎましょう！」

「ああ！ゼストさん、俺は行ってくる」

「わかった」

こうして、俺はその『局員』が捕らえられたビルへと向かった。

ゼスト side

「俺たちの夢は、どこで間違っただろうな、レジアス」

「夢など、とうに忘れたよ」

「俺は覚えているぞ、レジアス……世界に真の平和を作ると……地上の全てを守ると」

かつての若き頃、共に見た夢。そしてそれを今実現させようと奔走する少年がいる。

「彼は……世界を守った英雄はお前の言う「たかが」のために戦おうとしてるぞ。世界のためではない。たった一人の、彼と関わりがない他人を助けるために戦おうとしている。俺たちはいったい何をしてるんだろうな……」

「旦那……」

「俺は行くぞ。目の前でまた何かを失うのはごめんだからな」

俺は直人の後を追った。

ドゥーエ side

まずいわね・・・体のあちこち殴られて痛いし、手を使えないんじやあ武器も使えないし・・・

「それにしてもあの男も薄情な奴だな」

「ああ、局員一人や二人はどうということはないか」

男達が近づく。ああ、ドクター・・・ごめんなさい。その瞬間、私へ男達が行く手を阻むように、ダガーが突き刺さった。

「誰だ!？」

「・・・お前らに名乗る名前なんてないね」

そこに現れたのはドクターから話を聞いていた、世界を救った英雄だった。

「井上・・・直人!？」

「ナンバーズの?2ドゥーエだよな。はじめまして」

驚いた。彼は私の正体を知っている。

「な、なんのこと・・・でしょうか」

「ああ、隠さないでいいよ。スカリエッティには全部聞いてるし」

「ドクターから？」

思わず口が滑った。しかし、彼は特に表情を変えず、私の手のロープを切った。

「後ろ下がってな。事情は後で説明するから」

直人side

とりあえずセーフ・・・うーん、ざっと10人か。これならユニゾンしなくても勝てるな。

「い、井上直人だと!？」

「馬鹿な!英雄がなんだってこんなところに!」

「あんたらの悪行を潰しに来たのもあるが・・・この人を助けるために来た感じだな」

「そんなちっぽけなことのために・・・だと!？」

その言葉に、俺はメシアを構えて敵を睨みつけた。

「ちっぽけだから、守らなくちゃいけないんだろう!」

俺は男達に斬りかかる。彼らも魔導士や騎士のようだが、そんな攻撃の隙など与えず、俺は男達を瞬殺した。

「ふう………」

「どうやら、片付いてしまったらしいな」

「遅いよ、ゼストさん」

「ふっ、ちっぽけだから守る……か。君らしい言葉だ」

「聞いてたんなら助けてくださいよ。」

俺が言うと、ゼストさんは短く笑った。

「俺に出番などないようだから黙っていただけだ。」

「はは、言ってくれるなあ……」

「あ、あの……」

どうやらドゥーエが話についてきていないようだ。忘れてた。

「悪い悪い、事情は六課ですよ。ウーノやトーレ、クワットロが待ってる」

「ウーノたちが？」

「まあまあ、話は後だ。後は地上本部にでもまかせますか……」
「。」

こうして俺はゼストとドゥーエを連れ、機動六課へと戻っていった。

第二十話「英雄」（後書き）

直人「・・・・・・・・」

秋風「どうした？」

直人「いや、ちょうど原作ぶっ壊してると思ってたさ」

秋風「いいじゃん。そんなのこのサイトじゃ日常茶飯事・・・」

直人「それは言わない」

秋風「さてまあ話は変わるが、最近アクセス数が二十万を超えたんだな、これが」

直人「まじで！？」

秋風「それを記念して新しくキャラを讀者から募集しようと思って」

直人「大丈夫か？その企画」

秋風「なんで？」

直人「おもくそ二階堂先生のパクリじゃねーか！」

秋風「気にするな。先生ならきつと笑って許してくれるさ」

直人「何を根拠に言ってるんだああー！」

秋風「では馬鹿は放っておいて、以下の通りをお願いします。

名前

名前のふりがな

式（ミッドorベルカ）

ランク

年齢

身長

体重

デバイス名

技（2、3こ）

容姿

性格

稀少技能（なくてもOK）

備考

直人「こんな感じなのか？」

秋風「ああ、その通り。そして採用された方には……………」

直人「方には？」

秋風「……………」

直人「何も考えてなかったな？」

秋風「作家の方には直人を好きに自分の作品で使い、弄っていい権利を与えます！」

直人「なにいい！？」

秋風「作家でない方は、そのペンネームのキャラを新たに私が作ります！」

直人「おかしいだろ！作家の先生達もそれでいいだろ！」

秋風「んじゃ、そういうことでw」

直人「これでおわりかよおお！」

本当に募集します。採用の副賞についても事実です。しかしながら、副賞のほうは採用された方にお任せします。

直人「次回、第二十一話『騎士の約束』TAKE OFF！」

第二十一話「騎士の約束」(前書き)

今回は少し悲しいお話です。ファンの方にはちょっと申し訳ないです。

では本編どうぞw

第二十一話「騎士の約束」

地上本部から俺はドゥーエとゼストさんを連れ、機動六課に帰ってきた。ちなみに今はIS「偽りの仮面」外し、金髪に戻っている。ゼストさんは突然に体調が悪化。すぐに医務室へと運ばれた。

「ドゥーエお姉さま！」

「クワットロ」

クワットロがドゥーエに抱きつく。そういえばクワットロは姉貴大好きだっけ……

「どうなさったんですか！？この傷！」

「色々あったのよ。彼が助けてくれたの」

ドゥーエが嬉しそうに微笑む。まあいいか。そんなことの後、俺たちは会議室に集まった。

「じゃあ、マラキアが今いるアジトについて説明するで」

はやての後ろにスクリーンが現れる。それに映し出されたのは、巨大な球体。

「これは？」

「以前スカリエッティが持っていた聖王のゆりかごから半径500メートルに展開された結界や。一切の攻撃は通じない、その上攻撃したら門番のキメラたちが沸いてくる。さっき陸士部隊が攻撃した

ら全滅したらしい。」

なるほど、ゆりかこの下にあるその樂園を引っ張り出すための時間稼ぎか……

「ちなみにゆりかこの下にはカオス・レイと呼ばれるものがある」

次のスクリーンに飛び、ゆりかごと呼ばれたものの下に、黒い塊があった。

「じゃあ、これがカオス・レイ？」

フェイトが首を傾げる。確かに赤外線でとったから良くわからないが、何か城のような形をしている。

「そう……今色々調査を行ってる。こちらに出来るのは、それまでに体制を整え、戦力を強化すること。」

「フォワードは今まで以上に頑張らないとね」

なのはの言葉に、フォワードが頷く。だが……

「どうしたんですか主？」

「おそらく、今のこちらの戦力ではまだ駄目だ」

「え？」

「もっと戦力はある。」

カオスの50%に負けた俺だからこそわかる。今の六課では確実に敗北するだろう。」

「じゃあ、どうすれば？」

「地上本部からの増援。そして………」

俺は一拍おいてからそれを口にした。

「アルハザードとナンバーズの力がある」

「……………!?」「……………」

俺の言葉に全員が驚いた。

「まず、アルハザードだが、マラキアの出現で皇女も動いてくれるだろう。そこはアリシアだいた。そして、ナンバーズ。今戦闘要員はトーレのみ。今保護施設にいる8人の力をあわせないと、やつらには対応できないだろう。」

「その根拠は？」

「マラキアは本物の“悪”だ。人間や世界を破壊するのになんの躊躇もない。むしろ、それを楽しんでいる。だからこそ、絶対的な力で対応しなければいけないんだ」

俺の言葉に、全員が黙る。そしてはやては目を閉じる。そしてゆっくりと目を開いた。

「わかった。ナンバーズを正式に六課に加える。そして地上本部にも増援を要請する。必ず……必ずこの世界を守ったろ！」

『おお!』

はやての言葉に、全員が声を上げて答えた。

会議の後、俺はゼストさんのところに向かった。彼はもはや身体的に限界があるのだという。シャマルさんの話では、もう長くはないという。現在は医務室で横になっている。

「旦那……しっかりしてくれよお!」

アギトが泣きながらゼストさんに訴える。俺はゆっくりとゼストさんに近づいた。

「ゼストさん……」

「お前……か……」

ルーテシアも心配そうにゼストさんを見る。

「すまん……もう、限界があるようだ」

「そんな……」

「もともと死んだ身だ……土に還るのが少し遅くなった……それだけ……だ」

ゼストさんは苦しそうに息をしている。マスクをつけているのにもかかわらず、満足に息をしていない。

「お前はこんな俺を見てどう思う・・・友に裏切られ、命を落とし、犯罪者に手を貸した男だ」

「ゼスト・・・・・・・・」

ルーテシアがその手を握る。大きくも、やさしいその手を。

「俺の夢も、誇りも・・・もう終わりだ」

「終わりなんかない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・？」

「夢も、誇りも・・・それは人に受け継がれていく。大丈夫、終わりなんてない。あなたの夢はなんですか？」

「俺の夢・・・それは・・・・・・・・ゴホッ！」

ゼストさんが血を吐く。どうやら本当に彼の終わりは近い。

「旦那あ！」

「俺の夢は・・・地上も、空も・・・平和な世界を・・・作る・・・こと」

「あなたの夢、俺が必ず受け継ぎます。」

俺は静かに出された手を握る。

「私も、いるよ．．．ゼスト」

ルーテシアも涙を流し、その手を握る。いつの間にか、後ろには六課のメンバーたちが集まっていた。

「ふっ．．．それから．．．レジアスに．．．」

「わかりました。」

小さく言われた言葉を、俺はしっかりと聞き、うなづく。

「旦那、旦那あ！」

「アギト．．．これからは、直人がロードだ．．．」

「あたしのロードは旦那だよ！」

アギトが大粒の涙を流しながらゼストに叫ぶ。

「ルーテシア、お前との旅、悪くなかった．．．メガーヌに、よろしくな」

「うん．．．」

ルーテシアは一層強く、その手を握り締める。

「ゴホッ、ゴホッ．．．短い生涯だった．．．だが、悪くなかった．．．」

「ゼストさん．．．」

「俺の夢を・・・頼む、騎士としての、頼みだ・・・」

「はい、必ず・・・!」

俺が頷くと、ゼストさんはゆっくりと目を閉じ、俺とルーテシアの手を離した。

「旦那?旦那あ!うあああああああああああああああああああ
ああ!!!!!!!!!!!!」

「うつぐ・・・ひつぐ・・・うつ・・・」

アギトとルーテシアが涙を流す。そしてそこにいた全員が泣き、はやてが涙を拭いて背筋を伸ばす。

「ゼストさんに・・・・・・敬礼!」

これは彼を騎士ゼストとして、そして地上本部の首都防衛隊の人間として、その心と敬意を評し、はやてが言った言葉だった。全員が敬礼し、俺もそうした。その彼の誇りと夢・・・その両方を受け継いだものとして。そして、一人の騎士として。この日、地上本部で平和の世を夢見た騎士がこの世を去った。

翌日、ゼストさんの葬儀が行われた。ルーテシア、アギトは泣きっぱなし。俺は優しく二人を抱き、その棺を見つめた。ヴィヴィオは何をしているのかわかっていないらしいが、騒いだりしてはいけないと言うと、頷き静かになのはの元にいた。日本ではないため火葬はしない。棺に納められたゼストさんは安らかな顔で土の中へと消

えていった。

「うっぐ、ひっぐ……旦那……」

「ゼスト……」

「ゼストさん……どうか、安らかに」

新たにできた墓標「ゼスト・グランガイツ」の文字を俺は静かに見つめることにした。

それからしばらくして葬儀も終わり、なのはたちは食事を取りに向かった。俺はただ一人、その墓標に酒を置いた。

「ゼストさん、後はまかせてください」

俺は静かにそういうと、人の気配を感じた。そこにいたのはレジアス・ゲイズ

「……遅かったな。葬儀は終わったぞ」

「ああ、すまないな。仕事で遅くなった」

言いながらレジアスも酒を置く。

「やつが好きだった酒だ。」

「……あんたは、まだ続けるのか。犯罪を」

「どうなのだろうな。罪はもう消せないだろう・・・」

「そうだな」

レジアスは静かにため息をつき、しゃがみこんだ。

「・・・ゼストさんからあんたに伝言がある」

「伝言？」

「『俺の命は消えるが、かつて語った夢を、二度と忘れないで欲しい』だそうだ」

どんなに心が腐っても、ゼストさんはレジアスを友として見ていた。全ては世界の平和のために、目を覚まして欲しいと願う男の最後の言葉だった。

「・・・ワシは世界のため、地上のために全てを捨ててきた」
レジアスが静かにしゃべりだす。

「だが結果、ワシは友を裏切り、悪に手を染めきってしまった。」

自分の手を見て、レジアスはゆっくりと立ち上がる。

「ワシに、もう地上を守ることはできんな・・・」

「本当にそうか？」

「何？」

俺はグラスに酒を注ぎ、墓標に置いた。

「ゼストさんはただ死んだわけじゃない。俺たちに夢を託して死んだ。その夢を、今からでも成し遂げればいい。それが、あんたがするべきゼストさんたちへの償いだ」

「ふっ……地上を守ろうという英雄に、世界を守った英雄が説教をするか。」

「後はあんたが決めるんだな。この先をどうするか。託されたものの重みもな」

こうして、俺はなのはたちが待つ会場へと向かった。

「ゼストさんのご冥福を祈り、献杯」

『献杯』

俺が帰ってくると、ちょうど食事が始まっていた。俺が座ると、ヴィヴィオが俺のひざに座った。

「パパ、お腹すいた」

「ああ、わかった」

俺はいくつか物を取り、それをヴィヴィオの口に運ぶ。出ている料理はさまざまで、洋食だけでなく和食など多い。これは地球出身の人間が隊長に多いからだといえる。俺も料理を食べる。しかし、

隣ではルーテシアが静かに水だけを飲んでいた。

「ルーテシア、食べないのか？」

「うん、いらぬい．．．．．」

「食べないと元氣も出ないだろ？ほら」

俺は料理をいくつか取ると、それをルーテシアの前に置く。

「私、ゼストに何もできなかった．．．．．」

「ルーテシア．．．．．」

俺は優しくルーテシアの頭をなでた。

「ゼストさん、最後笑っていたよ。ルーテシアの手を握って、嬉しそうに。だから何もできなかったなんて言っな。お前はゼストさんの旅立ちを心地良い物にしたんだ。」

「うん．．．．．」

ルーテシアが頷き、食事を静かに始めていた。すると、別の席からアギトがやってきた。

「なあ、直人．．．．．」

「なんだ？アギト」

「あたしのロードになつてくれよ」

託されたものは夢だけでない。俺は相棒までも託されていた。

「お前はそれでいいのか？」

「旦那がレジアスのおっさんと同じくらいにあんたを信じていた。だから、旦那が信じたあんたを、私は信じたいんだ」

「なるほどな・・・だが、俺とお前では融合率は低いだろうな」

そう、それが問題だった。俺が現在契約するマリカの属性は電気。それに対してアギトは炎熱だ。融合事故が起きるのは目に見えている。

「どうかしたのか？直人」

そこへ烈火の将こと、シグナムさんが現れた。待てよ・・・？

「シグナムさんの魔力変換素質って確か・・・」

「炎熱だが？」

「アギト、シグナムさんをロードにしてみないか？」

俺の言葉に、シグナムさんとアギトは首を傾げる。

「どついうことだ？」

「シグナムさんもゼストさんと同様、誇り高い騎士だ。烈火の剣精であるお前となら、俺は相性がいいと思う。俺を信じてくれるなら、

俺の仲間も信じて欲しいんだ」

「・・・・・・・・ひとつ聞いていいか？」

アギトはシグナムを見る。その表情は真剣だった。

「なんだ？」

「あんたは、どう思う？ 旦那をただの犯罪者だと思うか？」

「彼は立派な騎士だ。誇りと信念。それを貫き、立派に戦った方だ
とっている」

「シグナムさん・・・・・・・・」

彼女も同じ騎士だからこそ、そう思ったのだろう。その言葉に、ア
ギトは少し嬉しそうだった。

「ありがと、旦那もそういつてくれると浮ばれるよ。・・・・・・・・決
めた！」

アギトは頷き、シグナムの肩に乗った。

「あんた、あたしのロードになってくれ！」

「私でいいのか？」

「ああ、直人もああ言ってくれてる。あんたを信じてみようと思う」

「そうか、よろしくな」

こうして、烈火の剣精は新たなるロードを見つけた。

食事会が終わり、俺は部屋でヴィヴィオを寝かせている。当然3人も一緒だ。はやてとフェイトはもう眠っている。（かなりギリギリだが）未成年なのに無理して酒を飲んだからだろう。

「ねえ直人君」

「どうした、なのは？」

「この先、私たちは世界を救えるのかな？」

「どうしてだ？」

なのはがヴィヴィオ挟んで不安そうに俺に聞いてきた。

「直人君が負けたって聞いたとき、すごく不安だった。直人君でも勝てないような敵に、私たちが勝てるのかなって……」

なのはも怖いんだ。どんなに強いと言われても、恐怖は感じる。当たり前だな。

「大丈夫さ。俺はもっと強くなる。それに、なのは……俺たちは一人じゃないんだ。それを忘れるなよ？」

「直人君……」

突然なのはが俺に詰め寄り、ヴィヴィオを挟み潰さないようにしながら、俺と唇を重ねる。

「んっ・・・・・・・・」

「ん・・・・・・・・ぷはっ、な、なのは？」

「ふふっ、一緒に頑張ろうね、直人君」

「ああ、そうだな・・・・・・・・」

俺たちは互いに笑い、眠りについた。

第二十一話「騎士の約束」（後書き）

直人「おい、どうすんだこれ……………」

秋風「ああ、超予想外だったな」

直人「なんだ、この応募数！」

秋風「そうだね、せいぜい一人か二人だと思ってたけど……………」

直人「えっと、現在の募集者は新しい人で……上から順に行くとシルフ先生、FADE様、神崎はやて先生、朱様、朧木先生、鷹先生、GPS先生、ユニコーン様、そしてメッセージのほうに二階堂先生……………多すぎ！」

秋風「9人から絞るのは難しいな……………」

直人「いつそ全部出すのは？」

秋風「俺に死ねと？」

直人「だな、出ても2、3人が……………」

秋風「それにしても思ったことがある。」

直人「何？」

秋風「みんな強すぎだろ！切れるとSSSになるとか、常時Sラン

ク級とかいすぎ！」

直人「確かに。俺が勝てそうにないやつらばかりだ」

秋風「あと虹彩色の目をしたやつらとかも多いな。」

直人「すごいな。てかき、GPS先生このくだらない企画のために2時間頑張ってくれてるよ?」

秋風「先生！作品を頑張つて！」

直人「いずれにせよ、出てくるのも選考にも時間がかかるのでしばらく待つててください」

秋風「あと、発表はそのキャラを出した話のあとがきで発表します！お楽しみに！」

直人「次回第二十二話『天使』TAKE OFF!」

第二十二話「天使」(前書き)

急ですが、今回採用したキャラを発表します！
なので最後まで見てくださいね！

では本編どうぞw

第二十二話「天使」

ゼストさんの死から早くも一週間。俺とマリカ、なのは、そしてフエイトは、はやてに呼ばれベルカ自治領の聖王教会に行くことになった。なんでも機動六課設立の「本当」の理由を教えたいらしい。教会につくと、一人のシスターが出迎えてくれた。

「初めまして。シャツハ・ヌエラと申します。蒼翼の天使様」

いきなり頭を下げられた。蒼翼の天使？なんのことだ？英雄と呼ばれるならまだしも、そんな呼ばれ方はされた覚えがない。

「まあ、それは中に入ったらわかるで」

はやてに促され、俺たちは部屋へ案内された。そこにいたのはクロノ提督と金髪の女性。

「初めまして。なのはさん、フエイトさん。聖王教会騎士団長のカリム・グラシアです。あなたたちのことははやてからよく聞いています。そして……」

言いながら今度はカリムさんは俺を見た。

「初めまして『蒼翼の天使様』我々騎士団はあなたがいらっしやるのを心より望んでおりました。」

カリムさんが言いながら頭を下げる。まったく話が読めない。

「直人君、久しぶりだな。元気で何よりだ」

「ええ、クロノ提督もお元気そうで……井上直人です。天使とかではありません」

一応そう言っておく。説明すると機動六課の本来の目的は、カリムの予言で出た、いずれ起こる陸士隊の全滅、管理システムの崩壊を防ぐために創られたと言う。

「でもな、予言が変わったっていう、異例が起きたんよ」

「これが以下の予言です」

読み上げられたのはこんな内容。

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の下、聖地よりかの翼が蘇る。

死者達が踊り、なかつ大地の法の塔はむなく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる

「しかし、予言がありえないことに、変わったんです。」

そしてまた別の予言が読み上げられた。

聖地に眠りし混沌の楽園、混沌を司るその者により、その楽園が蘇る。

混沌の僕は踊り、世界は混沌へと包まれる。それを先駆けに、数多に存在する世界は消え往く

「これはまさか……」

「カオス・レイの復活で、数多の世界が消えるというのか……」

俺はその予言に驚きを隠せない。だが、はやては言葉を続けた。

「でな、これの他に新しく出た予言がある。そやろ？カリム」

「ええ、続きを読むわね」

混沌の楽園に挑みし、二対の天使

一人は蒼翼、もう一人は紅翼

天使たちは混沌が待つ楽園へ、聖王の加護の下、二人は混沌に挑む

「これは、直人君のこと？」

「だと僕とはやては考えた。だがもう一人がわからない……」

「紅翼の天使なら、あいつだろ」

「ゼオンさん？」

フェイトの言葉に、俺は頷く。あのあと別れてしまったが、おそらく生きている。

「でも彼は……………」

「俺は異世界へ飛ばされたとき、やつの希少技能で助かっている。もしかしたら、あいつもどこかで生きているんだろ。それより気になる単語は……………」

「聖王、だね」

なのはに言われたが、そのとおり。これはおそらくヴィヴィオのことだ。

「スカリエツティから聞いたが、ヴィヴィオは聖王の資格はもちろん、アジトだったゆりかごも動かせる。」

「じゃあ加護はゆりかごのこと？」

「いや、それはわからない。マラキアがそれを破壊して『カオス・レイ』を蘇らせようとしているしな。」

「しかし、ヴィヴィオは聖王とは言え子供ですよね？」

全員が頭を抱える。わからないことだらけだ。すると、カリムさんが口を開いた。

「あのね、はやてにも言っただけ、予言の続きが出たの。」

「続き？」

「ええ、読むわね」

蒼翼と紅翼の天使は混沌に翼を折られる、だが潰えし命たちと共に、その翼は蘇る

混沌は破滅を呼び、自らの崩壊と共に世界を滅ぼさんとする

挑みし者たち、これを止め、世界は光へと導かれる

「翼が折れる・・・か」

マリカは顔が真っ青だ。主がこんなことにはなっただけで欲しくないんだろ。

「それって・・・」

「やはり、今のままでは勝てないんだろうな」

「そんな・・・」

翼が折れる・・・すなわち、俺が負けるということだ。蘇るのはいいが、できれば蘇ることなく倒したい。俺は少し不安を抱え、六

課へ戻ることとなった。帰り、俺たちは食事をするため、クラナガンへ行くこととなった。なんでも、少し前にティアナから教えられた店に行くらしい。

「ねえ、直人君？」

「なんだ？なのは」

「予言のこと気にしてるんだね」

「……まあな」

俺の返答に、フェイトとはやても不安そうに俺を見る。しかし、なのはは違った。

「大丈夫だよ……私が、ううん。私たちが、直人君を守るから」

「なのは……」

「そうだよ、直人は私たちが守る。」

「フェイト……」

「機動六課はあの予言を覆すために作った。だから今度は、新しい予言を覆すために、うちらが直人君を守る」

「はやて……」

なのはとフェイトが腕に絡みつき、はやてが俺の傍に寄り添う。

「主には、私たちがついてます。」

『我々も力になります。』

『マスターは一人ではないんですよ？』

マリカたちにも言われ、なぜか、俺の心はほっとしていた。みんなが言うなら、きっとそうしてくれる。そんなものがあった。

「そうか・・・そうだな。みんな、俺に力を貸してくれるか？」

「うん！」「」

『もちろんです、主ならどこまでも！』『』

こうしてみんなに勇気を与えられてから、俺たちは食事へと向かった。

次の日、俺はなのはと模擬戦をすることになった。リミットブレイクの第二段階開放。すなわち、スカリエッティのアジトでの暴走状態の力を制御するための訓練だ。

「じゃあ、行くよ？直人君」

「ああ、わかった・・・マリカ、行くぞ」

「はい主」

バリアジャケットは白く染まり、いつもなら二枚だけであるはずの翼が4枚へと変化する。そして翼は空の蒼い色へと変わった。

「はぁ……はぁ……」

なのはside

目の前で見るセカンドリミッターの解除。これは私のプラスター2にも相当するかもしれない。その変わったバリアジャケットと、羽。そして金色の瞳。まるで彼が直人君でなくなったみたいだった。

「なのは……来い」

「うん……アクセルシューター」

『アクセルシューター』

私の周りに桜色の魔力光が10浮ぶ。

「シューット!」

発射し、直人君を狙う。4つはまっすぐ。残りの6つは旋回し、回り込むように操る。

「はあっ!」

直人君がメシアスワローを振った。そう、本当に「振っただけ」だった。なのに、向かっていったアクセルシューターは消え、下へ払った斬撃の空気が衝撃波に変わって地面をえぐった。

「すごい……」

「メシアスワロー」

『ロードカートリッジ』

「真・蒼雷一閃」

いつもとは量の違うその雷をまとったメシアスワローが私を襲う。私はすぐに防御魔法を3重にしてそれを防いだ。でも……

——パリン！

「噓！？」

防御魔法がガラスのように割れた。そしてそのまま直人君の左手が私に向けられた。

「クリスタルソード」

4つの巨大なクリスタルの大剣が瞬時に形成された。あんなもの見たことがない！

「発射」

「くっ！レイジングハート！」

『ロードカートリッジ』

「デイベインバスター！」

私のデイベインバスターで相殺する。でも、消せたのは二本。まずい！私はそのままそれをよける。けど、注意を剣ばかりに向けていたせいで、私は直人君の接近に気がつかなかった。

「しまっ……」

「遅い……」

すでにカートリッジをロードしてる！？

「真・虚空雷閃……」

雷の斬撃が私を襲う。そして私はそのままソレを受け、地上へと落ちていった。

直人side

「う、ああああああああ！！！！！！！！！！」

体が熱い。体の中で、何かが疼く。

（暴れたい暴れたい暴れた暴れたい暴れたい暴れたい！）

「なんだ……これは……！」

なのはに勝ったのはいいものの、その力が制御できない！撃墜した

なのはが肩ひざを突いている。それを見た俺の体が剣を向ける。まさか……

「なのは！逃げろ！」

まずい！これは……！

「え!？」

俺は一気になのはに接近し、メシアを振るおうとする。まずい！

「きゃあああああああ！！！」

「やめろおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

そこで、俺の意識は途切れた。

なのは side

いつまで経つても私に放たれた一閃は飛んでこなかった。私は瞑つていた目をゆっくりと開ける。そこには、強制解除したマリカさんの姿。マリカさんは直人君を抑えていた。直人君は立ったまま気絶している。

「大丈夫でしたか？なのはさん」

「はい……」

マリカさんは直人君を下ろし、バリアジャケットを解除させた。

「途中から力が暴走していました。最後に攻撃しようとしたのは、主の意思ではありません」

「うん、大丈夫、わかってるよ」

マリカ side

危ないところでした。後一步でなのはさんを傷つけてしまうところだったのですから。それにしてもなのはさんは能天気というかなんというか、襲われかけたのになんでこんなに冷静なんだか……

「大丈夫だよ、私は直人君を信じてるもん」

「そうですか……」

「それにね」

なのはさんは主の頬を撫でてます。ちょっとうらやましい。

「直人君、自分で「やめろ！」って言ってたもん。私を助けてくれようとしていたんだね」

なのはさんはうれしそうに笑っていました。きっと、それだけ信頼しているんですね。私は主の今の状態をなのはさんに伝えることを決めました。

「主は今、おそらく闇のそこにいます。」

「闇の底？」

「リミットブレイクの第二段階の開放習得の最大の試練は、自分の闇に打ち勝つこと。きっと主は今、夢の中でしょう。」

私は言いながら主を抱き起こし、来た担架の上に乗せ、運ばれるのを見送りました。主が己の闇に勝つことを願って。

第二十二話「天使」（後書き）

直人「さて」

秋風「発表しますか！」

直人「前回話に出てからといいましたが、今回ここで発表します！」

直人・秋風「第一回！応募キャラ発表会！」

秋風「こんかい応募してくださった方々！ありがとうございます」

直人「正直、かなり迷い、出された感想、メッセージから選び抜き、出したキャラは・・・」

秋風「3名！」

直人「では発表します！まず一人目・・・」

秋風「サフィラ・アーク！」

直人「このキャラを選んだ理由は？」

秋風「まず年齢とランクの低さですね。14歳であることと、ランクは応募された中で低い方であるAAでした」

直人「なるほど、たしかに応募されたのはAAAやSオーバーが多かったからな」

秋風「そしてデバイス。これは剣の書というらしいですが、剣召還という面白い発想です」

直人「確かに、マグナショットは強いな。それに、魔力変換資質が磁力というのも面白い」

秋風「そして極めつけは備考の声が出ないため、会話が全て念話というところ」

直人「へえ、応募された中では特殊で面白いな」

秋風「というわけで、サフィラは少し先の話で登場します!」

直人「で、二人目だ」

秋風「二人目は……ジュリア・サガリス!」

直人「ほう、こいつは結構序盤に応募されたキャラだな」

秋風「ああ。ランクは空戦Bだ。で、地上本部勤めつてことで、増援としてはいいだろ?」

直人「秋風、お前が注目したのここだろ『直人を好いているが思いを伝えられない』」

秋風「よくわかったな。また引つ掻き回したくなつてな」

直人「……まあ、いい。俺的にはこれだな。槍のデバイスのスラーク」

秋風「ほう。」

直人「アサルトストライクだが、ラケーテンハンマーより早い突進というのが言いと思った」

秋風「それに魔力を収束できるっていうのはすごいな」

直人「だろ？」

秋風「てなわけで、ジュリアもサフィラと同時期の登場をします」

直人「気になる最後だ。だが、このキャラは特殊なんだろう？」

秋風「ああ、設定などから登場はかなり後。こいつを中心に話が進むことになる。つまり、事件後の第3部だ。」

直人「続く予定はあるが、忘れたところにやってきそうだな。」

秋風「ああ。では発表だ……最後の一人は」

直人「最後の一人は？」

秋風「アニミス・インフェニート！」

直人「理由は？」

秋風「ああ、実は第3部で思い描いてた作品のないようにぴったり溶け込むんだ。」

直人「で、この正体もなかなかの設定だ」

秋風「ただ、性格などについては改変するべきところもある」

直人「ああ、この人を殺して喜ぶところか」

秋風「この小説は残酷描写の設定はないので、これは却下だ。あとで改変する」

直人「なるほどな。それにしても、自分の同類を恨むという……面白い設定だ」

秋風「闇のキャラはこの小説にはいないキャラだからな。楽しみだ」

直人「さて、今回はこれで終了だ。」

秋風「見事採用された朧木先生、GPS先生には、直人を自分の作品でいじる権利を与えます！」

直人「おい！それは本当にやるのかよ！」

秋風「だめ？」

直人「それは作者の先生たちに一存させろ！」

秋風「おーらい、ってことでお二方、各々の判断をお願いします」

直人「そして緋雨ヒウさんには、何もないのが残念ですが、そのうち出演させるのでお待ちください」

秋風「そして応募してくださった方々を一挙ここで紹介！」

投稿してくれた方々

緋雨ヒウさん

朱さん

ユニコーンさん

ハーヴェイさん

F A D Eさん

G P S 先生

ナイトホーク先生

ヨツシイ〱〱〱先生

灰色の野良猫先生

キラー先生

シルフ先生

朧木先生

鷹先生

神崎はやて先生

二階堂先生

直人「以上、なんと15人！」

秋風「皆さんありがとうございました。今回惜しくも採用から漏れてしまった方々、いつそ全員とも考えたのですが、そんな技力がな
い私の責任です。また話が進み、アクセスが進んだとき募集をし
うと思います。そして応募されたキャラたちは責任を持ってこちら
で保存いたしますので、ご了承ください。」

直人「ちなみに、今回は本当にどれも良いキャラクターばかりで
した。」

秋風「ぶっちゃけかなり悩んでました」

直人「ではこれからも蒼天の騎士伝説をよろしくお願いします」

秋風「ちなみに採用キャラは次の次くらいに出します。お楽しみに
！」

直人「次回、第二十三話『心の闇、見つめる勇気』TAKE OF
F！」

第二十三話「心の闇、見つめる勇氣」（前書き）

最近ブランクです。

みなさんはどうやって解消してますか？

ぜひ聞きたいところです……

では本編どうぞ♪

第二十三話「心の闇、見つめる勇氣」

「ここ、どこだ？」

俺は何もわからない、真っ暗な空間にいた。すると、俺の前に何か
が現れた。仮面をつけたその男。

「誰だ？」

「俺はお前だ。」

仮面を外す男。その顔は俺と同じだった。

「黒い、俺？」

俺は今メシアスワローの状態だった。白いその羽とバリアジャケット
ト。それに対して、俺と名乗る男は黒い羽と黒いバリアジャケット
だった。

「ここはどこだ？」

「ここはお前の心の世界。そして……………」

黒い俺が指を鳴らした。すると、一瞬で景色が変わる。ここは燃え
盛る施設の中。まさか

「あの時の、ホテル……………」

「貴様がこの闇を越えるか、それとも飲まれるか……………試してや

ろっ」

もう一人の俺は黒い刀身のメシアスワローを構えた。俺もメシアスワローを構える。瞬間、奴は俺の視界から消えた。

「なっ！？」

「こっちだ」

「！？」

一瞬にして背後に回られた。速い！

「ぐっ……！」

「遅い！」

剣に雷！？あれは！

「蒼雷一閃」

俺はそれを防ぐが、そのまま壁に叩きつけられる。

「がっ……」

「この程度か？」

「くっ！」

俺は剣を構えなおす。こいつ、強い！

「拍子抜けだな。表の俺……………」

「なんだと……………!?!」

「弱すぎる。貴様はその程度で英雄だったのか?」

黒い俺は黒いメシアスワローを回して遊んでいる。

「リミットブレイク!」

「ふつ…………リミットブレイク」

互いにその力を解放し、ぶつかり合って火花を散らす。だが、それでも奴のほうが力が強い。強すぎる。

「がつ……………!」

「らあつ!」

俺は何とか攻撃を防ぐが、それでも攻撃の余波が体に残っている。

「なぜ同じでもここまで違うか、知りたいか?」

「何!?!」

「貴様の攻撃にはすべて殺気が微塵にもこもっていない。そんな剣で闇に勝つなんて、無謀!」

「つ……………!」

剣が重い。なんて重い一撃なんだ……

「さあ、終わりだ……」

巨大なクリスタルの剣が形成された。あれは……！

「クリスタルソード」

「うつ……！」

なのはを圧倒したあの剣が俺を襲う。避けきれない！

「カートリッジロード！」

カートリッジをロードし、とめなくては！

「蒼天・蒼雷斬！」

蒼い閃光がその剣を砕く。しかし……

「だから、お前は甘いんだよ」

俺の腹部に、剣が突き刺さっている。これ、は……

「ガ……ハッ……」

「ふっ……脆いな」

腹が焼けるように熱い！痛い！目が、霞む……！

「あきらめろ、こんな程度じゃ、誰も守れやしない」

ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう！これじゃあ、動けない！ま
ずい、意識が………

なのはside

直人君が気絶してから三時間。私はみんなと直人君の看病をしてい
る。そのときだった。

「ガハッ！」

「な、直人君！？」

「兄さん！」

「直人兄い！？」

「パパア！」

「僕、シャル先生を呼んできます！」

「あ、私も！」

突然血が口から噴出した。いったいなんで！？すぐにシャル先生
が来て、フェイトちゃんとはやてちゃんもやってきた。

「これは……！」

「シャル先生、お兄ちゃんは!？」

「魔力が、異常なまでに流れてる……………」

「え!？」

みんなが困惑する。私も、シャル先生の言ってることがよくわからない。

「おそらくけど、直人君の体の魔力が膨大な活発を行っている。それに、体がついていけないのよ」

「そんな……助ける方法は!？」

「私たちじゃ、手の施しようがないわ……………」

そんな……………助けられないなんて……………。すると、遅れてマリカさんがやってきた。

「みなさん、主の容態は!？」

「それが……………」

血を吐く直人君を見て、マリカさんは驚いている。その手には古ぼけた本がある。

「なのはさんにもいいましたが、主は今、闇の底……………心の闇の中にいます」

「心の闇？」

「人間には必ず光と影があります。光が普段表立って出ているのに対して、闇はその人の中にあるもの。秘密、トラウマ、欲望、憤怒、憎しみ……上げればきりがありませんが、主はそれと戦っているのです。」

「心の闇……じゃあまさか」

「はい、主は今、あの事故の闇と向き合っているはずです。」

「あの事故？」

スバルたちが首を傾げる。そっか、みんなは知らないもんね、直人君のこと。でもまさか、そんな大きな闇と戦っているなんて……

「今は、その話はいいでしょう。そしてリミットブレイクの試練には、裏の自分を戦わなければならないそうです」

「裏の自分？」

「この本には、初代のクラウン家当主が記録した技術やそのときのこと書かれています。これによれば、初代は闇に在りし自分を倒して力を手にしたと書かれています」

「じゃあ、直人君が負けたら……」

「当然、主は死んでしまいます」

そんな……本当に方法はないの？

「私たちに、できることは？」

「それは……一つだけ」

「何か方法が？」

マリカさんは頷き、本を広げた。

「主の体に、私たちが魔力を送ります。」

「魔力を？」

「この一説を見てください『私は絶望に立った時、自分の部下と仲間
間の声を聞いた。暖かな光に包まれ、私はそれに包まれて力を取り
戻した』」

「これって……」

「これは私の仮説ですが、初代も今の主と同じような状態になった
のでしょうか。なら、私たちも主に魔力を送り、今流れ続けるその魔
力を抑制すればいい」

マリカさんの仮説。合っているかはわからない。それでも、何もや
らないよりははるかにましのはず。全員で頷き、直人君の体に魔力
を送るために手をかざした。シャル先生の話では、その体に流れ
る力を抑えるには逆流した魔力を流せばいいらしい。直人君の魔力
の流れはわかった。後は、流すだけ。今度は私が直人君を闇から助
け出す番。

「皆さん、準備はいいですね？」

「「「「「はい！」「」「」「」」

私、フェイトちゃん、はやてちゃん、フォワードのみんな、ヴィー
タちゃん、シグナムさん、シャマル先生、ザフィーラが頷く。ヴィ
ヴィオまでもが、身を乗り出して手の魔力を直人君に流し込んだ。
直人君お願い、戻ってきて……！私は強い想いを魔力にこめた。

直人side

（なんだ………？体が、温かい………）

「（直人君！戻ってきて！）」

「（直人、負けないで！）」

「（直人君、闇になんか負けたらあかん！）」

この声、なのは、フェイト、はやて？

「（直人兄い、頑張つて！）」

「（兄さん、お願い！帰ってきて！）」

「（兄さん！僕たちもいます！）」

「（お兄ちゃん！あきらめないで！）」

フォワードの、みんな・・・？

「（直人！はやて泣かせるな！）」

「（お前なら闇にも勝てるぞ、直人！）」

「（直人君、負けてはだめ！）」

「（直人、我らも力になるぞ！）」

ヴォルケンリッターのみんな・・・なんで・・・

「（主！負けたら承知しませんよ！）」

「（パパ！がんばれ！）」

マリカ・・・ヴィヴィオまで・・・

「みんな・・・な」

「何？」

「聞こえる・・・みんなの・・・みんなの声が・・・！」

「どうした？傷のせいでおかしくなったか？」

俺は痛みに耐えながら俺は立ち上がる。そうだ・・・闇が何だ！弱さが何だ！俺に勇気を、力を与えるのは・・・弱い俺を立ち上がらせてくれるのは、いつも皆なんだ！

「はあ、はあ……う、おおおおおおお！！！！！！」

「馬鹿な……光が……」

俺の体に、様々な魔力光が集っていく。そうさ……

「これほど大事なものの、他にはないんだ・・・どんな力よりも、強い、その力」

「な、に!？」

俺の羽が6枚に変化する。だが苦しみも、痛みもない。そうだ、俺には皆がいる。俺は、「独り」じゃないんだ。

「俺は、皆と共に戦うんだ……そして、みんなをこの手で、守ってみせる！絶対！」

「馬鹿な、奴の周りにある魔力が、闇の進行を止めている！」

俺はメシアスワローを構えなおす。そうだ、強くなる、誰よりも、何よりも！みんなを守るため、そして、あいつらを守るために！

「うおおおおお！！！！！！！！！」

蒼い雷が激しい光を放つ。

「お前を、倒す！」

そういい残し、黒い俺は闇の中へと消えていった。すると、俺のほうへ、蒼い球体が寄ってきた。そしてそれは人の形を作り、女性へと変化した。それは紅と翠の虹彩異色をした女性。

「誰、だ？」

『私は、聖王……』

「聖王？」

そんな、まさか……

『私の名は、オリヴィエ。オリヴィエ・ゼーゲブレヒト』

「な、んで……」

『驚くのも無理はありません。私はオリジナルのオリヴィエの意思を継ぐプログラム人格であり、そして……ブレイブスワローの奥で眠っていたのですから』

「なぜ、あなたが？」

『私の王家は代々、クラウン家と親交を結びました。その証として、私の力を込めたデバイス……後に改良を加えた初代当主、ゼオン・クラウンのデバイス「ブレイブスワロー」となったからです。』

「じゃあ、あんたは本物のオリヴィエ」

『結果的にはそうなりますね。さあ、受け取りなさい……試練を』

乗り越え、己の闇と向き合い、それを倒した者よ』

「……………これが」

そこにあるのは美しい蒼い玉。それは俺の中にゆっくりと入り、消えていった。

『これで、私の役目も終わり。でも不思議ね、クラウン家の人間しか超えられないはずの試練を、あなたは越えてしまった』

「みんなのおかげです。俺はみんなとの勝利です」

オリヴィエの体が消えていく。

「オリヴィエさん！」

『大丈夫、私はまた試練を受けるものが現れるまで眠るだけ。一つだけいます。カオスと戦うときは、いかなるときも、諦めないでくださいね』

こうして、オリヴィエさんは消え、俺もこの世界での意識は消えていった。

なのはside

体の心拍数などは安定してきた。みんな看病で疲れているのか、みんな眠っている。私とフェイトちゃんとはやてちゃんだが、起きてそれを見守っていた。

「直人君」

「大丈夫だよ、なのは。直人ならきつと……」

「せや、信じよう」

「そうだね……」

直人君は強い。そして私たちもいる。お願い、帰ってきて。私はその手を強く握った。そして……

「ん……あ、れ？」

直人君が眠そうに体を起こした。

「なのは、フェイト、はやて……？」

「「直人君！」」

私たちはすぐに直人君に抱きついた。

「わっ……！」

「直人君、よかった……！よかった……！」

「なんでいつも心配ばかり……！」

「もう二度と無茶せんといて！」

「みんな……その、ごめん。本当に」

直人君が申し訳なさそうに謝っていた。私は笑顔で手をとる。

「大丈夫、帰ってきただけで、私は嬉しいから」

直人 side

戻ってこれた……か。俺は手に魔力を集中する。すると、ありえないほどの魔力があふれていた。

「これは……!」

「これが、試練を超えた力……」

なのはたちも驚いている。当たり前だ。

「直人君」

「え？」

いきなりなのはが抱きつき、俺と唇を重ねてくる。

「な、なのは!？」

「おかえり!」

「ずるい! 私も!」

「うちもする!」

こうして二人にも唇を奪われる結果となった。どうしてこうなったかはわからないが、俺はみんなを守る力を手に入れ、そして俺の帰還をみんなから祝福された。

第二十三話「心の闇、見つめる勇氣」（後書き）

直人「・・・・・・・・・・」

秋風「どうした？」

直人「いやさ、最近お前やつれてない？」

秋風「気のせいだろ」

直人「だって今日の睡眠時間、3時間だっただろ」

秋風「寝てるだけましだよ」

直人「そうじゃなくてさ・・・・・・・・」

正宗「よーす」

レイ「やあ、はじめまして」

秋風「お、Wの二人だ。はじめまして」

直人「どうも」

レイ「ここが異世界か。なるほど、興味深い。できれば直人のデバイスと融合騎が見たい」

直人「ああ、いいよ。マリカ」

マリカ「はい、主」

レイ「ふむ、デバイスとしても優秀そうだ。それにこの二つの融合機能は・・・ブツブツ」

正宗「ああ、悪い。気にしないでくれ」

直人「あ、ああ・・・」

マリカ「色んな所見られて恥ずかしいのですが・・・」

正宗「レイ、マリカをじろじろ見るのやめろ。なんか変態に見えちまう」

秋風「まあここなら大丈夫だろ」

正宗「ここならってなんだ!」

直人「それにしても、仮面ライダーWか。」

秋風「初めて聞いたときはどんなもんか不安で仕方なかったよな」

正宗「というと?」

秋風「当時はディケイドがブレイクしてて、すぐ終わっただろ?そこから来るライダーだから、非難も大きいと思ってたんだ」

直人「ところが現在大人気。Wドライバーだってすごい売り上げだしな」

正宗「ああ、そっぴやうちの作者からこれ」

直人「DXダブルドライバー？」

レイ「僕たちの世界の魔法技術を使ってるから、ただのおもちやじゃないよ」

秋風「ほんとだ、簡易デバイスだ」

正宗「ま、それは簡単なお土産だ。」

直人「ありがたくいただきます」

マリカ「そっぴえばお二人はなのはさんたちの中で誰に好意を？」

正宗「な！？」

レイ「質問の意味がわからない」

秋風「ようするに、誰が好き勝手ことだ」

正宗「そりゃ、まあ・・・みんな美人だけだよ・・・」

レイ「僕としてはただの仲間だと思っぴないが、正宗はいつも鼻の下伸ばしてるよ」

正宗「レイ！嘘教えてんじやねえ！」

レイ「そっ冷静さを欠くから、君はハードボイルドになれなない」

正宗「てめっ！」

秋風「まあまあまあ、ストップ」

直人「落ち着けて。だがまあ、正宗はかっこいいと思うけどなあ」

秋風「お前なんてお人よしの極みだから」

直人「余計なことを言っな」

正宗「ん？そうこうしてるうちにもう時間じゃないか？」

レイ「らしいね。そろそろ行かないと転送できない」

直人「そか、ならこれを持っていけ、土産だ」

正宗「このメモリは？」

秋風「俺が昔ガチャガチャで当てたディケイドと一号の変身音が入ったメモリ」

マリカ「あと、ゲーセンで当てたダブルのフリースです」

レイ「ふむ、この世界もすでにWは人気のようにだ」

正宗「まあ、サンキュ！またな！」

レイ「また来るよ。今度はもっと詳しく世界を知るためにね」

直人「ああ、待ってるぜ」

秋風「闘我先生によろしくな」

マリカ「お元気で！」

空条正宗 出演作品 魔法少女リリカルW

仮面ライダーWに変身する、ガイアメモリ関連の事件を追う執務官。フェイトには頭が上がらないらしい。話の中で目潰しを何回か食らっている。レジアスとの取引によって機動六課へスパイへと赴くことになる。原作では翔太郎とほぼ同じ。

空条レイ 出演作品 魔法少女リリカルW

正宗の弟であり、正宗の執務官補佐。正宗とは逆にクールで情報分析が得意だったり、頭の回転が速い。原作のフィリップに似ており、無限書庫をよく出入りする。ちなみに正宗とは戸籍上兄弟だが、血は繋がっていないらしい。

直人「次回、第二十四話『新たに息吹く二つの風』 TAKE OF F！」

第二十四話「新たに息吹く二つの風」(前書き)

とりあえず投稿です。小説ずっと読んでたらいつの間にかこんな時間・・・

それでは本編どうぞ♪

第二十四話「新たに息吹く二つの風」

試練を乗り越えてから早4日、俺は今スバルと一対一の組み手をやっている。

「はあああああ！！！！」

（だいぶアーツを使いこなしている・・・が！）

「まだ甘いぞ、スバル」

スバルの右ストレートを受け流し、足を引つ掛ける。そのままスバルが回転する。

「きゃああああ！？」

そしてそのままこけた。

「いったゝ・・・・・・・・」

「攻撃姿勢のときでも、自分に来るであろう攻撃は予測しろ。あとお前は集中力が甘い」

「はい・・・・・・・・」

「ほら、立て」

俺が手を出し、スバルは嬉しそうに手を取る。

「ありがとう、直人兄い」

「んじゃ、戻るか。朝練もそろそろ終わりみたいだし」

「うん」

こうして、俺たちはなのはたちのところに向かう。

「ねえ、直人兄い？」

「どうした」

「直人兄いは、私やギン姉をどう思う？」

「どうって・・・仲間だろ？」

俺の言葉に、スバルは「そうじゃない」と言って首を振る。

「あたしとギン姉は、戦闘機人・・・人間じゃないんだよ？」

ああ、そのことか。たく、こいつも同じか。多分ギンガから俺が知ったことを聞いたんだろうな。

「あのさ、スバル」

「何？」

「ていつ！」

俺は思い切りスバルにでこピンをかました。

「あう！な、直人兄い？」

「あのな、スバル。ギンガにも言ったが、お前は立派な人だろ。どうしてそう気にする？」

「もし世界中の人が私の敵に回ったらって思うと、怖くて仕方がないの」

スバルは少し半泣きだった。そこまで痛くはしてないが、別のことだろう。・・・なるほど、怖い・・・か。

「わかった。じゃあ約束しよう」

「約束？」

「ああ、もし世界がお前を敵に回すことがあっても、俺はお前を守る」

言いながら俺はスバルの頭を優しく撫でた。すると、嬉しそうにスバルは笑っていた。

「ありがとう、直人兄い」

言いながらスバルが頬にキスをして、そのまま走って行ってしまった。

「これで一件落着か？」

「直人君？」

声をかけられた瞬間、背筋が凍った。ゆっくり振り返ると、なのはがレイジングハートを握っている。

「な、なのは……」

「どうしてこうフラグを立てるかなあ……」

「待て、なんの話だ……」

「直人君は私だけを見てればいいの!」

なのはがいいながら抱きつく。てか、飛びついてきたから自動的にお姫様抱っこになった。

「ほら、行くよ?」

「この状態で?」

「勿論」

俺はやれやれとため息をつきながら、フォワードの所へ向かった。このあとそれを見たフェイトにも同じことをしなければいけないな。つたのはまた別の話。

それからしばらくして部隊長室。

「地上本部からの増援?」

「うん、レジアス中將が直々にこの二名を送るって」

「あのオヤジが？」

「直接通信で来てな、直人君への助力やて」

あのオッサンも随分丸くなったもんだ。そして映し出される二人の隊員。なるほど、A Aランクと空戦Bか……

「スパイってことは？」

「私も最初はそう思ったんやけど『ワシからあの男へとせめてもの償いだ』言ってたで」

「なるほどね……」

別に償ってもらわなくてもいいんだけどな……

「なかなか才能ある子達やろ？」

「らしいな」

「でな、この二人を迎えに行つて欲しいねん」

「地上本部に？」

「せや」

なんか最近俺お使用のこと多くないか？ま、いつか……

「んじゃ、行ってくるよ」

「あ、ちょっと待って、直人君」

「ん？」

すると、はやてが駆け寄ってきて俺と唇を重ねる。

「いつてらっしゃい」

「あんな……」

「夫婦になったらこれがしょっちゅうやで？」

なんだそれ。まあいいや、行くとしよう。部屋を出ると、ちょうどヴィヴィオが走ってきた。そのままダイブしてくるのを受け止め、抱き上げる。

「パパ！」

「あれ？ヴィヴィオどうした？」

「パパを探してたの！一緒に遊ぼう！」

肩にはマリカが乗っている。一応ヴィヴィオに何かあったときのためだ。

「ごめんなヴィヴィオ。パパはこれから地上本部に行かなきゃ行けないんだ」

「やだやだ！パパと遊ぶ！」

ヴィヴィオが涙目で俺に訴える。

「主、地上本部と言うことは、また何か？」

「いや、新しく来る増援を迎えに行くだけだ。一応車もあるし」

一応六課にも車はある。交通手段が厳しい機動六課は車などを保有していることが多い。フェイトのように自分の車を持っていたり、ヴァイスやティアナのようにバイクを持つ人間もいる。俺もバイクを買いおうかな……

「じゃあ、ヴィヴィオも行く！」

「……駄目だヴィヴィオ。いつもいい子にお留守番してるだろ？」

「ヴィヴィオも行くの！うええええええん！」

とうとう泣かれてしまった。いつもなら留守番に頷くのに……

「（主、主……）」

「（ん？）」

「（主が何度も命に危機に瀕したりするからそうなるんです。ヴィヴィオ、主が大怪我した時だって、ずっと泣いてたんですよ？）」

「（マジで？）」

「（マジです）」

なるほど、それでか……それは俺が悪いな。

「わかった、一緒に行こう、ヴィヴィオ」

「ほんとう？」

「ただし、いい子に大人しくするんだぞ？」

「うん！」

さつきとは違う喜びの笑みを浮かべ、ヴィヴィオは俺に抱きついた。

それからしばらくして、俺とヴィヴィオ、マリカは地上本部へと到着した。すると、地上本部の前に二人の女性が待っていた。一人はプラチナブロンドのロング。もう一人は白髪を三つ編みにした少女だ。二人ともティアナとスバルくらいかな？

「はじめまして、君たちが機動六課に来る人たちかな？」

「はっ！お待ちしております、井上直人さん！自分はジュリア・サガリス二等空士であります！」

「（自分はサフィラ・アーク二等陸士です。喉が潰れて喋れないため、念話で失礼します）」

と、二人が敬礼してくる。

「井上直人だ。で、こっちが俺のユニゾンデバイスのマリカ。んで俺の娘の・・・」

「井上ヴィヴィオです!」

と、ヴィヴィオがペコリとお辞儀する。すると、二人がびっくりしている。

「井上さんお子様が?」

「え?ああ、養子だ。血は繋がってないよ」

すると、二人がほっとした顔になった。なんでだ?

「じゃあ早速六課に行こうか。荷物はそれだけかな?サガリス二等空士とアーク二等陸士」

「あ、あの、自分のことはその、ジュリアと呼んでください」

「(私もサファイと呼んでください)」

「ん、わかった。じゃあ車に乗ってくれ、機動六課に向かうから」

こうして、俺が車に乗り、二人も後ろに乗って車が出発した。

ジュリア side

憧れの人が目の前で名前を呼んでくれた。すごく嬉しい。でも顔

が熱い……

「（あの、ジュリアさん？大丈夫ですか？）」

「（大丈夫じゃない……）」

「（でも本当、優しい人……）」

サフィがウツトリして見てる。14歳なのに、どうしてこうも色っぽく見えるんだろ……

「（どうして？）」

「（だって直人さん、私のこと一度も聞いてきませんよ？）」

確かにそうだわ……初対面の人は大抵この子について聞いてくるのに……

「そういえば……」

でもやっぱり聞くのね……

「二人はデバイスはどんなのだ？」

「え？」

「いや、ちよつと興味本位だ」

あれ？サフィのことじゃないの？

「（私のデバイスの名前は剣の書です。）」

「剣の書？」

「（はい、さまざまな形の剣を記述に記された本から召喚します）」

「召喚魔法・・・無機物を呼び出すのか」

「（アーク家に伝わる秘術です。魔力変換で磁力も操れます）」

サフィ、いつもあんまり喋らないのに・・・

「なるほど、それじゃあ剣術も？」

「（あまり得意ではありませんが、ある程度なら）」

なにが得意じゃない・・・よ。私勝ったことないのに・・・

「それじゃあジュリア、君は？」

「え、あ、はい！私のデバイスは近代ベルカ式のインテリジェントで、スラークと言います」

『こんにちは、直人殿』

「ああ、こんにちは。俺のはメシアとブレイブスワローだ」

『はじめましてご両人』

『こんにちは』

あれが伝説のデバイス・・・メシアとブレイブスワロー

「スラークの形状は？」

「槍です。カートリッジシステムを有しています」

「となるとうちのエリオといい練習ができるかもな」

「エリオ？」

聞いたことない子ね。

「ああ、うちのフォワードでな、槍使い。ヴォルケンリッターのシグナムさんの弟子かな」

「弟子！？あのシグナム二尉の！？」

そ、そうになると相当強いわね・・・わたしやっていけるかしら。そんなことを考えていると、建物が見えてきた。あれが・・・

「あれが機動六課だ。さて、着いたと・・・」

そう言つて直人さんが車を止め、車を降りた。私たちも降りなきゃ。車を降りて中に入ると、結構注目された。やっぱりサファイが可愛いからかしら。

サファイ side

うっ、みんな見てる・・・やっぱりジュリアさんが可愛いからだね。

「ヴィヴィオ、先にマリカと部屋に戻ってろ」

「えー！」

「後で遊んでやるから。な？」

「うん！わかった！」

「ではヴィヴィオ、行きましょつか」

「うん！」

可愛い・・・やっぱり小さい子はいいですね。

「さて、部隊長がお待ちかねだろうから、行こうか」

「（はい）」

「はい！」

しばらく歩くと、部屋にたどり着いた。広いですね、この隊舎。

「失礼するよ、はやて」

「あ、来た。ご苦労さん直人君」

「ああ、じゃ、二人とも入って。」

言われるがまま入ると、そこにはあのエースオブエース高町なのは

さんと、執務官のフェイト・Ｔ・ハラオウンさんがいた。ほ、本物・
・・・

「じゃあ、自己紹介。お願いしよか？」

「はっ！ジュリア・サガリス二等空士であります！」

「（サファイア・アーク二等陸士であります。声が出ないため、念話で失礼します）」

やっぱり気にしますね。この声については。

「機動六課部隊長の八神はやてや。よろしゅうに」

「スターズ分隊長の高町なのはだよ。」

「ライトニング分隊長のフェイト・Ｔ・ハラオウンです。よろしくね？」

「（よ、よろしくお願いします！）」

すごく綺麗な人たち、写真で見るとぜんぜん違う・・・

なのはside

（ああ、この二人可愛いなあ・・・直人君取られないかすごく心配だよ・・・）

フェイトside

この子達、すごく綺麗。どうしたらこうなるのかな・・・直人、さつきから二人のことばかり見てる。ああ、やっぱりこういう美人のほうがいいのかな。

はやてside

あかん、負けてる。ジュリアちゃん胸めっさ大きい・・・スバルといいところやろうか。サフィラちゃんもスタイルええし・・・うちがどんどん貧乳キャラに・・・

直人side

なんかみんな落ち込んだりしてるんだけど・・・なんだろ？てかはやて、なんかすごく暗くて二人が心配してるよ。

「お、おいはやて？」

「あ、な、何？」

「とりあえず、二人に色々後のことを教えたら？」

「せやね、とりあえず二人はフォワードになるわけやけど、やっぱりセットのほうがええ？」

「いえ、特には」

「（私たちは職場は同じですが、コンビとして戦ったことはないの
で）」

「なら、スターズ、ライトニングにそれぞれ入ってもらうで。それ

「でええか？」

「「（はい！）」」

こうして二人と隊長たちの対面が終わった。その後何故か俺がボコされた。

夜、俺はベッドで寝ている。もちろんなのはとはやてとフェイトがいる。はあ、なんだったんだ。今日のあれは。

「ねえ、直人？」

「何？」

フェイトがなぜか俺のほうへ寄ってきた。

「怒ってる？」

「いや、なんで？」

「だって、今日思いつきり……」

フェイトが俺の傷を優しく撫でる。

「ん、まあよくわかんないけど俺が何かしたんだろ？」

それ以外考えられないし……

「それがその、私たちが勝手にむかついただけで……」

「は？なんで？」

「だってその、今日来た二人が可愛かったから・・・」

「俺が惚れたと？」

「うん・・・」

俺はただ二人の今後の戦い方について考えていただけなんだけど・・・
。もしかして俺は女性を見ることにこういう仕打ちを受けるのか
？命がいくつあっても足りないよ。

「俺は・・・」

ああ、言葉が出てこない。何でそうかな。

「俺は別に二人が好きとかそんなんじゃないから。安心しろ」

「じゃあ、私は？」

「え？」

「私はどう思ってる？」

「どっつて・・・」

なんでそういう風に詰め寄ってくるかな・・・

「フエイトちゃん？」

なのは、起きてたのか……

「フェイトちゃん、そういう抜け駆け禁止だって言ったじゃない？」

「せや、そんな聞き方したら誰でも落ちてまう」

はやてまで……

「でもこの際聞こうかな、直人君は誰が好きなの？」

うつ……ストレート……なんでそういうことを聞く。

「それは……その……」

「この際、はつきり言つて欲しいんやけど？」

3人が詰め寄る。なんだこの展開……俺は……俺は……

「お「パパ」……ん？」

ヴィヴィオが起きて、むずむずしている。

「どうした？」

「オシッコ……」

ヴィヴィオが言った瞬間、3人がずつこけた。

「わかった、なのは頼む」

「……………うん。ヴィヴィオ、トイレこっちだよ」

「うん……………」

ヴィヴィオはトイレに行った。

「で、結局誰が好きなん？」

「……………内緒」

「ええ！ずるい！」

「俺は寝る……………」

そう言っただけで俺が目をつぶると、二人もしびしび寝た。なのはたちもベッドに入り、眠りについた。死んでもいいない……………3人とも好きだなんて……………」

こうして、今日も夜が更けていく……………」

第二十四話「新たに息吹く二つの風」(後書き)

秋風「さて、今回は新しくジュリアとサフィラということだ」

サフィラ「(こんにちは)」

ジュリア「どうも」

直人「今回初登場。てか、投稿キャラだもんな」

サフィラ「(とりあえず聞きますけど、ここでは私は声をだしてもいいのでは?)」

秋風「そうだね……」

ジュリア「正直言っているんですか?なんでこうも崩れてるんです?キャラ設定」

秋風「さあ」

直人「こいつにそんな技量はない」

サフィラ「身も蓋もありませんね」

ジュリア「ちなみにこの後の進展は?」

秋風「一応この後も色々と考えてるけど、まずはサフィラかな」

サフィラ「私ですか?」

秋風「事故ってことだから、それを考えるのと、治すのと」

直人「終わるのに一話分かかるな」

ジュリア「私は？」

秋風「そうだな。スターズとの友情物語」

直人「これも一話だな」

サファイア「これだとカオスとの話が・・・」

秋風「そうとう先だ」

直人「大丈夫かよ」

秋風「まあ何とかなるよ。今回はキャラ設定を紹介するからこの辺で」

名前：ジュリア・サガリス

愛称：ジュリア

魔法術式：近代ベルカ式

魔力色：白

階級：二等空士

ランク：空戦B

年齢：16歳

身長：170cm

体重：53kg

髪：プラチナブロンドのロング

眼：つり目、虹彩は青

体型：痩せ型、バストはスバルより少し大きめ

性格：温厚で可愛い物好き

趣味：写真撮影

地上本部勤めの魔導師。つり目に加えて背筋をピンと伸ばしてサッサと歩くため一見すると近寄り難い。しかし、話してみると意外と親しみやすい人物。常にデジカメを持ち歩いていて、綺麗な景色や動物を撮るのが好き。異性に対して奥手で直人を好いているが思いを伝えられない。人の呼び方は「～さん」

デバイス：スラーク

種別：男性型インテリジェンスデバイス
形状：槍

全長：2・2 m

重量：27 kg

カートリッジシステム有

性格：寡黙で不必要な事は喋らない性格

カートリッジを使用し穂先に魔力を収束して攻撃する戦闘スタイル。

技

ランサーレイ

収束した魔力を打ち出す長距離砲撃魔法、射程は長いが威力は低い
ため主に牽制用。放つにはカートリッジが一発必要。

アサルトストライク

穂先に魔力を収束したまま突撃する攻撃、最高速度はラケーテンハ
ンマーよりも速い。突撃用にカートリッジが二発必要。

名前：サフィラ・アーク

愛称：サファイ

ミッド式：剣召喚

階級：二等空士

ランク：A A

年齢：14

身長：156

体重：女性に体重を訪ねてはいけません

デバイス名：剣の書

技

マグナショット：召喚した剣を磁力で射出

タイタンリッパー：ビルほどの巨大な剣を磁力で操り、切りつける

サングレビエント：自分を中心に砂鉄による竜巻を発生させる。触るとやすりのごとく削られる。（必殺技）

容姿：白髪、ロングで一本に三つ編みにしている。青空のように澄んだ碧眼。絶世の美少女

性格：限りなく純粹

稀少技能：魔力形質変換・磁力

備考：昔の事故で喉が潰れて声が出ない。会話は全て念話。

二人の階級とサフィラの愛称と一族の設定は私のオリジナルです。

直人「次回第二十五話『集う意思、騒がしきひと時』TAKE OFF」

第二十五話「集う意思と騒がしきひと時」(前書き)

駄目だ・・・スランプだ・・・なんだこの駄文は・・・

そして誰か、サウンドステージXを小説に約して欲しい・・・なんてわがままを言っている

では本編どうぞ♪

第二十五話「集う意思と騒がしきひと時」

新入隊員を迎えてから早くも3日が過ぎた。一応ジュリアがスターズ、サフィラがライトニングである。最初のうちはジュリアがエリオが自分のイメージと違っていたとちよつと驚き、サフィラは自分の分隊が年下の子供ということで少し不安だったらしいが、なのはの教導での4人を見て驚いていたりする。それからというもの、2人はフォワードに溶け込み、馴染みつつあった。

「ふあゝあ．．．．」

朝7時。なのはは教導でいないが、フェイトと俺がベッドで寝ている。はやては朝早く出張に行ってしまった。

「朝、か．．．」

「パパ、おはよー」

「おはようヴィヴィオ。よく眠れたか？」

「うん！」

えらいなヴィヴィオは．．．んでもって．．．ちゃんと顔を洗いにいった。ん？なんか抱きかかえていったけど．．．

「きゃあああ！」

マリカだったのか。多分洗面台で水をかけたな？俺も着替えを済ませるわけだが．．．

「にしてもフェイトはまだ寝てるのか……………フェイト、もう7時だぞ?」

「ん…………おは、よ…………」

フェイト、顔が赤い…………

「どうした、具合でも悪いのか?」

「大丈夫…………着替えるから、先行つて…………」

「わ、わかった…………ヴィヴィオ、朝ごはん食べに行こうか」

「うん!」

「マリカも行くぞ。」

「はい…………」

こうして俺たちは食堂へ向かった。

「おはよう直人兄!」

「兄さん、おはよう!」

「お兄ちゃん!」

「兄さんおはようございます!」

「ああ、みんなおはよう」

フォワードがみんな迎えてくれたが……

「あれ？ジュリアとサファイは？」

「ああ、お2人ならもう食事を済ませてから仕事の時間までシグナムさんと戦ってます」

「なんで？」

「なんかシグナムさんが『是非とも2人と勝負したい』ってきかなくて……」

なるほど、ジュリアは槍だし、サファイラは剣を召喚するもんな……
バトルマニア・戦闘狂の目に留まって仕方ないか。

「お前かららしてどうだ？あの2人は」

「ジュリアは結構ティアみたいなんですけど、話して見ると結構仲良くなりました」

「サファイラさんは優しくてお姉ちゃんみたいです」

「はは、ならいいや。って、あれ？なのはは？」

そういえばなのはがいない。ヴィヴィオも不安そうにキョロキョロと見ている。

「なのはさんなら、調子が悪いからシャル先生のところで薬をもらいに」

「なのはもか？フェイトも調子悪いみたいだし、大丈夫かよ」

「おはようございますーすー！」

するとそこへ、リインがやってきた。あれ？

「リイン、お前はやてと出張じゃ・・・？」

「それが聞いてほしいです！はやてちゃんに置いていかれたですう！」

「はやてが？」

おかしいな・・・出張行くといつもリインは連れて行くのに・・・

「そういえばはやてちゃん、なんか体調がすごく悪いみたいでした！」

「はやてもか？」

おいおい、隊長三人とも調子悪くて大丈夫か、この部隊・・・

「直人さーん！」

するといきなり誰かがダイブしてきた・・・それは水色の髪をした少女。

「セイン!？」

「お久しぶりっすー!」

「ウェンディも、ってことは・・・」

食堂の入り口にチンクたちがいた。

「久しいな、これ2人とも、直人殿が困っているぞ」

「ああ、ごめんごめん」

「なるほど、もう来たのか。あれ?はやて知らないか?あいつ海上保護施設に行ったのに・・・」

「部隊長ならさっき医務室に運ばれたわよ?」

ウーノの言葉に、俺は驚く。おいおいまさか・・・

「ヴィヴィオ、ちょっと俺は部屋に戻るから、セインたちといい子にしてろ?セイン、ヴィヴィオ頼む」

「あいよ」

「・・・?うん」

俺は急いで部屋に戻った。すると、そこには・・・

「フエイト!」

フェイトがパジャマの状態で床に倒れていた。

「おい、フェイト！」

手を額に当てると、すごい熱だ。俺はすぐにフェイトに上着を羽織り、すぐに医務室のシャルさんの所へ運んだ。すると、なのはとはやても熱を出して寝ている。

「シャルさん！フェイトが！」

「ええ！？フェイトちゃんも！？」

急いでベッドに寝かせ、シャルさんが触診する。当然俺は別方向を向いている。

「どうやら、三人とも風邪ね・・・働き過ぎが結果的に来たみたいなのよ」

「やつぱり・・・」

ここ3日間、とんでもないハードワークだったもんな・・・

「しょうがない、今日の仕事は俺がやりますから、こいつら寝かせてください」

「わかったわ。じゃあ直人君もこれ。ヴィヴィオちゃんにも飲ませてね？」

そう言って渡されたのはカプセルの薬。

「これは？」

「風邪予防の薬。ヴィヴィオちゃんも子供だから、感染しやすいのよ」

「わかりました」

こうして、俺の一日が始まる。

デスクワーク 9時～12時

「そっちの資料はそこ、報告書はすぐに書いてくれ」

「わかりました。じゃあこれを……」

俺とウーノ、ドゥーエにクワットロ、そしてシグナムさんヴィータ、リインが総出で行う。これはフェイトとはやての仕事分だ。

「うわあ、何この報告書の量！」

「ああもう、これじゃあ終わらないわよ！」

フォワードも大変そうだ。てかスバルとライトニング、もうそろそろデスクワークに馴れてくれ、頼むから。それに大してジュリアとサフィラの手が早い。

「サフィ、次の報告書」

「（はい、ジュリアさん、これです）」

「ありがと、すぐやりましょ」

「（はい）」

「2人は手が早いな」

「はい、地上本部の勤めだと訓練よりこっちが多いんです」

と、ジュリアがコンソールを叩きながら喋る。喋ってるのにスピードが落ちてない・・・

「（エリオ君、キャロちゃん、そっちの仕事半分やるから頂戴？）」

「え、悪いですよ・・・」

「そうですよ、これくらいなら・・・」

「（チームなんだし、これも協力。ね？）」

「「は、はい・・・」」

と、サフィラの笑顔に2人が顔を赤くする。

「ティアー！ここわかんない！」

「ああもつ、あんたはあんたで世話が焼けるわね！」

「スバル、見せて？ああ、ここは・・・」

ジュリアが目にも留まらぬ速さでそれを打ち込む。

「ジュリアさんすごい！」

「スバル、あんたも見習いなさい。すみませんジュリアさん」

「あの、2人とも。私同い年だから、もっと軽く話しましょう？」

「そうだね、ありがとジュリア！」

「わかったわ、次からそうする」

と、仲良くなるのはいいから仕事してくれ！

訓練 13時～18時

「まあ、俺一人でも無理だから、体を動かす意味で頼んだ」

つてことで、フォワード6人+ギンガVSチンク、ディエチ、セツテ、ウエンディ、ディート、オットー、ノーヴェ。で、俺、トーレ、シグナムさん、ヴィータは上から見る。

「よし！行くっすよー！」

「姉も準備完了だ」

「同じく」

「久しぶりにグリップ握る・・・」

おお、張り切ってるな・・・

「わかっていると思うけど固有武装の殺傷設定は抜いたからな？」

「わかってらあ！」

「了解・・・」

「わかっています、直人お兄様」

「え？お兄様？」

デイトの言葉に首を傾げる俺。

「はい、そう呼びたいのですが・・・」

「別に良いよ」

フォワードの呼び方を真似したのか。

「んじゃ、はじめ！」

こうして7対7の大演習スタート

スバル、ジュリア、エリオ、ギンガが前衛か・・・ティアナとサフィラは中間、バックはキャロ・・・即席にしては良いフォーメーションだ。対してナンバーズ組みは前衛にチンク、ノーヴェ、セツテ。で、中間がオットーとウエンディ。後衛がディエチ・・・あれ？

「トーレ、ウエンディは後衛じゃないのか？」

「ああ、ウエンディのライディングボードはシールドの役割も果たすからな。」

「なるほど」

それにしてもスバルとギンガのコンビに対等に遣り合っているノーヴェはすごいな。武装も似てるし。お、サフィラが何かする気か？

「（マグナショット！）」

召喚した剣を飛ばした……てか、弾いた？

「アークの話では、磁力によって射出しているらしい」

「つまり反発の力が……」

なるほど、おいおい、ウエンディのボード弾き飛ばしたよ……これじゃあウエンディは戦闘不能だな。っと、エリオとジュリアが連携でチンクを叩く……いい感じだな。だけどチンクには秘策あるのか？下がりながら笑ってるぞ？

「IS ランブルデトネイター！」

なるほど、ビルの鉄筋も鉄だからな……あらかじめ触っていたわけだ。これでエリオとジュリアは撃沈。お、スバルたちもノーヴェを倒したな。やっぱり2対1は厳しいだろ、ノーヴェ。セツテとオットーは……ティアナの幻術に苦戦か？キャロのブーストは半端

ないし、厳しいか？

「ファントムブレイザー！」

うわ、違う位置からかよ。えぐいことするなあ……

「IS レイスストーム！」

「IS ツインブレイズ！」

双子のコンビネーション攻撃……これにはさすがのスバルも……
って、あれ幻術か！やるなあ……。でもギンガがセツテと相打ち
か。スバルは……。あ、プリズナーボックスに捕まった。これじゃあ
戦闘不能と。ってその直後にティアナがフリードとコンビネーション
で攻撃か。戦場だったらスバルは今のはぎりぎり無事だな。へえ、
楽しいな、こういうの見るのも。

「直人？」

「ん？どうしましたシグナムさん」

「いや、何か楽しそうだな」

「ええ、この時間帯はいつもヴィヴィオの世話してますから、こっ
う戦いは見れないんですよ。」

「ヴィヴィオは？」

「セインやウーノたちに任せました」

んなこと言ってる間に決着がつきそうだな。最後に立ってるのは・
・チンクとサフィラか。

「IS ランブルデトネーター！」

「(タイタンリッパー!)」

巨大な剣が現れ、宙を舞う。

「ぬう！」

「(きゃあ!)」

チンクが使ったISのダガーの爆発とサフィラの攻撃がほぼ同時だった。煙が晴れると、2人とも気絶している。しかもティアナとキヤロがチンクの攻撃巻き添え食らってる。あーあ、引き分けか。

「なんか、乱戦だったな」

「実践的でいいんじゃないか？」

こうして模擬戦は終了した。なんか見てて疲れたな。特に終盤。

医務室

「つ、疲れた……」

なのはたちは熱が下がって落ち着いている。たくつ、日ごろから疲れを溜めるからこうなるんだ。こいつ等は……

「直人君？」

「ん？どうしたなのは」

「今日、教導は・・・・・・・・・・？」

「俺がやった。」

「そっか」

なのはが笑顔で目をつぶる。あっち、タオル変えてと・・・

「今回はお前ら自業自得だ。次から休みは長く取れ」

「直人君？」

「直人・・・・・・・・」

「どうした、はやて、フエイト」

「その、仕事があつたんや・・・地上本部の増援の報告書とナンバーズの・・・・・・・・」

「私もたまっている報告書が・・・・・・・・」

「それも俺と全員でやったから。お前ら寝てろ」

「「「ごめんなさい・・・・・・・・」「」」

全員が謝り、目をつぶった。はあ、こいつら疲れる。

「なんでこいつら好きになったんだろ……………」

「え？」

「なんでもない。俺は食事取りに行くから、なんかあったら念話で呼べ」

「……はい……………」

こうして、俺は食堂へ向かうことにした。

食堂にはナンバーズやフワードなどでこった返している。なんとなく、人が10人以上増えるところなるわけな。

「ふう……………」

「パパ、ママたちは？」

「ん？大丈夫だよ。熱も引いたし、少ししたらすぐ元気になる」

俺はヴィヴィオの頭を撫で、席に座った。

「へえ、直人はパパになったんだ」

「意外だな」

「でもびつくりだね、一段と強くなってる」

「でしょ？これじゃあライでも勝てないんじゃない？」

そうそう、ライでも勝てない……って、ちょっと待て！

「お前ら！なんでここにいるんだ！」

そう、俺とヴィヴィオしか座っていなかった席に、アリシア、ラムザ、ライ、アクアがいた。

「なんでって、増援よ。決まってるでしょ？」

「そうじゃないだろ！事前連絡とかしろ！」

「あ、アリシアお姉ちゃんだ〜」

「ヴィヴィオ久しぶり〜」

ヴィヴィオは嬉しそうだが、俺は驚きを隠せない。すると、シグナムたちも寄ってきた。

「直人、この者たちは何者だ？」

「ああ、こいつ等は……」

「ほう、貴公できるな」

ライが不敵な笑みを作ってシグナムを見る。シグナムもまたニヤリと笑う。おいおいおい

「ライ！やめなさい！」

アクアがハリセンでライを叩く。どっから取り出したんだ、そんなもん。

「しょうがない、自己紹介してよ。隊長たちいないけど……
……（あと忘れていであろう読者のために）」

「私はアクア・マリンハート。焔の騎士よ」

「僕はラムザ・フェイムリット。翡翠の魔導士です」

「俺はライ・バーザム。漆黒の称号を持つ騎士だ」

と、自己紹介。まあアルハザードのことは言わなくていいよな。いろいろ面倒だし。シグナムさんはあれだ、とりあえずワクワクしてるけどみんなで止めた。なのはたちがいないと收拾つかないから。こうして忙しい一日は終わりを迎え、4人は空き部屋を使用。俺は翌日まで3人の看病を続けた。

第二十五話「集う意思と騒がしきひと時」（後書き）

秋風「・・・・・・・・・・・・・・・・」

直人「どうした？」

秋風「いやさ、キャラがまた増えたな・・・と」

直人「確かに、ナンバーズやアルハザードの4人が来たからな」

秋風「不安だ・・・・・・・・」

直人「あんな・・・・・・・・」

秋風「とりあえず頑張るそして眠い」

直人「寝ろ。永久的に」

秋風「そしてどうしようかな、この先」

直人「まさかのノープラン！？」

秋風「いや、そろそろカオスが目覚めてもいいかなと」

直人「てか、どんだけ楽園掘り起こすの時間かかってるわけ？」

秋風「あと一週間くらい？」

直人「長！」

秋風「まあいいや、今日はこの辺で……」

直人「……次回、第二十六話『現れた樂園、天使の心』 TAK
E OFF!」

第二十六話「現れた楽園、天使の心」(前書き)

また予告とタイトルが変わりました。申し訳ない。内容とイメージがあつてないことから変えました。ご了承ください・・・

では本編どうぞw

第二十六話「現れた楽園、天使の心」

マラキア side

世界は私を拒絶した・・・だから私は世界を破壊する。

「くつくつく・・・もはや管理局など敵ではない」

その楽園の玉座に私は座る。カオスの器を持つ鎧はただ窓を見ていた。その漆黒の空を。

「さて、ゆりかごは破壊した。そして力を得た。これで私は神になれる」

目の前にはキメラの山。これだけの軍勢、これなら世界を摘み取るなどたやすいだろう。

「カオス・・・どうだ？戦いの前に飲まぬか？」

私はグラスを向けるが、その直後だった。私の腹部に激痛が走る。

「がつ・・・あ・・・」

私が持っていたワインとは違う、鮮血が流れる。腹部には奴の剣が刺さっていた。

「馬鹿な・・・私を裏切るのか」

「裏切る？ 我は貴様を利用したに過ぎん。」

「創造主に向かって……………」

私の言葉に、カオスは鼻で笑った。

「貴様の言うカオスはもう4年も前に消え去ったではないか……………」

「では、きさ……………」

「ふん、私はアルカディアの別生産で生み出されたカオスだ……………」
新たな混沌、それが私だ」

「な、に……………」

「さらばだ、せめて我を恨んで逝くがいい」

ば……………か……………な……………」

カオス side

ふつ、私はアルカディアでお前の技術によつて生まれているが、我を生み出したのは別の人物だ。新たな混沌の幕開けだ。さあ楽しみも
うか、混沌による、終焉の鎮魂歌を……………」

直人 side

機動六課はとりあえずナンバーズ、そしてアルハザードの騎士たちを向かえ、強力な戦力を手にした。そして俺たちはある船を待っていた。

「ねえパパ、お引越してなあに？」

「ん？ああ、今いるこの隊舎とはお別れして、別の場所に行くことだよ」

「えー！ここ離れちゃうの！？」

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

なのはがヴィヴィオを抱き上げる。

「う？」

「アースラっていうお船に乗るの。少しの間だけそこにいて、その後また戻るから」

「そっかー」

と、ヴィヴィオは笑顔だ。って、ちょっと待てよ？

「アースラってクロノさんは降りてるんじゃない？」

「うん、もうすぐ廃艦予定だったんだけど、はやてちゃんがアコー
ス査察官に頼んだんだって」

「へー」

まだ一度か二度しか乗ってないもんな、アースラ。そんなことを思っている、突然地震がおきる。いや、これは地震というより地鳴だ。まさか・・・！？俺はなのはと外に出た。そして遠くの方角に浮かぶ、一つの城があった。あれが・・・

「あれが、カオス・レイ!？」

六課に非常用アラートが鳴り響く。もう俺たちしかないはずなのに……！すると、アースラに先に乗っていたシャーリーから通信が入る。

「シャーリー！どうした！」

「大変です！隊舎があのかの砲台にロックされました！」

「何!？」

こうして俺たちはすぐにそこから離れる。最早荷物も運び終えた六課だが、砲撃が放たれ、あたりが火の海になった。

「ろ、六課が……」

「うええええええん！」

なのはは膝をつき、ヴィヴィオは泣き叫ぶ。俺は遠くにあるカオス・レイを睨み付けた。

[illegible]

俺はこみ上げてくる怒りに耐え切れず、奴の名を叫んだ。

カオス side

ふむ、人はいなかったか・・・だがこれで試しうちも良いだろう。奴らの気力も削ぐことができるだろうしな。

「さて、楽しいショーの始まりだ」

私はかつて前の混沌がやったと同じように、回線を回し、全国へ終末のカウントダウンを発表することにした。

直人 side

アースラへと移動すると、全員の雰囲気暗かった。当たり前だ、六課の隊舎が破壊されればこうなるだろう。

「マラキア・・・ふざけた真似を！」

「人がいなかったのは不幸中の幸いだけど・・・」

ヴィヴィオは泣きつかれて眠ってしまった。すると、モニターが現れる。これは・・・！

『我が名はカオス・・・混沌の覇者なり。』

「カオスだと!？」

あいつはマラキアの支配下にあったんじやないのか！？

『我はこれより3日後、この混沌の樂園を使いこの世界を滅ぼすことを宣言しよう。世界の崩壊、止めれるものなら止めてみよ。貴様ら下等な人間がどうあがくか、ここからゆつくりと見させてもらおう』

ここで通信が切れる。あの野郎、前と同じことをするつもりか・・・！

「名指しで喧嘩売られたようなもんだな・・・」

「ああ、だからこそ、止めなきゃいけない・・・」

俺とライの言葉に、アクアたちは頷くが、なのはたちは未だに顔が真っ青だった。

「今日は休んだほうが良いな。はやて、みんなを解散させてくれ」

「う、うん・・・せやね・・・」

こうして一同が解散。三日・・・か。俺はヴィヴィオを部屋で寝かせ、考えていた。

「主、力はどうですか？」

「ああ、大丈夫だ。問題はない・・・ただ、これを使える時間がわからない」

『主の体を見ると、戦闘では持つても2時間未満でしょう・・・』

「カオスとの決着がそれで済めばいいのですが・・・」

「つくとは思えないな・・・」

「ですね。どうでしょうか・・・」

セカンドリミッターはここ数日の訓練によって消耗が激しいことと、攻撃の威力が間違いなく大きいことは理解できた。ただ、実戦の使用はカオスとの戦いが最初になる。俺はとりあえずトレーニングルームに行くことにした。今なら誰もいないだろう。

「ん？」

トレーニングルームに入ると、そこにはティアナがいた。

「ティアナ、何してんだ」

「あ、兄さん」

「また訓練か？」

「うん・・・ねえ、兄さん」

「なんだ？」

ティアナが俺によって来る。

「私みたいな凡人が、みんなと戦ってキメラに勝てるかな・・・」

「ティアナ・・・」

「確かに私はみんなと強くなったと思うよ？でもね、やっぱり怖い
の・・・」

不安なんだな。確かにそうだ。隊舎があんなことになって、そして
世界を滅ぼそうとする敵がいて・・・

「大丈夫だティアナ。お前たちは、俺が守るから」

「うん、兄さん」

ティアナは俺と唇を重ねる。突然のことに驚く。

「ティ、ティアナ!？」

「今は慰めてくれたお礼だよ、ありがとう兄さん」

そう言つてティアナが走つて行つてしまった。

「なんなんだ・・・」

『ティアナにも愛されてますね、主』

「なんだかな・・・」

俺はその後2時間半鍛錬を続けた。

その後食堂で夕食を食べる。だがやはり空気が思ひ。エリオとスバ

ルも、いつもの半分も食べていない。すると、サフィラが俺のほうを見ていた。

「どうかしたか、サフィ」

「（いえ、直人さん落ち着いてるなって・・・）」

「そうだな・・・」

「（どうしてですか？）」

「みんなで成し遂げられるって信じてるからだ。そうじゃないと、この先持たないぞ？」

俺の言葉に、フォワードのみんなが驚いている。

「お兄ちゃん、どうしてそう思うんですか？」

「確かに絶望的だよな。でも、それだからってネガティブに考えたって、自分が悪いようにしか進まないし、初めから負けをあいつに認めているようなもんだ。だったら、勝てることを信じて、特訓してくれないだろ？」

一同呆然。確かにって顔してるな。お、スバルとエリオに食欲が戻った。

「だから頑張ろう。きっとみんなで勝って、いつもの生活を取り戻せばいい」

「「「「「はい！」「」「」「」」」」

うん、いい返事だ。これでこいつらは大丈夫かな。

夕食を終え、俺は外に行くことにした。外といっても、アースラのデッキのような場所だ。だが先に先約がいた。なのは、フェイト、はやてだ。

「三人とも、どうした？」

「あ、直人君」

三人とも浮かない顔している。やっぱり隊舎が壊されたことはショックのようだ。

「直人君・・・！」

はやてが俺に抱きつき、泣いている。はやてはショックを隠せないのだろう。なにしろ、自分の持っていた隊舎が無くなったにも等しいのだから。

「・・・大丈夫だ、はやて。みんなでカオスを止める。そして、また六課をやり直そう」

「うん・・・！」

「直人君・・・」

「直人・・・」

二人も俺に抱きつく。そしてしばらく三人は泣いていた。正直ちよつと驚いている。

「三人とも・・・」

「ねえ、直人君？」

「なんだ？」

「あの日の夜、何か言おうとしてたよね・・・教えて？」

「え!？」

それを今ここで言えと!？

「ずっと気になってるんや。」

「お願い、教えて・・・？」

「直人・・・」

三人が涙目で俺を見てくる。どうやら、観念しなくてはいけないようだ。

「怒らないで、聞くか？」

俺の言葉に、三人が無言で頷く。

「俺は・・・」

ここ半年近く、俺はずつと言いたかった。だがいつも俺の夢に現れるあの火事が、俺の脳裏を過ぎる。だからこそ言えなかった。言うのが怖かった。また消えてしまいそうで、無くなってしまうようで、ずつと怖かった。

「俺は・・・みんなが好きだ」

「え？」

「みんなって・・・」

「まさか？」

「俺は、なのはも、フェイトも、はやても好きだ。情けなくて、どうしようもないけど、俺は三人が好きなんだ」

怒るだろうか、それとも幻滅するだろうか、普通なら一人の人間は一人の異性としか好きになることはない。だが俺には無理だ。一人を選べば、きつと他の人間を取りこぼしてしまう。それが怖い。そして心のそこから、この三人を俺は愛していた。

「やっぱりね」

「え？」

なのはたちは笑顔だった。どうしてかはわからない。

「きつとそう言ってくれると思った」

「私たちの予想どおりやな」

「え？」

俺がこういうことをわかっていたのか？

「直人君なら、きっとそう言うと思ったの。だから、私たちもそれを受け入れようって」

「なんでみんなそんなに気楽なんだ？俺が言ったのは、最低のことだぞ」

「だって、直人は私たちみんなを愛してくれるんでしょ？他人がどう言うかは知らないけど、私たちは気にしない。むしろ嬉しいよ」

「せや、みんなで直人君のお嫁さんになる。これもええやん」

おい、そこまで話が飛ぶのか！？

「それいいね。決まり！私たちは直人君のお嫁さんね！」

「浮気は駄目だよ？」

浮気なんてしたら殺されそうだな。

「三人とも・・・」

「だから直人君、もう一人で苦しまなくていいんだよ？その苦しみは、私たち三人も一緒に背負うから・・・」

「なのは・・・」

「私は直人と一緒に幸せになりたい」

「フエイト・・・・・・・・」

「うちの心の闇を受け入れてくれた直人君。だから今度は、うちが直人君の闇を受け入れる」

「はやて・・・・・・・・」

「だから私たちは、あなたが好きです」

その言葉を言われた瞬間、俺の体から何かが抜けた。それはずっと背負ってきた大きな重りのようなもの。その重りは消えて、体が軽くなった気がした。俺は三人を強く抱きしめた。

「ありがとう・・・・・・・・」

今は、この一言しか言えなかった。三人も嬉しそうに笑い、一人ずつ唇を重ねた。これは許されることなのか？否、そんなことは関係ない。この三人が好きだ。だから俺が守る。それだけでいい。俺は星空を見上げ、静かに眼を閉じた。

そして、物語の決着が訪れる

第二十六話「現れた楽園、天使の心」（後書き）

直人「・・・・・・・・・・」

秋風「良かったね、とりあえずフラグ確立で」

直人「喜んでいいのか微妙だな」

秋風「確かに、このあとが試練だな」

直人「ああ、カオスを・・・・」

秋風「そつちじゃなくてさ」

直人「は？」

秋風「お前忘れてない？三人、いや四人の鬼を」

直人「鬼？」

秋風「恭也、士郎、クロノ、シグナム」

直人「・・・・・・・・・・」

秋風「一度出した言葉は戻らないからな？」

直人「第二部は終盤に彼らに殺されてBAD ENDだな」

秋風「どんまい！」

直人「次回、第二十六話『開戦』 TAKE OFF！」

第二十七話「開戦」（前書き）

今回はキャラクターたちの心情とかその辺りが多いです。
カオスたちとの決戦、どうかお楽しみください

では本編どうぞw

第二十七話「開戦」

あれから2日後。アースラの発進準備。そして俺たちの戦いの準備も、すべて整った。そしてアースラは混沌の楽園「カオス・レイ」へと進路を取る。当然俺たちだけではなく、地上本部、そして本局なども合わせた合同の作戦だ。

「行くぞ、全てを終わらせるんだ」

俺はメシアスワローで上空を飛ぶ。空を飛行することが出来るなのは、フェイト、はやて、シグナムさん、ヴィータ、サフィラはソラを飛び、スバル、ギンガはウイングロードで同じように空を走る。エリオとキャロ、そしてティアナとジュリアはフリードに乗る。残ったナンバーズはガジェット？型で空を飛ぶ。アルハザード組も同じことだ。

「来たな・・・」

目の前にはキメラの団体がいる。すべて飛行タイプか・・・

「会議で話したことを忘れるなよ！いくぞ！」

俺、なのは、フェイト、はやて、シグナムさん、ヴィータ、アルハザード組はカオスの待つ城内部へ。ナンバーズ、そしてフォワードは動力炉へ向かう。シャマルさんとザフィーラはアースラからのサポートをする。

「城が見えてきたな・・・」

城へ突入すると、強力なAMFが発生する。

「ちっ、アンチAMF起動だ！」

了解です、我が主

進むと、巨大なキメラがいた。

[illegible]

「はっ、早速出たな……！」

巨大で無数に伸びる触手が俺たちを襲う。

「ちっ！こいつ！無茶苦茶だ！」

「行くわよ！ライ！」

「ふん、言われずとも！」

アクア、ライが武装を構えて突進する。

「コンビン・ブレイブ！」

それによって、キメラに穴が開く。あいつら、こんな技を!?

「すごいでしょ。あの二人だから出来る芸当よ」

「確かにな……っ！」

しかし、開いたキメラの穴はすぐに塞がってしまった。なんて回復力だ。

「なら、行くよアリシア！」

「ええ、ラムザ！」

今度は2人が詠唱する。この2人も！？

「彼方より来たれ、天空の嵐・・・」

「その嵐、稲妻が走る龍となり、あの者を飲み込め！」

「「ストームドラゴン！」」

2人の連結詠唱魔法・・・か！稲妻と風が龍になってキメラに向かって行く。それによってキメラが黒こげになるが、それでも回復する。なんなんだ、こいつは！

「憎い・・・憎い・・・憎い・・・！」

なんだこいつ、喋っている。いや、この声は・・・

「マラキアだと！？」

その怪物の中心にいる人物は、今回の事件の主犯であるマラキアだった。

「まさか、カオスに裏切られたのか」

もはや原型もとどまらないマラキア。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

マラキアが奇声を上げ、触手を操る。あいつ、もう意思がねえ！

「直人君！どうするの！？」

「もうあいつ……マラキアは助からない。そしてあいつが核なんだろう」

「そんな・・・」

「悪の最後……か。ならせめて……」

俺はメシアスワローを強く握る。一思いに楽にさせてやる。

「直人」

「なんだ、アリシア」

「私がやる。」

「アリシア……」

こいつにも思うところがあるんだろう。なにしろ、悪であり、そして自分を蘇生させた人間だ。

「マラキア・・・」

「悪の科学者の末路だな」

「先を急ごう」

こうして、俺たちは先を急いだ。

スバル side

私たちはキメラを倒しながら、動力炉へと進んで行く。直人兄いた
ち大丈夫かな。私たちにはみんながいるけど・・・・・・・・

「ねえ、スバル」

「何？ギン姉」

「実はね、戦いが終わったら、ナンバーズのみんなを家で引き取る
うと思うの」

「ええ！？」

突然なに言い出すのギン姉！

「正確にはチンク、ノーヴェ、ウェンディ、セツテ、ディエチだけ
ね」

「じゃあオットーとディード、セインは？」

「その三人は聖王協会で騎士カリムが修道女にならないかって、誘ってるみたい」

「そうなんだ・・・」

私はノーヴェを見る。すると、ノーヴェは顔を赤くした。

「なんだよ・・・」

「ううん、なんでもない」

「言っておくけど、あたしの姉はチンク姉だけだからな」

あ、自覚あるんだ。てか、話し聞いてたんだ。

「ふふ、いいもん、そのうちお姉ちゃんて呼ばせるから」

「ふつ、姉もスバルが姉か・・・」

「なにみんな、あたしが姉じゃ不安!？」

「不安だな」

「不安です」

「不安だよ」

「不安ッス」

「不安かな」

「ギン姉っ・・・みんながいじめるっ！」

「ふふっ、みんな仲良くね」

ティアナ side

なんかスバルたちが騒いでるわね。でも今は任務中。頑張らなきゃ！

「ねえティアナ」

「どうしたのジュリア」

「たいしたことじゃないけど、ティアナ、落ち着いてるわね」

「え？ああ・・・」

この前兄さんに元気付けられたからね。

「うん、兄さんに励まされたから」

「そう、なんだ・・・ティアナは直人さんが好きなの？」

「え！？」

突然名に言い出すのよジュリア！もしかして・・・

「ジュリア、兄さんが好きなの？」

ジュリアは無言で頷く。なるほどね。だからこの前影から兄さんの写真撮ってたんだ。

「私はどつちかというと、頼れるお兄さん・・・かな」

「そうなんだ・・・」

「ジュリア、帰ったら伝えちゃいなさいよ、好きだって」

「む、無理よ・・・私、そんな勇気ない」

「馬鹿ね、気持ちは伝えなきゃ伝わらないわよ。戦いが終わったら伝えなさい」

「う、うん・・・そうだね」

サフィラ side

「あの、サフィラさん」

「（どうしたの？エリオ君）」

「あの、僕たち勝てるんでしょうか」

「（わからない。でも、勝ちたいと思わなきゃ！直人さんも言ってたでしょう？）」

「はい」

「（それにキャラちゃんも、まだ怖い？戦いが）」

キャラちゃん、ずっと震えてる。大丈夫かな・・・

「サフィラさんは怖くないんですか？」

「（・・・怖いわ）」

私は自分の喉を触る。これも、その怖さが仇になった。その結果。

「じゃあ、どうして戦えるんですか？」

「（確かに怖さに飲まれすぎれば、私みたいになる。でもね、踏み出す勇気が大切よ）」

「踏み出す勇気？」

「（そう、怖さを乗り切れば、きっと自分の力は強くなる。恐怖に飲まれれば、私みたいに痛手を負うわ。）」

「サフィラさんの声も・・・」

「（ええ、キメラにやられたものよ。それはまたいずれ・・・。今は、目の前の戦いに集中しましょう）」

「「はい！」」

??? side

そこは避難所の一角。

「すでに始まっていたか・・・間に合うか!？」

俺は遠くにあるその混沌の楽園を見つめる。

「大丈夫なの？」

「ああ、必ず戻る。」

「帰ってきて、くださいね・・・」

「・・・ああ。行ってくる」

直人 side

城へ上って行くと、カメラが沸いてくる。キリがない！

「直人、ここは私とヴィータが抑える！お前たちは行け！」

「何を言ってるんです！4年前とは違うんですよ!？」

「我らヴォルケンリッターは負けん」

「オメーに余計な心配されたくねーんだよ」

「なら、我らも残ろう」

「え・・・!？」

アルハザードの4人もそれぞれ武器を構える。

「大丈夫だよ直人、フェイトをお願いね」

「アリシア」

「必ず帰ってきてください」

「ラムザ」

「負けたら承知しないからね」

「アクア」

「貴様とは、帰ったら決着をつける」

「ライ」

4人は俺を信頼してくれている。なら、俺もみんなを信頼する。4年前もそうだったな

「わかった。頼んだぞ」

こうして俺たちは先へと進んだ。

アリシア side

「ライにしては、言うわね」

「ふん、これでカオスに負けることがあれば、所詮はその程度だ」

「またそんな風に言って・・・ライはわかりやすいね」

「ラムザ、どういう意味だ」

「そのままの意味だよ。彼を友として見てるなら、そうしか言わないだろう？」

「ふっ・・・どうだか。」

「あら、団体さんのお着きね」

大量のキメラが沸いて出る。私たちは武器を構えた。シグナムさんたちもそれは同じ。

「ヴォルケンリッターの方々、準備はよろしいか」

「ああ、問題ない」

「初めから全開でいってやらあ」

2人も問題ないようね。

「アルハザード、白銀の魔導士。アリシア・テストロツサ」

「アルハザード、翡翠の魔導士。ラムザ・エムリエット」

「アルハザード、焰の騎士。アクア・マリンハート」

「アルハザード、漆黒の騎士。ライ・バーザム」

「烈火の将、シグナムと烈火の剣精アギト」

「鉄槌の騎士ヴィータ」

「『『『『『いざ参る！』『』『』『』』』』』」

直人 side

俺たちはアリシアに後を任せ、とうとう最上階にたどり着いた。そこにいたのは、4年前と同じ・・・その姿の男。

「カオス・・・」

「この姿を見るのは、貴公らにとっては二度目か。だが、私は初対面だろう?」

「何?」

カオス、何を言っているんだ?

「我は以前のカオスとはまた別に作られた存在だ」

「何を、言っている!?」

「我はマラキアとは別の人間に作られた。そして・・・」

カオスが力を解放させる。

「新たな混沌を作り、この世界を闇で支配する」

「そんなこと、させるものか！」

全員がデバイスを構える。カオスも剣を握る。

「よかるう、相手になってやる」

カオスから黒い何かが現れ、それが形を成し、そこにいたのは黒いなのは、フェイト、はやて・・・これはいつたい！？

「我が作った人形たちだ。さあ、行くがいい」

カオスの言葉と共に、それぞれのところへ行く。

「お前の相手は私がしよう。」

「上等！」

俺は駆け出し、剣をぶつける。火花が散る。

「はあ！」

「ぬうん！」

カオスの一振りに、俺は吹き飛ばされる。100%の開放、なんて力だ・・・！

「我はまだ60%しか使っていないぞ？その程度なのか？」

「……いいだろう。メシアスワロー！マリカ！」

『了解です、我が主！』

『いつでもどうぞ！』

「セカンドリミッター開放！」

『リミッター開放！』

それと同時に、俺は光に包まれる。六枚の蒼い翼。そして純白と銀のラインが入ったバリアジャケット。そして俺の力がとどめなく溢れる。メシアスワローも形状が変わっている。

「ほう、それがお前の真の力か」

「行くぞ！」

こうして、カオスとの戦いが幕を開けた。

第二十七話「開戦」（後書き）

直人「とうとうカオス戦か」

秋風「ああ、先が長いな」

直人「ちなみに言うと、黒いなのはたちはあれだろ、A Sの……」

秋風「それ以上はいうな！」

京谷「ども、来ましたよと」

秋風「お、来たか、ミスターチート」

直人「なんだそれ」

秋風「今まで呼んだ小説の中でもっともチートだった人間をそう呼ぼうかと」

直人「ぶっちゃけ安部兄弟といい勝負できそうだな」

京谷「まあ、書いてるのはうちの作者なんで」

秋風「確かに。それにしても、F a t eにネギま！だけでなく、最新話ではリボンとブリーチか……」

直人「恐ろしいな」

京谷「そうか？セカンドリミッター外した直人も怖いけど？」

直人「いや、多分負けるから。」

秋風「今闇の書戦だっけ？」

京谷「そうだな、もうすぐフルボッコだ」

直人「お前一人でもアルカンシエル級の砲撃を撃てる気がする」

秋風「千の雷とかな」

京谷「まあF a t eのあれを持つてるからな」

直人「いや、あれつかったら地球の半分消えるから」

秋風「まあとりあえずSTS編も気になるところだな」

京谷「なんで？」

直人「だってスカにどう挑むか見ものじゃん」

秋風「ゆりかご一人で破壊したりして」

直人「怖いだろ！」

京谷「なに言ってるの？俺の力なら地上本部破壊できるぞ」

秋風「自ら悪役になる気か！」

直人「でもまあ、それも面白そうだな」

秋風「何？反逆の京谷みたいなの？」

京谷「ふむ、まあその辺はうちの作者次第だな」

秋風「でもまあ、京谷は性格が変わったな」

直人「確かに、格好よくなっただな」

京谷「主人公なんてみんなそんなもんだろ？」

秋風「こいつはただのフラグを立てる駄目男だぞ？」

直人「さあ、お前の罪を数えろ」

京谷「・・・まあ、色々あるさ」

秋風「そろそろ時間か？」

京谷「ああ、帰るとしよう」

直人「ならこれを上げよう」

京谷「これは？」

秋風「決まってるじゃん、遊戯王カード」

京谷「本編で登場させると？」

直人「そこは任せる」

秋風「俺的にはオベリスクを・・・」

直人「おい！サラツと世界をはかいさせようとするな！」

京谷「まあ、ありがたくもらっておくぜ」

直人「じゃ、ばいばーい」

秋風「がんばれよー！」

氷上京谷 出演作品 魔法少女リリカルなのは 転生した主人公は最強の設定を使う

ある日事故で死んでしまった不幸(?)な主人公。死神の力によって転生。リリカルなのはの世界にて、AS編の世界へと飛ばされる。レアスキル希少技能『宝具生成』によって、あらゆるアニメ、漫画で主人公たちが使うものを出してリリカルなのはの世界をぶち壊している。最強系列の主人公。私的には、今まで出会ったチート小説の中でも5本指に入る最強形主人公で、結構気に入っている。これからの暴れっぷりに期待。

直人「次回、『それぞれの闇、混沌との死闘』TAKE OFF！」

第二十八話「それぞれの闇、混沌との死闘」（前書き）

今回、ちょっと内容が変わりました。って言っても、リインが最初からはやてとユニゾンしていたということにただけです。あんま変わりません。

そして現在新たな小説を考えてます。ちょっと不安。

では本編どうぞ♪

第二十八話「それぞれの闇、混沌との死闘」

なのはside

直人君の援軍に行きたかったけど、黒い私に阻まれ、いけない。その黒い私は黒いバリアジャケットと、赤い模様が入っている。

「ふふ・・・ここから先は通さないの・・・」

「どいて、あなたの相手をしてる暇なんてない！」

「どかせるものなら、力づくでなの・・・」

黒い私が紫のレイジングハートを構える。・・・来る！

「アクセルシューター」

「つく！レイジングハート！」

『アクセルシューター』

「「シューット！」」

こうして黒い私との戦いの火蓋が切って落とされた。

フェイトside

私とは違う、銀髪の私。彼女も私と同じ真・ソニックフォーム・・・スピードも同じ？

「あなたと違うわ。出来損ないのあなたとはね」

「なっ・・・！」

「私は全てを受け入れ、全てを破壊することを誓ったあなた。さあ、どちらが強いかしら？」

「そんなの決まってる、私が勝つ・・・！」

「いいわ、やってみなさいな・・・！」

こうして黒い私との戦いが始まった。

はやてside

黒いうち・・・いや、あれは以前あった、暴走したうちや・・・リ
インフォースとうちを足して二で割った感じやな・・・

「私は全てを拒み、全てを破壊する・・・。」

「そないなこと、させへん！」

「お前は恐れている。自分の罪が、他人に降りかかるのを・・・他人が自分を利用するのを」

「・・・っ！」

「ならば、楽になれ・・・全てが無にある世界。素晴らしいもの

だ」

「そんなただの夢や！その下らん夢、覚ましたる！」

こうしてうちと黒いうちの戦いが幕を開ける。

直人 s i d e

みんなの戦いが始まった。俺も、そろそろ始めよう。

「さあ、行くぞ！」

「来るがいい！」

駆け出し、俺はメシアスワローを振るう。

「ハア！」

「ぬう！」

カオスが吹き飛ぶ。よし、行ける！

「おもしろい！ここからは本気で戦おう！」

カオスのスピードが上がった。だが、見える！

「ここだ！」

襲い掛かる漆黒の刃を押さえる。俺より太い腕、でかい手、だが、

パワーなら負けない！

「だぁ！」

「ぐっ！」

カオスは間合いを取り、剣を構えなおした。

「ほう、１００％の力を発揮する私と同等とは・・・おもしろい！」

再び距離が縮まり、剣同士が交わる。火花が散り、何度もぶつかり合う。

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「ぬっ！」

「真・蒼雷一閃！」

雷を帯びた一閃を浴びせたが、あまり効果がない・・・なら！

「セカンドモード！」

『２モード！』

双剣にし、俺はそのまま斬りかかる。

「ぬっ、やる！」

「おおおおおおお！！！！」

攻めるが、やはり攻撃に効果がない・・・！

「これで終わりか？ならばこちらから行くぞ！」

カオスの殺気と迫力が増した。100%を越えている！？

「うわあああ！！！」

いきなりの怒涛の攻めに、俺は双剣で耐える。馬鹿な・・・！100%よりも威力も速さも違う！俺は何とか耐え、距離を置いた。

「ふつ、私の最大の力が、あの程度だとしても？」

「なに！？」

「私は混沌の力によって今はそうだな、150%の力を出している」

「なん、だと・・・！？」

「そして・・・」

カオスが俺の視界から消える。そして、俺は蹴り飛ばされ、壁に激突した。

「うわぁ！」

俺はそのまま外に放り出された。

「私の力は無限にある」

「ぐっ……！」

何とか翼で体制を建て直し、空中に浮遊する。外ではアースラや他の艦隊、そして局員がキメラに苦戦している。

「見ろ、奴らはキメラと戦い、絶望、諦め、苦しみを持っている。その力が糧となり……」

カオスがさらにクラナガンを見据える。

「奴らの助からないという絶望が、我の力になるのだ……」

「そうだろうと、俺は負けない……負けるわけには、行かないんだ！」

「そうだ、負けるか、みんなのために、世界のために……いや、違う。俺が、俺が戦うのは……！」

「あいつらのために、俺は負けない。あいつらと歩む道のため、あいつらとの幸せのために、俺は、負けない！」

「なのは、フェイト、はやて、俺は負けない……！」

「なのは side」

「いい加減諦めたらいいの」

「負けないよ・・・私は、直人君やフェイトちゃんたちと道を歩くんだから！」

「無駄なあがきの・・・スターライト・・・」

「レジングハート！ブラスター2！」

ビッドを展開、勝つ！この子には負けない！

「スターライト！」

「チリになるといいの・・・」

「「ブレイカー！」」

黒い砲撃と桜色の砲撃がぶつかり合う。つく！押されてる！

「どうしてあがくの？私には理解できないの」

「あなたは、昔闇にいた私！一度は絶望した！誰もいなくていいと思った！」

お父さんが怪我をしてから思ったこと。一人で寂しかった。そして誰かに助けて欲しかった。でも、誰かがまた怪我をしてしまうかもしれないと怖かった。でも、今は違う！

「大好きな、心から愛せる人がいるから、私は頑張れる！」

押されていた砲撃が少しずつ均衡していく・・・もう、少し！

「それでも私は絶望したわ。無茶な訓練、無茶な行動、無謀という力によって負った代償」

「そう！私は弱かった。心のどこかで、一人でなんでもやろうとしていた！」

かつてなんでも出来る。一人で出来る。私は強い。いつからか言い聞かせてきたそんなこと。でもそれは違う。だって・・・

『お前は独りじゃない・・・』

「あの人の言葉があるから、私は頑張れる！独りじゃない！みんなが、直人君がいてくれる！」

「うつ・・・ぐっ・・・」

「だから、負けない！」

私の砲撃が黒い私を包み込む。そして黒い私が灰になっていく。

「そう、なら頑張るといいの・・・あなたが幸せになるなら・・・」

消えていく彼女を見据え、私はその空を見上げた。

フエイトside

「つく！」

「ほらほら、どうしたのかしら！？」

同じソニックフォームなのに・・・！黒い私の方が速いなんて！

「あなたは欠陥品だわ。出来損ないで、弱い心しか持たない」

「・・・・・・・・・・！」

「でも私は違うわ！自分の運命！全てを破壊して絶望を作ろうとする力！それを受け入れた！」

今、わかった・・・この人の目が、どうしてこんなに悲しいのか。

「あなたは、かつての私・・・」

「なんですって？」

母さんの操り人形になって、戦い続けた日々。それが母さんのためなら、母さんが望むなら、それでいいと思った。でも、それは違う。違っていた。

『友達に、なりたいんだ』

この一言で、止まっている私の心の歯車は動き出したんだ。

「私は弱い。でも、いいんだ・・・それも全部私。」

「弱い人間は強さなんてないわ。その先に幸福も、安らぎもない！ただの絶望だけ！」

黒い私がかつてのプレシア母さんと同じような、邪悪な笑みをする。違う・・・

「幸せは、強さの先になんてない・・・幸せは、自分で作るべきものなんだ・・・」

そう、かつて作られた自分を恐れ、そして負い目に思っていた。でも違った。あの人は、そんな私を救い出してくれた。

『お前は幸せになるべきなんだ』

あの言葉を、片時も忘れたことはない。私は幸せになる。私だけじゃない。同じようにつらい目にあったエリオ、キャロ・・・そして彼も。だから私は諦めない、負けない！

「絶対に負けない・・・私は直人と道を歩くんだ！」

「あなたじゃ、無理よ」

無理なんかじゃない。直人と、私・・・そしてなのは、はやて・・・みんなで同じ夢を見るために！私は勝つ！

「はあああああ！」

「不快だわ！消えなさい！」

互いのバルディッシュが交わった。肩に傷が出来る。でも、倒れたのはもう一人の私。彼女は笑っていた。

「その甘さ・・・どこまで通じるのか試して見なさい。幸せなんてなまぬるいものの先に、何があるのか・・・」

こうして、黒い私は灰となって消えていった。

はやてside

「穿て！ブラッティダガー！」

「ブラッティダガー」

同じようにダガーが飛び交う。さっきから同じ魔法を使って、負けかけてる。これは長持ちせえへん。しゃあない、もうこれは最大攻撃しかない！

「リン！」

『わかってるですはやてちゃん！』

魔力最大、かましたる！

「響け終焉の笛！」

「響け、終焉の笛………」

同じ魔法で来る……上等や！

「ラグナロク！」

互いの三つある砲撃がぶつかり、周りの壁やらなにやらがどんどん壊れていく。くっ……やっぱ強い……！

「あなたは愚か・・・」

「!？」

「罪を負い、管理局という檻に閉じ込められた、哀れな小鳥・・・」

あかん・・・！押されてる！でも、負けへん！

「確かに・・・うちにはみんなのことに気がつけない罪がある！」

「なら、何故願わない・・・すべての静寂、すべての破壊を・・・」

「そんなん願っても、なんにもならん！」

「なる・・・それが安らぎとなる・・・」

この子、まるであの時の暴走したリインフォースや！そして、悲しみの闇に沈んでもうたうちの姿！

「でも、やっぱりそれはただの夢や！」

「!？」

『はやてちゃん・・・』

「確かにうちに罪はある。背負っていかなあかんと思う！でも、静寂なんてのぞんでへん！」

「何故、理解できない」

この子にわからせたる！想いの強さを！

「静寂の先には何もあらへん！幸せも、取り戻したかった日常も！」

ラグナロクの均衡が崩れる・・・でも、負けへん！誓ったんや！あの子達と！あの人と！そして、消えてもうたあの子のために！

『未来を見るんだ、その一歩で世界が変わる』

「直人君はうちの罪を受け入れてくれた！だから！リイン！」

『はいです！』

「絶対負けない！」

うちのラグナロクが勢いをあげる。このまま行つて！

「なぜ、負ける・・・」

「檻に捕まった鳥も、いつかはその空を夢見て籠を抉じ開ける・・・自由と幸せを求めて」

「自由と幸せ・・・なるほど、考えもしなかった・・・」

こうして黒いうちは目を閉じ、灰になって消えていった。

直人 side

激しさを増す俺とカオスの戦い。そして爆発し、崩壊している最上

階。なのはたち、無事なのか！？

「他人の心配をしている暇があるか！」

「ぐっ！」

「終焉だ……」

カオスの手に魔力が……！クソ、負けるか！

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

二発ロードし、俺は一気に攻撃を繰り出す。

「絶空斬」

「蒼天・虚空斬刃！」

二つの力がぶつかり、吹き飛ぶ。しかし、カオスが体制を建て直し、俺に向かってくる。このままではまずい！

「さらばだ、愚かなるものよ！」

まずい、やられる……！そう思った、まさにその瞬間だった。俺へ向かう剣が、別の剣に防がれた。そして、そこに広がる紅の翼。くれないまさか……

「直人、あの時の気合はどうした？」

「来てくれたのか……ゼオン！」

「ああ、世界に光を見せるためにな」

ここに、蒼天の天使と、紅天の天使が揃った。

第二十八話「それぞれの闇、混沌との死闘」(後書き)

直人「とうとうか」

秋風「だな。で、これどうする?」

直人「ああ、K y o先生から送られたこの宝具?」

秋風「これはさすがに本編では……………」

直人「使用できないね」

秋風「まさか宅急便で来るとは」

直人「世界が違うのにびっくりだな」

秋風「でな、今新しく考えてる小説があるんだわ」

直人「どんなの?」

秋風「ああ。普通にディケイド×なのはクロス。二つ目、最強系列の二次創作。三つ目、新しい二次創作」

直人「なんというか、微妙なラインナップだな」

秋風「ああ、最強系列も、主人公がディケイドとディエンドの力でリリなの原作をフルボッコだから……………」

直人「まあ、それはこのカオス戦を終えてから書け」

秋風「ああ、中途半端なんてしないよ」

直人「どうだかな・・・」

秋風「まあ、お前のイベントはこれからも続くわけだし」

直人「はあ？」

秋風「言っておくけど、この小説の完結は5月あたりまで続くぞ？」

直人「めちゃくちゃだ・・・」

秋風「ま、なるようになるさ。今日はこの辺で」

直人「次回、第二十九話『二人の天使、折れた翼』 TAKE OF F！」

第二十九話「二人の天使、折れた翼」（前書き）

今回で30万ヒットを超えました。ありがとうございます。
なので、新しくアンケートを取るの、どうかしたまでご覧くださ
い。

では本編どうぞ♪

第二十九話「二人の天使、折れた翼」

直人 side

「ゼオン・・・」

「ふっ、お前にしては、少々情けない気がするな」

「いいタイミングだよ。助かった」

言いながら俺はカオスを見る。相変わらず余裕か。

「ほう、かつて混沌に沈んだ愚か者か」

「カオス・・・」

「ゼオン、あいつは以前のカオスじゃない」

「何？」

「奴は同じ技術で作られてはいるが、別の人間が作り出したカオスだ」

「誰だ、そんな馬鹿げたことをしたのは」

「さあな」

俺はメシアスワローを構える。

『ゼオン・・・』

「マリカか、話は後だ。さあ行くぞ、直人」

「ああ・・・」

翼を広げ、メシアを構える。そして空を蹴り、カオスに斬りかかる。

「はあ！」

「だあ！」

「ぬう・・・！」

2人分の斬撃が利いたのか、カオスが少し後退した。よし、行ける！

「メシアスワロー！」

「シャインイーグル！」

『『ロードカートリッジ！』』

互いに蒼い雷と真紅の炎を剣に纏い、突っ込む。

「真・蒼雷・・・」

「真・紅炎・・・」

「「一閃！」」

2人の攻撃が見事に命中する。しかし、カオスは耐えている。

「やる！だが・・・甘い！」

黒いオーラが増大する。こいつ、どこまで強くなるんだ。

「次はこちらから行くぞ！」

カオスが同じように空を切る。早い・・・！

「ちい！」

「ぐう！」

今度は体から手が増えて4本になる。化け物め・・・！

「そらそらそらそら！」

「くつ・・・メシアスワロー！」

『オーライ！リミットブレイク！』

翼の蒼がさらに濃くなり、目が金色になる。

「シャインイーグル」

『オーライ、リミッター開放』

ゼオンの体から紅の翼が6本に増える。まさか・・・

「ゼオン、お前も？」

「ああ、聖王の加護を受けている」

「なら」

「ああ……」

「あきらめない！」

2人でいつせいにカオスに踊りかかった。

「おおおおお！……！！！」

「よかろう！出力200%だ！」

スピードが上がリ、互いにトップスピードでぶつかり合った。

なのは side

私たちの戦いは終わった。でも力オスは直人君、そして救援で現れたゼオンさんと共に戦っている。そして何より……

「2人とも、なんて動き……」

「私のソニックフォームより速い……」

「うちらじゃ、力になれへん……」

そう、さつきから目で追っているけど、全然見えない。こんな戦い、始めてみた。先ほどからその剣がぶつかり合う音だけが聞こえる。

「おおおおおおおお！！！！！！」

「はああああああ！！！！！！」

「ぬおおおおおお！！！！！！」

三人の叫び声。なんて戦いなんだろう。でもなんだろう。ところどころで止まっている時、2人のデバイスが光ってる？

シャルサイド

ここはアースラのロビー。戦いの様子はかなり厳しい。運び込まれてくるけが人も量を増している。私も闘いに参加したけど、はやてちゃんのお願いでヴィヴィオを守らねばならないといけない。すると、ヴィヴィオが立ち上がった。

「行かなければ……」

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

「2人の勇者が呼んでいる。私は行かなければ……」

そう言つてヴィヴィオが外へ走ってしまった。私は運ばれてくる怪我人を見ないといけない。

「ザフィーラ！追つて！」

ザフィーラは頷いて、ヴィヴィオを追った。ヴィヴィオ、いったいどうしたというの？

ザフィーラ side

いきなり走り出したヴィヴィオ。何故だ？ただの子供から、あれ程の覇気が出るなど……。そんなことを言っているうちに、外のゲートまで来ている。次々と運び込まれる怪我人。ヴィヴィオはそれに構わず、外へ出る。外ではキメラたちの攻撃がやまない。

「ヴィヴィオ、止まれ」

「……どきなさい、闇の書より生まれし盾の守護獣よ」

「っ！？お前は、ヴィヴィオではないな？」

ヴィヴィオは無言で頷き、その混沌の楽園、カオス・レイを見据える。

「お前は何者だ？」

「かつて戦ったことがあるでしょう、盾の守護獣。私はこの先に待つ勇者たちを助けねばなりません」

「かつて……？」

その瞬間、一度戦った事のある女性が浮かぶ。その威風堂々たる姿と、その美しき瞳。忘れるはずがない。まさか……

「まさか、お前は？」

ヴィヴィオは無言で頷き、宙に浮遊する。

「私は行きます。彼らは助けを求めているから」

「待て・・・ぬう！ヴィヴィオ！」

目の前に現れたキメラによって行く手を遮られた。そのキメラを粉砕し終えたときには、もうヴィヴィオは見えなくなっていた。

直人 s i d e

そろそろセカンドリミッター開放の限界時間だ。くそ、こっちは疲弊ばかり・・・本当に底なしなのか、あいつの力は・・・！

「まずいな・・・」

「ああ、そろそろ決める」

「ほう、まだ戦えるのか。それは楽しみだ」

カオスのやつ、どれだけ力が・・・！

「全力を持って答えよう」

「くるぞ直人！」

「ああ！わかつてる！」

『『ロードカートリッジ！』』

もう、これで決めるしかない！

「真・蒼天・・・」

「真・紅天・・・」

俺とゼオン、それぞれフルパワーだ・・・これで決めなければ、勝機はない！

「「龍斬波！」」

二頭の龍がカオスを飲み込んでいく。やったか・・・！？

「絶空・・・」

そんな、まさか・・・！

「龍黒波！」

俺たちが作り出した魔力の龍を突き破り、漆黒の龍が突き破る。そしてそれを纏ったカオスが俺たちに突進してくる。くそ、防御魔法を・・・！

「いざかしいわあ！」

「ぐあああああ！！！！！」

「うわああああ!!!!」

俺たちはそのまま、最上階の場所へと叩きつけられた。

なのはside

突然空から2人が落ちてきた。2人とも気絶している。

「直人君!ゼオンさん!」

意識がない、その瞬間、予言の一説が頭を過ぎる。

蒼翼と紅翼の天使は混沌に翼を折られる――

「そんな・・・そんなことって・・・!」

私はレイジングハートを強く握り締めた。すると、マリカさんが出てきた。どうやらユニゾンが強制的に解除されたみたい。

「主!ゼオン!」

「マリカさん・・・2人をお願い・・・」

私、フェイトちゃん、はやてちゃんがそれぞれデバイスを構える。

「え・・・?」

「2人が起きるまでは」

「私が・・・私たちが・・・」

「足止めする！」

「皆さん・・・」

勝てるとは思わない。でも、2人が起きるまでは、何とか時間を稼ぎたい。

「フェイトちゃん、はやてちゃん・・・」

「うん、なのは・・・」

「みんなの、未来のために・・・」

「行くよ！」

私たちは飛び立ち、すぐに攻撃を開始する。

「アクセルシューター・・・」

「プラズマランサー・・・」

「穿て・・・」

それぞれ射撃魔法を発動する。

「これは・・・！？」

『聖王プログラム認識・・・』

『王たる器を確認、共振率100%』

「！？」

突然主とゼオンの腕からデバイスが外れました。降りてくるカオス
がいて、ひざをついているのはさんたち。そしてその間に降りて
来た人物・・・あれは、そんな！

「ヴィヴィオ！？」

驚きを隠せないのは私だけではありません。なのはさんたちも何が
なんだかわからない状況でした。

「ヴィ、ヴィヴィオ！？どうして！？」

「ヴィヴィオ・・・この子の名でしたね・・・」

違う、あの子はヴィヴィオではない！？

「ほう、その幼き体でその覇気、何者か・・・？」

「貴方を倒すもの・・・」

名乗る瞬間、二つのデバイス。ブレイブスワローと、確かシャイン
と呼ばれていたデバイス。その二つがヴィヴィオの腕へとつきまし

た。そしてヴィヴィオが光に包まれ、そこに現れたのは、まったく別の人物。サイドポニーに、黒と白の騎士甲冑・・・あれは！？

「私の名は、オリヴィエ。オリヴィエ・ゼーゲブレヒト」

私たちの前に、かつての聖王女が再臨しました。

第二十九話「二人の天使、折れた翼」（後書き）

秋風「来ちゃったね・・・」

直人「ああ、今脳内にあるカオス編の約6割の部分までな」

秋風「どうしてヴィヴィオがオリヴィエになったかわかる人はいないかな」

直人「お前の駄文でわかる人間なんてそういないぞ」

秋風「だろうな。まあ、それはオリヴィエが次回本編で言うから」

直人「いいのか!？」

秋風「さて、ここからカオスとどう戦うのか、見ものだな」

直人「ああ・・・って、俺が戦うんだろうが」

秋風「はっはっは、まあ気にすな。さて、今回は読者の方にアンケートを取ろうと思います」

直人「アンケート?」

秋風「前の後書きで新しく小説を書くって言っただろ?」

直人「ああ・・・言ってたなそんなこと」

秋風「でな、次の中から、私の小説を書く技力でどれがいいか判断

して欲しいんだ」

直人「読者に？」

秋風「おう」

？リリカルなのは無印から始まる二次創作

？リリカルなのはシリーズ問わず。どれかから始まるディケイドとのクロス

？リリカルなのはs t sから始まる二次創作

？リリカルなのはA Sから始まる二次創作

秋風「こんな感じ」

直人「何番が言いか、番号で回答してください」

秋風「協力よろしく願いします。では、今日はここまでだ」

直人「次回、第三十話『聖王の意思、蘇る翼』TAKE OFF!」

第三十話「聖王の意思、蘇る翼」（前書き）

今回はかなり長いです。間違っていないかすごく不安・・・

では本編どうぞ♪

第三十話「聖王の意思、蘇る翼」

なのはside

ヴィヴィオ？でもヴィヴィオは今アースラに・・・それに今、オリヴィエって・・・

「オリヴィエ？ほう、あの王女か」

「・・・そう、もう何百年ぶりなんでしょうね、カオス・・・いえ、カオス・レイ・・・」

「どういう、こと・・・？」

もうわけがわからない。ヴィヴィオが聖王のクローンだっていうことは知ってる。でも、どうしてオリヴィエ聖王女の記憶まで・・・？

559

「だが、何故お前は生きている？お前は確かゆりかごで最後を遂げたのだろう？」

「私は確かにオリヴィエです。正しくは、王の遺伝子を受け継ぐものの器を借りた者」

「ほう・・・その腕輪、いやデバイスか？」

その二つの輝くデバイス。まさか、あれがヴィヴィオを覚醒させる鍵だった！？

「そう、私たち聖王家とクラウン家・・・友好の証として作られた

二つのデバイス。それが『シャイン』と『ブレイブスワロー』」

「なるほど、お前の意思、そして記憶がそれらに込められていたというわけか……」

「正しくは記憶と意思……それぞれが半分ずつこれらに封じ込められていた」

そんなことが……でも、それじゃあ……

「ヴィヴィオは……」

「安心なさい……今は体を借りただけ……私がこの体に意思を留めて置けるのはわずか……だから……」

ヴィヴィオ、いや、オリヴィエが構えを取った。あれが、聖王家最強を誇る戦士……

「あの子に戻るまで、^{ヴィヴィオ}相手をしましょう」

「ほう、昔のように行くか……?」

「やって見せましょう……世界の影、カオス・レイ。古代ベルカの暗黒期を作り出した魔王よ」

「来るがいい、振り返ちだ」

カオスが剣を突き立てた。その瞬間オリヴィエが動く。は、速い！

「はぁ！」

「らあ！」

拳と拳がぶつかっただけなのに、その振動がこっちにまで……！

「せあ！」

「ぬう！」

その聖王のラッシュ……速い。それにカオスも追いつき、同じように拳が交わる。なんて戦い……！

「腕は衰えぬようだな、聖王」

「あなたも同じそうですね、魔王」

一定の距離を取り、そしてまた接近する。その瞬間カオスが拳を下ろすも、オリヴィエが消えた。そして後ろに回りこんでいる。な、なんて速さ……！

「はあっ！」

「ぬう！」

「時間ありません、立ちなさい魔王」

右のストレートパンチがもろに……！カオスがよろけて、苦痛の表情を浮かべている。す、すごい……

直人 side

「ここは・・・」

俺は真つ白な世界にいた。ここは確か・・・

「試練を終えた者の部屋」

「久しぶりですね」

「オリヴィエさん？」

おかしいな、試練を終えたなら、眠りにつくって・・・

「それが、眠ってられる状況でもなくなりました」

「え？」

「今、私は戦っています」

「戦って・・・？」

「そうです、あなたの娘であり、私の複製であるあの子の体を借りて、私は戦っています」

ヴィヴィオが！？そんな、どうして・・・！

「あの子が・・・」

「え？」

「ヴィヴィオが、あなたを助けたいと思う願いが、ブレイブスワロ
ーとシャインに眠る私の意志と記憶を、目覚めさせたのです」

そんな・・・じゃあ今ヴィヴィオは一人で！？

「俺を行かせてください」

「負けたのに、ですか？」

「それでも行かなきゃいけない。あいつに勝たなきゃ、未来は来ない」

「・・・・・・・・・・わかりました」

「え？」

俺の前に、また蒼い光が舞い降りる。これは・・・？

「私の最後の力です。全てに幸福を、全てに安らぎを・・・約束してください。世界の平和と全ての者への、幸せを」

「はい・・・！」

「行きなさい、蒼天を継ぎし、天を舞う騎士よ・・・」

俺の目の前が真っ白になった。

ゼオン side

ここはかつて来た修練者の間・・・

「お久しぶりです。21代目」

「オリヴィエ・・・あなたは、眠っているのでは？」

「それがそうも言っていられなくらったのです」

「というത്？」

「私の複製と貴方たちが使う初代のデバイスたちが共振し、私はその子の器を借りて戦っています。」

オリヴィエの複製！？いや、それ以前に戦っているのか！？

「オリヴィエ、俺を行かせてください」

「負けたのにですか」

「戦わなければ、必ず帰るという約束が果たせない」

「・・・わかりました」

俺の前に、また紅い光が舞い降りる。これは・・・？

「私の最後の力です。全てに幸福を、全てに安らぎを・・・約束してください。世界の平和と全ての者への、幸せを」

「ああ・・・！」

「行きなさい、紅天を継ぎし、天を駆ける騎士よ……」

なのはside

押してる。でも、やっぱりカオスは倒れない。いったいどうして!?

「やはりあなたは……」

「ふん。知っているのだろう、私がカオスとは違うということ」

「……つく!」

カオスの蹴りが炸裂し、オリヴィエさんが後退する。体からは所々に魔力が漏れ出している。まさか……

「時間はもう、ないようですね……」

「ふっ……哀れ、だな」

「……」

そんな、オリヴィエさんも勝てないなんて……

「何を取り違えているのですか?」

「なんだと……?」

「私は貴方を倒すなどと、一言も言った覚えはありません」

「何……?」

え？じゃあいつたい何故オリヴィエさんは・・・？

「私は短に時間稼ぎをただけ・・・貴方を倒すのは、彼ら・・・私ではない」

「・・・・・・・・・・ほう、まだ立ち上がれるのか」

「ハアー、ハアー・・・・・・・・」

「ゼエ、ゼエ・・・・・・・・」

そこに立つのは二人の騎士。

「直人君・・・ゼオンさん！」

すると、オリヴィエさんは一瞬にして直人君たちの所まで移動して
た。

「ヴィヴィオ・・・いや、オリヴィエさん・・・」

「オリヴィエ殿下・・・・・・・・」

「時間は稼ぎました。後は、貴方たちに託します。この世界の未来、
そして光を・・・・・・・・」

そう言い残し、オリヴィエさんは消え、元のヴィヴィオに戻ってし
まった。直人君はそっと、眠るヴィヴィオを抱きしめた。

直人 side

オリヴィエさん・・・あんたの覚悟、確かに受け取った。

「なのは、フェイト、はやて・・・下がってる」

「うん・・・」

俺はヴィヴィオを預け、ゼオンと共に立つ。

「最早満身創痍の貴様らが、我に勝てると？」

「俺たちだけじゃないさ・・・」

俺たちの周りを光が包み込む。そして、頭の中に声が響く。

『混沌と戦いし者たち、そして混沌に怯える民たちよ・・・聞きなさい。私はオリヴィエ。オリヴィエ・ゼーゲブレヒト』

スバル side

コアに到着したのはいいけど、大きなカメラが何体も待ち構えていた。勝てないかもしれない。そう思い始める。そんな時、声が聞こえてきた。

『混沌と戦いし者たち、そして混沌に怯える民たちよ・・・聞きなさい。私はオリヴィエ。オリヴィエ・ゼーゲブレヒト』

「何これ・・・頭に声が・・・！」

『恐れてはなりません、目の前にある混沌を、目の前にある闇を』

どこか優しい、慈愛に満ちた声。まるで、お母さんの声……

『そして信じるのです。今戦う英雄たちを』

響いた瞬間、直人兄いのことを思い出した。そうだ、直人兄いだつてつらい戦いをしてる。きっと苦しんでる。だから、こんなところでくじけたりしたら駄目なんだ！

「みんな！頑張ろう！直人兄いやなのはさんたちがきつと……きつと何とかしてくれる！だから、必ず、このコアとキメラを倒そう！」

私の言葉に、全員が頷いた。

「わかってるわよスバル！兄さんなら勝てるに決まってるじゃない！」

「きつと直人兄さんなら！」

「お兄ちゃんは強いんですから！」

「そうね……きつと、勝ってくれる」

「（直人さんたちと笑ってまた会つために！）」

フォワードのみんなの後に、ナンバーズのみんなも頷いた。

「ふ、確かに奴ならやってくれるな」

「姉もそう思っているさ」

「そうそう、直人さんならね」

「そうですね、彼の可能性に賭けてみる価値はあるでしょう」

「まあ、信じる価値はあるよね」

「あいつがやられるわけねえだろ！」

「そうだね、信じなきゃ始まらない」

「そうっす！直人さんが負けるなんてことないっすよ！」

「私はお兄様を信じています」

みんな心は一つ。そしてやることも一つだけ・・・残り何体いるかはわからない。けど、直人兄いを信じて、私たちは戦う！

なのはside

「そうだよ、私たちが弱気になったら世界は終わっちゃう」

私は心のどこかで、カオスに怯えていた。でも今は違う、直人君を信じてる。

フエイトside

「そうだね、なのは。直人やゼオンが、きっと勝ってくれる」

そうだよ、私たちは直人君を信じてる。だからこそここまで来た。闇の私にも打ち勝った。だからこそ、だからこそ、信じなきゃいけない！頑張って！

はやてside

「せや、絶望なんて、絶対せえへん！」

だから今うちらはここにいる。世界のために戦うなんてたいそれたことやない。今あるこの日常と、幸せを守るためにここまで来た。だから絶対、ここで絶望なんかせえへん！

アリサside

「ゼオン・・・帰ってくるわよね？」

「うん、約束したもんね・・・」

帰ってこなかったら承知しないんだから！だから必ず、必ず帰ってきなさいよ！

すずかside

あそこでゼオンさんと直人君が戦ってる。信じなきゃ、きっと勝っ

てくれる。絶対に世界に光は来る。そう信じてる。だから今は、精一杯願うだけ。どうか、無事に帰ってきてくことを。

「帰ってきてください。ゼオンさん、直人君、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん・・・！」

直人 side

俺とゼオンを包む光が、だんだんと大きくなっている。これが、これが人々の祈りの光。

『これで、私ができるのは最後です。後を頼みます』

そう言ってオリヴィエさんは消えた。だが、その力はまだ、渦巻いている。

ゼオン side

これが人々の祈りの光。見せなければ・・・世界に光を、世界に幸せを・・・！

「直人、行くぞ」

「ああ、わかつてるさ」

直人 side

「メシア、ブレイブスワロー・・・それにマリカ。行くぞ」

『『勿論です！主とならば、どこまでも！』』』

俺は光に包まれ、メシアスワローの再びセカンドリミッターが解除された。だがそこにあるのはブレイブスワローと同じ白銀の翼。

「シャイン、イーグル・・・行くぞ」

『『主とならば喜んで』』』

そしてシャインイーグルも、シャインと同じ金色の翼。これが世界の人々の想い、そして祈り・・・

「これからが、本当の戦いだ・・・！」

第三十話「聖王の意思、蘇る翼」（後書き）

秋風「うーむ」

直人「どうした？」

秋風「アンケートがな、4番が多いんだよ」

直人「でもお前、AS書けるの？」

秋風「微妙」

直人「そんなわけで、選択しをちよつと変えます」

秋風「4番はASですが、最強系列にします。主人公。それでもいいなら4番をお選びください」

直人「別に無印でもstsでもいいんですけどね」

秋風「たしかにな・・・」

直人「あとはこれです」

——主人公は最強？それともノーマル？それともヘタレ？

直人「この三択を新しい4番の内容と考えてお答えください」

秋風「抽選で2名さまに、メッセージにて、直人を小説で使っている権利をお渡しします！」

直人「またそれかよ！」

秋風「では、意見と感想も待ってまーす！」

直人「次回、第三十一話『蒼天の騎士伝説』 TAKE OFF！」

第三十一話「蒼天の騎士伝説」(前書き)

今回はかなり長いです。そして私のユーザーのワードがいかれました。マジでシヨック。でもめげずに頑張ります。あ、あとアンケートは今回で終了です。ありがとうございました。皆さんの意見を参考に、考えていこうと思います。

では本編どうぞw

「ぬう……！この程度で！」

「はあ！」

「てえあ！」

すぐに追い討ちをかけるが、残った三本の腕によって、それを防がれる。まだそれだけの力はあるのか。だったら！

「メシアスワロー！」

「シャインイーグル！」

ロードカートリッジ

「聖劍・蒼雷・」

「聖劍・紅炎・」

互いの雷、そして炎が増大し、今までとは比べ物にならない。

「閃！」

そしてその一閃がカオスに激突した。

「ぬおおおおおおおおお！……！！！」

カオスの腕は2本になり、胸は俺が斬ったことでその跡が生々しく残っている。そこから流れるのは、赤ではなく黒い血……こいつ

が人間じゃない証拠だな。

「おのれ・・・調子に乗りおって・・・！」

「あきらめる力オス。今この瞬間、この世界に未来をあきらめる人間も、絶望する人間もいない」

「そして、この世界の光は、絶対に消えない」

「おのれ、おのれ、おのれ・・・オノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレ！」

とうとう言語がおかしくなってきたやがった・・・

「ぬおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

突然、混沌の樂園から黒い何かが力オスを包み込んだ。それはしだいに肥大し、目の前には巨体となった、4年前とは何かが違う力オスの姿があつた。

「なに!?!」

「まさか、混沌の樂園にあつた混沌を、吸い上げたのか・・・!?!」

『貴様ら・・・許さんぞ!世界の終焉、今ここで叶えてくれる!』

「そんなこと、俺たちがさせない!」

「終焉するのはお前の存在だ!」

二つの刃が巨大なカオスの片腕を落とし、それによってカオスのバランスが崩れ、倒れた。しかしそれでも、その第二波が発射される。幸い誰もいない、何もない方向だったが、その砲撃によって地面が抉れ、山が消し飛んだ。

「あ、危なかった・・・」

「直人君！」

すると、なのはたちが飛んできた。なのはの腕にはヴィヴィオが眠っている。

「なのは、危ないから逃げない！」

「わかってる。でも、私たちにできることはないの!？」

なのはの必死に訴えるその目。だが、今の3人は足手まといになっ
てしまう。

「じゃあ、一つだけ」

「何？」

「今交戦している艦隊と魔導士を撤退させるんだ。」

「え!？」

「カオスの力も大きいが、俺たちも、みんながいるせいでこの力を
100%発揮することができないんだ」

そう、それが俺たちの戦いづらい理由だった。先ほどのように、カオスの斜線上に艦隊などがあるのも困るが、俺たちも聖王、そして世界から託された力を使えば、そのとばかりが被害を及ぼしてしまふ。

「・・・わかった」

なのはたちは納得してくれた。すると、カオスが再び雄たけびを上げる。どうやら叩き斬った腕が元に戻ってやがる。しぶとい・・・

「でも直人、一つだけ約束して！」

「え？」

「必ず、必ず今回は帰ってくる、そういう約束や！」

「・・・ああ、必ず。そうだな、帰ったらみんなで遊びに行こう」

俺の言葉に、3人が頷く。

「パパ・・・？」

気絶していたヴィヴィオがゆっくりと目を開ける。

「ヴィヴィオ、よく頑張ったな。後は、パパに任せろ」

「うん・・・」

「お喋りはここまでだな。来るぞ、直人」

再び起き上がったカオス。さっきよりでかくなった。

「行け！三人とも！」

「「「うん！」「」」

こうして三人と艦隊は離脱。その空に残るのは俺たち二人と、世界の混沌だけ。

「いくぞ！」

「おう！」

再び攻撃を開始する。

「聖剣・クリスタルソード！」

「聖剣・ダイヤモンドランス！」

4本の水晶の剣。そして4本の金剛石の槍が、カオスに突き刺さる。だが、これで終わりではない。

「聖剣・蒼雷一閃！」

「聖剣・紅炎一閃！」

二つの斬撃で、今度は両腕を斬りおとす。

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「まだまだあ！」

「一気に潰す！」

『『ロードカートリッジ！』』

「聖剣・虚空雷閃！」

「聖剣・虚空炎閃！」

さらに飛び出てくる触手を斬り刻む。くそ、まだ倒れないのか・・・！

「があああああああ！！！！！！！！！！」

再び同じように砲撃が発射される。それを避けると、空にあった雲が割れ、太陽がその姿を現す。こうなったら、最大の力でぶち込むしかない！

「ゼオン！」

「ああ、出力最大で決めるぞ！」

『『ロードカートリッジ』』

カートリッジ数7発。残りのカートリッジをすべてつぎ込み、メシアスワローの魔力を上げた。

「聖剣・蒼天龍斬波！」

「聖剣・紅天龍斬波！」

蒼に銀色が混ざり、美しい光を放つ龍の砲撃。そして紅に金色がまざり、神々しい光を放つ龍の砲撃。その二つが互いに並び、巨大なる混沌に向かつていく。だが混沌もそのすべてを消滅させてしまうような漆黒の龍を作り出し、それをぶつける。三匹の龍がぶつかりあう。強い……！

「だが負けない！負けてたまるかぁ！」

「必ず帰る！彼女たちが待つ、あの地へと！」

均衡してぶつかり合う3匹の龍……絶対、負けたくない！

なのはside

艦隊と管理局員の避難はできた。後は、スバルたちがうまくやるだけ。お願い直人君、戻ってきてね……そしてお願い……

フエイトside

4年前もそうだった。こんな風に、見守ることしかできない。だけどそれしかできないなら、今は精一杯祈るだけ。直人……

はやてside

やっぱり最後まで力になれへん・・・うちは非力や。でもだからって二人を信じてないわけじゃあらへん、直人君！

アリサ side

頭に聞こえてきた声。あれがなにかは私は知らない。でも、そんな事言われなくなつて、私はゼオン、それに直人だつて信じてる。だからお願い、無事に帰つてきて！そして・・・

すずか side

アリサちゃんと二人、避難所で他の人たちとその戦いを懸命に見守る。二人が攻撃されて目を覆いたくなる。でも逃げない、逃げたくない。必ず私は二人を見届ける！

アリシア side

キメラは倒した。そして降りてきたフェイトたちと脱出したけど、大丈夫かな、直人・・・ううん、心配はしちゃだめ。信じなきゃ。直人・・・

ラムザ side

彼は平気かな？いや、彼は強いんだ、僕なんかよりずっと・・・だから・・・

アクアside

まったく、助けに行きたいけどこのボロボロじゃ無理ね。だから今は祈るだけ。直人・・・

ライside

ふん、聖王の力か。その力で世界を救え、直人。だから唯一の友でライバルあるお前を信じよう・・・直人・・・

シグナムside

あの時と同じ。また我らは力になれん。だが主や高町、それにテスタロッサが懸命に祈っている。だから私も祈るとしよう・・・友よ・・・

ヴィータside

あの優男がここまで強くなつてたとは知らなかった。そして今戦つてゐる。はやてがしているようにあたしも祈る。だから、だから・・・

ヴィヴィオside

パパ・・・帰ってきて・・・でも、パパ・・・

シャルside

みんな帰ってきたけど、まだ後二人が戦ってる。お願いです・・・

ザフィーラ

もはや祈ることしかできぬとは、守護獣としてなんとも情けない。だが今は主のようにできることをするでしょう。直人・・・

スバルside

「デイベイイン・・・バスター！」

ティアやエリオ、キャロ、それにジュリアやサフィラたちとコアに攻撃するけど、ヒビしか入らない。でもあきらめない。そのために私たちはここにいるんだもん！

「みんな！もう一度一斉攻撃いくよ！」

『おおっ！』

再び全員で一斉攻撃を開始。もう迷わない。負けない。絶望なんて、もつとしない！だから直人兄！

ティアナside

兄さんが頑張ってる。だからこそ、私たちは兄さんを信じて戦う。それが私の今やるべきこと！だから兄さん！

エリオ side

怖かった自分の存在・・・でも、今はそれを受けれてくれる兄さんがいる。だから！

キャロ side

自分の力が怖かった。でも今、お兄ちゃんはその私が恐れるより、もっと怖い力と戦ってる。だから逃げない、おびえない！そして・

ジュリア side

私はずっと憧れてた人の背中を追っていた。でもその憧れの人が今、自分と同じ舞台上で戦っている。だから私はその人の力になりたい。直人さん・・・

サフィラ side

その優しさが、そのぬくもりが嬉しかったあの人のために、今ある力を精一杯出す！だから、だから直人さん・・・！

トール side

ふっ・・・いくつも罪を重ねてきた私だが、これほど人を信頼したことはない。だからこそ、心のそこで願わせてもらおう・・・直人・

チンク side

兵器ではなく人間と言ってくれた直人殿・・・そして家族として受け入れようとしてくれるナカジマ姉妹。そして守るべき妹たちのために、直人・・・

セツ side

私は戦闘機人。余計な感情は必要ない。でも今は、今だけは、あの人を信じてみたいと思った。それが、それが人になるために第一歩だというなら、言わせていただく・・・

オット side

感情というものは僕にはわからない。でも、このそこから溢れ出る暖かさ。それが希望というもの。だからその希望のあの男に、僕も賭けてみたい・・・だから心で願う・・・

ノーヴ side

絶対負けねえ！うちらだけじゃない、今戦ってる直人だって！そして今ある姉妹のために負けねえ！だから・・・

デイイチ side

この先、私は未来はわからない。でも、今ある温もりを、そして機械ではなく人と言ってくれた彼のためにも、ここはなんとしても勝たなければいけない。だから言わせて・・・

ウエンデイ side

最初は弱気だったけど、今は違う。あの人を信じてるっス！だから、直人さん・・・

デイト side

私もオットーと同じで、稼働・・・いえ、もうその言い方はやめましょう。生まれてから間もない。だからこそ人の感情というものを知らない。でも彼の言う希望というものが私にもあるのなら、それを信じたい。だからお兄様・・・

ギンガ side

みんなあきらめていない。ううん、今ある世界と未来のために、みんな戦ってる。戦闘機械人としてではなく、人として認めてくれたあの人のために。そして妹達のために！直人さん・・・

『必ず・・・必ず勝つて!』

直人 s i d e

「今は・・・？」

均衡が崩れかけていたその時、突然みんなの心の声が聞こえた気がした。それはゼオンも同じようだ。必ず勝て・・・その通りだな。こんなところで、負けてなどいられない。だから、絶対・・・

ゼオン s i d e

さまざまな人の声が聞こえたが、はっきりと聞こえた。あの二人の声。そうだ、二度と大切なものを失わないために。そのために私はここにいる。だから・・・

直人 s i d e

「絶対、勝つ!」

俺とゼオンの声が重なり、龍が一つとなった。そこにあるのは白い・・・いや、純白の龍の砲撃、それは漆黒の龍を飲み込み、カオスを破壊した。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

カオス本体を光が飲み込む。

「さらばだ、世界の混沌」

「未来は、俺たちが守る」

「覚えて・・・おくがいい・・・いつか、影が・・・光りを支配する、その時を・・・ぬおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

カオスは爆発し、灰となった。

スバル side

ようやく割れた！でもなんか周りがすごいことになってる。

「ティア・・・これって言いたくないけど、崩れる？」

「そう、みたいね・・・」

「ならやることは一つ。みんな、逃げろー!」

こうして私たちは混沌の楽園を脱出した。

直人 side

カオスは消えた。残るは俺たちだけ。すると、羽からその金色と銀色が剥がれ落ち、地面へと降っていく。

「これは・・・」

それは風に乗る、地面につくと、そこから新たに自然が、死に掛けていた動物たちが、蘇っていく光景だった。漆黒の楽園もその本来の白銀に輝く城の姿があった。

「ゼオン」

「なんだ？」

「帰ろう、みんなが待つ、その場所に・・・みんなの所へ」

「ああ、そうだな。戦いは終わったんだ・・・帰るとしよう」

こうして、俺たちの混沌との戦いは幕を閉じた。

S i d e o u t

二人の戦闘中、少し混沌の楽園から少し離れた場所。そこから観測隊の隊員が書き綴ったその記録。後に受け継がれるその伝記に、二人の姿をこう書き残している。

「混沌に挑む二人の騎士。その姿はまるで、天を華麗に舞う『天使』のようだった」

これが後に伝記として、永劫に語り継がれる二人の英雄の話「蒼天

の騎士伝説」である。

第三十一話「蒼天の騎士伝説」（後書き）

秋風「無事、三十一話終了！」

直人「おつかれー」

秋風「まあ、今日はパソコンがぶっ壊れてそれどころじゃなかったんだけどね」

直人「ああ、ワードがいかれるとはな・・・」

秋風「それにしても一人一人順番に心情書くのは疲れた。もうやらない」

直人「最初はこれがやりたかったくせに」

秋風「うつさいな・・・ん？なんか届いてるぞ」

直人「これは・・・また宅急便だけど・・・うつ！」

秋風「何？」

直人「シャルさんの料理だ」

秋風「送り返せ！」

直人「ああ！」

秋風「さて、次回にて、第二部は終了です」

直人「ま、次回で終わりってわけじゃないけどな」

秋風「第三部は六課の卒業までの期間。」

直人「実はまだ7月なんだよな、俺たちの世界」

秋風「ああ、実はJS事件は9月なのにな」

直人「それほど伸ばすってこと？」

秋風「まあしばらくはほのぼのが多いけどな」

直人「戦いがないのが一番いい・・・」

秋風「俺もバトル描写がなくて済むしな」

直人「そういう問題じゃないだろ！」

秋風「ま、冗談はさておき、ここまで見てくださった読者の皆様、本当にありがとうございます！」

直人「これからも俺の物語は続く。期待して待っていてくれ」

秋風&直人「次回、三十二話・第二部最終回『選ばれた未来、進むべき明日へ』TAKE OFF！」

第三十二話・第二部最終回「選ばれた未来、進むべき明日へ」(前書き)

今回で第二部最終回です。そしてちょっと短いです。しかし、これから直人の物語をよろしくお願いします。

では本編へ、Take Off!

第三十二話・第二部最終回「選ばれた未来、進むべき明日へ」

カオス・レイとの死闘から二日が過ぎた。俺たち機動六課は管理局本局から栄光を称えられた。俺とゼオンはカオスを倒した英雄として称えられ、ゼオンは今まであった罪が消されることとなった。本人の意思としてはまだ罪は残っているようだが、それにアリサとすずかが喜び、二人がゼオンを好きになったことを俺となのはたちは驚いていた。そして六課に協力したナンバーズ達の罪は軽くなり、施設へと戻った。そしてその生みの親スカリエッティは色々と上層部のことを暴露。最高評議会の死が公となり、その下にいた上層部の人間が全員逮捕されることとなった。スカリエッティ曰く

「この方が世間的には面白い」

だそうだ。まあ、否定はしないよ。腐ってたやつらを一扫できたんだから。で、そのスカリエッティはそれにより制限付きで釈放。そして平和な時は過ぎる。季節は夏。俺はなのは、フェイト、はやて、ヴィヴィオと共に、俺の家。すなわち実家に帰ってきた。現在機動六課は長期の休みとなっている。

「父さんの書斎か・・・」

母さんと父さんが言っていた言葉。家に帰ったら書斎の下にある引き出しを開けること。

「引き出してこれ？」

「みたいだな」

俺はその引き出しを開けた。そこに入っていたのは・・・

「これは、指輪？」

そこに鎮座するのは4つの指輪。4つ？

「なんだこれ」

そこには一通の手紙。

直人へ

この手紙を読むということは、おそらく私が直人を一人前と認めたからだろう。そして私の身に何かが起こった証拠だ。これは私が死ぬと浮き出るように細工してある。

だからこそ、今秘密を明かそう。父さんは時空管理局という魔法を使う、異世界を守る仕事をしていたんだ。

と、父さんが管理局員！？

「これって・・・」

「あ、ああ・・・続きを読もう」

父さんは母さんと出会い、局員であることから身を引いた。その終わりの際、一つの魔法具を生成した。それが「契約の指輪」

これの一つはお前がつける。そして残った指輪は、愛すべきものの数だけ増える。まあ、ここにあるものが2つ以上になることはそう

ないだろう。

ごめん父さん、4つある。

そして、これを共に読む者よ、どうか直人を見守ってやってくれ。
それが私からのお願いだ。そしてこの先、いかなる困難があろうとも、その指輪と共に撃ち破ってくれ。
父さんから、息子への最後の願いだ。

父より

「父さん・・・」

真ん中に鎮座する指輪を取り、それをはめる。すると、体に魔力が流れた。心地のよい、そんな魔力が。

「じゃあ、これは・・・」

「ああ、なのは、フェイト、はやての分・・・だな」

それぞれ桃色、金色、白銀の指輪。桃色をなのはに、金色をフェイトに、白銀をはやてに、それぞれはめた。

「これ、婚約指輪ってことでいいの？」

「そうだよ・・・」

「ホンマに、受け取っていいん？」

正直回答に困る。3人とも顔が真っ赤だ。

「この宝石の色・・・みんなの魔法陣の色と一緒にだろ？だから、それでいいと思う。これが、俺の今の愛する人への気持ちだからな」

こうして、俺の家でのことは終わり。で、問題はここからだ。

「じゃあ行こう翠屋」

「せやね、士郎さん、リンディさん、シグナム待たせてるし」

「・・・今更だけど、すごく緊張してきた。そして何より・・・」

怖い。それはもう恐ろしいくらいに。そもそも3人がいるということとは、プラス影から兄であるあの二人が見ている可能性だってあるわけだ。やばい、今になって考えると結構恐ろしいことだぞ、これ。

「・・・君、直人君」

「どうしたなの？」

「もう翠屋だよ？」

「え、嘘!？」

考えてるうちにもう着いた!?!やばい、ちょっと待て！

「ま、待った・・・」

緊張で高鳴る心臓を何とか止めようにも無理な話。俺は深呼吸をす

る。

「じゃあ、行くよ?」

「あ、ああ・・・」

「大丈夫だよ直人」

「せや、うちらがついとるもん」

それが一番緊張するんだよ! まあ、そんなことを言っているのも無駄なこと。覚悟、決めるか・・・。こうして翠屋の扉が開かれる。もう閉店の時間なので誰もいない。でもって、一番大きい席に、3人と、うちの姉が座っている。席に座り、沈黙。で、土郎さんが最初に口を開いた。

「それで、これはなんの集まりかな?」

「あのね、お父さん、とりあえず怒らないで聞いて?」

「母さんも」

「シグナムもや」

それぞれの保護者がうなずき、俺は口を開く。

「単刀直入な話をします。俺は、今ここにいる3人を好きになりました」

「私達はその、それを納得した上で、言います」

「私達は、直人と一緒にいたい」

「そして一緒に幸せになりたい」

「だから・・・」

「」「直人君と結婚させてください!」「」

三人の言葉に、保護者側呆然。うちの姉さんだけが、ニコニコとそのままだった。そしてしばらくの沈黙。これはかなり重い空気だ。そして土郎さんが俺を見る。

「・・・直人君」

「はい」

「これが、君の答えかい？」

かつて約束した、すべてを守ること。それ故の結果だ。

「はい、そうです」

俺ははっきりと、土郎さんの目を見て答えた。

「そうか・・・リンディさんはどうだい？」

「直人君は、この先3人を必ず幸せにするの?」

「はい、必ず」

リンディさんはこの上なく真剣な表情で俺を見る。そしてフェイトを見た。フェイトも緊張して顔が強張っている。

「・・・主、それであなただけは幸せなのですか？」

シグナムの問いに、はやては強く頷く。

「だからこそ今一緒にここにいる。そしてその気持ちを、信頼できる人たちに聞いて欲しかったんや」

そしてまた沈黙・・・そして、俺は無言で頭を下げる。

「俺は必ず、3人を幸せにすることを誓います」

「・・・いいだろう。君の覚悟がどれほどのものなのか・・・これから先見せてくれ」

「フェイトの幸せ。そしてそれだけでなく、3人の幸せを守るというのなら、私は結婚を認めます」

「直人は、確かに主だけでなくテストアロッサや高町も幸せにできる。そういう器だ。」

3人の言葉に、なのはたちは喜んだ。俺も安堵のため息をついた。これで一件落着・・・か？

「とりあえず、乾杯しましょうか？」

どこからか桃子さんが出てきて、みんなに飲み物を配った。俺たち

は未成年・・・って、あと一年だけど。なのでジュースで乾杯した。これからの未来と、みんなの幸せのために。

ここは海鳴の自然公園。もう夜だ。そこからみんなで山を少し登り、展望台のところまで向かった。いつもここでなのは魔法の練習をしていたのだという。そしてここは・・・

「ここは、みんなと出会った場所・・・か」

「なつかしいねー、もう昔だけど」

もう4年前、ここでみんなと出会った。不良に絡まれていた5人を助けたこと。もうずいぶん昔のことなんだよな。あの出会いがなければ、今の俺はない。そして、今のこの世界はないのかもしれない。

「直人が助けてくれたんだよね」

「あの後、直人君と一緒にご飯も食べたっけ」

「そういえば、あの時の絵、できたの？」

「忘れてた」

そんなものもあったな。結局学校は卒業できずじまい。まあ、高校までの課程の勉強はアルハザードでしたからいいけど。

「そんなことだろうと思った」

「でも、新しい絵を描くんでしょ？」

「・・・そうだな。実はもうタイトルは決まっている。」

「何？」

俺は優しく。3人を抱きしめる。

「3人の天使」

そして、俺は一人ずつ唇を重ね、その満天の星空をみんなで見る。その輝きは、おそらく一生忘れることはないだろう。

「ねえ、直人君はこれからどうする？」

「どうするって？」

「いつまでも囑託魔導士っていうのも、格好がつかないから」

「どうせなら正式な局員として働こうよ」

「そうだな・・・とりあえず、機動六課で考える。」

「そうやね。レリックはもうないけど、まだ運用期間は半年もある」

そう、まだ時間はある。ゆっくり考えていけばいい。だけど、唯一つ、願いがある。

「これから俺がやることは、確かに仕事を探すことでもある。けど・・・」

「けど？」

「今は少しだけ、このまま静かに過ごしたい・・・かな」

「そうだね。でも、もうすぐ休暇は終わっちゃうよ？」

「そっか、でも別に休暇だから静かに過ごすってわけじゃない。

「休暇が終わっても、部隊のみんなと、静かに楽しく過ごせればいいんじゃないか？」

「それもそうだね」

少し寒くなってきた。そろそろ帰ろうか。

「そろそろ帰ろう。家でヴィヴィオが待ってる」

「もう私たちは家族だもんね」

「そうだね、私は井上なのは・・・」

「うちは井上はやて」

「フェイト・Ｔ・井上・・・ちょっとゴロ悪いかな」

「井上フェイトでもいいんじゃない？」

まあ、それはまだ少し先の話。結婚を正式にするのは、ミッドチルダに帰って、機動六課が解散するまでお預けだ。それまでは、婚約

という形になる。あの事故から、もう13年。雪の降る冬に魔法と出会い、世界を渡り、己の闇と向き合った。そして世界を光で満たした。今日ほど、世界を素晴らしいと思ったことはない。

「時間が過ぎるのは、早い。時は流れて、消えていく」

「でも、これからは私たちが一緒に時間を作る」

「いつまでも一緒。どんな困難があっても」

「誓ったこの指輪と共に」

なのは、フェイト、はやてが俺の左手を包む。その温もりは優しく、そして心地がよいものだ。これからは一人じゃない。大切な家族が、愛する人がいる。だから行こう、光が溢れるこの世界で・・・

「・・・同じ道を歩くために」・・・

第二部 完

第三十二話・第二部最終回「選ばれた未来、進むべき明日へ」(後書き)

あとがきは次の回です

あとがき、秋風よりこの小説を読んでもうださった皆様へ

こんにちは、秋風です。皆様、ありがとうございます。無事、第二部が完結することが出来ました。実を言つと、初期段階の過程ではこの物語は第二部で終わる予定でした。しかし、皆さんの感想などを見ているうちに、第三部、そして原作の第4部に乗った第4部、そして第5部を作成していこうと考えにいたったわけです。

リリカルなのはという世界を舞台に、ここまで作品を0から作つたのは初めてで、様々な設定の矛盾や読者からの指摘に追われ、悩まされる大変な毎日でした。それでもさまざまな読者の方々からの応援や励ましなどによって、何とかここまで来ることができました。第三部では、直人の世界で残る機動六課の半年を舞台に、静かなひと時、そしてそこに迫る新たな影との戦いを描いていきたいと思っています。

最後に、ここまで応援してくださった読者の皆さん。メッセージや感想などでアドバイスや企画をしてくれた先生方。そして直人をあとかきなどに登場させてくれた先生方。本当に、本当にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。

第二部はこれにて完結です。これから第三部をお楽しみください。皆さん本当に、ありがとうございます！

第三部予告

新暦75年・・・カオス・レイとの死闘を終えた機動六課

「機動六課、ここに再建や！」

そして平和に流れる時間

「パパ、遊ぼうよ」

「そうだな」

その静かに流れる時間の裏で、うごめく影

「・・・私は・・・」

英雄が再び立ち上がる

「あれが、俺たちの作り出した最後の責任なら、俺がけりを着ける」

「世界の真実、俺たちはまだたどり着いていない」

そして明かされる、英雄たちの悲劇の真実

「ああ、あのホテル。実に滅ぼしがいがあった」

「貴様ああああ！」

「貴様の顔、覚えているぞ。恋人を殺され、部隊を全滅させられた

男だったな」

「お前は、ここで殺す」

全ての謎を詰めたパンドラの箱。その箱が今開かれる

「どうしてだ！キメラはもういないはずなのに！」

キメラ来襲！

「大丈夫。どんなときでも、アリスが直人とゼオンを守ってあげる」

そして謎の少女、アリス

「これが、本当の終わりだ」

世界の混沌は、果たしてどこへ行くのか・・・？そして真実の先にある英雄たちの姿は？

魔法少女リリカルなのはStrikerS 蒼天を愛した混沌

近日、執筆開始

——あなたは、私を守ってくれますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4049j/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～蒼天の騎士伝説～

2010年10月10日05時59分発行